

## 『管子』の経済思想

# 『管子』の経済思想

## 社会システム研究科 地域社会システム専攻 于淼

管子は管仲の敬称で、中国春秋時代の政治家であり、また偉大な思想家でもある。『管子』という書物は、後世の人間が管子の名を托して、法家、道家、儒家思想をまじえた政治、経済、倫理、社会などの方面の理論を記述したものである。『管子』の思想の内容が豊富で、著者は不明、学術流派を多角化であるという特徴は、研究の価値を高めている。

本論考は、管子その人および彼の名を託した『管子』という書物の構成、内容などを述べた上で、『管子』の経済思想を論述したものである。およそ以下の十章に分ける。

「始めに」では、原宗子の『管子』の研究の現状と課題と主に、『管子』の経済思想に関する研究した現状を簡単な説明する。及び本研究の研究対象、研究方法、論文の構成を述べた。現在の著作は『管子』の中のある篇の中の経済思想についてあるいは『管子』の経済思想のある一面について論じている。『管子』全書の経済思想を論じた著作は、多くは全体の思想に対する総合的な討論で、文句の分析まで具体的なことが少ないことである。

第一章では、管仲という人の生涯と事績、『管子』という書物の構成および注釈書を紹介した。司馬遷が著した『史記』の中の『管晏列伝』の管仲の紹介を中心に、管仲の生涯事績と「管鮑之交」の由来を簡単に紹介している。前漢中期の学者、劉向がまとめた『管子』という本は、『管子』を八類八十六篇に分類している。しかし唐代になると遺矢十篇のうち、現存するものは七十六篇である。『管子』の注釈書主は日本猪飼敬所の『管子補正』と安井息軒の『管子纂詁』、中国の古代尹知章の『管子注』、民国時代の羅根澤の『管子探源』近現代郭沫若・聞一多・許維遹が共同研究してまとめた『管子集校』と黎翔鳳撰、梁運華整理の『管子校注』。

第二章では、今までの『管子』研究で明らかにした『管子』の主な思想を紹介した。『管子』は思想内容が豊富で、道家・法家・儒家などの思想だけでなく、政治・経済・軍事・法律などの思想も含んでいる。政治思想と経済思想が主な内容だった。

第三章では、『管子』に出て来るすべての「農」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「農」に関する経済思想を明らかにした。

「重農抑商」は『管子』の重要な経済思想で、国家は農業に対して一連の措置をとり、経済発展を調節すべきことを論述している。

第四章では、『管子』に出て来るすべての「幣」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「幣」に関する経済思想を明らかにした。その論述はおもに貨幣の流通と経済調節という二つの方向から述べた。『管子』貨幣思想の積極的な意味を論述したうえで、その「限界」、つまり時代に合わないものも指摘した。

第五章では、『管子』に出て来るすべての「賦」、「税」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「賦」、「税」に関する経済思想を明らかにした。税収は国の財政収入の重要な源であり、『管子』は税収を調整することによって、国の安定を維持することを強調している。「賦」とは、古から国家が民衆に財物や労役を割り当てて、国家を維持する重要な制度である。『管子』は「賦」が「税」と同様に、国家制度の柱で社会の安定を守る重要な政策であるとしている。

第六章では、『管子』に出て来るすべての「商」、「工」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「商」、「工」に関する経済思想を明らかにした。管仲自身は商人の出身なので、商業の発展を重視する政策を取っている。「工」とは「職人」のことで、『管子』小匡篇には「夫是故工之子常為工」とある。「だから、職人の子弟は職人である。」という意味で、「匠」の継承を重視する。管仲は、「工」を国家

の統治を守り、経済を発展させる重要な手段としている。

第七章では、『管子』に出て来るすべての「水」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「水」に関する経済思想を明らかにした。水は万物の源である。『管子』は自然の水利条件を利用し、経済の発展を促進する。

第八章では、『管子』に出て来るすべての「地」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「地」に関する経済思想を明らかにした。古代において、土地は非常に重要な国家資源であった。君主が国の統治を堅固にし、経済を発展させるためには、土地の使用を統一的に管理する一連の措置が必要であった。

「終わりに」は、上記の研究計画による成果をまとめ、『管子』の経済思想を全面的に述べた。『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に渡って、様々な作者によって書かれたものとみられる。上記の研究方法を通じて、それぞれの文章の間に一貫した思想があるかどうかを検討していく。また、経済思想と政策の内容を明らかにすれば、各文章の時代背景もだんだんわかってくると思うのである。

# **The economic thought of Guanzi**

YU MIAO

Guan Zhong is the honorific name of Guan Zhong, a statesman and a great thinker in the Spring and Autumn Period of China. Guanzi, a book entrusted by later generations to Guan Zhong, describes the political, economic, ethical and social theories of mixed legalism, Taoism and Confucianism. Guanzi has the characteristics of rich content, unknown author and diversified academic schools, which enhances the research value.

On the basis of narrating the structure and content of Guanzi written by Guan Zhong himself and in his name, this paper discusses the economic thoughts of Guanzi. It can be divided into the following ten chapters.

In the "preface" part, it briefly explains the research status and subject of Hramotoko's Guanzi, as well as the economic thought research status of Guanzi. This paper expounds the research object, research method and composition of the paper. The current works deal with the economic ideas in a section of Guanzi or an aspect of the economic ideas in Guanzi. Most of the works on economic thought in Guanzi are comprehensive discussions on the whole thought, and few are specific analysis of the text.

The first chapter introduces Guan Zhong's life story, the structure and notes of Guanzi. Based on the introduction of Guan Zhong in Guan Yan's Biography in Records of the Grand Historian by Sima Qian, this paper briefly introduces Guan Zhong's life story and the origin of Guan Bao's friendship. The book Guanzi compiled by Liu Xiang, a scholar in the middle of the Western Han Dynasty, divided Guanzi into eight categories and eighty-six chapters. However, by the Tang Dynasty, ten of them had been lost and seventy-six had survived. The annotated book of "Guanzi" mainly has the Japanese Igaikesyou's "Guanzi correction" and the "Guanzi codification" of Yasuikou, the ancient Chinese Yin Zhizang's "Guanzi note", the Republic of China Luo Genze's "Guanzi exploration source", modern Guo Moruo, Wen Yiduo, Xu Wei Yu joint study and collation of "Guanzi twin check" and Li Xiangfeng, Liang Yunhua collation of "Guanzi collation and annotation".

The second chapter introduces the main ideas of Guanzi which have been clarified in the study of Guanzi so far. Guanzi is rich in thought, including Taoism, legalism, Confucianism, politics, economy, military, law and so on. The main content is political thought and economic thought.

The third chapter gives a detailed explanation of the source and usage of all the words "agriculture" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "agriculture" in Guanzi is expounded. "Emphasizing agriculture and suppressing commerce" is an important economic thought in Guanzi, which states that the state should take a series of measures to regulate economic development.

Chapter four gives a detailed explanation of the source and usage of all the words "currency" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "currency" in Guanzi is expounded. It mainly discusses from two directions of currency circulation and economic regulation. On the basis of discussing the positive significance of Guanzi's monetary thought, it also points out its "limitation", that is, something that does not conform to The Times.

The fifth chapter explains in detail the source and usage of all the words "levy" and "tax" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "levy" and "tax" in Guanzi is expounded. Tax revenue is an important source of national fiscal revenue, Guanzi emphasizes the regulation of tax revenue to maintain national stability. The so-called "levy", since ancient times, is that the state apportioned property and labor to the people in order to maintain the important system of the country. Guanzi believes that "tax", like "tax", is the pillar of the national system and an important policy to maintain social stability.

The sixth chapter gives a detailed explanation of the source and usage of all the words "business" and "labour" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "business" and "labour" in Guanzi is expounded. Guan Zhong himself was a businessman, so he adopted a policy that emphasized the development of commerce. "Worker" refers to "craftsman", "Guanzi" Xiao Kuang article cloud: "husband is the son of the worker often for the worker." "So the children of craftsmen are craftsmen." In this sense, attach importance to the inheritance of "craftsmen". Guan Zhong regards "work" as an

important means to maintain state rule and develop economy.

The seventh chapter explains in detail the source and usage of all the words "water" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "water" in Guanzi is expounded. Water is the source of all things. Guanzi takes advantage of natural water conditions to promote economic development.

The eighth chapter explains in detail the source and usage of all the words "land" in Guanzi. On this basis, the economic thought of "land" in Guanzi is expounded. In ancient times, land was a very important national resource. In order to consolidate the rule of the state and develop the economy, the monarch must take a series of measures to unify the management of land use.

Conclusion summarizes the results of the above research plan, and comprehensively expounds the economic thought of Guanzi. Guanzi's articles, which span the long period from the Warring States Period to the Qin and Han Dynasties, are believed to have been written by different authors. Through the above research methods, to explore whether there are coherent ideas among the various articles. In addition, once you understand the content of economic thoughts and policies, you can gradually understand the historical background of each article.

## 目録

論文主旨 .....	1
はじめに .....	3
第一章、管仲と『管子』 .....	7
第一節、管仲の生涯 .....	7
第二節、『管子』という著作の構成 .....	9
第三節、『管子』の注釈と用例 .....	10
第二章、『管子』の思想について .....	12
第一節、唯物的な立場 .....	12
第二節、管仲の経済政策 .....	13
第三節、君権の確立 .....	15
第四節、牧民観点 .....	15
第五節、階層分業の思想 .....	16
第三章、『管子』の中の「農」に関する経済思想 .....	19
第一節、『管子』の中の「農」字の分析 .....	19



第二節、農本思想 .....	33
第三節、農時思想 .....	35
第四節、農税思想 .....	37
第五節、農業思想 .....	38
第四章、『管子』の中の「幣」に関する経済思想.....	40
第一節、斉国の貨幣.....	40
第二節、『管子』の中の「幣」字の分析.....	41
第三節、貨幣の機能.....	55
第四節、『管子』の貨幣思想 .....	59
第五節、『管子』貨幣思想の積極的な意味と限界 .....	66
第五章、『管子』の中の「賦」と「税」に関する経済思想.....	69
第一節、「賦」と「税」 .....	69
第二節、『管子』の中の「賦」字と「税」字の分析 .....	69
第三節、相地而衰徴.....	78
第四節、輕税租、薄賦斂 .....	81
第五節、賦税思想 .....	85

第六章、『管子』の中の「商」と「工」に関する経済思想 .....	87
第一節、『管子』の中の「商」字と「工」字の分析 .....	87
第二節、商工業者の地位と役割 .....	101
第三節、官山海 .....	103
第四節、外国貿易 .....	104
第五節、商工思想 .....	108
第七章、『管子』の中の「水」に関する経済思想 .....	109
第一節、『管子』の中の「水」字の分析 .....	109
第二節、水利思想 .....	130
第三節、水利事業の組織管理 .....	131
第四節、水利工事技術問題 .....	133
第八章、『管子』の中の「地」に関する経済思想 .....	137
第一節、『管子』の中の「地」字の分析 .....	137
第二節、地利思想 .....	175
第二節、土地の生態環境 .....	177
第三節、地政要公 .....	179

第四節、地力均分 .....	180
終わりに.....	182
参考文献.....	186

## 論文主旨

管子は管仲の敬称で、中国春秋時代の政治家であり、また偉大な思想家でもある。『管子』という書物は、後世の人間が管子の名を托して、法家、道家、儒家思想をまじえた政治、経済、倫理、社会などの方面の理論を記述したものである。著作としては戦国時代に出来上がったようである。

本論考は、管子その人および彼の名を託した『管子』という書物の構成、内容などを述べた上で、『管子』の経済思想を論述したものである。およそ以下の十章に分ける。

「始めに」では、本研究の研究対象、研究方法、論文の構成を述べた。

第一章では、管仲という人の生涯と事績、『管子』という書物の構成および注釈書を紹介している。

第二章では、今までの『管子』研究で明らかにした『管子』の主な思想を紹介している。

第三章では、『管子』に出て来た「農」という文字の出自、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「農」に関する経済思想を明らかにした。「重農抑商」は『管子』の重要な経済思想で、国家は農業に対して一連の措置をとり、経済発展を調節すべきことを論述している。

第四章では、『管子』に出て来た「幣」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「幣」に関する経済思想を明らかにした。その論述はおもに貨幣の流通と経済調節という二つの方向から述べた。『管子』貨幣思想の積極的な意味を論述したうえで、その「限界」、つまり時代に合わないものも指摘した。

第五章では、『管子』に出て来た「賦」、「税」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「賦」、「税」に関する経済思想を明らかにした。税金は国の財政収入の重要な源であり、『管子』は税金を調整することによって、国の安定を維持することを強調している。「賦」とは、古から国家が民衆に財物や労役を割り当

てて、国家を維持する重要な制度である。『管子』は「賦」が「税」と同様に、国家制度の柱で社会の安定を守る重要な政策であるとしている。

第六章では、『管子』の中の「商」、「工」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「商」、「工」に関する経済思想を明らかにした。管仲自身は商人の出身なので、商業の発展を重視する政策を取っている。「工」とは「職人」のことで、『管子』小匡篇には「夫是故工之子常為工」とある。「故に、職人の子弟は職人である。」という意味で、「匠」の継承を重視する。管仲は、「工」を国家の統治を守り、経済を発展させる重要な手段としている。

第七章では、『管子』に出てきた「水」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「水」に関する経済思想を明らかにした。水は万物の源である。『管子』は自然の水利条件を利用し、経済の発展を促進した。

第八章では、『管子』に出て来るすべての「地」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「地」に関する経済思想を明らかにした。古代において、土地は非常に重要な国家資源であった。君主が国の統治を堅固にし、経済を発展させるためには、土地の使用を統一的に管理する一連の措置が必要であった。

「終わりに」には、上記の研究計画による成果をまとめ、『管子』の経済思想を全面的に述べた。『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に渡って、様々な作者によって書かれたものとみられる。上記の研究方法を通じて、それぞれの文章の間に一貫した思想があるかどうかを検討しておく。また、経済思想と政策の内容を明らかにすれば、各文章の時代背景もわかってくると思うのである。

## はじめに

管子は管仲の敬称で、中国春秋時代の政治家であり、また偉大な思想家でもある。『管子』という書物は、後世の人間が管子の名を托して、法家、道家、儒家思想をまじえた政治、経済、倫理、社会などの方面の理論を記述したものである。『管子』の思想や内容が豊富である一方、著者は不明、学術流派を多角化であるという特徴は、研究の価値が高まっている。古今東西、管子の研究者は輩出し、『管子』を研究する文献、著作も次第にと積み重ねてきた。

日本の学者原宗子の「『管子』研究の現状と課題」<sup>①</sup>の中で『管子』に関する著作を次のように分類している。第一類は、自己の所説のために『管子』の一部を利用したもの。第二類は、『管子』中の特定の篇を他篇と独立させて説明することを企図したもの。第三類は、『管子』全書について、一定のテーマのもとに考察したもの。第四類は、『管子』全書の成立事情を視野に含めたもの。第五類は、『管子』の抄訳・訳解書。第六類は、『管子』に関連する版元・注釈書・出土物を論じたもの。その中で、量的に、圧倒的多数を占めたのが、第一類のあるテーマを展開するために、『管子』中の言葉を切り取って利用した論考である。それから、『管子』に言及する論考の中で、重要な提言をしているものは、多く第二類の、特定的一篇もしくは数篇について、『管子』中の余の部分と切り離し、分析的に扱った論考の中に見ることができる。

日本では、『管子』の経済思想に関する著作は、穂積文雄の「管子の経済思想」<sup>②</sup>、長谷川誠一の「中国古代の経済思想——『管子』の研究」<sup>③</sup>および水上健造の「管子「経済論」の一考察」(1、2、3、4)<sup>④</sup>などがある。これらの「管子経済思想」研究論文は農業、商業、

---

① 原宗子「『管子』研究の現状と課題」『流通経済大学論集』19(1)、1984年9月。

② 穂積文雄「管子の経済思想」『経済論叢』第五十二巻、第四号、1941年。

③ 長谷川誠一「中国古代の経済思想——『管子』の研究」『駒沢大学研究論集』（通号10）、1967年。

④ 「管子「経済論」の一考察-1-」水上健造、『和光経済』8-1.2、1975年3月10、1967

貨幣、経済調整などの方面を論じたが、それぞれの論述の間に一貫した思想がなくて、関連性に欠けていたことが否めない。なお、「中国古代の経済思想——『管子』の研究」はただ『管子』の農本主義、賦税政策と官山海などを簡単に紹介した。『管子』の経済思想の研究は十分ではなかった。

中国では、『管子』の経済思想に関する著作は主に黄漢の『管子経済思想』<sup>①</sup>、胡寄窗の「管子経済学説」<sup>②</sup>と巫宝三の「『侈靡篇』の経済思想と創作時代」<sup>③</sup>などが挙げられる。これらの著作は『管子』の中のある篇の中の経済思想について、あるいは『管子』の経済思想のある一面について論じているが、一つの全体として『管子』全書の経済思想を論じたものではないので、全体の思想に対する総合的な探求に及ばなかった。文句の分析まで具体的な研究がやはり少なかったのである。

本論考は、管子その人および彼の名を託した『管子』という書物の構成、内容などを述べ、『管子』の中の「幣」、「農」、「工」、「商」、「賦」、「税」、「水」、「地」という文字の調査と分析を通じて、これらの字の意味を具体的に解説する。その上で、『管子』の経済思想を全面的に論述するものである。

## 1、本論考の構造

本研究は以下の十章に分ける。

「始めに」では、本研究の研究対象、研究方法、論文の構成を述べた。

第一章では、管仲という人の生涯と事績、『管子』という書物の構成および注釈書を紹介した。

第二章では、今までの『管子』研究で明らかにした『管子』の主な思想を紹介した。

---

年6月。「管子「経済論」の一考察-2-」水上健造、『和光経済』9-2、1976年1月。「管子「経済論」の一考察-3-」水上健造、『和光経済』18-1、1985年11月。「管子「経済論」の一考察-4-」水上健造、『和光経済』22-1、1989年11月。

① 黄漢『管子経済思想』商務印書館、1936年。

② 胡寄窗「管子経済学説」『中国经济思想史』（上）、第十章、1962年。

③ 巫宝三「『侈靡篇』の経済思想と創作時代」『中国社会科学院经济研究所集刊』、1979年。

第三章では、『管子』に出て来るすべての「農」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「農」に関する思想を明らかにした。「重農抑商」は『管子』の重要な経済思想で、国家は農業に対して一連の措置をとり、経済発展を調節すべきことを論述している。

第四章では、『管子』に出て来るすべての「幣」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「幣」に関する経済思想を明らかにした。その論述はおもに貨幣の流通と経済調節という二つの方向から述べた。『管子』貨幣思想の積極的な意味を論じたうえで、その「限界」、つまり時代に合わないものも指摘した。

第五章では、『管子』に出て来るすべての「賦」、「税」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「賦」、「税」に関する経済思想を明らかにした。税収は国の財政収入の重要な源であり、『管子』は税収を調整することによって、国の安定を維持することを強調している。「賦」とは、古から国家が民衆に財物や労役を割り当てて、国家を維持する重要な制度である。『管子』は賦が「税」と同様に、国家制度の柱で社会の安定を守る重要な政策であるとしている。

第六章では、『管子』に出て来るすべての「商」、「工」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「商」、「工」に関する経済思想を明らかにした。管仲自身は商人の出身なので、商業の発展を重視する政策を取っている。「工」とは「職人」のことで、『管子』小匡篇には「夫是，故工之子常為工。」<sup>①</sup>とある。「故に、職人の子弟は職人である。」という意味で、「匠」の継承を重視する。管仲は、「工」を国家の統治を守り、経済を発展させる重要な手段としている。

第七章では、『管子』に出て来るすべての「水」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明する。その上で、『管子』の「水」に関する経済思想を明らかにした。水は万物の源である。『管子』は自然の水利条件を利用し、経済の発展を促進した。

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（上）巻八「小匡」四〇二頁。黎翔鳳撰、梁運華整理の『管子校注』中華書局 2004年6月出版。以下同。



第八章では、『管子』に出て来るすべての「地」という文字の出所、用法をピックアップして詳しく説明した。その上で、『管子』の「地」に関する経済思想を明らかにした。古代において、土地は非常に重要な国家資源であった。君主が国の統治を堅固にし、経済を発展させるためには、土地の使用を統一的に管理する一連の措置が必要であった。

「終わりに」は、上記の研究計画による成果をまとめ、『管子』の経済思想を全面的に述べる。『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に於いて、様々な作者によって書かれたものとみられる。上記の研究方法を通じて、それぞれの文章の間に一貫した思想があるかどうかを検討していく。また、経済思想と政策の内容を明らかにすれば、各文章の時代背景もだんだんわかってくると思うのである。

## 2、本論考の研究対象

本論考の研究対象は、主に『管子』の経済思想に焦点を合わせる。そのために、以下の見地に立って本研究を進めていこうと考える。

まず、『管子』という書物が戦国時代から秦漢期の間に、管子、その弟子および一派の人々が漸く完成させたものとする。作者が違うかもしれないが、書物の内部に一定の横のつながりが存在する。その横のつながりには、主に法家的要素と道家的要素があると見られるが、経済思想は斉国の治国理念と政治経済政策を反映したものと思われる。故に、本論考の得られた成果は、『管子』を一つのまとまりのある書物として考究したものである。

## 3、本論考の研究手法

本論考の眼目は、管子の経済思想を『管子』各類、各篇に分散している「幣」、「農」、「工」、「商」、「賦」、「税」、「水」、「地」という文字の調査に始まり、その出所、使用頻度、意味、背景を徹底的に分析することとする。その上で、「『管子』の経済思想に注目し、国の政策としての役割、理念などを分析する。この研究方法は、本論考の独自の研究法と持ち味といえるものである。

本論考は黎翔鳳撰、梁運華整理の『管子校注』（中華書局 2004 年 6 月）をテキストとする。

# 第一章、管仲と『管子』

## 第一節、管仲の生涯

管仲(?—西暦紀元前 645 年)、姓は姫、管氏、名は夷吾、字は仲、諡号は敬。春秋時代の法家の代表的な人物である。中国の安徽省潁上(今の亳州市潁上県)に生まれたが、生年月日は不明である。春秋時代の初期に斉桓公を助けて、桓公が最初の覇者になったことで、中国古代の著名な経済学家、哲学家、政治家、軍事家とされていた。「法家の先駆者」、「聖人の師」、「華夏文明の保護者」、「華夏第一の宰相」とも称賛されていた。

司馬遷の『史記』に「管晏列伝」<sup>①</sup>があり、次のように述べている。

管仲夷吾者、潁上人也。少時常与鮑叔牙游、鮑叔知其賢。管仲貧困、常欺鮑叔、鮑叔終善遇之、不以為言。已而鮑叔事齊公子小白、管仲事公子糾。及小白立為桓公、公子糾死、管仲囚焉。鮑叔遂進管仲。管仲既用、任政于齊、齊桓公以霸、九合諸侯、一匡天下、管仲之謀也。

(管仲、名は夷吾、潁上の人。彼は若い頃、よく鮑叔牙とつきあっていたが、鮑叔牙は彼が賢明で有能であることを知っていた。管仲の家は貧しく、いつも鮑叔の利益になっていたが、鮑叔はいつも彼をよくあしらい、不平を言わなかった。やがて、鮑叔は齊の公子小白に仕え、管仲は公子糾に仕えた。白が即位して齊の桓公になると、桓公は魯国に公子糾を殺させ、管仲は囚われた。そこで鮑叔は齊の桓公に管仲を推薦した。管仲が登用されて齊の国で政を執り、桓公は管仲を頼って覇を取り、その覇者として諸侯と何度も会合して天下を一つにしたのは、管仲の智謀であった。)

---

<sup>①</sup> 司馬遷『史記 全8巻』巻5、(ちくま学芸文庫)第四二頁。

それによれば、管仲は幼年の頃から鮑叔と親交があり、共に商業に従事していたが、時に鮑叔を欺いて、利益の分け前を多くとったことがあった。しかし鮑叔は一言も不平をいうことはなかった。

その後、鮑叔は斉の公子小白につかえ、管仲は公子糾に仕えた。この二人の公子は互いに君位につこうとして相争った。小白が勝って糾を殺し、斉国に君臨して桓公となったが、その際管仲は捕えられた。しかし鮑叔の推薦によって、管仲は桓公の宰相となり、大いに産業を興し、内政を整え、斉国の国威を伸長するに与って力があつた。

それで、管仲は上記の一節の続きに次のように語った。

管仲曰、「吾始困時，嘗与鮑叔賈分財利多自与，鮑叔不以我為貪，知我貧也。吾嘗為鮑叔謀事而更窮困，鮑叔不以我為愚，知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐于君，鮑叔不以我為不肖，知我不遇時。吾嘗三戰三走，鮑叔不以我怯，知我有老母也。公子糾敗，召忽死之，吾幽囚受辱，鮑叔不以我為無耻，知我不羞小節而耻功名不顯于天下也。生我者父母，知我者鮑子也。」<sup>①</sup>

（管仲は、「私が貧しかった頃、鮑叔と商売をしていた。私はかつて鮑叔のために仕事をして、彼をますます困窮させたが、鮑叔は私を愚鈍とは思わず、時機の有利不利を知っていた。私は何度も官吏になり、何度も君主から免職されたが、鮑叔は私が有能でないと思っておらず、好機に恵まれていないことを知っている。私は何度も戦い、何度も負けて逃げたが、鮑叔は私が臆病だとは思わず、老母がいることを知っていた。糾は失敗し、召忽は死んで、私は牢の中で屈辱を受けていたが、鮑叔は私のことを恥知らずとは思っていない。私を生んだのは両親で、私のことを知っているのは鮑叔である。」）

鮑叔は管仲を推挙し、自らはその下位について甘んじたので、天下の人は管仲の賢よりも

---

<sup>①</sup> 司馬遷『史記 全8巻』巻5、(ちくま学芸文庫)第四二頁。

鮑叔の人を知る明を誉め称えた。これは「管鮑の交わり」として後世によく知られる逸話である。

なお、管子の物語と伝説は、先秦兩漢時代の幾つかの古典にも出て来るが、本論考はそれらを念頭に置いて研究を進めていく。

## 第二節、『管子』という著作の構成

『管子』は管仲とその弟子たちの著書とされているが、その成立は、おそらく戦国から秦漢期の上に様々な人の加担により漸く完成されたものと考えられる。

前漢中期の劉向<sup>①</sup>（紀元前 77 年-紀元前 6 年）が調べたところ、当時に管仲の著作といわれるものは実に五百六十四篇もあった。そこで、劉向は記述の重複した部分を除き、『管子』八十六篇を編集した。これが『漢書』<sup>②</sup>芸文志でいう『筧子』<sup>③</sup>である。

『管子』八十六篇とはつぎのとおりである。

- ①経言類九篇＝牧民、形勢、權修、立政、乘馬、七法、版法、幼官、幼官図
- ②外篇類八篇＝五輔、宙合、枢言、八觀、法禁、重令、法法、兵法
- ③内言類九篇＝大匡、中匡、小匡、王言\*、霸形、霸言、問、謀失\*、戒
- ④短語類十八篇＝地員、參患、制分、君臣上、君臣下、小称、四称、正言\*、侈靡、心術上、心術下、白心、水地、四時、五行、勢、正、九變
- ⑤区言類五篇＝任法、明法、正世、治國、内業
- ⑥雜類十三篇＝封禪、小問、七臣、七主、禁藏、入國、九守、桓公問、度地、地員、弟子職、言昭\*、修身\*、問霸\*

---

① 中国前漢の学者。漢王族の出身。博学で、文才があり、20 歳で諫議大夫となり、政治的抱負をもっていたが、失脚し、のち再び用いられ、宮中所蔵の諸文献と民間所蔵のそれとを対校して新校本をつくり、それぞれの解題『別録』を著わし、中国の目録学の創始者とされる。

② 『漢書』中国後漢の章帝の時に班固・班昭らによって編纂された前漢のことを記した歴史書。二十四史の一つ。『後漢書』との対比から前漢書ともいう。

③ すなわち『管子』ことである。

⑦管子解類五篇＝牧民篇\*、形勢解、立政九敗解、版法解、明法解

⑧輕重類十九篇（内\*三篇）

上の内、\*印はすでに散逸し、現存の『管子』は七十六篇だけである。しかも記述の重複が多く、構成も乱雑である。

宋の詩人、葉水心<sup>①</sup>は「管子は一人の作でもないし、また、一時代の作とも思えない」<sup>②</sup>と  
いっているが、これが妥当であろう。

後代の管子研究者がかってに加えた部分も多い。ただ、最初の「経言」九篇だけは、その  
文章の調子や、『史記』に出ている伝記から見て、管仲自身の作であろうといわれている。  
この論考の研究対象は『管子』全体である。

### 第三節、『管子』の注釈と用例

『管子』の注釈については、唐代の尹知章の『管子注』三十巻をもってその濫觴とする。

『管子注』は現存する最古の『管子』注本として、多くの不足があるが、依然として重要な  
歴史的地位と価値を持っている。

『管子』の研究は明代が一番盛んで、梅士享、趙用賢、劉績、朱長春らが注を加えた。さ  
らに清代になると訓詁学がさかんであったので、王念孫、孫詒讓、洪頤煊、戴望、俞樾らも  
注を加えた。

日本では、日本の江戸時代後期の折衷学派の儒学者猪飼敬所<sup>③</sup>の『管子補正』、安井息軒<sup>④</sup>  
の『管子纂詁』が有名である。

---

① 葉 適（しょう せき、1150 年 - 1223 年）は、南宋の儒学者・官僚。字は正則。号は水心。温州永嘉県の人。事功派永嘉学派の雄として知られる。

② 葉 適『水心集』、「『管子』非一人之筆、亦非一時之書。」

③ 猪飼 敬所（1761 年 4 月 - 1845 年 12 月）は、日本の江戸時代後期の折衷学派の儒学者。名は彦博（よしひろ）、字は文卿、希文。近江国出身。著作に『論孟考文』、『管子補正』などがある。

④ 安井 息軒（やすい そっけん、寛政 11 年 1 月 1 日〈1799 年 2 月 5 日〉 - 明治 9 年  
〈1876 年〉9 月 23 日）は江戸時代の儒学者。名は衡、字は仲平、息軒は号。日向国宮崎  
郡清武郷（現・宮崎県宮崎市）出身。その業績は江戸期儒学の集大成と評価され、近代漢

中国の民国時代以降の研究として、まず羅根沢<sup>①</sup>の『管子探源』が取り上げられる。該書は『管子』諸著作の真偽と年代を研究し、そのうちの第八章は『輕重』篇に対する著作の年代考証であり、梁啓超と王国維の誤読に対して証拠を羅列し、疑問を提起している。その研究貢献は特に人に賞賛され、深い学術的影響を有している。

郭沫若、聞一多、許維適<sup>②</sup>の共同研究である『管子集校』（科学出版社、1956年）は、前人の『管子』の研究を整理・校正し、注釈を加えたものである。1956年出版以来、日本の研究者を含め、多くの学者に便宜を提供した。

黎翔鳳撰、梁運華整理の『管子校注』（中華書局2004年6月）は、『管子集校』を底本として、さらに整理し、校訂したものである。

本論考は黎翔鳳撰、梁運華整理の『管子校注』をテキストとする。

---

学の礎を築いた。

① 羅根沢（1900-1960）字は雨亭、直隸（今河北省深州県）の出身、中国古代文献研究の専門家。

② 郭沫若（1892-1978）中華民国、中華人民共和国の政治家、文学者、考古学者、歴史学者。原名は郭開貞で、開貞は諱、沫若は号にあたる。字は鼎堂。聞一多（1899-1946）は、中国の詩人、古典論家。名は家驊。字は友三、または友山。後に清華大学に入学後に名を多と改め、学友である潘光旦の勧めにより「一」の字を加え、筆名を一多とする。許維適（1905-1951）は上海人、古典文献研究家。

## 第二章、『管子』の思想について

管子は法家の祖とされている。これは『隋唐』経籍志で法家に列されてからの一般的な伝統である。また一部の人は、管子を道家の範疇にいている。これは『漢書』芸文志で『管子』を道家に列していることに端を発していると思われる。

しかし、『管子』を「法家」または「道家」の書という分類で概括しきれないと思われる。これは『管子』の思想を一つの型にはめようとするものであり、いわゆる諸子百家ということばにとらわれすぎるためである。こうした分類には、現代的な意義はあまりない。

管仲は思想家というより政治家であると同時に、経済政策の立案者でもあった。したがって、『管子』は儒書のような道德教科書ではなく、広い意味での政治、経済、法律の綱領というべき書物である。ここでは、今までの先行研究を踏まえて、『管子』の経済政策や政治綱領の中にあらわれた重要な思想を次のように概説して、本論文の研究土台にしておきたい。<sup>①</sup>

### 第一節、唯物的な立場

厳密な意味で、管仲は唯物論者だということはもちろんできないが、彼は古代中国の思想家のなかで、わりと唯物的な立場に立って論説を展開した人物に間違いない。彼はいう。

「倉廩実則知礼節，衣食足則知荣辱。」<sup>②</sup>（日々の暮らしが楽になれば、自然に礼儀をわかまえる、生活にゆとりができさえすれば、道德意識はおのずと高まる。）

「財不蓋天下，不能正天下。」<sup>③</sup>（物質の豊富なことで天下一の国でなければ、精神的に天下をリードすることはできない。）

---

<sup>①</sup> 以下は主に金谷治著『管子の研究』（岩波書店 1987 年）および戦化軍著『管仲評伝』（齐鲁書社 2001 年版）を参照。

<sup>②</sup> 『管子校注』（上）巻一「牧民」二頁。

<sup>③</sup> 『管子校注』（上）巻二「七法」一一六頁。

「気情不営，則耳目穀，衣食足。耳目穀，衣食足，則侵争不生，怨怒無有，上下相親，兵刃不用矣。」<sup>①</sup>（『金持ケンカせず』といわれるように、物質的な面で苦勞がなければ争いはおきるものではない。『食物の怨みは長い』ともいうが、食うのに事欠くことがなければ、人を怨む者はいなくなる。）

ここには、いわゆる「先王の道」という発想はない。物質的条件を重くみるというこの考え方は、当時、急速にすすんだ農業生産力の発展を反映しているとみることができよう。

儒家の説く仁・義・礼・智・信も、法家の強調する法律も、兵家の目的とする戦争に勝つ方法も、すべて物質的な基礎を確立しなければ、机上の空論に終わるだけだというのが、『管子』の根底に流れる思想である。

## 第二節、管仲の経済政策

『管子』には、生産と流通に関する多くの見解が述べられている。二千数百年前ということを考えるならば、これはおどろくべき卓見であった。管仲の「経済政策」を列举すればつぎのようになろう。

- 一、農業の保護奨励
- 二、塩、鉄、金、その他重要物資の生産管理
- 三、均衡財政の維持
- 四、流通、物価の調整
- 五、税制および兵賦の整備

当時、鉄製農具の普及と役牛の使用によって農業生産が進むとともに、所有制度は貴族・領主の土地占有から封建地主の土地所有制へと移行しつつあった。一方、商工業がさかんになり、大商人が勃興してきた。市——商業都市が形成されつつあった。

齊の地は、『史記』貨殖列伝によると「潟鹵」（塩分の多い湿地）だったという。紀元前

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（中）卷十七「禁蔵」一〇一三頁。



十一世紀、この地に封ぜられた太公望呂尚<sup>①</sup>は機織り、漁業、製塩をおこした、という記録が同書にある。また、桑の原産地は、この山東地方であるといわれている。

こうした基盤にたって、管仲は、製塩業、金、鉄の採掘、地方の特産物（青茅、赤弓の材料、玉）などを生産管理したものと思われる。これらのものは、従来、自給自足程度の細々としたものであった。その産業化が齊の国力を充実させたことはいうまでもない。漢代に至って、「齊帶山海，膏壤千里，宜桑麻，人民多文采布帛魚鹽。」（齊は山と海をひかえ、肥沃な土地は千里にわたり、桑・麻が育ち、人民は多く、色とりどりの布帛や魚塩がある。）

（『史記』貨殖列伝）といわれるようになったのも、管仲の事績が実を結んだためであろう。

管仲はまた、流通の調整にも着目した。中国の歴史で、物価（とくに穀物の価格）の調整を考えだし、それを実際の政策に実現させた政治家は、管仲をもって嚆矢とする。「輕重斂散法」<sup>②</sup>といわれるこの方法は、農民の保護と表裏一体を成すものである。『管子』の価格調整法は、一口にいえば需給のバランスをとりながら人為的に市場を操作することである。これは近代経済学でいう「管理価格」と一脈通ずるものがある。

流通手段としての貨幣について論及したのも、『管子』が最初である。発生の起源は明らかでないが、齊で作られた刀錢（刀の形をした貨幣）が、今日各地で発掘されていることも、これと無関係ではあるまい。『管子』は貨幣の役割を重視し、「貨幣発行権は統治者にのみあるべきである。」と説いている。

古代社会では、国家収入の根幹は地租である。このばあい、税額の査定が当を得ているか否かによって、その国家の政治的安定が左右される。管仲は、ここでもきわめて合理的な考え方をしている。それは、税額の査定に当たっては、所有地の面積の大小だけにとらわれずに、その土地の生産性を考慮にいれることである。反当り十石の土地と、反当り一石の荒地に同率の税金をかけられたのでは、農民はたまらない。

---

<sup>①</sup> 呂尚は、西暦紀元前 11 世紀ごろの古代中国・周の軍師、後に齊の始祖。姓は姜、氏は呂、字は子牙もしくは牙、諱は尚とされる。軍事長官である師の職に就いていたことから、「師尚父」とも呼ばれる。諡は太公。齊太公、姜太公の名でも呼ばれる。

<sup>②</sup> 「周礼の泉府と管子の輕重収斂法」神谷正男、東京支那学報（通号 9）、1963 年。

『管子』は、土地を普通の土地と開墾困難地の二種に大別している。そして後者をさらに、沼地、藪、準河川地、準山地、山地、河川、森林、……といくつかの段階にわけ、各段階によって税率に違いがある。また、査定の公平を期するために、三年に一度の調整、五年に一度の土地調査を主張している。

### 第三節、君権の確立

管仲は主君の桓公にむかって、周王室に忠誠をつくすことを説いている。彼が本心から衰えた周王室の権威回復を望んだとは考えられない。その大義名分を利用して、斉の富強をはかろうとしたのである。

経済政策で、きわめて進歩的な見解を示した管仲は、政治の面では保守的な姿勢をとっているかのようにみえる。が、血縁的な氏族の紐帯をたちきり、君権支配を確立することは、当時においては前むきの姿勢であった。これを郡県制によって確立し、ついに天下を統一したのが後の秦であることを考えればこのことは判然とする。

### 第四節、牧民観点

現代的に言えば、『管子』は、「人民は為政者に治められている」と考えていた。牧民篇にある有名なことば、「凡有地牧民者，務在四時，守在倉廩。」<sup>①</sup>（およそ地を有し民を治める者は、務め四時に在り。守り倉廩に在り。）はこれを端的に示している。これは『管子』だけでなく、中国の古代社会ではきわめてポピュラーな考えであったわけで、「牧民」とか「畜民」とかいう表現がよくでてくる。郭沫若はこれを奴隸社会制度の意識として非難しているが、当時の支配層からみれば、治められている農民は、放牧されている家畜と、大差なかったのかもしれない。

管仲は、人民をうまく治めることを統治者の義務と考えた。そのためには、かれらの生活

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（上）巻一「牧民」二頁。

を保証してやることであり、さらに、法律による規制と、制度による抑圧があると考えた。  
後世の法家思想の源泉がここにある。

## 第五節、階層分業の思想

『管子』は階級的な差別を積極的に肯定する。「乗馬篇」にこういう説明がある。

「故一国之人不可以皆貴，皆貴則事不成而国不利也。為事之不成，国之不利也，使無貴者則民不能自理也，是故辨於爵列之尊卑，則知先後之序，貴賤之義矣。」<sup>①</sup>

（国中の人間がみな高位高官ばかりなら、勤労者はいなくなる。したがって、生産は停止し、国家は危機に瀕する。反対に、高位の者がいなかったらどうなるか。人民ばかりで統治する者がいないから、国家はいたずらに混乱するばかりだ。適正な序列や格差をつけることによって、長幼の序、貴賤の別を明らかにすることが肝要である。）

『管子』の階級観は政治的特権の有無によって差別される、いわゆる「身分」とも違う。それは「身分」より一歩進んだものである。『管子』の階級観は、「身分」に一定の生産意識と社会的任務を加えたものである。

『管子』は社会を君主・卿大夫・士・農・工・商のいくつかの階層にわけている。この中で、士・農・工・商の四階層は、各分担すべき業務があり、互いに違う所に住まわせるべきであり、兼業することは望ましくないと主張している。中国の学者はこれを「四民分業定居論」といつている。これは管仲の発想ではなく、周王朝の社会制度の一特長だが、『管子』はとくにこれを強く打ち出している。

四民分業には序列があるか。『管子』は、農業を最も重んじ、工業を一番軽く見る。この考え方はその後、中国よりも日本に強い影響をあたえたようだ。「士・農・工・商」は漢代

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（上）巻一「乗馬」八七頁。

以降になると中国ではあまり口にされなくなったが、日本では、江戸時代に至って社会的身分をこのことばで概括していたのである。

『管子』は後世においてさまざまな批判を受けた。孔子、孟子を含む儒家はもちろんのこと、先秦時代では、墨子、列子、莊子、荀子、韓非、漢代では劉向、司馬遷、楊雄、近世では、程伊川、蘇洵、蘇軾、呂祖謙、梅士享、朱長春、郭正域、俞樾、王念孫、日本では、伊藤仁斎、荻生徂徠、細井徳民、猪飼敬所、安井息軒……と、批判者の数は枚挙にいとまない。現代でも郭沫若、蔣伯潜<sup>①</sup>などから批判されている。

まず管仲という人物に対する批判がある。これは主として、かれが二君に仕えたことに由来する。が、管仲にとって肉体的な「君主その人」は問題でなかったのだ。かれはいう。「豈死一糾哉。夷吾之所死者，社稷破，宗廟滅，祭祀絶，則夷吾死之。」<sup>②</sup>（糾さまおひとりのために死ぬ必要はない。もし死ぬとすれば、それは、国が敗れるか、宗廟が滅びるか、先祖の祭りが絶えるかしたときだ。）一種の「君主機関説」とみることができよう。また、ともに公子糾に仕えた召忽が自害したのに、管仲だけが桓公の招きに応じたという点にも攻撃が集中した。

儒家はほとんど例外なく『管子』に反感をもつ。孟子は、管仲と比較されるのは不愉快だといわんばかりだし（『孟子』公孫丑篇）<sup>③</sup>、孔子は『論語』八佾篇の中で、「管仲之器小哉！」（管仲の器量は小さい。）などといっている。これは、『管子』の説く霸道が、儒家の唱える「仁」や「王道」とは対蹠的なものであることからして当然であろう。『管子』の霸道の根底を成すのは富国強兵策であり、物質優先の考え方であり、儒家にとっては、許し得ぬ「不仁の書」なのである。

また、『管子』の経済政策も後世の論議をよんでいる。たとえば、明代万暦年間の学者朱長春はこういう。

---

<sup>①</sup> 蔣伯潜（1892－1956）中国近代学者、教育者、浙江省富陽人。

<sup>②</sup> 『管子校注』（上）卷七「大匡」三三二頁。

<sup>③</sup> この段では孟子の答えはただ一言で済む「子誠斉人也，知管仲、晏嬰而已矣。」

看了管子的輕重篇，就会知道在米和塩的事情上投入了太多的精力。政策上也只關注对下層階級的救済，而不去反思正經商人和地方上的素封家的生活。

（管子の輕重篇を見てみると、あまりにも米や塩のことに力をいれすぎていることがわかる。政策的にも下層階級の救済にばかり気をとられ、ちゃんとした商人や地方の素封家の生活を省みようとしなない。）<sup>①</sup>

こうした批判にたいして、同じ万歴の進士で、經濟に精通したといわれる郭正域はいう。

我也讀過『管子』。這本書謀求商品流通，圖謀富国强兵。那个政策是符合當時人民的希望的。指責管子的人這樣說。『管子』拘泥于小利而失大節。『管子』的政策对大商人和放貸者過于嚴厉，不懂人情。

（わたくしも『管子』を読んだ。この書は商品の流通をはかり、富国強兵を策している。その政策は当時の人民の希望にかなったものである。管子を非難する者はこういう。『管子』は小利にこだわり大節を失している。『管子』の政策は大商人や金貸業者にきびしすぎ、人情をわきまえていない。）<sup>②</sup>

だが、これらはみな木を見て森を見ない論である。管子は民衆の気持ちをよく察しており、すこしも苛酷ではない。一言一句に千古の道理を秘めているから、その通り実行すれば、必ず国を富まし、兵を強くし、民を安んじることができよう。

---

① 朱長春『朱太復文集注』、『済南職業技術学院学報』、2015年8月。

② 郭正域『批点考工記』、中華書局、2008年2月出版。

### 第三章、『管子』の中の「農」に関する経済思想

農業は人々の衣食の源であり、社会経済の中で重要な地位を占めている。古代の農業社会では、農業経済は社会経済の根本であった。したがって、農業が歴代の支配者に重んじられたのは当然である。管仲は斉の宰相として農業の重要性をもちろん了解する。

#### 第一節、『管子』の中の「農」字の分析

『管子』全書には、三十二篇の文章のうち、107カ所に「農」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「権修」篇に一箇所ある。「故野不積草，農事先也。」<sup>①</sup>意味は「だから、田野に雑草を積ませないで、農業を首位に置くべきである。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「立政」篇に一箇所ある。「相高下，視肥瘠，觀地宜，明詔期，前後農夫，以時均修焉，使五谷桑麻，皆安其處，由田之事也。」<sup>②</sup>意味は「地勢の高低を観測し、地味の肥瘦を分析し、土地がどのような作物の生育に適しているかを究明する。農民が応召して服務する日を明確に定め、農民の生産、服務の前後に対して、時間どおりに全面的に手配し、五穀桑麻の栽培をさせ、それぞれにその適を得させる。それが「司田」の役割である。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「乗馬」篇に五箇所ある。1、「正月，令農始作，服于公田農耕，及雪積，耕始焉，芸卒焉。」<sup>③</sup>意味は「正月には農民に耕作を命じ、公田に勤務させた。雪が解けて春の農作業から夏の鋤まで。」ここでいう「農」とは、農民と農耕のことである。2、「是故非誠賈不得食于賈，非誠工不得食于工，非誠農不得食于農，非信士不得立于朝。」<sup>④</sup>意味は「したがっ

---

① 『管子校注』（上）卷一「権修」五二頁。

② 『管子校注』（上）卷一「立政」七三頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九一頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九一頁。

て、真の商人でなければ、商売をしてはならない。真の職人でなければ、仕事をしてはならない。真の農夫でなければ、農業をしてはならない。名実ともに士人でなければ、朝中に仕官することは許されない。」ここでいう「農」とは、農夫と農業のことである。3、「右士農工商」<sup>①</sup>意味は「以上は士農工商について。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「幼官」篇に一箇所ある。「一挙而上下得終，再挙而民無不従，三挙而地辟散成，四挙而農佚粟十，五挙而務輕金九，六挙而潔知事変，七挙而外内為用，八挙而勝行威立，九挙而帝事成形。」<sup>②</sup>意味は「このように、一年目の施政の結果、上も下も良い政治をした。翌年の施政の結果、人民は従わなかった。三年目の施政の結果、土地が開墾され、五穀が取れた。四年目の施政の結果、農民は安楽で食糧が豊かになった。五年目の施政の結果、賦役は軽減され国庫は潤沢になった。六年目の施政の結果、国事の変化を予言することができた。七年目の施政の結果、内外ともに自分のためにすることができた。8年目の施政の結果、勝利が実現し、国威が樹立された。九年目の施政の結果、帝業は一応の規模となった。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「幼官図」篇に一箇所ある。「一挙而上下得終，再挙而民無不従，三挙而地辟散成，四挙而農佚粟十，五挙而務輕金九，六挙而潔知事変，七挙而外内為用，八挙而勝行威立，九挙而帝事成形。」<sup>③</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。

「五輔」篇に五箇所ある。1、「其庶人好耕農而惡飲食。」<sup>④</sup>意味は「国中の百姓は耕作を愛し、大いに食べたり飲んだりすることを嫌う。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。2、「其庶人好飲食而惡耕農。」<sup>⑤</sup>意味は「国中の百姓は食うことを好み、耕作を嫌う。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。3、「君択臣而任官，大夫任官辯事，官長任事守職，士修身功材，庶人耕農樹芸。」<sup>⑥</sup>意味は「君主は臣を選んで官に任

---

① 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」九二頁。

② 『管子校注』(上) 卷三「幼官」一三九頁。

③ 『管子校注』(上) 卷三「幼官圖」一八四頁。

④ 『管子校注』(上) 卷三「五輔」一九二頁。

⑤ 『管子校注』(上) 卷三「五輔」一九二頁。

⑥ 『管子校注』(上) 卷三「五輔」一九八頁。

じ、大夫は官治事に任じ、官長はその事を担当して職責を厳守し、士人は品性を修養して才芸を攻め、平民は農耕栽培に従事する。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。

4、「庶人耕農樹芸，則財用足。」<sup>①</sup>意味は「庶民が農耕に従事すれば、財用は充分であった。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。5、「農以勞矣，而天下飢者，其悦在珍怪，方丈陳于前。」<sup>②</sup>意味は「農民は苦勞しているのに、天下に食糧がないのは、君主が珍味を好むからである。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「八觀」篇に二箇所ある。1、「行其田野，視其耕芸，計其農事，而飢飽之國可以知也。」<sup>③</sup>意味は「一國の田畑を巡察し、その耕作状況を見、その農業生産を計算すれば、その國の飢餓状況がわかる。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。2、「故曰、行其田野，視其耕芸，計其農事，而飢飽之國可知也。」<sup>④</sup>意味は前と同じ。

「重令」篇に一箇所ある。「何謂民之經產？畜長樹藝，務時殖谷，力農墾草，禁止末事者，民之經產也。」<sup>⑤</sup>意味は「人民の「經產」とは何か。家畜を飼育し、よく栽培し、農時に注意し、食糧を増産し、農事につとめ、荒地を開墾し、ぜいたく品の生産を禁止するのが、人民の經產である。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。

「法法」篇に一箇所ある。「故農夫不失其時，百工不失其功，商無廢利，民無游日，財無砥滯。」<sup>⑥</sup>意味は「だから、農夫は農作業を怠らず、各種の職人はその業を失わず、商人は利潤を減らさず、民衆はぶらぶらしていないし、財が滞ることもない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「大匡」篇に三箇所ある。1、「耕者農農用力，応于父兄，事賢多，行此三者，為上舉。」<sup>⑦</sup>意味は「田畑を耕す者は、非常に力を出し、父兄に順じ、しかも多くその勞に服す、この

---

① 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九九頁。  
② 『管子校注』（上）卷三「五輔」二零一頁。  
③ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二五八頁。  
④ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二五八頁。  
⑤ 『管子校注』（上）卷五「重令」二八六頁。  
⑥ 『管子校注』（上）卷六「法法」二九九頁。  
⑦ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六九頁。



三者あれば上等である。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。2、「耕者出入不応于父兄，用力不農，不事賢，行此三者，有罪無赦。」<sup>①</sup>意味は「田畑を耕す者は、出入りが父兄に不順、力を入れて働かず、事あるごとにその労に服せず、この三者を行っても罪は赦されない。」ここでいう「農」とは、農耕の仕事のことである。

「小匡」篇に七箇所ある。1、「制国以為二十一郷，商工之郷六，士農之郷十五。」<sup>②</sup>意味は「全国を21の郷に分けて、商・工の郷が6つ、士・農の郷が15個である。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「士農工商四民者，国之石民也，不可使雜処，雜処則其言訛，其事乱。是故聖王之处士必于閑燕，処農必就田野，処工必就官府，処商必就市井。」

<sup>③</sup>意味は「士農工商の四民は、国家の柱石の民であり、彼らを雑居させてはならない。雑居すれば言うこともやることも同じではない。そこで聖王は、士を閑静な地に住まわせ、農を田野に近く住まわせ、職人を官府に近く、商人を市場に近く配置した。」ここでいう「農」とは、農民のことである。3、「令夫農群萃而州処，審其四時，權節具備其械器用，比耒耜谷芟。」<sup>④</sup>意味は「農家の住居を集まらせ、四季を分け、用具を手配し、器械を備え、耒耜枷鎌などを完備させる。」ここでいう「農」とは、農民のことである。4、「是故農之子常為農，朴野而不慝，其秀才之能為士者，則足頼也。故以耕則多粟，以仕則多賢，是以聖王敬畏農。」<sup>⑤</sup>意味は「だから、農家の子弟は農民であることが多い。彼らは質素にして奸悪せず、その優秀な人材が士人になれば信頼できる。彼らに農業をさせれば食糧が増える。かれらを仕官させれば、賢才が多い。だから、聖王はいつも農を敬い、農を愛する。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「戒」篇に一箇所ある。「先王之游也，春出，原農事之不本者，謂之游。」<sup>⑥</sup>意味は「先王

---

① 『管子校注』（上）卷七「大匡」三七〇頁。

② 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇一頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇一頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十「戒」五〇七頁。

の遊行、春に外出して農作業で経営に困っていることを調べるのを「遊」という。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「君臣上」篇に三箇所ある。1、「是以上之人務徳、而下之人守節。義礼成形于上、而善下通于民、則百姓上帰親于主、而下尽力于農矣。故曰、君明、相信、五官肅、士廉、農愚、商工願、則上下体而外内別也、民性因而三族制也。」<sup>①</sup>意味は「したがって、上にある者は道徳を重んじ、下にある者は本分を守り、義礼は上で模範となり、美善は下で人民に通じる。こうして、民はみな上には君主に寄り、下には農業に力を注ぐようになった。だから、君主は英明で、宰相は誠実で、五官は厳粛で、士人は廉直で、農民は愚朴で、商人と工匠は謹厚で、それでは、上下は一定の体裁があつて、内外は一定の別れがあります；人民の生活には頼りがある。農、商、工の3種類の人もすべて管理しました。」ここでいう「農」とは、農業と農民のことである。2、「是故歳一言者、君也；時省者、相也；月稽者、官也；務四支之力、修耕農之業以待令者、庶人也。」<sup>②</sup>意味は「したがって、年ごとに視察するのが君主、四時ごとに視察するのが輔相、月別に視察するのが百官、労働専務農業に従事して上の命令を待つのが一般庶民である。」ここでいう「農」とは、農業のことである。

「君臣下」篇に四箇所ある。1、「斉民食于力則作本、作本者衆、農以听命。」<sup>③</sup>意味は「庶民は労働力によって生活し、基本的な農業生産に従事する。農業生産に従事する人が多くなると、勤勉で命令に従う。」<sup>④</sup>ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「決之、則君子行于礼；塞之、則小人篤于農。君子行于礼、則上尊而民順；小民篤于農、則財厚而備足。」<sup>⑤</sup>意味は「開放すれば、君子に礼制を守らせることができる。詰めて、則ち小民に営農に専念させることができ、君子は礼制を守って、則ち君主の尊厳で百姓は従順です；小民が営農に専念すれば、財貨も豊かになり、食糧も豊富になる。」ここでいう「農」とは、農事の

---

① 『管子校注』（中）卷十「君臣上」五五〇頁。

② 『管子校注』（中）卷十「君臣上」五五九頁。

③ 『管子校注』（中）卷十「君臣下」五五〇頁。

④ 『管子校注』（中）卷十一「君臣下」五八四頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十一「君臣下」五八五頁。

ことである。3、「禁淫務，勸農功，以職其無事，則小民治矣。」<sup>①</sup>意味は「ぜいたく品の生産を禁止し，農業耕作を奨励して，無職の民に仕事をさせると，小民が治める。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「侈靡」篇に一箇所ある。「故書之帝八，神農不与存，為其無位，不能相用。」<sup>②</sup>意味は「だから、經典によると、古代の帝王は八人いて、神農はその中にいない。これは彼が五徳の位にいないため、五徳の終りに参与することができないという理由だ。」ここでいう「農」とは、「神農」のことである。神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人である。

「四時」篇に一箇所ある。「三政曰、慎旅農，趣聚收。」<sup>③</sup>意味は「第三の政令は、田地、山林に在る農民を戒め、秋の収穫を促す。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「五行」篇に三箇所ある。1、「睹戊子，土行御，天子出令，命左右司徒内御，不誅不貞，農事為敬。」<sup>④</sup>意味は「戊子に当たる日に、土の徳性に応じて時節に応じて事を治める。天子は、左右の司徒に、内侍して事を治めるよう命じた。この時節は誅せず賞せず，農事に敬慎する。」ここでいう「農」とは、農事のことである。2、「君子之静居，而農夫修其功力极。」<sup>⑤</sup>意味は「貴者は静かに居て、農民は農業生産に従事して非常に専念して、力を入れなければならない。」ここでいう「農」とは、農事のことである。3、「然則昼炙陽，夕下露，地競環，五谷隣熟，草木茂。実歳農丰，年大茂。」<sup>⑥</sup>意味は「日中は日が暑く、夜は涼露が降り、地気が出て、五穀が続々と熟し、草木も豊かになり、農作物も豊かになる。」ここでいう「農」とは、農作物のことである。

「治国」篇に十三箇所ある。1、「昔者七十九代之君，法制不一，号令不同，然俱王天下者何也？必国富而粟多也；夫富国多粟，生于農；故先王貴之。凡為国之急者，必先禁末作文巧；末作文巧禁，則民無所游食；民無所游食，則必事農；民事農，則田墾；田墾，則粟多；

---

① 『管子校注』（中）卷十一「君臣下」五九四頁。

② 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七四四頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五一頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七四頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七四頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七六頁。

粟多，則国富；国富者兵強；兵強者戰勝；戰勝者地広；是以先王知衆民強兵，広地富国之必生于粟也，故禁末作，止奇巧，而利農事。今為末作奇巧者，一日作而五日食，農夫終歳之作，不足以自食也；然則民舍本事而事末作，舍本事而事末作，則田荒而国貧矣。」<sup>①</sup>意味は「これまでの歴代の君主は、法令も号令もちがっていたが、みな天下に君臨していたのはなぜなのか。きっと国が豊かで食糧があるからだ。国が豊かで食糧が充実したのは農業のおかげで、先代の聖王は農業を重視した。国家の管理に当る当面の急務は、ぜいたくな手工業や商業を止めなければならず、これを止めてしまえば、人民は放食することができず、人民は放食することができず、農業に従事するしかない。人民が農業に従事すれば土地が開拓され、土地が開拓されれば食糧が増え、食糧が増えれば国が豊かになり、国が豊かになれば兵力が盛んになり、兵力が盛んになれば戦争に勝つことができ、戦争に勝てば土地も広大になる。だから古代の聖王は、人口が多く、兵力が強く、国土が広く、国富が豊かになるのは必ず食糧に由来することを知り、ぜいたくな商工業を禁止して農業に有利になった。現在、手工業や商業に従事する者は、一日の労働で五日分の食料を得ることができるが、農民の一年の労働では、自家の生活を維持するには足りない。そうすれば人民は農業を離れて商工業に従事し、農業を離れて商工業に従事すれば、土地は荒廃して国は貧しくなる。」ここでいう「農」とは、農事と農業のことである。2、「凡農者月不足而歳有餘者也，而上徵暴急無時，則民倍貸以給上之徵矣。」<sup>②</sup>意味は「農業に従事している人は、その収入は月々にしては不足することが多く、年にして初めて余ることが可能である。しかし、官憲の徴税は差し迫っていて、しかも一定の時期はなく、農民は倍額の高利を借りて国家の徴税に対応しなければならなかった。」ここでいう「農」とは、農民のことである。3、「今也倉廩虚而民無積，農夫以粥子者，上無術以均之也。故先王使農士商工四民交能易作，終歳之利，無道相過也。」<sup>③</sup>意味は「今、国の穀倉は空しく、百姓には貯蔵がない。農民が子供を売る理由は、君主が彼ら

---

① 『管子校注』（中）卷一五「治国」九二四頁。

② 『管子校注』（中）卷一五「治国」九二五頁。

③ 『管子校注』（中）卷一五「治国」九二六頁。

の収入のバランスをとることができないからである。だから先代の聖王は、農・士・商・工を交替させて、毎年の収入を誰も出し合うことができなかった。」ここでいう「農」とは、農民のことである。4、「所謂興利者，利農事也；所謂除害者，禁害農事也；農事勝則入粟多；入粟多則国富；国富則安郷重家；安郷重家，則雖變俗易習，驅衆移民，至于殺之，而民不惡也，此務粟之功也。上不利農，則粟少；粟少則人貧；人貧則輕家，輕家則易去；易去則上令不能必行；上令不能必行，則禁不能必止；禁不能必止，則戰不必勝，守不必固矣。夫令不必行，禁不必止，戰不必勝，守不必固，命之曰寄生之君。此由不利農，少粟之害也。粟者，王之本事也，人主之大務，有人之塗，治國之道也。」<sup>①</sup>意味は「興利とは、農業に有利であるということである。害を除くとは、農業に害を与えることを禁止することである。農業が発展すれば食糧収入が多くなり、食糧収入が増えれば国富になり、国富になれば百姓は郷に安住して家を愛することになる。郷に安住して家を愛することになれば、彼らの風俗と習慣を変え、彼らを駆使して使い、殺戮することになるが、百姓はみな憎まない。食糧生産に力を入れた効用である。人君が農業を発展させなければ食糧は必ず少なくなり、糧が少なれば百姓は窮乏し、窮乏すれば家を軽んじ、家を軽んじては逃げやすくなる。百姓が簡単に逃げれば君令は「必行」ができず、君令ができなければ禁律も「必止」ができない。法令は必ず実行されてはならない。掟は必ず止められず、戦いは必ず勝つことができず、守りは必ず固めることができない。これを寄生君主という。これはいずれも農業を発展させない食糧不足の弊害である。ゆえに食糧を増産することは王になるための根本の大事であり、人君の重大な任務であり、民衆を招く道であり、国を治める道である。」ここでいう「農」とは、農業のことである。

「封禪」篇に一箇所ある。「神農封泰山，禪云云。」<sup>②</sup>意味は「神農は泰山で封の祭を行い、云々の山で禪の祭を行いました。」ここでいう「農」とは、「神農」のことである。神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人である。

---

① 『管子校注』（中）卷一五「治国」九二六頁。

② 『管子校注』（中）卷一六「封禪」九五三頁。

「禁蔵」篇に三箇所ある。「法令為維綱，吏為罔罟，什伍以為行列，賞誅為文武。繕農具当器械，耕農当攻戰，推引鉋耨以当劍戟，被蓑以当鎧鎡，蒞笠以当盾櫓。故耕器具則戰器備，農事習則功戰巧矣。」<sup>①</sup>意味は「法令はレチクルの大綱に如し、官吏は網と罟に如し、住民の什伍編制は軍隊の行列に如し、賞罰は進退の金鼓に如し。農具を整備して武器にし、耕作を利用して戦闘に利用すべきである。鋤は劍戟に似ており、蓑は鎧に似ており、笠は盾に似ている。だから農具が完備すれば武器が完備し、農事習熟攻戦も精巧になる。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「度地」篇に一箇所ある。「不利作土功之事，放農焉。」<sup>②</sup>意味は「この時土工工事をするのに不利で、それが農事を妨害するためである。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「形勢解」篇に一箇所ある。「神農教耕生谷，以致民利。」<sup>③</sup>意味は「神農は民に耕作を教え食糧を生産し、人民を利する。」ここでいう「農」とは、「神農」のことである。神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人である。

「巨乘馬」篇に三箇所ある。1、「一農之量壤百畝也，春事二十五日之内。」<sup>④</sup>意味は「一人の農民が百畝の土地を耕すことができ、春の種まきは二十五日以内に完了しなければならない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「彼善為国者，使農夫寒耕暑耘，力歸于上；女勤于織微，而織婦于府者；非怨民心，傷民意，高下之策，不得不然之理也。」<sup>⑤</sup>意味は「そのような国を治めるのが上手な人は、農民が耕作に精を出して成果を君に帰し、婦人が紡績に精を出して成果を官に帰すことができる。国民の心を害しようとしたのではなく、物価の高さを利用した財テクだったのだから、そうならざるを得ない。」ここでいう

---

① 『管子校注』（中）卷一七「禁蔵」一〇一六頁。

② 『管子校注』（下）卷一八「度地」一〇六三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八三頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二三頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二七頁。

「農」とは、農民のことである。3、「謂農夫曰」<sup>①</sup>意味は「農民に言う。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「事語」篇に一箇所ある。「農夫寒耕暑耘，力歸于上，女勤于緝績黹織，功歸于府者，非怨民心，傷民意也。」<sup>②</sup>意味は「農夫を耕させ、成果を君主に歸し、婦人を紡績に勤ませ、成果を官に歸すのは、民心と民意を傷つけようとするものではない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「山權数」篇に二箇所ある。1、「故王者歲守十分之參，三年与少半成歲。三十一年而藏十一年，与少半藏參之，一不足以傷民，而農夫敬事力作，故天毀地，凶旱水洧，民無入于溝壑乞請者也。此守時以待天權之道也。」<sup>③</sup>意味は「ゆえに成王業の君主は、毎年食糧の十分の三を貯え、三年余りで一年分の食糧を蓄えた。三十七年で十一年ちょっとの貯蓄になる。毎年 3 分の 1 の貯蓄は民生を害するほどではなく、農民が農業を重視し勤勉に努力することを促すことができる。天災が土地生産をき損しても、凶魃がおこっても、百姓は溝で死んだり、路上で物乞いをしたりすることはなくなった。これが天の時を掌握して天の権変に対応する方法である。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「民之能明于農事者，置之黄金一斤，直食八石。」<sup>④</sup>意味は「百姓のうち、農事に精通している者には、黄金一斤、食糧八石の価値に当たる。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「山至数」篇に三箇所ある。1、「以幣準谷而授祿，故国谷斯在上，谷賈什倍。農夫夜寢蚤起，不待見使，五谷什倍。士半祿而死君，農夫夜寢蚤起，力作而無止。」<sup>⑤</sup>意味は「食糧を貨幣で換算して俸給を出せば、食糧はすべて国に蓄えられ、食糧価格は十倍に跳ね上がる。農民は遅く寝て早く起きるので、こき使わなくても生産量を 10 倍に増やすことができる。このようにして、兵士は以前の半分の食糧俸祿さえあれば、国のために尽くすことができる。

---

① 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二七頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「事語」一二四一頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山權数」一三〇〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山權数」一三〇九頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

農民はまた遅く寝て早く起きて努力して耕作して止まらない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「大夫高其壟，美其室，此奪農事及市庸，此非便国之道也。」<sup>①</sup>意味は「士大夫に墓を高く、墓室を美しくととのえさせるのは、必然的に農事や市場の使用人を奪って、利国の道ではない。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「地数」篇に一箇所ある。「陽春農事方作，令民毋得築垣牆，毋得繕冢墓，丈夫毋得治宮室，毋得立台榭，北海之衆毋得聚庸而煮塩，然塩之賈必四什倍。」<sup>②</sup>意味は「春の農事が始まると、百姓には垣を築くことも、墓を建てることも、大夫には宮の台の木を建てることも、北海の民には、塩を煮るために人を雇うことも一切しないよう命じた。となれば、塩の値段は四十倍になる。」ここでいう「農」とは、農事のことである。

「揆度」篇に六箇所ある。1、「上農挾五，中農挾四，下農挾三。上女衣五，中女衣四，下女衣三，農有常業，女有常事。一農不耕，民有為之飢者，一女不織，民有為之寒者。」<sup>③</sup>意味は「上等労働者は五人分、中等労働者は四人分、下等労働者は三人分の食事を負担できる。上等労働者の婦人は5人に衣服を供給でき、中等労働者は4人に供給でき、下等労働者は3人に供給できる。農民は常に耕作し、女性は常に紡績しなければならない。農業をしなければ、人民は飢えているかもしれない。女が織物を編まなければ、人民は凍えるものがあるかもしれない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「神農之数曰」<sup>④</sup>意味は「神農の術が教えてくれる。」ここでいう「農」とは、「神農」のことである。神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人である。

「輕重甲」篇に十箇所ある。1、「吾田野辟，農夫必有百倍之利矣。」<sup>⑤</sup>意味は「わが国の土地は開拓され、農民も百倍の利益を得るに違いない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「今北沢焼，莫之続，則是農夫得居装而売其薪藁，一束十倍。」<sup>⑥</sup>意味は「北

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三七頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三四六頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八七頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八八頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二〇頁。



部の沢から火が出て、柴草を立てることができなくなったので、農夫は余裕をもって車に積んで薪を売り、一束の値段を十倍にすることができた。」ここでいう「農」とは、農民のことである。3、「使夷吾得居楚之黄金，吾能令農毋耕而食，女毋織而衣。」<sup>①</sup>意味は「夷吾が楚の黄金を持っていれば、農民は耕さずに食べ、女性は織らずに着ることができる。」ここでいう「農」とは、農民のことである。4、「孟春既至，農事且起。」<sup>②</sup>意味は「春先になると、農作業は既に始まっている。」ここでいう「農」とは、農事のことである。5、「農夫失其五谷，是重竭也。」<sup>③</sup>意味は「農夫に食糧を失わせることは、倍の枯渇に等しい。」ここでいう「農」とは、農民のことである。6、「一農不耕，民或為之飢。」<sup>④</sup>意味は「一人の農民が畑を耕さなければ、人民は飢える可能性がある。」ここでいう「農」とは、農民のことである。7、「且君朝令而求夕具，有者出其財，無有者売其衣，農夫糶其五谷，三分賈而去。」<sup>⑤</sup>意味は「それに君主が朝に徴税を命ずると、夜にはそれを制限して納めるので、金持ちの家では出せ、貧しい家では衣類を売り、農民は穀物を売って税を納め、十分の三の値段でしか売ることができない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。8、「然則一農之事，終歲耕百畝，百畝之收，不過二十鐘，一農之事乃中二金之財耳。」<sup>⑥</sup>意味は「このようにして、一農民が毎年 100 畝耕地すると、100 畝の収穫はわずか 20 鐘で、一農民の耕作はわずか 2 斤の黄金の価値にしかない。」ここでいう「農」とは、農民のことである。9、「一農之事，有二十金之策。」<sup>⑦</sup>意味は「1 人の農民が 1 年の耕作で 20 斤の黄金の収入がある。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「輕重乙」篇に十三箇所ある。1、「一農之事，必有一耜、一鋤、一鎌、一耨、一椎、一鉿，然後成為農。」<sup>⑧</sup>意味は「農夫の生産には犁、大鋤、鎌、小鋤、短鎌などの道具があっ

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二二頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二六頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三〇頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三六頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三六頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四八頁。

てこそ農夫になれる。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「涇水十二空，汝淵洙浩滿三之于，乃請以令，使九月种麦，日至日獲，則時雨未下而利農事矣。」<sup>①</sup>意味は「小水を地形に応じて加減すれば、汝、泗、洙、沿諸水の水量は三倍になる。そこで九月に麦を植え、翌年の夏至に刈り取るよう命じた。このようにして、時雨が降る前に、農事灌漑に有利になった。」ここでいう「農」とは、農事のことである。3、「請以令発師置屯籍農，十鐘之家不行，百鐘之家不行，千鐘之家不行。行者不能百之一、千之十，而困窮之数，皆見于上矣。」<sup>②</sup>意味は「軍隊を派遣して辺疆に屯田して農業をするように命令してください。しかし、家に10分の食糧を蓄えている者は行かなくてもよい、家に100分の食糧を蓄えている者は行かなくてもよい、家に千鐘を蓄えている者は更に行かなくてもよいと規定しています。これでは百分の一も十分の一も行かず、各蔵の備蓄量はすべて国に知られてしまう。」ここでいう「農」とは、農事のことである。4、「罷師帰農，無所用之。」<sup>③</sup>意味は「兵をやめて帰農すれば、これらの食糧は無用になるではないか？」ここでいう「農」とは、農事のことである。5、「桓公曰、「吾欲殺正商賈之利，而益農夫之事，為此有道乎？」管子対曰、「粟重而万物輕，粟輕而万物重，兩者不衡立。故殺正商賈之利，而益農夫之事，則請重粟之价金三百。若是則田野大辟，而農夫勸其事矣。」桓公曰、「重之有道乎？」管子対曰、「請以令与大夫城藏，使卿諸侯藏千鐘，令大夫藏五百鐘，列大夫藏百鐘，富商蓄賈藏五十鐘。内可以為国委，外可以益農夫之事。」桓公曰、「善。」下令卿諸侯令大夫城藏。農夫辟其五谷，三倍其賈。則正商失其事，而農夫有百倍之利矣。」<sup>④</sup>意味は「桓公は、「商人の利益を削って農民の生産を助けたいが、どうすることができるか」といった。管仲は、「食糧の値段が高ければ、その他の物資の値段は安くなる。食糧が低ければ、その他の物資の価格は高くなる。両者の上げ下げの傾向は逆である。だから商人の利益を削って農民の生産を助けるには、

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五五頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六二頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六二頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六五頁。

一釜あたりの食糧の値段を三百銭上げなさい。こうして荒地は広く開墾され、農夫も懸命に耕した。」桓公は、「糧価を上げるには、どんな方法がある」といった。管仲は答えて、「大夫諸君に命じて、卿と附庸諸侯に千鐘、令大夫に五百鐘、列大夫に百鐘、富商蓄賈に五十鐘を貯蔵せよ。内は国家の貯蔵として、外は農民の生産を助けることができる。」桓公は、「よし」といった。卿諸侯、令大夫などに食糧の貯蔵を命じた。農民たちはその五穀を大いに栽培し、糧は三倍になり、商売に専念する商人はほとんど損をし、農民は百倍の利益を得た。」

ここでいう「農」とは、農民のことである。6、「農事且作，請以什伍農夫賦耒鉄，此之謂春之秋。」<sup>①</sup>意味は「農作業が始まったとき、農民に什伍相互保証で農具を前売りさせるのを春の時機という。」ここでいう「農」とは、農民、農事のことである。

「輕重丁」篇に二箇所ある。1、「寡人多務，令衡籍吾国之富商蓄賈称貸家，以利吾貧萌，農夫不失其本事。反此有道乎？」<sup>②</sup>意味は「私は処理しなければならないことが多いので、役人を派遣して豪商蓄賈や高利貸に税を課し、貧民や農夫を助けて農作業を維持させた。しかし、このやり方を変えて、ほかに道があるだろうか。」ここでいう「農」とは、農民のことである。2、「君谷籍而務，則農人独操国固。」<sup>③</sup>意味は「専務が食糧を徴収すれば、地主がそれを操作する。」ここでいう「農」とは、農民のことである。

「輕重戊」篇に六箇所ある。1、「神農作，樹五谷淇山之陽，九州之民乃知谷食，而天下化之。」<sup>④</sup>意味は「神農が執政し、碁山の南に五穀を植えたことで、九州の民は食糧を食べることを知り、天下を帰化させた。」ここでいう「農」とは、「神農」のことである。神農は、古代中国の伝承に登場する三皇五帝の一人である。2、「公因令齊勿敢為，必仰于魯梁，則是魯梁积其農事而作綈矣。」<sup>⑤</sup>意味は「齊国には、ワールスを出さず、于魯、梁の二国に下賜せよ、と命じた。こうして魯梁の二国は農業を放棄して、ワールスを作ることになる。」

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六七頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四七四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五〇七頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五一四頁。

ここでいう「農」とは、農業のことである。3、「魯梁之君即令其民去綈修農。」<sup>①</sup>意味は「両国の君主は百姓たちに農作業を中止するよう命令した。」ここでいう「農」とは、農業のことである。4、「萊即积其耕農而治柴。」<sup>②</sup>意味は「萊国はすぐに農業をやめて薪割りに専念した。」ここでいう「農」とは、農業のことである。5、「管子即令隰朋反農。」<sup>③</sup>意味は「管仲は、隰朋に命じて兵を撤退させ、耕作させた。」ここでいう「農」とは、農事のことである。6、「楚民即积其耕農而田鹿。」<sup>④</sup>意味は「楚の民は農業をやめて鹿を狩った。」ここでいう「農」とは、農業のことである。

『管子』全書に対して107 処の農の字の分析を通して、農の主な意味が農事、農業、農民と農時であることが判明した。

## 第二節、農本思想

「農業は立国の基本である。」というのが『管子』全体を貫く主要な思想である。『管子』はその第一篇「牧民」の中で明らかに書いている。「凡有地牧民者，務在四時，守在倉廩。国多財則遠者来，地辟举則民留处，倉廩实則知礼節，衣食足則知荣辱。」（すべて一国の君主は、四時の農事に力を入れ、食糧の貯蔵を確保しなければならぬ。国の財力が豊かであれば、遠方の人々は移り住んでくることができ、荒地の開発がうまくいけば、自国の民は安心して留まることができる。食糧が豊かになれば、人々は礼儀を知り、衣食が豊かであれば、人は荣辱を知る。）国土をもって人民を治める君主は、四時の農事を重視し、食糧の備蓄を保証しなければならない、という意味である。国の財力が豊かになれば遠方から人を呼び込むことができるし、土地の開発利用がうまくなれば国民を安心して住まわせることができる。農業生産は国家の興亡と人民の教化にかかわると考えた。『管子』は主に次の二つの側

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五一五頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二一頁。

面から農業の重要性を強調している。<sup>①</sup>第一に、農業を重視することは、人民の安住の保証であり、国家統治の有力な物質的基盤でもある。「五谷食米，民之司命也。」（食糧は、人民の生命の支配者である。）（『国蓄』）「明王之務，在于強本事，去無用，然後民可使富。」

（英明な君主の任務は、農業を強化し、無用の長物の生産を廃止し、そして人民を豊かにすることにある。）（『五輔』）食糧は人民の生活必需品であり、人々はまず食事の問題を解決しなければ、他の諸事業に従事することができない。だから、国を豊かにするにはまず国民を豊かにし、豊かな国民が国を治めることになる。「善為国者，必先富民，然後治之。」

（故に、上手に国を管理する君主は、まず民を豊かにしてから治めなければならない。）「凡治国之道，必先富民，民富則易治也，民貧則難治也。」（およそ国を治める道理は、まず民を豊かにしなければならない。民が豊かであれば治めやすく、貧しければ治めにくくなる。）

「必国富而粟多也。夫富国多粟，生于農，故先王貴之。」（国が豊かで糧が多いからに違わない。国が豊かで食糧が充実したのは農業のおかげで、先代の聖王は農業を重視した。）

（『治国』）ここでは、国家を治めるには人民を豊かにすることが必要であり、人民を豊かにするには国家が農業生産を重視することが必要であると指摘している。国民には十分な生活物資があり、安定した経済的基盤があり、各人が楽に暮らし、この物質的基盤の上に、遵法奉公が可能になり、君主の命令に喜んで服従することが可能になり、君主が教化を施し、民を善に導くことが可能になり、国家が安定し秩序あるものになる。第二に、農業を重視することは、社会経済の発展と富国強兵を促進するための保証となることである。「民事農則田墾，田墾則粟多，粟多則国富，国富者兵強，兵強者戦勝，戦勝者地広。」（百姓が農業に従事すれば土地が開墾され、土地が開墾すれば食糧が増え、食糧が増えれば国が豊かになり、国富になれば兵力が強大になり、兵が強ければ戦争に勝ち、勝てば土地が広がる。）（『治国』）農業生産を発展させ、食糧の供給を増やすことは、富国強兵を実現し、領土を拡張し、諸侯を制覇するために必要であった。国の農業が強くなってこそ、国の軍隊も強くなり、軍

---

<sup>①</sup> 「試析『管子』中的農業科技思想」李艷紅、『広西民族大学学报』、2009年2月第1期。

隊が強くなれば戦争に勝つことができ、戦争に勝てば広大な国土を持つことができる。

### 第三節、農時思想

農業生産活動は季節と密接に関連しており、季節の影響を大きく受ける。農業の科学技術のあまり発達していない古代で、季節は農業に決定的な影響を与えた。そのために、農作業に遅れないように手配することが重要だった。<sup>①</sup>

「春者、陽気始上、故万物生。夏者、陽気畢上、故万物長。秋者、陰気始下、故万物收。冬者、陰気畢下、故万物藏；故春夏生長，秋冬收藏，四時之節也。賞賜刑罰，主之節也。四時未嘗不生殺也，主未嘗不賞罰也；故曰、春秋冬夏，不更其節也。」（春は陽気が上がり始めるので、万物がよみがえる。夏は、陽気が完全に上がるので、万物が成長する。秋は、陰気が降り始めるので、万物が収まる。冬は、陰気が完全に訪れるので、万物が閉じてしまいくる。だから春夏は成長して、秋と冬は閉じて、これは四時の節令である。刑罰と恩賞、これは君主の節度である。四時に生殺が実現しないことはない。君主が賞罰を与えないことはない。故に、春秋冬夏、その節を改めない。）（『形勢解』）「春秋冬夏、陰陽之推移也；時之短長，陰陽之利用也。」（春秋冬夏は陰陽の推移で、農事の長短は陰陽の作用である。）（『乘馬』）春夏秋冬、4つの変化と時間の長さはすべて陰陽の相互作用の結果です。四季の移り変わりは万物の生長にも影響する。春生夏長、秋収冬蔵、これは四時交替の自然の摂理である。このように人々に農事を手配するのは必ず四時の変化と万物の生長の規律に従って、盲目的に事を行うことができないことを戒める。「地之生財有時。」（土地は富を生産して、季節の制限を受ける。）（『權修』）農事活動は農事の時間に合わせて行わなければ収穫が得られない。「不務天時，則財不生。」（天の時を気にしなければ、富は増えない。）（『牧民』）「不失其時然後富。」（農業を怠らないでこそ国は豊かになる。）（『禁藏』）「不知四時，乃失国之基。」（四時を知らなければ、立国の根本を失う。）（『四時』）四時変化

---

<sup>①</sup> 「『管子』農業経済管理思想概観」劉冠生、『管子学刊』、2005年第2期。

の法則性を守らなければ、農業生産もできず、国の根幹も失うことになる。農業の時期を逃さないように適切な耕作をしてこそ、農業の豊作と国家の安定を得ることができる。農業の時間は農業の生産にとって非常に貴重なことを見ることができて、農作業を重視するのは農業をよくする重要な前提である。

また、『管子』は、農耕の時間は短いので、それを大切にして農業生産に間に合わせなければならないことを認識している。<sup>①</sup>「一農之量壤百畝也, 春事二十五日之内。」(一人の農民が百畝の土地を耕すことができ、春の種まきは二十五日以内に完了しなければならない。)(『巨乘馬』)一人の農民が百畝の土地を耕すことができ、春の種まきは二十五日以内に完了しなければならないので、農作業は非常に差し迫っており、人々は農作業に遅れないように十分な準備をしなければならない。『山国軌』にも曰く「春十日不害耕事, 夏十日不害芸事, 秋十日不害斂実, 冬二十日不害除田, 此之謂時作。」(春の大事な十日は耕作に、夏の大事な十日は草取りに、秋の大事な十日は収穫に、冬の大事な二十日は手入れに、というのが、時間どおりに作業をするということである。)これはまた、春、夏、秋、冬の各季節の最も重要な10日間は農作業を怠らないように、春種、夏芸、秋の収穫を適時に完了し、冬の最も重要な20日間は土地を整備して、次の年の耕作のための基礎と準備を整えるよう人々に戒めている。『管子』はまた、農時が短く貴重であるからこそ、支配者に農時を奪わないことで、農業生産を円滑に進めることを勧めている。<sup>②</sup>「彼王者, 不奪民時, 故五谷興丰。」(王業をなす君主は、百姓の農期を奪うことがありませんから、五穀豊穰になる。)(『巨乘馬』)「無奪民時, 則百姓富。」(農期を奪わなければ、民は豊かになる。)(『小匡』)農作業を遅延させなければ、農業生産と豊作が保証され、それによって民は豊かになり、国は安定する。『管子』には、農時を奪わないための具体的な方法が列挙されている。まず、君主と官府は、農繁期に農民に賦役を与えるのではなく、逆に農時を駆り立てるために、十分な人・財・物力を動員して組織し、農業に奉仕させなければならなかった。また、農繁期には、農

---

① 「浅談『管子』与『經濟論』的農業思想」曹俊傑、『管子学刊』、1998年第4期。

② 「『管子』的農業科技思想初探」侯輝、『農業考古』、2013年第3期。

民が他の非農業的経営に従事することを禁止する厳しい法律・政令を發布したが、その目的はやはり労働力の確保と労働時間の確保であった。「発五正，赦薄罪，出拘民，解仇讎，所以建時功，施生谷也。」（各種の政令を出して、罪の軽い者を赦し、拘留者を釈放し、紛争を調停して、農事を早く終えて食糧生産に専念するためである。）（『禁藏』）すなわち、春耕期には、罪の軽い者には赦し、拘束されている者には釈放し、百姓間の葛藤を解消し、功德のある者には報奨して、農業労働力を増大させ、速やかに農作業を完成させる。「故力出于民，而用出于上。」（労力は民から、農具は国から出る。）（『山国軌』）農時が始まる前に、国家は農民に各種の農具と食糧を充分に用意し、また困窮者には税を免除し、食糧のない者には金と種子を貸し、困窮者には農具・器物を貸与して、農業生産に力を入れさせる。「民之能明于農事者，置之黄金一斤，直食八石。」（百姓のうち、農事に精通している者には、黄金一斤、食糧八石の価値に当たる。）（『山権数』）農作業に精を出す者には、奨励政策を実施した。これらの措置は十分に農民が適時に耕作することを保証して、農業の発展に有利となるものである。

## 第四節、農税思想

封建的な土地制度のもとでは、農業税は国家財政の主要な供給源であり、農業経済をコントロールする重要な手段であったから、農業税の問題は農業経済における重要な問題であった。『管子』は農業税に関する一連の思想を述べている。<sup>①</sup>

### 1、与民分貨

農税制度は農地制度と密接に関連しており、農地制度は農税制度の基礎となっている。『管子』は農地制度では「均地分力」、農税制度では「与民分貨」、つまり農民が人から受け取ったものの一部を税収として国家に納め、一部を私財として農民に残すことを主張した。与民分貨の基本原則は国民との兼ね合いで、国家のことばかり考えて、税金を高く

---

<sup>①</sup> 「『管子』農業経済管理思想概観」劉冠生、『管子学刊』、2005年第2期。



取りすぎてはいけない。国家を顧みずにはいられず、徴税は低すぎ、国家と庶民の双方の利益を考慮しなければならなかった。『乗馬』篇にあるように「与之分貨，則民知得正矣；審其分，則民尽力矣。是故不使而父子兄弟不忘其功。」（与民分貨制度を実行して、人民は確実に収穫があることをわかる。徴収の基準を明確にすれば、民は力を尽くす。そこで、促されるまでもなく、親子兄弟ともに出産に関心を持つようになったのである。）国民は国に明確な課税基準があることを知ると、より積極的に農業に取り組むようになる。

## 2、相壤定籍

管仲は、土地の品質には優劣の区別があり、生産量には高低の区別があるため、土地の品質の善し悪しに基づいて課税標準を定めるべきだとみなしている。『乗馬数』に曰く「郡県上與之壤守之若干，間壤守之若干，下壤守之若干。故相壤定籍而民不移，振貧補不足，下樂上。故以上壤之滿，補下壤之衆。章四時，守諸開闔，民之不移也，如廢方于地。」（郡県の上等の土地に対して、その食糧の数量を把握し、中位の土地に対して、その食糧の数量を把握し、下等の土地に対して、その食糧の数量を把握する。これによって、土地の善し悪しに応じて賦課を定め、民を安定させる。貧困を救済し、不足を補助し、民は君主にも満足している。故に、国家は上等の土地の提供する利潤で、下等の土地の空虚を補い、四時の物価の変化を抑え、市場の収放の大権を掌握すれば、百姓の安定は、方形のものを平地に置くようなものである。）ここでは土地の善し悪しに応じて課税基準を定めることを提唱し、農民の生産意欲を高めた。

## 第五節、農業思想

「農業は立国の基本である。」農業社会において、農業生産は最も重要な経済活動であり、政権の鍵であり、立国の基本である。農業を重視することは経済発展を促進し、人民の安住を保証するだけでなく、国家の統治に有力な物質的基盤を提供するだけでなく、富国強兵の

保障でもあり、戦争に勝利し、領土を拡大し、天下を一匡することができる。<sup>①</sup>「五谷食米，民之司命也。」（食糧は、人民の生命の支配者である。）（『国蓄』）「明王之務，在于強本事，去無用，然後民可使富。」（英明な君主の任務は、農業を強化し、無用の長物の生産を廃止し、そして人民を豊かにすることにある。）（『五輔』）食糧は人民の生活必需品であり、人々はまず食事の問題を解決しなければ、他の諸事業に従事することができない。農時を重視して、農民に春耕時に大事な二十五日を過ごさせず、それによって食糧を充足させる。「地之生財有時。」（土地は富を生産して、季節の制限を受ける。）（『権修』）農事活動は農事の時間に合わせて行わなければ収穫が得られない。「不務天時，則財不生。」（天の時を気にしなければ、富は増えない。）（『牧民』）「不失其時然後富。」（農業を怠らないでこそ国は豊かになる。）（『禁藏』）「不知四時，乃失国之基。」（四時を知らなければ、立国の根本を失う。）（『四時』）四時変化の法則性を守らなければ、農業生産もできず、国の根幹も失うことになる。農業の時期を逃さないように適切な耕作をしてこそ、農業の豊作と国家の安定を得ることができる。農業の時間は農業の生産にとって非常に貴重なことを見ることができて、農作業を重視するのは農業をよくする重要な前提である。与民分貨と相壤定籍では、農民の生産の積極性を高めるため、それによって農民に有限な土地の上で最大限に資源を利用して、より多くの食糧を生産して来る。

---

<sup>①</sup> 「浅議『管子』的農業經濟思想」林承園、『全国第七届管子學術研討会交流論文集』、2012年4月。

## 第四章、『管子』の中の「幣」に関する経済思想

### 第一節、斉国の貨幣

ここでは、まず斉国の刀幣を紹介しておこう。<sup>①</sup>

刀幣は商周時代の工具の青銅削りが変化したもので、だから刀幣の柄の端はすべて環があって、柄の上に裂溝があって、形状は針首刀、尖首刀、円首刀、弧背刀などがある。主に東方の斉、燕などの地で流通して、その後趙、中山などの国と布幣の併存まで発展した。種類が多く、斉刀、即墨刀、安養刀、針首刀、尖首刀、円首刀、明刀などがある。秦の始皇帝が中国を統一した後、貨幣制を統一し、貝、刀、布などの貨幣を廃棄した。その後、王莽が鑄造した貨幣には金錯刀があった。

東方の斉と北方の燕は主に刀幣を使用した。刀幣には「燕明刀」と「斉刀化」の二種類がある。山戎、北狄など北方遊牧民族の漁獵用の刀に似た形をしている。斉刀面に「化」の文字があることから「刀化」と呼ばれる。刀貨形は刀背に弧背、折背、直背があり、刀首に平首、尖首の区別があり、中国の初期の1種の青銅鑄貨でもある。

春秋斉桓公の時代、商業の発展を重視し、刀幣を大規模に鑄造して商品流通の媒体と始めた。斉国造幣業の発展と貨幣の流通は普遍であり、管仲の貨幣に対する認識も非常に高く、特に貨幣の機能に対する理解はかなり全面的で深い。管仲は貨幣の機能に関する概念を明確に提出していないが、しかし彼は国際、国内の経済貿易問題を分析する時すでに直接あるいは間接的に貨幣の五つの機能に関連している。

---

<sup>①</sup> 「『管子』貨幣思想論」張龍海、『管子学刊』、1994年第1期。

## 第二節、『管子』の中の「幣」字の分析

『管子』全書には、二十五篇の文章のうち、144カ所に「幣」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「形勢」篇に一箇所ある。「主功有素，宝幣奚為？」<sup>①</sup>意味は「君主の功業に基礎がある以上、何も貴重な供物を使う必要はない。」ここでいう「幣」とは、貴重な品物のことである。貨幣に価値があるということだ。

「幼官」篇に一箇所ある。「九会諸侯，令曰、以爾封内之財物，国之所有為幣。」<sup>②</sup>意味は「第九回会集諸侯は、領内の財物や国内特有のものを、幣貢の物として献上するよう命じた。」古くは貢納の贈り物を幣と呼んだ。

「幼官図」篇に一箇所ある。「九会諸侯，令曰、以爾封内之財物，国之所有為幣。」<sup>③</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。

「大匡」篇に二箇所ある。1、「以臣則不，而令人以重幣使之。使之而不可，君受而封之。」<sup>④</sup>意味は「私の考えによると、むしろ人を派遣して重礼をもって宋に行って交渉したほうがよい、交渉ができないので、あなたは杞君を引き取って封を加賜してください。」ここでいう「幣」とは、贈り物のことである。2、「諸侯之君，有行事善者，以重幣賀之。」<sup>⑤</sup>意味は「諸侯国の君主によいことをする者があれば、重礼をもってそれを祝う。」ここでいう「幣」とは、贈り物のことである。

「小匡」篇に五箇所ある。1、「又游士八千人，奉之以車馬衣裘，多其資糧，財幣足之，使出周游于四方，以号召收求天下之賢士。」<sup>⑥</sup>意味は「また遊士八十人を派遣して、車馬の衣裘を与え、多く物資と食糧を持参し、財貨も十分であった。これを四方巡遊させて、天下

---

① 『管子校注』（上）卷一「形勢」二五頁。

② 『管子校注』（上）卷三「幼官」一五九頁。

③ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八六頁。

④ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三五八頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六〇頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二三頁。

の賢士を集めるよう呼びかけた。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。2、「審吾疆場，反其侵地，正其封界，毋受其貨財，而美為皮幣，以極聘眺于諸侯，以安四隣，則隣国親我矣。」<sup>①</sup>意味は「我々の国境を検閲し、侵略した国々の土地を返し、隣国の境を訂正し、彼らの財貨を受け取らない。そして皮幣をきちんと出して、各国の諸侯を次々に招いて、こうして四隣を安定させると、隣国はわが国と親しくなる。」ここでの「幣」とは、貴重な毛皮と繒帛を指し、古代外交では贈答品として使われた。3、「桓公知諸侯之歸己也，故使輕其幣而重其礼，故使天下諸侯以疲馬犬羊為幣。」<sup>②</sup>意味は「桓公は諸侯が彼に帰依することを知っていたので、謁見の幣を少なくして返礼を多くした、だから天下の諸侯はやせ馬犬羊を礼幣とする。」ここでいう「幣」とは、貢納の贈り物のことである。4、「諸侯以縷帛布鹿皮四分以為幣，齊以文錦虎豹皮報。」<sup>③</sup>意味は「諸侯は素絹と鹿皮の四枚を礼幣とし、斉国は花錦と虎豹皮で返納した。」ここでいう「幣」とは、贈り物のことである。

「霸形」篇に二箇所ある。1、「于是楚国之賢士，皆抱其重宝幣帛以事齊。」<sup>④</sup>意味は「そこで、楚の賢士たちは貴重な宝物や布帛を持って齊に仕えることになった。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。2、「桓公之左右，無不受重宝幣帛者。」<sup>⑤</sup>意味は「桓公の左右には、その貴重な宝物や布帛を受けない者はいなかった。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。

「戒」篇に一箇所ある。「举齐国之幣，握路家五十室，其人不知也。」<sup>⑥</sup>意味は「彼は斉国の金で、難民五十数戸を救済したが、受患者は彼であることを知らなかった。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。

「四称」篇に一箇所ある。「受其幣帛，以懷其徳。」<sup>⑦</sup>意味は「隣国に幣帛を与え、隣国の

---

① 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。  
② 『管子校注』（上）卷八「小匡」四三九頁。  
③ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四三九頁。  
④ 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五九頁。  
⑤ 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五九頁。  
⑥ 『管子校注』（中）卷十「戒」五二〇頁。  
⑦ 『管子校注』（中）卷十一「四称」六一五頁。

徳恵に感謝する。」ここで「幣」とは、「お金」や贈り物のことである。

「侈靡」篇に一箇所ある。「功力之君，上金玉幣。」<sup>①</sup>意味は「功力を消耗した君主は、金玉の貨幣を重視する。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。

「五行」篇に一箇所ある。「出皮幣，命行人修春秋之礼于天下諸侯，通天下，遇者兼和。」<sup>②</sup>意味は「皮幣を出して、使臣に春秋の礼を天下の諸侯に行わせ、各国に通好を与えて、接触する国すべてを和ませる。」ここでの「幣」は貴重な毛皮と繒帛を指し、古代外交では贈答品として使われた。

「禁蔵」篇に一箇所ある。「能移無益之事，無補之費，通幣行礼，而党必多，交必親矣。」<sup>③</sup>意味は「無益な行事、無益な出費から脱却して、通幣礼の外交を行えば、同盟国が多く、必ず親睦がある。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。

「形勢解」篇に二箇所ある。1、「雖不用宝幣事諸侯，諸侯不敢犯也。」<sup>④</sup>意味は「諸侯と貴重な宝貨を交わらなくても、諸侯は彼を侵すことができない。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。2、「主功有素，宝幣奚為。」<sup>⑤</sup>意味は「君主の功業に基礎がある以上、何も貴重な供物を使う必要はない。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。

「巨乘馬」篇に五箇所ある。1、「有衡求幣焉，此盜暴之所以起，刑罰之所以衆也。」<sup>⑥</sup>意味は「また、官吏が税を徴収して現金を納めることを要求したことが、叛乱の由起と刑罪増加の原因となった。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。2、「率二十七日為子之春事，資子之幣。」<sup>⑦</sup>意味は「その約二十五日のあいだに、自分たちで春耕をして、国から融資を受ける。」ここでいう「幣」とは、「借金」のことである。3、「幣之在子者，

---

① 『管子校注』(中) 卷十二「侈靡」六五二頁。

② 『管子校注』(中) 卷十四「五行」八七二頁。

③ 『管子校注』(中) 卷十七「禁蔵」一〇一二頁。

④ 『管子校注』(下) 卷二十「形勢解」一一七三頁。

⑤ 『管子校注』(下) 卷二十「形勢解」一一七三頁。

⑥ 『管子校注』(下) 卷二十一「巨乘馬」一二二三頁。

⑦ 『管子校注』(下) 卷二十一「巨乘馬」一二二七頁。

以為谷而廩之州里。」<sup>①</sup>意味は「お前たちの借金、穀物にして州や里の倉へ返さなければならぬ。」ここでいう「お金」とは「借金」のことである。4、「国無幣，以谷準幣。」<sup>②</sup>意味は「国にはお金がないから、食糧をお金にして買う。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。

「乗馬數」篇に一箇所ある。「財物之貲与幣高下，谷独貴独賤。」<sup>③</sup>意味は「諸物資の価格は、貨幣のいくりに値するかには相当しなければならず、食糧はその貴賤を別途に定める。」ここでいう「幣」とは「貨幣」のことである。

「国蓄」篇に十箇所ある。1、「黄金刀幣，民之通施也。」<sup>④</sup>意味は「貨幣は、人民の交易手段である。」ここで「幣」は、貨幣の流通手段としての機能を体現している。2、「人君鑄錢立幣，民庶之通施也。」<sup>⑤</sup>意味は「君主が鑄造発行する貨幣は、民間の交易手段であった。」ここで「幣」は、貨幣の流通手段としての機能を体現している。3、「則君雖強本趣耕，而自為鑄幣而無已，乃今使民下相役耳，惡能以為治乎！」<sup>⑥</sup>意味は「農業を強化し、生産を督促し、しかも自分たちがそこでたえず貨幣を鑄造していたとしても、人民を奴隷にただけでは、国家の統治とはいえない。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。4、「故天子籍于幣，諸侯籍于食。」<sup>⑦</sup>意味は「したがって、天子の税収は貨幣であり、諸侯の税収は食糧である。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。5、「谷賤則以幣予食，布帛賤則以幣予衣。」<sup>⑧</sup>意味は「穀物が安ければ買い上げた穀物に貨幣を投入し、布帛が安ければ布帛に貨幣を投入する。」これは、貨幣の供給量を制御することによって、物価を制御し、需給を調節し、財政を充実させるという貨幣の制御思想を体現している。6、「先王為其途之遠 其至之難 故托用于其重 以珠玉為上幣 以黄金為中幣 以刀布為下幣」

---

① 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二七頁。

② 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二七頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬數」一二三七頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二五九頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二六六頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二六六頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七二頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七四頁。

①意味は「先王はこれらの品物は遠く離れていて容易ではなかったので、その貴重さを借りて、珠玉を上幣、黄金を中幣、刀布を下幣とした。」ここで君主は、獲得の難易度によって貨幣を三つに分類しただけで、それ自体の価値を認識していなかった。しかし、これは当時の人々が意識していなかった貨幣価値尺度の機能を側面から反映していると思う。7、「三幣握之則非有補于暖也，食之則非有補于飽也，先王以守財物，以御民事，而平天下也。」②意味は「この三種類の貨幣は、握って暖を取ることができず、食べて飢えを満たすことができず、先王はそれを用いて財物を統制し、民を掌握し、天下を治めたのである。」ここで『管子』は、貨幣は富ではなく、富の一般的な代表として蓄積されたものだと考えている。貨幣の貯蔵機能を体現している。

「山国軌」篇に二十八箇所ある。1、「田有軌，人有軌，用有軌，郷有軌，人事有軌，幣有軌，県有軌，国有軌。」③意味は「土地には統計があり、人口には統計があり、必要には統計があり、経常費には統計があり、貨幣には統計があり、郷には統計があり、県には統計があり、国全体に統計がある。」貨幣の統一的計画である。2、「某県之人若干？田若干？幣若干而中用？谷重若干而中幣？」④意味は「一つの県の人口がいくらで、土地がいくらで、貨幣がいくらであればその県の需要に適し、谷の価格がいくらであれば貨幣の流通に適する。」貨幣の統一的計画である。3、「然後調立環乘之幣。」⑤意味は「そして、計算された貨幣を発行することができる。」貨幣の統一的計画である。国家は、需要に応じた貨幣量を計算して発行する。それによって社会の安定を守ることができる。4、「田軌之有余于其人食者，謹置公幣焉。」⑥意味は「その収穫量が穀物消費量を超えると予想される農家には、借金をする。」公幣とは国家備蓄金のことで、貨幣の貯蔵手段としての機能を体現している。

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七九頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七九頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八二頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八二頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。



5、「則置公幣焉。」<sup>①</sup>彼らにお金を貸してやる。公幣とは国家備蓄金のこと、貨幣の貯蔵手段としての機能を体現している。6、「吾所寄幣于子者若干，郷谷之橫若干，請為子什減三。」<sup>②</sup>意味は「国は借款の元利金を7割で食糧回収に換算し、残りの十分の3は貨幣で返済する。」借款は食糧で返済する。これは一種の支払い手段として機能している。7、「谷為上，幣為下。」<sup>③</sup>意味は「そうすれば、穀物価格は上がり、貨幣価値は下がる。」食糧の価格を調節することによって、貨幣価値を安定させる。8、「山不被谷，十倍山田，以君寄幣，振其不贍，未淫失也。」<sup>④</sup>意味は「山地の農家は、すでに国からの融資があるので、その不足分を補ってもそれほど損はしない。」ここでいう「幣」とは「借金」のことである。9、「上無幣，有谷，以谷準幣。」<sup>⑤</sup>意味は「国には金がなく、食糧があるから、食糧を貨幣に換算して買い上げる。」食糧を貨幣に換算して購入し、支払い手段の役割を果たした。10、「谷反準，賦軌幣。」<sup>⑥</sup>意味は「食糧価格がまた元の水準に下がって、集計された貨幣を貸し出し。」貨幣の統一的計画である。11、「上且修游，人出若干幣。」<sup>⑦</sup>意味は「国君が巡行するから、お金を貸してくれ。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。12、「貨家假幣，皆以谷準幣，直幣而庚之。」<sup>⑧</sup>意味は「裕福な家から借りた金は一律食糧割引で返す。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。13、「谷為下，幣為上。」<sup>⑨</sup>意味は「穀物の値段が下がるし、貨幣価値が上がる。」食糧の価格を調節することによって、貨幣価値を安定させる。14、「環谷而応假幣。国幣之九在上，一在下。幣重而万物輕，斂万物，応之以幣。幣在下，万物皆在上，万物重十倍。」<sup>⑩</sup>意味は「食糧で借金を返せば、貨幣の九割は

① 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑨ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

⑩ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。

流通せず、国家が掌握し、民間には一割しかいない。貨幣の値が上がれば万物は下がるので、貨幣を出して物資を買う。貨幣が民間に戻ると、物資が国家に集まって、万物の値段が十倍になる。」貨幣の制御思想。国家は、貨幣の社会的保有量を制御することによって、商品価格を制御することができる。15、「以幣貨金，巨家以金，小家以幣。」<sup>①</sup>意味は「貨幣を使って金を補助し、大家族は金を使い、小家族は貨幣を使うことができる。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。16、「周岐山至于崢丘之西塞丘者，山邑之田也，布幣称貧富而調之。」<sup>②</sup>意味は「岐山の周囲から崢丘の西にかけての塞丘地区は、山地の田で、貨幣だけを貸し付け、貧富に応じて配分していた。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。17、「周寿陵而東至少沙者，中田也，据之以幣，巨家以金，小家以幣。」<sup>③</sup>意味は「寿陵の周囲から東に少なくとも沙一帯は、中くらいの土地で、借入れも制限され、大家族は金を使い、小家族は貨幣を使うことができる。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。18、「上無幣，請以谷視市橫而庚子牛馬，為上粟二家。」<sup>④</sup>意味は「国は金がないから、食糧を時価に換算して返済する。こうして、牛馬は国家のために、食糧はこの両家に帰属する」食糧を貨幣に換算して購入し、支払い手段の役割を果たした。

「山權数」篇に五箇所ある。1、「湯以庄山之金鑄幣，而贖民之無(米亶)売子者。禹以歴山之金鑄幣，而贖民之無(米亶)売子者。」<sup>⑤</sup>意味は「商湯は庄山の金属を使って貨幣を鑄造して、食糧がなくて子供を売っている民を救う。夏禹は歴山の金属を使って貨幣を鑄造して、食糧がなくて子供を売る民を救った。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。2、

「梁山之陽綈綈，夜石之幣，天下無有。」<sup>⑥</sup>意味は「梁山南面の産綈綈と山東掖県一帯の玉石、天下は珍しい宝だ。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。3、「請立幣。」

---

① 『管子校注』(下) 卷二十二「山国軌」一二九四頁。

② 『管子校注』(下) 卷二十二「山国軌」一二九四頁。

③ 『管子校注』(下) 卷二十二「山国軌」一二九四頁。

④ 『管子校注』(下) 卷二十二「山国軌」一二九四頁。

⑤ 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇〇頁。

⑥ 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇三頁。

①意味は「貨幣を製造する。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。4、「則君請以国策十分之一者，樹表置高，郷之孝子聘之幣，孝子兄弟衆寡不与師旅之事。」②意味は「君主はその上の剰余金の十分の一をもって、仁孝を顕彰し、郷の孝子にはみな贈り物をし、孝子の兄弟にはいくらかでも兵役を免除する。」ここでいう「幣」とは、贈り物のことである。

「山至数」篇に三十九箇所ある。1、「械器不奉，而諸侯之皮幣不衣。」③意味は「機械器が充実しなければ、諸侯は上皮帛の服を着ない。」2、「外皮幣不衣于天下，内国傳賤，梁聚之言非也。」④意味は「斉国の皮帛は天下各国に輸出することができず、内戦士の地位は卑しいので、梁聚の話は正しくない。」ここでの「幣」は貴重な毛皮と繒帛を指し、古代外交では贈答品として使われた。3、「君有山，山有金，以立幣。」⑤意味は「君には山があり、山には銅があり、その銅で貨幣を鑄造する。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。4、「以幣準谷而授祿，故国谷斯在上，谷賈什倍。」⑥意味は「そして穀物を貨幣で換算して全国の俸祿を出せば、穀物はすべて国の手に蓄えられ、穀物価格は10倍になる。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。5、「祿肥則士不死，幣輕則士簡賞，万物輕則士偷幸。」⑦意味は「俸祿が軽ければ、士人は国のために尽くすことを望まない。幣価が低ければ、士人は賞を軽視する。物価が低ければ、士人はそれなりに生計を立てる。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。6、「財物在下，幣之九在大夫。然則幣谷羨在大夫也。」⑧意味は「品物は民間に売られ、九割の貨幣が大夫の手に渡る。結局、金や穀物の利益はすべて大夫のものになった。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。7、「某県之壤広若干，某県之壤狭若干，則必積委幣，于是県州里受公錢。」⑨意味は「ある県の土

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山權数」一三〇三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「山權数」一三〇七頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二六頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二七頁。

⑨ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三一頁。

地がどんなに大きくても、またある県がどんなに小さくても、必ず貨幣貯蔵が必ずあるべきで、同県の州では農民に公金を支給しなければならない。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。8、「泰秋，田谷之存予者若干，今上斂谷以幣，民曰無幣以谷，則民之三有歸于上矣。」<sup>①</sup>意味は「秋になると、農民に向かって、「過去にあなたの手にあった食糧はいくらだったか、今は国が貨幣に折って返してほしいと要求している」と言う。民は「手に金がないから、穀物を返すしかない」と言った。農民が残した食糧の十分の三は国のものになった。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。9、「吾国歳非凶也，以幣藏之，故国谷倍重，故諸侯之谷至也。」<sup>②</sup>意味は「わが国に凶作が起これぬうちに、貨幣を出して穀物をため込んで、穀物の価格を倍にして高騰させると、諸侯の穀物がわが国に来る。」貨幣の制御思想があらわれている。10、「幣準之数，一県必有一県中田之策，一郷必有一郷中田之策，一家必有一家直人之用。」<sup>③</sup>意味は「貨幣流通の基準となる数字は、ある県ではその県の土地に適した数字、ある郷ではその郷の土地に適した数字、ある世帯では世帯の人口に適した数字でなければならない。」貨幣の流通量には一定の要求があり、社会の要求に応じた貨幣量を発行する。11、「歳丰，五谷登，五谷大輕，谷賈去上歳之分。以幣据之，谷為君，幣為下。国幣尽在下，幣輕谷重。」<sup>④</sup>意味は「年が豊作になり、五穀豊穰になり、穀物の値段が前年の半分に下がったら、この借款で買い上げ、穀物を国家に帰属させ、貨幣を民間に分散させる。これでは、貨幣は民間に配給されるため、貨幣価値は下がり、穀物価格は上がる。」貨幣の制御思想。社会の貨幣量を制御することによって、穀物の価格を制御する。12、「出于国谷策而藏于幣者也。」<sup>⑤</sup>意味は「それは食糧販売政策と貨幣の利用によるものである。」貨幣の制御思想。社会の貨幣量を制御することによって、穀物の価格を制御する。13、「以国幣之分，復布百姓。」<sup>⑥</sup>意味は「そして、国家が持っている貨幣の半分で、再び庶民

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

に配る。」貨幣の制御思想。社会の貨幣量を制御することによって、穀物の価格を制御する。

14、「五谷相靡而重，去什三為余，以国幣準谷反行，大夫無什于重。」<sup>①</sup>意味は「食糧価格は互いに影響し合って3割値下がりする。残った食糧を貨幣で買い上げ、穀物価格が下落して戻ってきた基準になると、大夫は穀物価格をつり上げることができなくなる。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。15、「君以幣賦禄，什在上。」<sup>②</sup>意味は「国の君主が俸禄を与えても、貨幣を使って糧を使わなければ、食糧はすべて国家が掌握することになる。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。16、「桓公問管子曰、「請問幣乘馬。」管子対曰、「始取夫三大夫之家，方六里而一乘，二十七人而奉一乘。幣乘馬者，方六里，田之美惡若干，谷之多寡若干，谷之貴賤若干，凡方六里用幣若干，谷之重用幣若干。故幣乘馬者，布幣于国，幣為一国陸地之数，謂之幣乘馬。」桓公曰、「行幣乘馬之数奈何？」管子対曰、「士受資以幣，大夫受邑以幣，人馬受食以幣，則一国之谷資在上，幣資在下，国谷什倍，数也。万物財物去什二，策也。皮革筋角羽毛竹箭器械財物，苟合于国器君用者，皆有矩券于上。君実郷州藏焉。曰、某月某日，苟從責者，郷決州決。故曰、「就庸一日而決。国策出于谷，軌国之策，貨幣乘馬者也。今刀布藏于官府，巧幣万物輕重皆在賈之。彼幣重而万物輕，幣輕而万物重。彼谷重而谷輕，人君操谷幣金衡而天下可定也，此守天下之数也。」」<sup>③</sup>意味は「桓公は管仲に問うた。「貨幣の計算計画について」管仲は答えた。「当初は三夫が一家の生産単位で、六里四方の土地を占め、兵車一台を出して二十七人を配置した。貨幣の計算の立案というのは、六里四方の土地を単位として、その土地のよくやせた土地がどれくらいあるか、穀がどれくらいあるか、穀価がどれくらいあるか、六里四方の土地に貨幣がどれくらい必要か、そしてその穀物の価格について貨幣がどれくらい必要かを計算することである。したがって、貨幣の計算計画とは、この需要量を全国的に推計して、貨幣の数字を全国の土地の数に対応させることである。これを貨幣の計算計画という。」桓公は、「貨幣を計算して策定

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三四頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三一頁。

した財テクの方法を、どのように実行すべきか」と言った。管仲は答えた。「士の俸禄は貨幣で支給し、大夫の封邑の租税も貨幣で支給し、官府の人夫、馬匹など一切の支出も貨幣で支給する。そうすれば、食糧はすべて国家の手に残り、貨幣は民間に流通する。食糧が10倍ほど値上がりしたのは、この法のためである。その他の物資が米の高さで二割ほど値下げされたのも、この政策の結果である。そして革、筋角、羽、竹矢、器械その他の財物、たとえば国の器の規格と君主の必要にかなうものは、すべて買収の契約を結んだ。君主の食糧は元来、各郷諸州に貯蔵されていた。そこで、某月某日、国家と契約の債務関係があるものは、本郷本州付近で解決せよと通告した。ということは、車馬人夫を雇って、荷駄を一日で済ませてしまう。国家の理財政策は、食糧の統計によるものであるが、国家がこれらの物資を利用するのは、貨幣の計算によるものである。現在、貨幣は官府に貯蔵されているが、巧みに貨幣を使い、物価を操作するのは商人である。市場では貨幣の値が上がれば物価が下がり、貨幣の値が下がれば物価が上がり、食糧の値が上がれば金の値が下がる。人君が食糧と貨幣と金のバランスをとれば、天下の経済秩序は安定する。これも天下掌握の一つの方法だ」国家は貨幣量に対して計算計画を行う。一地方に必要な貨幣量を計算することで、全国に必要な貨幣量を算出する。そして、「輕重」の原理を利用して、貨幣の抑制によって需給を調節し、それによって国家経済のマクロコントロールを実現する。17、「遍有天下，則賦幣以守万物之朝夕，調而已。」<sup>①</sup>意味は「天下統一のもとでは、貨幣を使って物価の高低を把握し、バランスをとるのがよい。」貨幣の制御思想である。

「地数」篇に六箇所ある。1、「戈矛之所發，刀幣之所起也。」<sup>②</sup>意味は「これが兵器・貨幣鑄造の原点である。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。2、「此皆距周七千八百里，其塗遠而至難，故先王各用于其重，珠玉為上幣，黃金為中幣，刀布為下幣。」<sup>③</sup>意味は「これらは周の中央から七千八百里も離れていて、道が遠くて困難なので、先王はそ

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三五〇頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三五二頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六〇頁。

これらの貴重さを区別し、珠玉を上等、黄金を中等、刀布を下等と規定した。」君主は、獲得の難易度によって貨幣を三つに分類しただけで、それ自体の価値を認識していなかった。しかし、これは当時の人々が意識していなかった貨幣価値尺度の機能を側面から反映していると思う。3、「先王権度其号令之徐疾，高下其中幣，而制下上之用，則文、武是也。」<sup>①</sup>意味は「先王が号令の緩急を考えて金の価格を調節し、下幣刀布と上幣珠玉を統制する役割を果たしたのが、周の文王と周の武王であった。」貨幣の制御思想。金の価格を調節し、下幣刀布と上幣珠玉の役割を統制する。4、「人求本者，食吾本粟，因吾本幣，騏驎黄金然後出。」<sup>②</sup>意味は「外人はわが国に来て、我々の食糧を食べて、我々の貨幣を使って、それから、良い馬と金も提供される。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。

「揆度」篇に十一箇所ある。1、「賈人出其財物，国幣之少分廩于賈人。若此則幣重三分，財物之輕重三分。」<sup>③</sup>意味は「商人はこのとき、保有していた財貨を売って、国内市場の半分以上の貨幣を自分の手に貯めることができる。そうすれば貨幣価値は十分の三上がり、貨物価格は十分の三下がる。」貨幣の制御思想。「輕重」の不正確さが物価を不安にさせる。2、「幣重則民死利，幣輕則決而不用，故輕重調于数而止。」<sup>④</sup>意味は「お金が貴重であれば人々は必死に求め、価値が下がれば人々は捨ててしまう。」貨幣の制御思想。貨幣の価値を合理的な範囲内に収める。3、「刀幣者，溝洫也。」<sup>⑤</sup>意味は「貨幣は、物の流通経路である。」貨幣の流通手段の機能。4、「吾聞海内玉幣有七策，可得而聞乎。」<sup>⑥</sup>意味は「海内の宝を貨幣として利用するには七つの方法があると聞いたが、教えてくれないか。」ここでいう「幣」とは、貴重な宝物のことである。5、「君請使与正籍者，皆以幣還于金，吾至四万，此一為四矣。」<sup>⑦</sup>意味は「納税すべき者に、彼らが納めるべき貨幣を金に折らせて納めるように命

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六〇頁。  
② 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六八頁。  
③ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七七頁。  
④ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八一頁。  
⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八二頁。  
⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八二頁。  
⑦ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八三頁。

令してください。そうすれば、我々は四万円の収入を得ることができる。これがまさに一から四になる。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。6、「故先王度用其重而因之，珠玉為上幣，黃金為中幣，刀布為下幣。」<sup>①</sup>意味は「そこで先王はその貴重さに応じて利用し、珠玉を上幣、黄金を中幣、刀布を下幣と定めた。」君主は、獲得の難易度によって貨幣を三つに分類しただけで、それ自体の価値を認識していなかった。しかし、これは当時の人々が意識していなかった貨幣価値尺度の機能を側面から反映していると思う。7、「先王高下中幣，利下上之用。」<sup>②</sup>意味は「先王は、中幣金の貨幣価値を上げたり下げたりすることで、下幣刀布、上幣珠玉の役割を制約していた。」貨幣の制御思想。金の価格を調節し、下幣刀布と上幣珠玉の役割を統制する。

「国準」篇に一箇所ある。「出金山立幣，存菹丘，立駢牢，以為民饒。」<sup>③</sup>意味は「鉾山を開発して貨幣を鑄造し、草地を蓄えて牧場を建て、人民を豊かにした。」ここでいう「幣」とは「貨幣」のことである。

「輕重甲」篇に七箇所ある。1、「今君鑄錢立幣，民通移，人有百十之数，然而民有売子者何也？財有所并也。」<sup>④</sup>意味は「今は君主が貨幣を鑄造し、人民がそれを取引して、一人当たり何百何十という数があるのに、なぜ子供を売ったり女を売ったりするのか。これは金銭が人に保存されているからである。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。2、「故為人君不能散積聚，調高下，分并財，君雖強本趣耕，発草立幣而無止，民犹若不足也。」<sup>⑤</sup>意味は「だから、人君としては、買い占めた穀物を分散させ、物価の高低を調節し、合併した利益を分散させ、農業を強化し、生産を促し、果てしなく荒地を開発し、貨幣を鑄造しても、人民は貧しくなる。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。3、「頓戟一噪，而靡幣之用，日去千金之積。」<sup>⑥</sup>意味は「一回の戦争では、毎日の費用で千金の貯金を

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「国準」一三九四頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三二頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三二頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三五頁。



使い切ることができる。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。4、「吳、越不朝，珠象而以為幣乎？発、朝鮮不朝，請文皮、服而以為幣乎？禹氏不朝，請以白璧為幣乎？崑崙之虛不朝，請以璆琳、琅玕為幣乎？」<sup>①</sup>意味は「吳や越は朝見に来ないので、彼らが産出した真珠や象牙を貨幣として使った。朝鮮とは朝会いに来ないので、彼らの高貴な皮張と皮服を貨幣として使った。北の禹氏は朝見に来ないので、彼らの産出した玉璧を貨幣とした。西方の崑崙は朝見に来ないので、彼らの産出した良玉美石を貨幣として用いた。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことです。諸侯国の貴重な品物を貨幣とすることで、共通の利益が得られ、参上させることができる。

「輕重乙」篇に七箇所ある。1、「夫海出沛無止，山生金木無息，草木以時生，器以時靡幣，沛水之塩以日消。」<sup>②</sup>意味は「海は塩を産出し、山は金属や木材を産出し、草木は生長し、器物は滅び、海塩もいつかは尽きてしまう。」ここでの「幣」は「敝」である。「消滅」の意味。2、「故苟入吾国之粟，因吾国之幣，然後載黄金而出。」<sup>③</sup>意味は「故に、彼らはわが国の食糧を食べ、わが国の貨幣を使い、それをいつも金で払うのである。」貨幣の世界的な貨幣の機能である。3、「故先王度用于其重，因以珠玉為上幣，黄金為中幣，刀布為下幣。故先王善高下中幣，制上下之用，而天下足矣。」<sup>④</sup>意味は「だから先王はそれぞれ、その貴重度に応じて、珠玉を上等、黄金を中等、刀布を下等とした。先王は金の価格をよく把握し、下幣刀布や上幣珠玉の役割を抑え、天下の需要を満たしていた。」君主は獲得の難易度に応じて貨幣を三つに分類し、金の価値を調節し、刀布や珠玉の役割を制御して国家の需要を満たした。4、「君直幣之輕重以決其数，使無券契之責，則積藏困窮之粟皆歸于君矣。」<sup>⑤</sup>意味は「人君は貨幣のいくらに依じて金銭の支払いを計算して、国が食糧購入の書類上の債務を滞らないようにした。これでは各家の穀倉に蓄えられた残糧はすべて人君のものとなった。」

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四四〇頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四六頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四六頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六二頁。

貨幣の支払い手段の機能を示すものである。

「輕重丁」篇に一箇所ある。「且君幣籍而務，則賈人独操国趣。」<sup>①</sup>意味は「人君専務が貨幣を徴収すれば、富商が金融を操作する。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。

「輕重戊」篇に四箇所ある。1、「萊、莒之山生柴。君其率白徒之卒，鑄庄山之金以為幣，重萊之柴賈。」<sup>②</sup>意味は「萊、莒両国の山は柴薪が豊富で、お前は新徴の兵を率いて庄山の銅を採掘して貨幣を鑄造し、萊国の柴薪価格を引き上げることができる。」ここでいう「幣」とは、「貨幣」のことである。2、「金幣者，人之所重也。」<sup>③</sup>意味は「お金は、誰もが大切にしているものです。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。3、「子急令民求狐白之皮，以致齊之幣，寡人将以来离枝之民。」<sup>④</sup>意味は「あなたは至急民に命じて、狐白の皮を手に入れさせ、齊国の貨幣と引き替えに、私はこの金で離枝国の民を招きます。」貨幣の支払い手段の機能を示すものである。4、「齊未亡一錢幣，修使三年而代服。」<sup>⑤</sup>意味は「齊は一文も使わず、使臣を派遣するだけで、三年で代国は帰服した。」ここでいう「幣」とは、「お金」のことである。

『管子』全書に対して144 処の幣の字の分析を通して、幣の主な意味がお金、借金、貨幣などであることが判明した。同時に、貨幣の五つの機能を体現している。

### 第三節、貨幣の機能

#### 1、価値尺度の機能

上記の調査統計により、『管子』の幣に対する具体的な考えが明らかになった。まず、「幣」には価値尺度の機能を持つ。

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二四頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二四頁。

『乗馬』に「黄金者，用之量也。」（金は財貨を計る道具である。）とある。これが『管子』の貨幣価値尺度に対する基本的な認識だ。<sup>①</sup>金は財をはかるための道具だと考えられている貨幣的価値尺度に対する認識は、それほど深刻ではないが、多少の了解は得られている。

また、『山権数』の中にも「黄金一斤，直食八石。」（黄金一斤、食糧八石の価値に当たる。）などの説があり、金の保有量を国の財政支出の目安としていた。これらは貨幣の商品価格に対する表現を反映しているが、価格は商品価値の貨幣表現であるため、貨幣が商品価値の尺度としての役割を果たしていることを示している。

## 2、流通手段の機能

『管子』の貨幣価値の尺度に対する認識は比較的にあいまいであるが、しかし貨幣の流通手段としての機能に対する認識は非常にはっきりしている。<sup>②</sup>

「黄金刀布者，民之通貨也。」（『輕重乙』）とは、幣は、人民の交易手段である、という。

「黄金刀幣，民之通施也。」（『国蓄』）「刀幣者，溝流也。」（『揆度』）とは、幣は、物の流通経路でもある、という。

「人君鑄錢立幣，民庶之通施也。」（『国蓄』）とは、君主が鑄造発行する貨幣は、民間の交易手段である、という。

『管子』によると、「幣」は民間が交換する手段であり、商品と商品間の交換はまさに「幣」という方式を通じて実現されたという。このような直接が貨幣を「溝流(手段)」と解釈した見方は形も適切であり、実に古人の得難い見解である。『管子』は貨幣という商品交換の媒介を通じて、経済的、政治的な目的を実現す

---

① 「『管子』貨幣思想研究」譚曉麗、『管子学刊』、1996年第1期を参考。

② 「『管子』貨幣思想研究」譚曉麗、『管子学刊』、1996年第1期を参考。

る。

### 3、支払手段の機能

『管子』は、「幣」の支払い手段としての機能をはっきりとは指摘していないが、実際には肯定している。『管子』には、報酬を貨幣で支払い、貸借と返済を貨幣で行い、租税と利子の一部を貨幣で納めるなど、実際には支払い手段としての貨幣を肯定している。

「以幣準谷而授禄。」（『山至数』）とは、貨幣で食糧を換算して全国の俸禄を支給する、という。

「士受資以幣，大夫受邑以幣，人馬受食以幣。」（『山至数』）とは、士の俸禄も貨幣で支給し、大夫の封邑の租税も貨幣で支給し、官府の人夫・馬匹など一切の支出も貨幣で支給する、という。

「貨家假幣，皆以谷準幣，直幣而庚之。」（『山国軌』）とは、裕福な家から借りた金は一律食糧割引で返す、という。

このように、『管子』は支払い手段としての貨幣の機能を完全に認めている。

### 4、価値貯蔵の機能

『管子』は言った。「万乗之国，不可以無万金之蓄飾；千乗之国，不可以無千金之蓄飾；百乗之国，不可以無百金之蓄飾。」<sup>①</sup>（万乗の国に万金の価値のある貯蓄がなくてはいけない。千乗の国に千金の価値のある貯蓄がなくてはいけない。百乗の国に百金の価値のある貯蓄がなくてはいけない。）

これは、人口一万世帯の都市には、一万鐘の食糧備蓄と一千万貫の金が必要だという意味である。人口千世帯の都市には、食糧備蓄千鐘と金百万貫が必要である。ここで、貨幣は穀物とともに貯蔵の対象である。『管子』によれば、貨幣は「握之則非有補于暖也，食之則非有補于飽也。」（握って暖を取ることができず、食べて飢えを満たすことができない。）（『国蓄』）「時貨不遂，金玉雖多，謂之貧国

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（下）卷二十二「山權数」一三一七頁。

也。)(日常の物産が不足し、金玉が多ければ貧国としかいいようがない。)

(『八觀』)という。『管子』では、貨幣は富ではなく、富の一般的な代表として蓄積されると考えたことは明らかである。また、『管子』では、農業生産の季節的需要に対応するために、「環乗の貨幣」、すなわち「公幣」(公共準備金)を設置することが提言されており、これは貨幣の貯蔵機能のさらなる発展である。

## 5、世界貨幣の機能

貨幣が一国の範囲をこえて、国際経済関係において一般的等価物の役割を果たすことが、世界的な貨幣の機能である。『管子』は、金の世界貨幣としての機能を認識していた。たとえば、「子為我致綈千匹，賜子金三百斤；什至而金三千斤。」<sup>①</sup>(綈を千匹売ってくだされば、金三百斤を差し上げる。10 倍にすれば、金三千斤を差し上げる。 ) 「子為我致生鹿二十，賜子金百斤。什至而金千斤也。」<sup>②</sup>(生鹿を二十頭売ってくだされば、金百斤を差し上げる。10 倍にすれば、金千斤を差し上げる。)

「吾国者衢处之國也，遠稽之所通、游客蓄商之所道，財物之所遵。故苟入吾国之粟，因吾国之幣，然後載黄金而出。」(わが国は四通八達の国家で、遠路は賦税を納めてここを通過、観光客と商人はここを通過、資財と貨物はここから積み替える。故に、彼らはわが国の食糧を食べ、わが国の貨幣を使い、それをいつも金で払うのである。)(『輕重乙』)

上引三段の大意は、齊国は魯梁の織物、楚の鹿を金で買うことができ、外国の商人が齊国にやってきて商売をし、最後には齊国の貨幣を金に両替して持っていくということだ。このように、『管子』は、世界貨幣という貨幣の機能について知っていたのである。

このように、『管子』は貨幣の五つの基本的機能について明確に体系的に述べてはいないが、実際には多少の認識があったことがわかる。

---

① 『管子校注』(下) 卷二十四「輕重戊」一五一四頁。

② 『管子校注』(下) 卷二十四「輕重戊」一五二一頁。

## 第四節、『管子』の貨幣思想

### 1、貨幣流通量論の思想

貨幣流通量論は、すなわち貨幣を鑄造するの計画である。<sup>①</sup>これは『管子』の貨幣論で特に強調されている問題だ。貨幣流通の機能については、『輕重』諸篇で繰り返し論じられている。『山国軌』では「幣有軌」を提示している。「幣有軌」というのは、貨幣の流通に一定の規則があるということである。車の轍のように。『管子通解』は『山国軌』釈の中で、「軌、通会。合計又は統計の意。」ここでいう貨幣とは、貨殖に必要な貨幣を統計的に集計し、それに基づいて国家が鑄造・発行した貨幣のことである。『山国軌』は、「田有軌、人有軌、人事有軌」だけでなく、「幣有軌」も強調している。「某県之人若干？田若干？幣若干而中用？谷重若干而中幣？……」（一つの県の人口がいくらで、土地がいくらで、貨幣がいくらであればその県の需要に適し、谷の価格がいくらであれば貨幣の流通に適する。……）県の人口、土地のいくらによって、どれだけの貨幣を鑄造して県の要求に合うかを計画しなければならない。穀価がどれほど高いかは貨幣の流通の数にかなう。ここでは実際の需要を貨幣鑄造量の主な根拠とした。いいかえれば、貨幣の社会への流通量は社会の実際の需要に合わせなければならず、流通量が増えれば物価が上がり、貨幣価値が下がるということである。「投げる」「必要」を正しくするには、管子は『山至数』で、貨幣の計算立案について論じている。「始取夫三大夫之家，方六里而一乘，二十六人而奉一乘。幣乘馬者，方六里，田之美惡若干，谷之多寡若干，谷之貴賤若干，凡方六里用幣若干，谷之重用幣若干。故幣乘馬者，布幣于国，幣為一国陸地之数。謂之幣乘馬。」（当初は三夫が一家の生産単位で、六里四方の土地を占め、兵車一台を出して二十七人を配置した。貨幣の計算の立案というのは、六里四方の土地を単位として、その土地のよくやせた土地がどれくらいあるか、穀がどれくらいあるか、穀価がどれくらいあるか、六里四方の土地に貨幣がどれくらい必要か、そし

---

<sup>①</sup> 「『管子』貨幣思想論」張龍海、『管子学刊』、1994年第1期。

てその穀物の価格について貨幣がどれくらい必要かを計算することである。したがって、貨幣の計算計画とは、この需要量を全国的に推計して、貨幣の数字を全国の土地の数に対応させることである。これを貨幣の計算計画という。)当初は三夫が一家の生産単位で、六里四方の土地を占め、兵士車一台に二十七人が配備されていた。だから貨幣の計算の立案とは、六里四方の土地を単位として、その立派な畦地の各いくら、穀倉いくら、穀価の高低いくら、六里四方の土地に貨幣いくら、そしてその穀物の価格について貨幣いくらを必要とするかを計算することである。貨幣の計画とは、この需要量を全国に推定することである。貨幣の数字を全国の土地の数に合わせる。これを貨幣の「計画的画策」という。管子とは、通貨計画をこれだけ細かく詳細にしても、それでも費用が足りない、お金が足りないという場合、これを「利有蔵也」という。お金の利益が蓄積されると、お金の「投じる」と「必要」のバランスが崩れ、経済がアンバランスになる。

## 2、貨幣調節思想

『管子』の貨幣調節思想は主に2つの方面に現れて、1つは国家の貨幣供給量に対する調節である。第二は、国の通貨政策が市場の需給、物価を調節し、財政を充実させる役割を果たすことである。<sup>①</sup>このため『管子』は貨幣の数量と商品の価格の関係について真剣に検討し、その中から貨幣の流通量が商品の価格に与える影響を分析し説明し、貨幣と商品の間の軽重の変化の法則を明らかにして、それによって国家の商品と貨幣の管理を強化するために重要な思想の基礎を作った。

『山国軌』は次のように指摘する。

「国幣之九在上，一在下，幣重而万物輕。斂万物，応之以幣。幣在下，万物皆在上，万物重十倍。」

(貨幣の九割は流通せず、国家が掌握し、民間には一割しかいない。貨幣の値が上がれば

---

<sup>①</sup> 「『管子』的貨幣思想析論」趙夢涵、『管子学刊』、2004年第1期。

万物は下がるので、貨幣を出して物資を買う。貨幣が民間に戻ると、物資が国家に集まって、万物の値段が十倍になる。)

ここで『管子』は、貨幣の収納が貨幣や商品の軽重を変化させる重要な条件であることを説明して強調し、社会にとって、貨幣が少なく物が多ければ、必然的に貨幣が重く物が軽くなり、逆に貨幣が軽く物が重くなるということを指摘している。実際、商品価格の変化に影響を与える要因は多岐にわたっている。貨幣的な要因を除いて、生産と需給はいずれも商品の価格に重要な影響を与える。しかし、生産と社会的需給が正常な状況の下では、貨幣の社会的保有量は確かに市場の商品の価格の変動に影響する重要な要素である。

また、『管子』は次のように強調する。「則一国之谷資在上，幣資在下，国谷什倍，数也。」（そうすれば、食糧はすべて国家の手に残り、貨幣は民間に流通する。食糧が10倍ほど値上がりしたのは、この法のためである。）（『山至数』）上は国家、下は社会を指す。「国幣之九在上」とは、国家が10分の9の貨幣を収蔵し、一時的に流通から撤退させることで、社会が10分の1の貨幣量になったとき、社会はお金が少なく物が多いために貨幣購買力が10倍になる、逆もまたしかりである。ここで『管子』がいうように、貨幣が上に集中したり下に分散したりすることによって生じる貨幣購買力の変化は、主として、国家が自発的ではなく、自発的に生じることを指す。

このような認識に基づいて、『管子』は、物価の抑制、需給の調節、財政の充実などの目的から、国家が貨幣の数量を調節して市場経済の管理を強化する政策を提唱した。その基本精神と全体の特徴は、通貨の商品との軽重によって変化のリズムは、通貨発行権の国家統制の強みを発揮して、商品流通市場の場合、通貨と物資の所得に対することを通じて、国家と社会の調剤通貨保有量、これ商品価格の軽重を把握して統制社会経済命脈ビジネス。この思想は『管子』の軽重の法則の運用と一致する。『管子』の軽重理論の中で、貨幣の作用を際立たせ、貨幣の収放によって市場経済を制御するのは『管子』の軽重法則の総運用の重要な構成部分である。



『管子』貨幣調節思想の核心内容は「以重射輕，以賤泄平」<sup>①</sup>である。<sup>②</sup>

「以重射輕，以賤泄平」とは、『管子』が商品の需給と価格の変動に基づいて提示した国家のとるべき収入政策であり、『管子』は輕重の術によって市場經濟を調節し、これで財政を充実させ、物価を抑え、需給を調節する財テク方法と手段としていることである。『管子』は、財テクは輕重をわきまえないやり方では、国家經濟をうまく管理することはできないと考えている。「凡將為國，不通于輕重，不可為籠以守民，不能調通民利，不可以語制為大治」<sup>③</sup>（凡そ國を治めて、輕重の術を知らないで、經濟の「籠」を組織して民間を制御することができない。國民の利益を調節することができなければ、統制經濟を追求して國家の大治を実現することはできない。）いわゆる「以重射輕」とは、一定の条件の下で、市場に重い物を投入することによって、軽い物に影響を与え、軽い者を軽いから重いに回すことである。たとえば、市場貨幣が重いものが軽いとき、國家は重い貨幣で低価格商品の買い上げ量を増大させ、その商品を軽いから重くする。逆もまた然り。「以賤泄平」とは、國家が市場価格より低い価格で市場のある貴重商品の放出量を増大させ、その商品の市場価格を抑え、それを重から軽にすることである。『山權數』篇に「彼重則見射，輕則見泄，故與天下調。」（商品の価格が高いと、他國がダンピングして利益を奪いに来る。商品の値段が安く、物資が流出する。だから、物価が同じになるように気をつけなければならない。）を示している。

『管子』は、「以重射輕，以賤泄平」、いずれも孤立的におこなわれるのではなく、商品と貨幣との輕重關係の変化と、市場情勢の發展の必要に応じて交互に用い、循環的におこなわれると考えている。「以重射輕」ことによって、市場のある種の軽い商品はすでに重くなって、そして価格が引き続き上升する傾向があつて市場の需給に不利になる時、「以賤泄平」をして、もとの「以重射輕」を替わる。その商品の価格がまた低くなった時には、

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「國蓄」一二六九頁。

② 「『管子』的貨幣思想析論」趙夢涵、『管子學刊』、2004年第1期。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「國蓄」一二六四頁。

また「以重射輕」を採用して、価格の回復を促す。このように繰り返すことで、国は一石多得の財テク効果を得ることができる。まず、「以重射輕，以賤泄平」として国家の財政収入に対して重大な役割がある。市場の供給が過剰で、貨幣価値が重い場合、国家は「以重射輕」で、重い貨幣で安価な商品を大量に買い付けることによって、国家の富蓄積を増大させ、商品が重くなった場合に備えて売り払うことができる。市場で商品が不足し、貨幣が軽ければ物が重いとき、国家は「以賤泄平」し、より高い価格で商品を投下し、貨幣を回収することによって、国家の資金蓄積を増大させる。この反正的な価格の差額による利潤は、国家の手に無形に中継される。「夫民有余則輕之，故人君斂之以輕。民不足則重之，故人君散之以重。斂積之以輕，散行之以重，故君必有十倍之利。」（民間の物資が余った時は安く売ることに積極的ですから、君主は安く買うべきである。民間の物資が不足すると高値で買いますから、君主は高値で売るべきである。安く買って高く売れば、君主は十倍の利益を得られる。）（『国蓄』）「凡輕重之大利，以重射輕，以賤泄平。万物之満虚，随財準平而不变。衡絶則重見。人君知其然，故守之以準平。」（軽重の術の大きな利益は、まず安い品物を高い値段で買って、それからその安い品物を安い値段で売ることにある。各種の物資の不足は季節によって異なりますが、調節に気をつければ正常に保たれ、バランスを失えば値段が高くなる。人君はそれがわかっているので、いつも平準化して把握する。）（『国蓄』）

『管子』は貨幣の収入と放出が物価に与える影響に基づき、特に流通物の軽重の変化の中で、貨幣の収入と放出の役割を十分に発揮することが国家財政に対して重大な意義を強調している。「国幣之九在上，一在下，幣重而万物輕，斂万物応之以幣。」（貨幣の九割は流通せず、国家が掌握し、民間には一割しかいない。貨幣の値が上がれば万物は下がるので、貨幣を出して物資を買う。）（『山国軌』）「谷賤則以幣予食，布帛賤則以幣予衣，視物之輕重而御之以準，故貴賤可調而君得其利。」（穀物が安ければ買い上げた穀物に貨幣を投入し、布帛が安ければ布帛に貨幣を投入する。そして物価の騰落を見て平準の法でコントロールする。そうすれば、物価を調節することができ、君主はその恩恵を受けることができる。）

（『国蓄』）「以重射輕，以賤泄平」、同時に国家の市場経済に対する管理メカニズム

を強化することに有利であり、需給を調節し、物価を安定させ、消費を安定させるために重要な役割を果たす。それについては『管子』がよく知っている。まず『管子』は、社会の需給の矛盾は軽重によって調節することができると考えている。それは、「彼重則見射，軽則見泄，故与天下調。」（商品の価格が高いと、他国がダンピングして利益を奪いに来る。商品の値段が安く、物資が流出する。だから、物価が同じになるように気をつけなければならない。）（『山権数』）という。これは、地域間の需給の矛盾であれ、同地域の異なる時期に生じた需給の矛盾であれ、いずれも目標を持って施行して「以重射軽」、あるいは「以賤泄平」で調整することができる。市場の供給が過剰になると、国家が貨幣を投入することで、商品の販路を拡大し、価格の回復を促し、商品の滞積を防ぐことができる。商品が供給不足の時、国家が物資を投入することは、市場の供給状況を改善することができ、社会の消費の需要を確保するのに役立ちます。次に、国家の軽重があれば、富裕層の投機を抑制し、市場物価を抑えることができる。『管子』は、軽重の術は、国家に市場の変化を事前に認識させ、相応の措置をとらせ、商人の投機活動を制限するとともに、国家に商品の流通過程を統制させ、富商大賈に物価を操作する機会を奪わせ、物価の安定を維持するのに有利だと指摘した。「故物動則応之。故豫奪其途則民無遵，君守其流則民失其高。故守四方之高下，国無游賈，貴賤相当，此謂国衡。」（こうして商品が流通すると、対策がついてくる。商売を遮断しておくで、商人は動けない。君主が流通を支配すると、商人は物価を高くすることができない。だから各地の物価の騰落をよく把握して、国内に投机商人がなくて、商品の貴賤は同じで、これを「国衡」と言う。）（『揆度』）そしてその次に、「以重射軽，以賤泄平」として、国家の財テクの全体的な利益と長期的な需要から、人々の目の前の状況を見て現れた心理状態が市場の需給関係に及ぼす不利な影響を克服して、それによって需給と物価の長期的な安定を維持するのに役立ちます。庶民の心理状態を見ると、往々にして「民が余れば軽之」、「民が不足すれば重之」であり、品物が多い時には、しかと考えずに安売りして売ると、供給が足りなくなり、品物が少ない時には高値で買い占めて、供給が過剰になる。国家が行う軽重の術とは、この二つの誤った傾向が流通に及ぼす悪影響を未然に防ぎ、

反民の道を歩むことである。「委施于民之所不足，操事于民之所有余。」（民間の物資が不足する時、在庫のものを供給する。民間の物資が余りある時、市場の商品を買い上げる。）

（『国蓄』）ことをなる。凡民軽いものを国家が大量に買い上げ、凡民重いものを国家が放て、軽いものには販路があり、重いものには供給があるようにする。これにより世の中の目の先の心理状態が社会の需給に及ぼす悪影響を財テク上克服し、市場経済の安定を保つのに役立つ。『管子』が強調した「民重則君軽，民軽則君重，此乃財余以満不足数也。」（民間が貴ければ国家が安く売れ、民間が低ければ国家が高く売れる。これは余りを損して足りない分を補う財テクである。）（『揆度』）である。

以上の分析によれば、『管子』の貨幣調節思想は主に以下の点に集約される。<sup>①</sup>

1、貨幣の収放によって、社会の主要消費財である穀物の価格を統制し、それによって貨幣の社会的購買力を安定させる。「人君操谷幣準衡而天下可定也。」（人君が食糧と貨幣と金のバランスをとれば、天下の経済秩序は安定する。）（『山至数』）「制其通貨，以御其司命。」（流通手段を利用して人々の生命を支配する食糧を制御する。）（『輕重乙』）

2、貨幣の輕重の変化の法則に基づいて、国家が財政と市場管理を充実させる必要を満たすために、意識的に租税などによって一定の条件を作り出し、貨幣の輕重の変化を調節する。

「令疾則黄金重，令徐則黄金輕，先王權度其号令之疾徐，高下其中幣，而制其上下之用」。国家の税收命令が差し迫って、下は金を集めて税を納めることを急いで、庶民は仕方なく品物を安売りして、税を納める必要があることを要して、この時金の購買力は必然的に高くなる。逆に、役人の徴税命令が遅れ、金に対する社会の需要が鈍ると、金の価格は低くなる。国はこの動きを把握しており、通貨の切り上げが必要なときは徴収を早めるように命令し、軽くする必要があるときは徴収を遅らせるように、通貨の輕重の変化を調節して、国のある必要性を満たしている。

3、貨幣による穀物の輕重の統制に加えて、貨幣による市場への統制、その他の商品の価

---

<sup>①</sup> 「『管子』的貨幣思想析論」趙夢涵、『管子学刊』、2004年第1期。

格変動の調節・制御によって、市場における商品経済全体の主導権を掌握する。いわゆる「谷賤則以幣予食，布帛賤則以幣予衣。視物之輕重而御之以準，故貴賤可調而君得其利。」（穀物が安ければ買い上げた穀物に貨幣を投入し、布帛が安ければ布帛に貨幣を投入する。そして物価の騰落を見て平準の法でコントロールする。そうすれば、物価を調節することができ、君主はその恩恵を受けることができる。）（『国蓄』）

4、貨幣の収放が市場価格に与える影響によって、「以重射輕，以賤泄平」ことで、市場の需給を調節し、物価を均衡させ、市場経済を活性化させ、ひいては国家財政の充実を図ることを目的とする。「民有余則輕之，故人君斂之以輕；民不足則重之，故人君散之以重。斂積之以輕；散行之以重，故君必有十倍之利。」（民間の物資が余った時は安く売ることにより積極的ですから、君主は安く買うべきである。民間の物資が不足すると高値で買いますから、君主は高値で売るべきである。安く買って高く売れば、君主は十倍の利益を得られる。）（『国蓄』）

## 第五節、『管子』貨幣思想の積極的な意味と限界

『管子』は戦国秦漢時代の封建的商品貨幣経済に対する深い検討を通じて、当時の条件下で貨幣と商品の間の輕重の変化の法則を明らかにし、そしてその法則の発生と運用が具備すべき条件を説明した。<sup>①</sup>

また、社会経済活動における貨幣の役割を通じて、貨幣がもつさまざまな機能を、比較的包括的に説明した。とともに、その基礎の上で、通貨の受信に検討を分析し、通貨は上下間の数の変化、商品の価格の重要な影響を及ぼす国家をどう自覚を提示して運用に通貨発行権の優位を掌握し、商品流通市場を狙った場合、弾力的に運用の通貨と物資を入れ、市場経済に対する管理のイニシアチブを掌握し、物価が平抑、調剤の有無、国家財政の充実が目的だ。

---

<sup>①</sup> 「『管子』的貨幣思想析論」趙夢涵、『管子学刊』、2004年第1期。

『管子』の上記のような認識は、今日に至るまで、商品貨幣経済の管理を強化するうえで、無視できない参考になっている。今日のように、国は市場の物価を調節するためにも、常に市場にどのくらいの通貨を投入するかを注意して、市場の物価が高すぎる場合には、銀の引き締めと通貨の再ケージの方法を採用して、市場の通貨量を減らす。あるいは、国家はある商品が供給不足になることを防ぐために、それらの商品の生産シーズンに、意図的に貨幣を投入して在庫を買い、市場に異常な事態が発生したときに、それを交渉値で売る。このように、『管子』の時代とは性格が根本的に異なるが、その管理方法は一貫している。『管子』の中で表現された貨幣思想は、管仲が参考になるような外部思想の成果がない状況の下で、当時の経済生活の実践に基づき、個人の困難な探索を経て、独自にまとめた思想認識であり、この点だけでもすでに貴重である。彼は当時の社会経済管理に重要な役割を果たしただけでなく、その後の経済発展にも大きな影響を及ぼした。漢代の傑出した財務家桑弘羊は、『管子』の思想に基づき、彼が直面した実際の問題と結びついて、均輸平準法など一連の重大な経済措置を創立し、漢武帝中後期の財政困難を解決するために、きわめて重要な役割を果たした。

歴史的条件の制約のため、『管子』の貨幣思想はいくつかの歴史的な限界があり、主に次のように現れている。<sup>①</sup>

1、『管子』では、社会的生産が流通中の商品価格の変化を決定する根本的な要因であることを強調せず、単に商品価格に影響を与える重要な役割を貨幣だけに強調したのは、認識の面で大きな一面性がある。生産が正常に発展する条件の下でこそ、市場の需給関係に一定の物質的保証があるからだ。そのような場合にのみ、貨幣の回収と放出が市場価格の変化に直接的な影響を与える。

2、貨幣の起源については、『管子』は春秋時代の単旗と同様に、貨幣は王の救援の必要に由来すると考えているが、貨幣が商品交換の長期的な発展の結果であるとは認識してい

---

<sup>①</sup> 「『管子』的貨幣思想析論」 趙夢涵、『管子学刊』、2004年第1期。

ない。「湯七年旱，禹五年水，民之無(米亶)売子者。湯以庄山之金鑄幣，而贖民之無(米亶)売子者；禹以歷山之金鑄幣，而贖民之無(米亶)売子者。」（商湯の治世には旱魃が7年、夏禹の治世には水害が5年あった。民は食べるものがなく、甚だしくは子供を売る者もいる。商湯は庄山の金属を使って貨幣を鑄造して、食糧がなくて子供を売っている民を救う。夏禹は歴山の金属を使って貨幣を鑄造して、食糧がなくて子供を売る民を救った。）（『山権数』）これは単旗<sup>①</sup>が提起した、「古者天災降戾，于是乎量資幣，權輕重，以振救民。」（昔、天災が起こると、財を計って、錢の輕重を計り、民を助けた。）（『国語・周語』）という認識と基本的に同じである。

3、貨幣そのものの価値について、『管子』は何らかの通貨珠玉のような造幣食材が少なく、産地の遠い、入手が難しい、それ自体、珠玉はないのに高い価値の表現で、むしろ珠玉はそのものの貴重な王そのジャンプの特徴によってその価値が高いですべてそれ自体ではなく、それを否定した珠玉は自身の通貨価値の客観性を持つ。

4、複数の貨幣本位が存在するという条件の下で、単に、他の貨幣の購買力を調整するための基礎として、流通の役割が大きく、信用の高い貨幣を調節することを強調することは、商品流通の需要に適応することが事実上困難であり、したがって、実践的に長期的に維持することは困難である。

要するに、『管子』の貨幣思想は、戦国時代の秦漢の商品貨幣経済のさらなる発展を反映して、それは比較的に全面的で体系的に貨幣の機能と国家の調節貨幣の商業管理を強化し、国家財政の役割と意義を充実させることを説明して、その思想的価値と実際の意義は深くて積極的である。自然経済を主とする初期の封建時代に、商品貨幣経済のこのような思想を発展させることができたのは、確かにわが国の歴史上貴重な精神的財産であり、われわれが分析研究し、継承し、運用するに値する。

---

<sup>①</sup> 単穆公、春秋時期単国の君主、名旗。周の景王や敬王時代の卿士。

## 第五章、『管子』の中の「賦」と「税」に関する経済思想

### 第一節、「賦」と「税」

賦税は古代中国国家のマクロ経済管理の重要な手段である。統治者が国家機構を維持するために強制したのである。税収は国の財政収入の重要な源であり、『管子』は税収を調整することによって、国の安定を維持することを強調している。

賦には古代に特定の意味があった。「賦」の字は「貝」と「武」からできており、もとは国家が民から兵士や武器、軍需品、銭貨を徴集して戦争に用いることを指していた。「賦」とは、古から国家が民衆に財物や労役を割り当てて、国家を維持する重要な制度である。

「税」の字は「禾」と「兌」からできており、国家は民から食糧を徴収し、支配者の生活に必要な食糧を供給した。『管子』は「賦」が「税」と同様に、国家制度の柱で社会の安定を守る重要な政策であるとしている。

### 第二節、『管子』の中の「賦」字と「税」字の分析

『管子』全書には、二十五篇の文章のうち、49カ所に「賦」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「権修」篇に三箇所ある。1、「舟車飾，台榭広，則賦斂厚矣。」<sup>①</sup>意味は「船や車が豪華になり、楼台や亭閣が多すぎると、税が重くなる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。2、「賦斂厚，則下怨上矣。」<sup>②</sup>意味は「税が重いと人民は朝廷を怨む。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。3、「上好軸謀閑欺，臣下賦斂競得，使民偷壹，則百姓疾怨，而求下之親上，不可得也。」<sup>③</sup>意味は「君主はよく陰謀や詐欺をやり、

---

① 『管子校注』（上）巻一「権修」四九頁。

② 『管子校注』（上）巻一「権修」四九頁。

③ 『管子校注』（上）巻一「権修」五三頁。



官吏は苛酷な税を取り立て、人民を使役して一時の快を取り、民に恨まれるようなことをする、このようにして、人民に君主に近づくことはできない。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「立政」篇に三箇所ある。1、「国之所以富貧者五，輕税租，薄賦斂，不足恃也。」<sup>①</sup>意味は「国が貧しくなるか富むかは、5つの条件によって決まるのであって、租税を軽く徴収し、賦役を薄く徴収するだけでは当てにならない。」ここでいう「賦」とは、賦役のことである。2、「四曰不好本事，不務地利而輕賦斂，不可与都邑。」<sup>②</sup>意味は「第四に、農業を重視せず、地の利を重視せず、安易に税を課す者を都邑の官にしてはならない。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。3、「好本事，務地利，重賦斂，則民懷其産。」<sup>③</sup>意味は「農業を重視し、地の利を重視し、安易に課税しないからこそ、人民は自分の田畑を懐かしむことができる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「乗馬」篇に一箇所ある。「方六里名之曰社，有邑焉，名之曰央，亦关市之賦。」<sup>④</sup>意味は「六里見の方の地域では、「社」と呼ぶ。住民の邑があり、その名を「央」という。関税や市場税も課される。」ここでいう「賦」とは、関税、課税のことである。

「幼官」篇に三箇所ある。1、「十二始節，賦事。」<sup>⑤</sup>2、「市賦百取二。关賦百取一。」<sup>⑥</sup>意味は「市場税は2パーセント、関税は1パーセントを徴収する。」ここでいう「賦」とは、関税、課税のことである。

「幼官図」篇に三箇所ある。1、「十二始前節，第賦事。」<sup>⑦</sup>2、「市賦百取二，关賦百取一。」<sup>⑧</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。

---

① 『管子校注』（上）卷一「立政」五九頁。

② 『管子校注』（上）卷一「立政」六二頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「立政」六二頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一五四頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一五八頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一八二頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一八五頁。

「五輔」篇に一箇所ある。「薄徴斂，輕征賦，弛刑罰，赦罪戾，宥小過，此謂寬其政。」

①意味は「租税を薄くとり、租税を軽く徴収し、刑罰をゆるし、罪人をゆるし、小過をゆるす、これを寛大な政治という。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「八觀」篇に一箇所ある。「辟地広而民不足者，上賦重，流其藏者也。」②意味は「土地開墾が多いにもかかわらず百姓の食糧が不足しているのは、朝廷の賦課税が重く、百姓が蓄えていた食糧を売ったからである。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「大匡」篇に二箇所ある。1、「乃輕税，弛关市之征，為賦禄之制。」③意味は「そこで税を軽減し、関税や市場税の徴収を緩和し、賦税・禄賞制度を確立した。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。2、「賦禄以粟，案田而税。」④意味は「農民への賦課は、食糧の量から計算して、土地の肥えやせに応じて徴収する。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「小匡」篇に一箇所ある。「省刑罰，薄賦斂，則民富矣。」⑤意味は「刑罰を減らし、税を薄くすれば、民は豊かになる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「霸形」篇に一箇所ある。「市書而不賦。」⑥意味は「市場は書契のみで課税しない。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「君臣下」篇に一箇所ある。「千里之内，束布之罰，一畝之賦，尽可知也。」⑦意味は「千里の内ならば、一束の布の罰でも、一畝の土地の賦課でも、君主は完全に知ることができる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「四時」篇に三箇所ある。1、「二政曰、賦爵列，授禄位。」⑧意味は「第二の政令は、

---

① 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九五頁。

② 『管子校注』（上）卷五「八觀」二六〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六八頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四一一頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五四頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十一「君臣下」五七一頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八四三頁。

官爵を与え、禄位を授けた。」ここでいう「賦」とは、授与のことである。2、「賞賜賦爵，受禄順鄉，謹修神祀，量功賞賢，以動陽氣。」<sup>①</sup>意味は「賜与、授爵、授禄を行い、各郷を巡視して農をすすめ、神事を行い、功を量って賢を賞め、陽気の発展を助ける。」ここでいう「賦」とは、授与のことである。3、「二政曰、善順陰，修神祀，賦爵禄，授備位。」<sup>②</sup>意味は「第二の政令は、陰気になじんで神事を行い、爵禄を受け、官位を授けて備える。」ここでいう「賦」とは、授与のことである。

「五行」篇に二箇所ある。1、「賦秘賜賞于四境之内。」<sup>③</sup>意味は「秘蔵の物を配り、全国各地に賜与する。」ここでいう「賦」とは、放出することである。2、「天子不賦，不賜賞，而大斬伐傷。」<sup>④</sup>意味は「天子が賦与と賜与をしなければ、大斬伐をする。」ここでいう「賦」とは、賦与のことである。

「正世」篇に二箇所ある。1、「今使人君行逆不修道，誅殺不以理，重賦斂，得民財，急使令，罷民力。」<sup>⑤</sup>意味は「もし君主が治国の原則を重んじずに倒行逆施するならば、刑殺は道理に基づいた事を堅持せず、税を重く徴収し、民財を枯渇させ、賦役を急徴し、民力を疲弊させる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。2、「今人主輕刑政，寬百姓，薄賦斂，緩使令，然民淫躁行私而不從制，飾智任詐，負力而争，則是過在下。」<sup>⑥</sup>意味は「もし君主が百姓に対して刑を軽くし、寛政を行い、税を薄くして賦役を猶予するが、百姓は自分を放縱に行い、節制に従わず、巧を取り、詐りを行い、力をもって相争っているならば、過失は下にある。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「七臣七主」篇に三箇所ある。1、「春無殺伐，無割大陵，倮大衍，伐大木，斬大山，行大火，誅大臣，收谷賦。」<sup>⑦</sup>意味は「春には殺伐せず、大丘陵を掘らず、大沼を焼かず、大

---

① 『管子校注』（中）卷十四「四時」八四六頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五五頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六九頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七九頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十五「正世」九一九頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十五「正世」九二〇頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

樹を伐らず、山を開かず、大火を出さず、大臣を殺さず。穀賦を徴収しない。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。2、「冬無賦爵賞祿，傷伐五藏。」<sup>①</sup>意味は「冬に官を封じず祿を与えず、五穀の埋蔵を傷つける。」ここでいう「賦」とは、授与のことである。3、「愚臣深罪厚罰以為行，重賦斂，多兌道，以為上，使身見憎而主受其謗。」<sup>②</sup>意味は「民に罪を重くして罰を与えるのは成果があると思い、税を重くして、多く金を集めるのは君主のためだと思い、結局は自分が人に悪いと思って君主も人に誹謗される。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「禁蔵」篇に一箇所ある。「貸無種，与無賦。」<sup>③</sup>意味は「種のない農家に種を貸し、税金を払えない家を救済する。」ここでいう「賦」とは、税金のことである。

「国蓄」篇に二箇所ある。1、「春賦以斂繒帛，夏貸以收秋実，是故民無廢事，而国無失利也。」<sup>④</sup>意味は「春耕の時、民に金を貸して、絹を買うのに使う。夏のくわには金を貸し、秋穀を買い取った。こうすれば、人民は農業を荒廃させることもなく、国家も財産を流出して私財を利することもなくなる。」ここでいう「賦」とは、貸しすることである。2、「百乘之国，官賦軌符，乘四時之朝夕，御之以輕重之準，然後百乘可及也。」<sup>⑤</sup>意味は「百乗の小国は、国が法定債券を発行し、季節ごとの物価騰落に応じて軽重の調節を行うことで、補給を受けることができる。」ここでいう「賦」とは、発行することである。

「山国軌」篇に二箇所ある。1、「谷反準，賦軌幣，谷廩，重有加十。」<sup>⑥</sup>意味は「そして米価はまた元の水準に下がった。また統一的に発行された貨幣を貸し付けて、さらに食糧を備蓄すると、食糧価格はさらに10倍に上昇する。」ここでいう「賦」とは、貸しすることである。2、「去其田賦，以租其山。」<sup>⑦</sup>意味は「今では田賦を免除し、山林資源に税を

---

① 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。  
② 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」一〇〇二頁。  
③ 『管子校注』（中）卷十七「禁蔵」一〇一七頁。  
④ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二六九頁。  
⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七五頁。  
⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二八四頁。  
⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二九七頁。

納めている。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「山権数」篇に一箇所ある。「丁氏帰，革築室，賦籍藏龜。」<sup>①</sup>意味は「丁氏は家に帰ると、家を改築し、敷を設け、亀をしまっておいた。」ここでいう「賦」とは、設置することである。

「山至数」篇に七箇所ある。1、「古者輕賦税而肥籍斂，取下無順于此者矣。」<sup>②</sup>意味は「むかしは輕税を実施して薄徴したが、これは租税政策の中で最も適当で容易にできたものであった。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。2、「彼輕賦税則倉廩虚。」<sup>③</sup>意味は「税を軽く賦課すれば、国家の倉庫は空しくなる。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。3、「泰夏，賦谷以市糶。」<sup>④</sup>意味は「夏には、食糧を相場で民間に配給した。」ここでいう「賦」とは、放出することである。4、「故賦無錢布，府無藏財，貨藏于民。」<sup>⑤</sup>意味は「だから国は百姓から錢貨を徴収せず、府庫にも金を蓄えず、富を百姓の手に隠した。」ここでいう「賦」とは、徴収することである。5、「君以幣賦禄，什在上。君出谷，什而去七。君斂三，上賦七。散振不資者，仁義也。」<sup>⑥</sup>意味は「君主が俸禄を与えても、金を使って糧を使わなければ、すべての食糧は国に掌握される。最後に君主がそのうちの 10 分の 7 の食糧を出して、つまり 3 割を残して、7 割を貸して、貧民に炊き出しをするのも、一種の仁義の行為である。」ここでいう「賦」とは、賦与、貸しすることである。6、「徧有天下，則賦幣以守万物之朝夕，調而已。」<sup>⑦</sup>意味は「天下統一という条件のもとでは、貨幣を利用して物価の騰落を把握し、調整させるのである。」ここでいう「賦」とは、利用することである。

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三一六頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三一頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三三頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三三四頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三五〇頁。

「揆度」篇に一箇所ある。「民財足則君賦斂焉不窮。」<sup>①</sup>意味は「民の財貨が豊かになれば、君主の税収は尽きることがない。」ここでいう「賦」とは、賦税のことである。

「國準」篇に一箇所ある。「春秋賦生殺老，立施以守五谷。」<sup>②</sup>意味は「春と秋、幼畜を百姓に供給し、老畜を殺して売り、貨幣を発行して食糧を手に入れる。」ここでいう「賦」とは、供給することである。

「輕重乙」篇に一箇所ある。「農事且作，請以什伍農夫賦耒鋤，此之謂春之秋。」<sup>③</sup>意味は「農作業が始まったとき、農民に什伍相互保証で農具を前売りさせる。これを春の時機という。」ここでいう「賦」とは、販売することである。

「輕重丁」篇に一箇所ある。「天子之養不足，号令賦于天下，則不信諸侯，為此有道乎？」<sup>④</sup>意味は「周の天子は財が足りなくて、命令して各諸侯国に徴収して、すべて諸侯の応答を得ないで、この問題を解決する方法がありますか？」ここでいう「賦」とは、徴収することである。

「輕重戊」篇に二箇所ある。1、「則是魯梁不賦于民，財用足也。」<sup>⑤</sup>意味は「これで魯、梁の二国は百姓から徴税しなくても、財用は充分にあった。」ここでいう「賦」とは、徴税することである。2、「則是楚不賦于民而財用足也。」<sup>⑥</sup>意味は「これで楚は百姓から徴税しなくても、財用は充分にあった。」ここでいう「賦」とは、徴税することである。

『管子』全書に対して49処の賦の字の分析を通して、賦の主な意味が賦税、徴税、賦与などであることが判明した。

『管子』全書には、十篇の文章のうち、22カ所に「税」の字が登場する。次はその詳細を

- 
- ① 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七九頁。
  - ② 『管子校注』（下）卷二十三「國準」一三九四頁。
  - ③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六七頁。
  - ④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四七三頁。
  - ⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五一四頁。
  - ⑥ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五二一頁。

取り上げ、分析を行う。

「立政」篇に一箇所ある。「国之所以富貧者五，輕税租，薄賦斂，不足恃也。」<sup>①</sup>意味は「意味は「国が貧しくなるか富むかは、5つの条件によって決まるのであって、租税を軽く徴収し、賦役を薄く徴収するだけでは当てにならない。」ここでいう「税」とは、税金のことである。

「五輔」篇に二箇所ある。1、「薄税斂，毋苟于民，待以忠愛，而民可使親。」<sup>②</sup>意味は「税を軽くし、民に厳しく求めず、忠愛をもって待遇すれば、民を親しくさせることができる。」ここでいう「税」とは、税金のことである。2、「关幾而不征，市鄽而不税。」<sup>③</sup>意味は「関所では検問するだけで徴税せず、市場では品物を保管するだけで徴税せず。」ここでいう「税」とは、徴税することである。

「大匡」篇に四箇所ある。1、「乃輕税，弛关市之征，為賦禄之制。」<sup>④</sup>意味は「そこで税を軽減し、関税や市場税の徴収を緩和し、賦税・禄賞制度を確立した。」ここでいう「税」とは、税金のことである。2、「賦禄以粟，案田而税。」<sup>⑤</sup>意味は「農民への賦課は、食糧の量から計算して、土地の肥えやせに応じて徴収する。」ここでいう「税」とは、徴税することである。3、「二歳而税一，上年什取三，中年什取二，下年什取一，歳飢不税。」<sup>⑥</sup>意味は「二年に一度、豊年には十分の三、中年には十分の二、下等年には十分の一、不年には徴収せず、飢饉が緩和してから徴収する。」ここでいう「税」とは、徴税することである。

「中匡」篇に一箇所ある。「薄税斂，輕刑罰，此為国之大礼也。」<sup>⑦</sup>意味は「税を薄く徴収し、刑罰を軽くする、これが国を治める大礼である。」ここでいう「税」とは、税金のことである。

---

① 『管子校注』（上）卷一「立政」五九頁。

② 『管子校注』（上）卷三「五輔」二〇一頁。

③ 『管子校注』（上）卷三「五輔」二〇一頁。

④ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六八頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷七「大匡」三六八頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷八「中匡」三八六頁。

「小匡」篇に一箇所ある。「通斉国之魚塩于東萊，使关市幾而不正，廛而不税，以為諸侯之利，諸侯称寛焉。」<sup>①</sup>意味は「東萊から斉国の魚塩を交換して諸侯国に送り、関所、市場を査察させて徴税せず、貨物を預けて徴税せず、諸侯の利益のために、諸侯はみな彼の寛恵を賞賛した。」ここでいう「税」とは、徴税することである。

「霸形」篇に三箇所ある。1、「人甚憂飢，而税斂重。」<sup>②</sup>意味は「百姓は飢えをたいへん恐れているが、今は税収がたいへん多い。」ここでいう「税」とは、税金のことである。

2、「公輕其税斂，則人不憂飢。」<sup>③</sup>意味は「君主が税を軽く徴収してくれれば、百姓は飢えに困らない。」ここでいう「税」とは、税金のことである。3、「使税者百一鐘。」<sup>④</sup>意味は「納税者が100分の1しか出せないようにする。」ここでいう「税」とは、納税することである。

「国蓄」篇に二箇所ある。1、「租税者，所慮而請也。」<sup>⑤</sup>意味は「「租税」とは、意図的に取り立てるものである。」ここでいう「税」とは、税金のことである。2、「是壤地尽于功賞，而税臧殫于継孤也。」<sup>⑥</sup>意味は「その結果、土地は論功行賞に充てられ、税収は遺児の養育に充てられた。」ここでいう「税」とは、税収のことである。

「山至数」篇に二箇所ある。1、「古者輕賦税而肥籍斂，取下無順于此者矣。」<sup>⑦</sup>意味は「むかしは輕税を実施して薄徴したが、これは租税政策の中で最も適当で容易にできたものであった。」ここでいう「税」とは、賦税のことである。2、「彼輕賦税則倉廩虚。」<sup>⑧</sup>意味は「税を軽く賦課すれば、国家の倉庫は空しくなる。」ここでいう「税」とは、賦税のことである。

---

① 『管子校注』（上）卷八「小匡」四四〇頁。

② 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五三頁。

③ 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五四頁。

④ 『管子校注』（上）卷九「霸形」四五四頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二五九頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七五頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二二頁。



「地数」篇に四箇所ある。1、「吾欲守国財而毋税于天下，而外因天下，可乎？」<sup>①</sup>意味は「私は国内の資源を守り、天下の諸国に獲られないようにして、かえって天下に獲らなければならない、いいですか。」ここでいう「税」とは、獲得することである。2、「夫本富而財物衆，不能守則税于天下。五谷興丰，巨錢而天下貴，則税于天下。」<sup>②</sup>意味は「国富にして財物は多くて、経営して掌握することができなくて、則ち天下の諸国に掬い取られる。食糧が豊かであれば、我々が安くて他国が高くて、天下の諸国に獲れるである。」ここでいう「税」とは、獲得することである。3、「天高我下，則財利税于天下矣。」<sup>③</sup>意味は「もし天下諸国の食糧価が高ければ、我々だけが低ければ、我々の利益は天下諸国に掬い取られる。」ここでいう「税」とは、獲得することである。

「輕重甲」篇に二箇所ある。1、「是歳租税九月而具，粟又美。」<sup>④</sup>意味は「今年の租税はやはり9月に納め終わって、穀物の作柄もよい。」ここでいう「税」とは、税収のことである。2、「此租税所以九月而具也。」<sup>⑤</sup>意味は「これが租税が9月に納められる理由である。」ここでいう「税」とは、税収のことである。

『管子』全書に対して22処の税の字の分析を通して、税の主な意味が税収、税金、獲得などであることが判明した。

### 第三節、相地而衰徴

「相地而衰徴」とは、管仲が創始した新しい土地税制度である。それは「案田而税」の基礎の上で、その思想の道に沿って、引き続き改革して、更に系統的で、更に完備して、更に合理的であるようにする。「案田而税」とは、所有している土地の数に応じて租税を徴収す

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六二頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六七頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六八頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二〇頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二〇頁。

ることである。<sup>①</sup>「案田而税」について、『大匡』篇には、「桓公踐位十九年，弛关市之征，五十而取一，賦禄以粟，案田而税。二歳而取一，上年什取三，中年什取二，下年什取一。」

（桓公が即位して十九年、関市の徴税を緩和して、五十分の一の税収にした。農税は食糧の数量を計算して、土地の肥瘦ごとに分けて徴収した。税は二年に一回で、豊年は十分の三、中年は十分の二、下年は十分の一である。不作の年には徴収しないで、飢饉状況が緩和した後で徴収する。）齊の桓公が即位して第十九年目（前六六五年）に「案田而税」という土地税制度を実行した、魯宣公が十五年目（前五九四年）に実施した「初税畝」より七十九年前のことである。この税制改革は画期的な意義を持って、それは農業生産関係の1回の重大な変革で、中国の歴史の上で最も早い税畝制である。それは齊国の封建的生産関係の萌芽の曙光を示している。この政策の実施は、生産力を大いに解放し、農業労働者の意欲を奮い立たせ、これまでになかった身の自由を獲得した。

「相地而衰徴」とは、土地の優劣に応じて均等額の地代を賦課することである。『乗馬数』篇に「郡県上與之壤守之若干，間壤守之若干，下壤守之若干。故相壤定籍而民不移，振貧補不足，下樂上。故以上壤之滿，補下壤之衆。章四時，守諸開闔，民之不移也，如磨方于地。」

（郡県の上等の土地に対して、その食糧の数量を把握し、中位の土地に対して、その食糧の数量を把握し、下等の土地に対して、その食糧の数量を把握する。これによって、土地の善し悪しに応じて賦課を定め、民を安定させる。貧困を救済し、不足を補助し、民は君主にも満足している。故に、国家は上等の土地の提供する利潤で、下等の土地の空虚を補い、四時の物価の変化を抑え、市場の収放の大権を掌握すれば、百姓の安定は、方形のものを平地に置くようなものである。）すなわち土地を大別して上壤、間壤、下壤三種とする。『乗馬』篇の中でまた具体的に畑地と冠水地の減税の割合を述べた。「十仞見水不大潦，五尺見水不大旱，十一仞見水輕征，十分去二三，二則去三四，四則去四，五則去半，比之于山。五尺見水，十分去一，四則去三，三則去二，二則去一，三尺而見水，比之于沢。」（普通十仞の深

---

<sup>①</sup> 「略論『管子』的積財之道与賦税之策」于孔宝、『齊魯学刊』、1996年第5期。

さは水の土地を見て、大きな潦が発生していない、水深五尺の土地では大干ばつは起こっていない。一匁が水を見る土地は、租税を十分の一軽減し、二匁は十分の二の減額、三匁は十分の三の減額、四匁は十分の四の減額、五匁は半減、山地に相当する。5尺に水を見る土地についても、10分の1の減税を行なう。四尺は十分の二の減額、三尺は十分の三の減額、二尺は十分の四の減額ことである。そして一尺に水を見る土地は、沼地に相当する。) これは畑地や冠水地に対する租税の規定で、それは、乾燥地、冠水しやすい5つのレベルに分けて、対応する税率を規定し、乾燥地と冠水の程度は軽減の額に比例している、最初に水を見た土地は軽く10分の1、最初に水を見た土地は軽く10分の2。このように、地勢が高くなればなるほど、租税軽減の割合も大きくなる。これは畑地に対する規定である。冠水地に対して、5尺は水を見て10分の1を軽く徴し、4尺は水を見て10分の2を軽く徴し、……地勢が低ければ低いほど、冠水の被害は深刻になり、徴税を減らす割合も大きくなる。

それは、土地の干ばつに応じて徴税額が軽減されるということであった。減税の根拠は、干ばつや冠水ではない可耕地を課税標準とすべきだが、この課税標準は一定のものではなく、年の状況や収穫によって変わる。だから、『大匡』篇には、「桓公踐位十九年、……賦禄以粟，案田而税。二歳而税一。上年什取三，中年什取二，下年什取一。歳飢不税，歳飢弛而税。」（桓公が即位して十九年、……農税は食糧の数量を計算して、土地の肥瘦ごとに分けて徴収した。税は二年に一回で、豊年は十分の三、中年は十分の二、下年は十分の一である。不作の年には徴収しないで、飢饉状況が緩和した後で徴収する。）もっともよい年、すなわち豊作の年には租税の十分の三が課されるが、二年に一度とすると、毎年十分の一しか課されない。税率は比較的低い。

これらの差別化課税政策は、農耕者の心理的負担力、現実的負担力、産業的負担力を十分に考慮した、税の多寡と土地の肥え具合、年の具合、食糧の生産量と有機的に結び付けて、総合的にトレードオフする。それによって全面的に農民の生産の積極性を働員して、社会の生産力を大いに解放して、今後の商工業の発展のためにしっかりした基礎を築いた。当時斉国の耕地の有限な状況の下で民に「尽地之利。」（土地の利を尽くする。）（『小匡』）こと

ができて、もっと多くの農産物を産出する。「農夫夜寝蚤起，不待見使，五谷什倍。」（農民は遅く寝て早く起きるので、こき使わなくても生産量を 10 倍に増やすことができる。）（『山至数』）低税率の租税政策を実施する。「田租百取五。」（『幼官』）労働者は自分がいくら納めるか知っているので、そうすればより積極的に労働生産に投入することができる。「為而不倦」（『乗馬』）、「力作而無止」（『山至数』）。それによって彼らの労働を受動から能動に、生産を消極から積極に変え、さらに農業生産の発展を全面的に促進し、同時に「相壤定籍、而民不移」の国政の目標を実現した。

#### 第四節、輕税租、薄賦斂

「市者可以知治乱，可以知多寡，而不能為多寡。」（市場を通じて、社会の治乱に通曉することができて、物資の多寡に通曉することができて、ただそれによって物資の多寡を創造することができない。）（『乗馬』）ので、そのためには、市場の流通を活発にし、生産要素の流れを速めることが必要であり、「万物通則万物運。」（相通ずるものがあれば財は市場に流れる。）（『輕重甲』）そうでなければ、「帷蓋不修，衣服不衆，則女事不泰。」（車の帷や車の蓋を整え、大量の衣服を買い揃えなければ、女工の事業は発展しない。）（『事語』）という状況である。そのためには、商人の積極性を全面的に引き出し、商人の役割を十分に発揮する必要があった。<sup>①</sup>商人は利を欲しているので、「其商人通賈，倍道兼行，夜以続日，千里而不遠者，利在前也。」（商人が商売をして、一日に二日の道を追い、夜を日に継いで、千里の遠路をはるばる行っても遠くと思わないのは、利が先にあるからである。）（『禁藏』）そして、『管子』は「关幾而不征，市廛而不税。」（関所では検問するだけで徵税せず、市場では品物を保管するだけで徵税せず。）（『五輔』）、「市賦百取二，官賦百取一。」（市場税は 2 パーセント、関税は 1 パーセントを徴収する。）（『幼官』）、「輕税，馳关市之征」（税を輕減し、関税や市場税の徴収を緩和する。）、「馳关市之征，五十

---

<sup>①</sup> 「『管子』賦税思想及其当代价值」王義忠、『税務研究』、2015 年 8 月。

而取一。」（関市の徴税を緩和して、五十分の一の税収にした。）（『大匡』）、「关幾而不征，市書而不賦。」（関所では検問するだけで徴税せず、市場は書契のみで課税しない。）

（『霸形』）、「征于关者勿征于市，征于市者勿征于关。虚車勿索，徒负勿入。」（商人に対しては、ただ関所税を徴収して、市に入ると課税しない。店舗に対して、ただ市場税を徴収して、出入りの関所はもう課税しない。空車で通る者には関所税は課されないし、徒歩で重荷を背負って市に入る交易者には市場税は課されない。）（『問』）、「关幾而不正，市正而不布。」（検問所は査察するだけで徴税しないし、市場は官を置くだけでお金を取らない。）（『戒』）、「廛而不税」（貨物を預けて徴税せず。）（『小匡』）の租税政策を実施した。商人により多くの利潤を得させ、同時に各種の市場を繁栄させ、商工業を全面的に発展させ、天下の民を水のように戻る。税率は低くても、取引量が多いほど税金が多いである。同時に、それは「各国の商人を集めて、齊では必要だが不足している皮、筋、角、羽、銅、鉄などの兵器材料を運んでた。こうして齊は、ス歟ズで節制された市場の中で、人々を豊かにし、強大な軍隊に必要な各種の武器や装備を容易に集めることができた。」周辺諸国に重視されにくく、富国強兵の目的を達成する。『管子』は一連の低税、軽減措置を通じて、商工業の発展を促進すると同時ににより多くの収益を獲得した。著名な『管子』研究家の胡寄窓氏はかつて、これは「与十八世紀欧洲的財政剥削能手所谓拔最多的鹅毛而不让鹅叫的辦法比較，似乎還要巧妙些。」<sup>①</sup>と指摘している。多元的な課税政策が市場規模を拡大させただけでなく、商業の発展を促し、民衆の雇用を増やし、商業社会の地位を確立したからである。商業が全面的に繁栄すると、社会需要の各種の生産要素は疑いなく十分に流動化する。斉国の民衆はそこから直接利益を得ることはできないが、低関税や無関税のため、外国貿易商品の価格が相対的に低く、さらにこのような関賦政策から間接的に利益を得て、これも無形の益民の挙である。逆に、商業に税金をかけすぎると、商人の得られる利潤が少なくなり、彼らは商業の流通を促進しようと努力しなくなり、市場の需給を不均衡にし、製品の低価格販

---

<sup>①</sup> 『中国経済思想史』（上）胡寄窓、上海人民出版社、1978、第三五六頁。

売をもたらし、農民の生産意欲をそいでしまう。消費者は求めているものが手に入りにくく、より多くの金銭を支払って求めなければならなくなり、このように貧者をますます貧くさせ、商業の発展に影響するだけでなく、社会の安定にも影響する可能性がある。

『管子』が商工業に対して積極的な租税政策を採取するのは、主な原因は「一農不耕，民或為之飢；一女不織，民或為之寒。」（農業をしなければ、人民は飢えているかもしれない。女が織物を編まなければ、人民は凍えるものがあるかもしれない。）（『輕重甲』）、「時貨不遂，金玉雖多，謂之貧国也。」（日常の物産が不足し、金玉が多ければ貧国としかいいようがない。）、「天下之所生，生于用力；用力之所生，生于劳身。」

（財は労働力から生まれ、労働力は働いている体から生まれる。）（『八觀』）税の梃子効果を發揮することによって、農業、手工業、商業を全面的に發展させ、「農夫不失其時，百工不失其功，商無廢利，民無游日。」（農夫は農作業を怠らず、各種の職人はその業を失わず、商人は利潤を減らさず、民衆はぶらぶらしていない。）（『法法』）という目的を達成し、国家にも絶え間ない安定財源をもたらした。

『管子』は一連の徴税制度を確立したほか、徴役減免などの惠民教化政策を制定した。『入国』によると、管子が入国してから四十日で「五行九惠之教。」になる。管子は九つの惠民教化政策のためにそれぞれ管掌官吏を置き、具体的な惠民措置を明らかにした。『入国』には八つの免除状況が列挙されている。<sup>①</sup>

一、七十歳以上の老人がいる家庭で、「一子無征」であること。二、家の中に八十歳以上の老人がいる家庭、「二子無征」；三、家の中に90歳以上の老人がいる家庭は、「尽家無征」である。四、孤児を養子にした家庭では、「一子無征」。五、二人の孤児を養子縁組した家庭では、「二子無征」。六、三人の孤児を養子にした家庭は、「尽家無征」である。七、子供が三人いる家庭は「無婦征」である。八、四人の子持ちの家庭で、「尽家無征」。

これらの免税措置は、老人扶養、孤児の養子縁組、幼児の養育の負担を軽減し、また民衆

---

<sup>①</sup> 「管子的財政思想」馬海涛、韋燁劍、『河北大学学报』、2019年9月。

の心からの感謝を獲得し、また国家の将来の兵源を保証し、その「愛之、生之、養之、成之。」（『正』）民本の情念を十分に体现している。同時に、王にとって、これは無限の潜在的利益をもたらすことができる。一方では長期の持続的な兵源を保証することができる。一方で支配的な地位を固めることにもなる。徴税が重すぎると民心を失い、支持を失う。「重籍其民者失其下。」（人民に過度に徴税すると、人民の支持を失う。）（『輕重甲』）、「重賦斂，竭民財，急使令，罷民力，財竭則不能毋侵奪，力罷則不能毋墮倪。」（税を重く徴収し、民財を枯渇させ、賦役を急徴し、民力を疲弊させる。民財が枯渇すれば侵奪を免れず、民力が疲弊すれば情を怠ることを免れない。）（『正世』）だから、齊桓公が家屋税、六畜税、田畝税、人丁税を徴収しようとする、と、管子は極力反対した。「夫以室廡籍，謂之毀成。」（家屋税が課せられると家屋損壊につながる。）（『国蓄』）ならば、「広廈千万間」は見当たらないという。もし「以六畜籍，謂之止生。」（六畜税が課せられると六畜の繁殖が制限される。）（『国蓄』）ならば、民衆の栄養不足をもたらすことになる。もし「以田畝籍，謂之禁耕。」（田畝税を徴収すれば、農耕が損なわれる。）（『国蓄』）ならば、田野は荒れる。もし「以正人籍，謂之离情。」（人丁税を徴収すれば、人の情を断つことになる。）（『国蓄』）ならば、人口出生率を下げることになる。「以正戸籍，謂之養羸。」（家門別に税を収めれば、富豪を優遇することになる。）（『国蓄』）ならば、富める者は益を得る。彼はまた、もし「斂求厚」になれば、社会不安を引き起こし、民衆は流離すると思った。したがって、管子は強調して、もし君が「取于民有度，用之有止。」（人民に対する徴収は度があり、消費は節度がある。）ならば、「国雖小必安。」（国は小さくてもきっと安らかである。）もし君が「取之無度，用之不止。」（人民に対する徴収は度が無く、消費は節度がない。）ならば、「国雖大必危。」（国は大きくても必ず危うくなる。）（『權修』）

管子はまた、王が急に徴税することに反対した。「且君朝令而求夕具，有者出其財，無有者売其衣，農夫糶其五谷，三分賈而去。」（それに君主が朝に徴税を命ずると、夜にはそれを制限して納めるので、金持ちの家では出せ、貧しい家では衣類を売り、農民は穀物を売って税を納め、十分の三の値段でしか売ることができない。）（『輕重甲』）、こんなすると

民衆の利益が大きく破損し、貧富の格差を拡大することになる。これでは「君求焉而無止，民無以待之。」（君主の苛斂誅求は際限がなく、民はそれに対処することができなかった。）、民衆は「走亡而栖山阜。」（逃亡して山林に入った。）しかないが、外にいる「持戈之士顧不見親。」（兵士は親に会えない。）は「此不待戦而内敗。」（戦争をしないと内部から倒れる。）（『輕重甲』）となる。

## 第五節、賦税思想

一時代の賦税思想は往々にその時代の政治経済、思想文化、倫理道德の直接的な反映である。<sup>①</sup>『管子』の賦税思想は、春秋時代の斉国の実情と結びついている。それは、斉の国の状況と国民の生活を契合し、国の内部の潜在力を完全に解放し、十分に生産力の発展を促進し、貧富の格差を縮小し、効果的に社会の調和を構築し、斉国の政治的地位の向上、空前の経済繁栄、軍事「不戦而屈人之兵」という国の統治目的を達成した。

『管子』の賦税思想はすでにわが国の封建社会の2000年余りに影響したにもかかわらず、しかしそれは今日の税率の制定ひいては税の徴税に対して、依然として無視できない理論の意義と参考の価値がある。

第一は、『管子』が積極的に輕課税、少課税、さらには非課税の実務的な措置を利用して、国外の商人を積極的に斉国の商業運営に投入させ、国外の商人を豊かにしただけでなく、斉国の市場を活性化させた。柔軟な賦税政策を利用すれば、外商を吸引し、市場の需給を調節できるだけでなく、彼らがより多くの外資をもたらすように促すことができる。

第二は、賦税調整の役割を果たし、貧富の格差を縮めることである。「甚富不可使，甚貧不知耻。」（人は富がありすぎて使いにくく、貧しすぎると恥を知らず。）（『侈靡』）、「夫民富則不可以禄使也，貧則不可以罰威也。」（人は富がありすぎると利益を駆使できなくなり、貧しすぎると刑罰が抑えられない。）（『国蓄』）、したがって、先進国であれ発展途上

---

<sup>①</sup> 「『管子』賦税思想及其当代価値」王義忠、『税務研究』、2015年8月。



国であれ、発達地区であれ貧困地区であれ、国民間の貧富の格差を切実に対処しなければならない。差別化のための弾力的な賦税は貧富の差を調整する効果がある。例えば、奢侈品にはより高い消費税が課せられるが、一般的な日用品にはより低い税、あるいは免税が課せられる。

第三は、税のレバレッジ効果を利用して、弱い産業を支える。一国や一地方の産業発展に不均衡が生じた場合、劣勢にある成長産業に税制支援を強化し、急速な成長を促すことができる。斜陽産業や必要不可欠でない成熟産業には高い税金を課して撤退を促す。

第四は、税調節機能を活用し、市場の需給を調節する。市場のある製品の供給が不足した時、その製品に高い消費税を課すことができ、それによってその価格を引き上げて、需要を減らして、需給を均衡させることができる。市場のある商品が供給過剰になったとき、消費税を低く徴収したり、免税したり、補助金を与えたりして、需要と供給が均衡するまで販売を促進することができる。

第五は、租税適応メカニズムを利用して、商人の利益をコントロールする。商人にとっては、商売の目的は利益を得ることである。ただし、国は必ず適切に関与させ、商人の利潤空間を一定の範囲内に統制され、この範囲を超えたら重税を徴収する。従って、「大賈蓄家不得豪奪吾民矣。」（豪商大賈は、百姓を騙し取り強奪することができない。）（『国蓄』）、有効で「殺正商賈之利。」（商人の利益を削る。）（『輕重乙』）、「蓄賈游市，乘民之不給，百倍其本。」（富商は市場に出入して、人民の困難を利用して、百倍の利益を得た。）（『国蓄』）、「游商得以什伯其本也。」（遊商は十百倍もの高利を得ることができる。）（『七臣七主』）などの状況を避ける。

## 第六章、『管子』の中の「商」と「工」に関する経済思想

『管子』の商工業思想は、『管子』経済思想の重要な構成部分であり、古代中国の経済思想の発展の歴史の中で重要な位置を占めている。『管子』の商工業思想は、開放的な発展を体現するだけでなく、実務的な管理を重視し、当時の比較的全面的な経済思想である。

### 第一節、『管子』の中の「商」字と「工」字の分析

『管子』全書には、二十一篇の文章のうち、48カ所に「商」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「權修」篇に一箇所ある。「商賈在朝，則貨財上流。」<sup>①</sup>意味は「商人が朝中に権力を持てば、財は上層に流れる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「立政」篇に一箇所ある。「百工商賈不得服長鬐貂。」<sup>②</sup>意味は「職人や商人は、子羊やミンクの毛皮を着てはならない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「乗馬」篇に二箇所ある。1、「其商苟在市者三十人。」<sup>③</sup>意味は「市の商人は30人がある。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「右士農工商。」<sup>④</sup>意味は「以上は士農工商である。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「幼官」篇に一箇所ある。「九和時節，君服白色，味辛味，听商声，治湿氣，用九数。」<sup>⑤</sup>意味は「金気の盛んな時、君主は白い服装をし、辛い食べ物を食べ、商音の音楽を聞き、湿った気を養い、数字は九を使い、西に向かう井戸の水を飲み、火を焚くのには北の木材を使った。」ここでいう「商」とは、商音のことである。

---

① 『管子校注』（上）卷一「權修」五三頁。

② 『管子校注』（上）卷一「立政」七六頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九二頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一五四頁。

「幼官図」篇に一箇所ある。「九和時節，君服白色，味辛味，听商声，治湿気，用九数。」

①意味や用法は「幼官」篇と同じ。

「八観」篇に二箇所ある。1、「金玉貨財，商賈之人不論而在爵禄也，則上令輕，法制毀。」

②意味は「財を運ぶ商賈は、道德品行を問わず爵禄を享受すれば、君令は重視されず、法制は破れる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「悦商販而不務本貨，則民偷处而不事積聚。」③意味は「君主は商人が好きで農業が好きではないので、人民はそれなりに安住して蓄えに力を入れない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「法法」篇に一箇所ある。「故農夫不失其時，百工不失其功，商無廢利，民無游日，財無砥滯，故曰、儉其道乎！」④意味は「このようにして、農夫は農作業を怠らず、職人は効能を保証し、商人は失敗しない、人民は遊蕩しない、財も滞積しない。だから、儉約は正道である！」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「小匡」篇に七箇所ある。1、「制国以為二十一郷，商工之郷六，士農之郷十五。」⑤意味は「全国を21の郷と定め、商・工の郷が6つ、士・農の郷が15つである。」ここでいう

「商」とは、商人のことである。2、「士農工商，四民者，国之石民也。」⑥意味は「士農工商の四民は、国家の柱石の民である。」ここでいう「商」とは、商人のことである。3、

「処商必就市井。」⑦意味は「商人を市場に近づける。」ここでいう「商」とは、商人のことである。4、「今夫商群萃而州处，觀凶飢，審国变，察其四時，而監其郷之貨，以知其市之賈。」⑧意味は「商人を居住させて集まらせ、彼らは年景凶飢えを観察し、国内の状況を知り、四時を観察し、本郷の貨物に注意し、市場の物価を予知する。」ここでいう「商」と

---

① 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八二頁。

② 『管子校注』（上）卷五「八観」二六九頁。

③ 『管子校注』（上）卷五「八観」二七二頁。

④ 『管子校注』（上）卷六「法法」二九九頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇二頁。

は、商人のことである。5、「夫是，故商之子常為商。」<sup>①</sup>意味は「だから、商人の子弟は常に商人である。」ここでいう「商」とは、商人のことである。6、「曹孫宿処楚，商容処宋，季勞処魯，徐開封処衛，晏尚処燕，審友処晋。」<sup>②</sup>意味は「曹孫宿は楚に駐屯し、商容は宋に駐屯し、季友は魯に駐屯し、衛開方は衛に駐屯し、医尚は燕に駐屯し、審友は晋に駐屯する。」商容は、人名である。

「君臣上」篇に一箇所ある。「君明、相信、五官肅、士廉、農愚、商工願，則上下体而外内別也。」<sup>③</sup>意味は「君主は英明で、宰相は誠信で、五官は厳粛で、士人は廉直で、農民は愚朴で、商人と職人は謹厚で、それでは、上下は一定の体裁があつて、内外は一定の別れがある。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「侈靡」篇に二箇所ある。1、「丹沙之穴不塞，則商賈不処。」<sup>④</sup>意味は「丹砂鉍産物の入り口をふさいではならず、商賈の輸送を停滞させてはならない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「然後移商人于国，非用人也。」<sup>⑤</sup>意味は「商人は国家に対して、何もしない人間ではない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「治国」篇に一箇所ある。「故先王使農士商工四民交能易作，終歳之利，無道相過也。」<sup>⑥</sup>意味は「だから先代の聖王は、農、士、商、工の四民が業種を交換しても、毎年の収入は互いに超えないように注意していた。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「七臣七主」篇に二箇所ある。1、「夫倉庫非虚空也，商宦非虚壞也，法令非虚乱也，国家非虚亡也。」<sup>⑦</sup>意味は「国家の倉庫は何の理由もなく空になったのではなく、商賈官吏は何の理由もなく墮落したのではなく、法度政令は何の理由もなく混乱したのではなく、国家も何の理由もなく滅亡したのではない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、

---

① 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇二頁。

② 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二三頁。

③ 『管子校注』（中）卷十「君臣上」五五〇頁。

④ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六五二頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七三〇頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十五「治国」九二六頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九三頁。

「而上不調淫，故游商得以什伯其本也。」<sup>①</sup>意味は「国家が貴賤調剤の過剰現象に注意しないと、遊商は十百倍もの高利を得ることができる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「禁藏」篇に一箇所ある。「其商人通賈，倍道兼行，夜以続日，千里而不遠者，利在前也。」<sup>②</sup>意味は「商人が商売をして、一日に二日の道を追い、夜を日に継いで、千里の遠路をはるばる行っても遠くと思わないのは、利が先にあるからである。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「地員」篇に四箇所ある。1、「呼音中商。」<sup>③</sup>意味は「呼音は「商」の声に相当する。」ここでいう「商」とは、商声のことである。2、「凡听商，如离群羊。」<sup>④</sup>意味は「「商」という声を聞くと、まるで群れを失った羊が鳴くようだ。」ここでいう「商」とは、商声のことである。3、「不無有，三分而去其乘，適足以是生商。」<sup>⑤</sup>意味は「もはや三除を用いて百八の上から三分の一を引いてはならず、その数七十二に足るに足る。これによって商声が生じる。」ここでいう「商」とは、商声のことである。4、「其下清商，不可得泉。」<sup>⑥</sup>意味は「しかし下の清商の家には泉がない。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「海王」篇に一箇所ある。「万乗之国，人数開口千万也，禹策之，商日二百万，十日二千万，一月六千万。」<sup>⑦</sup>意味は「1 万乗の大国で、人口は総数千万人である。あわせてこれ数を数える。1 日に 200 万円、10 日に 2000 万円、1 月に 6 千万円のお金ができる。」ここでいう「商」とは、合計することである。

「地数」篇に一箇所ある。「夫齐衢处之本，通達所出也，游子勝商之所道。」<sup>⑧</sup>意味は「齐

---

① 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九三頁。

② 『管子校注』（中）卷十七「禁藏」一〇一五頁。

③ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七二頁。

④ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇八〇頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇八〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇八五頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「海王」一二四七頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六八頁。

国は交通の要衝の国に位置して、四通八達の地方で、それによって観光客と富商の必ず通るところである。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「揆度」篇に二箇所ある。1、「其在声者、宮、商、羽、徵、角也。」<sup>①</sup>意味は「音にあられるのは、宮、商、羽、徵、角である。」ここでいう「商」とは、商声のことである。

2、「善正商任者省有肆。」<sup>②</sup>意味は「商業を上手に管理するものは、国家が同時に商業をやらねばならない。」ここでいう「商」とは、商業のことである。

「輕重甲」篇に二箇所ある。1、「故頡封食邑，富商蓄賈，積餘藏羨時蓄之家，此吾国之豪也。」<sup>③</sup>意味は「なぜなら、大官になっている者、邑取を持っている者、富商、蓄賈、余財を積んでいる者、利潤を隠している者、財物を買占めている者は、みなこの国の富豪である。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「今君之籍取以正，万物之賈輕去其分，皆入于商賈，此中一国而二君二王也。」<sup>④</sup>意味は「今では王が直接正税を徴収する形式をとっているが、庶民の制品は税を納めるために売りさばいて、往々にして半分に値下がりして商人の手に落ちる。一国に二君二王ということになる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「輕重乙」篇に八箇所ある。1、「吾国者，衢处之国也，遠稽之所通，游客蓄商之所道，財物之所遵。」<sup>⑤</sup>意味は「わが国は四通八達の国家であり、遠路賦税を納めてここを通り、観光客蓄商はここを通り、資財はここから積み替えて来る。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「令富商蓄賈百符而一馬，無有者取于公家。」<sup>⑥</sup>意味は「百枚の債権を持っている商賈には馬一頭を献じさせ、馬のない者は国から買うことができる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。3、「桓公曰、「吾欲殺正商賈之利，而益農夫之事，為

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七九頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四〇四頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四二五頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四六頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六〇頁。

此有道乎？」管子対曰、「粟重而万物軽、粟軽而万物重、兩者不衡立。故殺正商賈之利、而益農夫之事、則請重粟之価金三百。若是則田野大辟、而農夫勸其事矣。」桓公曰、「重之有道乎？」管子対曰、「請以令与大夫城藏、使卿諸侯藏千鐘、令大夫藏五百鐘、列大夫藏百鐘、富商蓄賈藏五十鐘。内可以為国委、外可以益農夫之事。」桓公曰、「善。」下令卿諸侯令大夫城藏。農夫辟其五谷、三倍其賈。則正商失其事、而農夫有百倍之利矣。」<sup>①</sup>意味は「桓公は、「商人の利益を削って農民の生産を助けたいが、どうすることができるか」といった。管仲は、「食糧の値段が高ければ、その他の物資の値段は安くなる。食糧が低ければ、その他の物資の価格は高くなる。両者の上げ下げの傾向は逆である。だから商人の利益を削って農民の生産を助けるには、一釜あたりの食糧の値段を三百錢上げなさい。こうして荒地は広く開墾され、農夫も懸命に耕した。」桓公は、「糧価を上げるには、どんな方法がある」といった。管仲は答えて、「大夫諸君に命じて、卿と附庸諸侯に千鐘、令大夫に五百鐘、列大夫に百鐘、富商蓄賈に五十鐘を貯蔵せよ。内は国家の貯蔵として、外は農民の生産を助けることができる。」桓公は、「よし」といった。卿諸侯、令大夫などに食糧の貯蔵を命じた。農民たちはその五穀を大いに栽培し、糧は三倍になり、商売に専念する商人はほとんど損をし、農民は百倍の利益を得た。」ここでいう「商」とは、商人のことである。4、「請以令、為諸侯之商賈立客舍、一乗者有食、三乗者有芻菽、五乗者有伍養、天下之商賈歸齊若流水。」<sup>②</sup>意味は「諸侯国の商人のために客舎を設け、四馬一車の商人は、ただで食事をするにしました。十二頭の馬と三台の車をもつ商人に加えて家畜を供える。二十頭の馬と荷馬車五台の商人には、五人の給仕がついていた。天下諸国の商人が水のように齊に集まる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「輕重丁」篇に六箇所ある。1、「寡人多務、令衡籍吾国之富商蓄賈称貸家、以利吾貧萌、農夫不失其本事。反此有道乎？」<sup>③</sup>意味は「私は処理しなければならないことが多いので、

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五六頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六八頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四七四頁。

役人を派遣して豪商蓄賈や高利貸に税を課し、貧民や農夫を助けて農作業を維持させた。しかし、このやり方を変えて、ほかに道があるだろうか。」ここでいう「商」とは、商人のことである。2、「已守其謝，富商蓄賈不得如故。」<sup>①</sup>意味は「国家がこれらの物資を手に入れてしまえば、豪商蓄賈はその技を施すことができなくなる。」ここでいう「商」とは、商人のことである。3、「四郊之民貧，商賈之民富。寡人欲殺商賈之民，以益四郊之民，為之奈何？」<sup>②</sup>意味は「農民は貧しく、商人は富む。商人の利益を削って農民を補おうと思うが、どうすればよいか。」ここでいう「商」とは、商人のことである。4、「行令未能一歲，而郊之民殷然益富，商賈之民廓然益貧。」<sup>③</sup>意味は「命令が施行されて1年もたたないうちに、農民はやはりしだいに豊かになり、商人はやはりしだいに貧しくなった。」ここでいう「商」とは、商人のことである。5、「故賤売而貴買，四郊之民売賤，何為不富哉？商賈之人何為不貧乎？」<sup>④</sup>意味は「したがって商人が安売りして高く買うことになる。農民はそれに応じて高く売って安く買って、どうして富むことができますか、商人はどうして貧しくならないことができますか。」ここでいう「商」とは、商人のことである。

「輕重戊」篇に一箇所ある。「夏人之王，外鑿二十虵，鑿十七湛，疏三江，鑿五湖，道四涇之水，以商九州之高，以治九藪，民乃知城郭門閭室屋之築，而天下化之。」<sup>⑤</sup>意味は「夏代は、二十条の河を切り、十七条の淀んだ河道を浚渫し、三江を疎かにし、五湖を切り、四涇の水を引いて、以て九州の高地を測り、九条の大沢を防除し、城郭、裏道、家々の建築をわきまえさせ、それによって天下を帰化させた。」ここでいう「商」とは、測量することである。

『管子』全書に対して48処の商の字の分析を通して、商の主な意味が商人である。

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四八四頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四九五頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四九五頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四九五頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五〇七頁。



『管子』全書には、二十三篇の文章のうち、63カ所に「工」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「立政」篇に五箇所ある。1、「五曰工事競于刻鏤，女事繁于文章，国之貧也。」<sup>①</sup>意味は「第五に、職人が木楼の金を刻むことを追い、女紅も花摘みの文飾を広めようとすれば、国は貧しくなる。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「工事無刻鏤，女事無文章，国之富也。」<sup>②</sup>意味は「職人が木楼金を彫らず、女紅も文才や花飾を求めなければ、国は豊かになる。」ここでいう「工」とは、職人のことである。3、「論百工，審時事，辨功苦，上完利，監壹五郷，以時鈞修焉，使刻鏤文采，毋敢造于郷，工師之事也。」<sup>③</sup>意味は「諸職人を考課し、時節ごとの作業項目を検定し、製品の質の優劣をわきまえ、完全と巧緻を提唱し、五郷を統一して管理し、刻木・彫金・文才のような贅沢品の細工は、各郷で作業することをはばかる。これが「細工師」の役割である。」ここでいう「工」とは、職人のことである。4、「百工商賈不得服長鬐貂。」<sup>④</sup>意味は「職人や商人は、子羊やミンクの毛皮を着てはならない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「乗馬」篇に六箇所ある。1、「工治容貌功能，日至于市，而不為官工者，与功而不与分焉。」<sup>⑤</sup>意味は「器物の様式機能を重んじ、市場取引に参加する手工業者に対しても、官家の工匠でない者は、労役に服して収益を分配しない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「不可使而為工，則視貨离之実而出夫粟。」<sup>⑥</sup>意味は「直接労働させることができない人々には、彼らが劣っている実際の数字を見て、力役に補償する食糧を納める。」ここでいう「工」とは、労働することである。3、「是故非誠賈不得食于賈，非誠工不得食于工，非誠農不得食于農，非信士不得立于朝。」<sup>⑦</sup>意味は「したがって、真の商人でなければ

---

① 『管子校注』（上）巻一「立政」六四頁。

② 『管子校注』（上）巻一「立政」六四頁。

③ 『管子校注』（上）巻一「立政」七四頁。

④ 『管子校注』（上）巻一「立政」七六頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻一「乗馬」九一頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻一「乗馬」九一頁。

⑦ 『管子校注』（上）巻一「乗馬」九一頁。

ば、商売をしてはならない。真の職人でなければ、仕事をしてはならない。真の農夫でなければ、農業をしてはならない。名実ともに士人でなければ、朝中に仕官することは許されない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。4、「右士農工商」<sup>①</sup>意味は「以上は士農工商である。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「七法」篇に五箇所ある。1、「存乎論工而工無敵。」<sup>②</sup>意味は「第二は、軍事工芸を究め、工芸を無敵にすることにある。」ここでいう「工」とは、工藝のことである。2、「財蓋天下，而工不蓋天下，不能正天下。工蓋天下，而器不蓋天下，不能正天下。」<sup>③</sup>意味は「財力は天下を圧倒するが、工芸は天下を圧倒せず、征服できない。工芸は天下を圧倒するが、兵器は天下を圧倒せず、征服できない。」ここでいう「工」とは、工藝のことである。3、「故聚天下之精財，論百工之銳器，春秋角試，以練精銳為右。」<sup>④</sup>意味は「だから、天下最高の物材を集めて、各種の工匠の兵器を研究する。春秋2季に試合を行い、精銳の者は上等に列せた。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「幼官」篇に一箇所ある。「論百工之銳器。」<sup>⑤</sup>意味は「各種の工匠の兵器を研究する。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「幼官図」篇に一箇所ある。「論百工之銳器。」<sup>⑥</sup>意味はと「幼官」同じことである。

「五輔」篇に二箇所ある。1、「事有本，而仁義其要也。今工以巧矣，而民不足于備用者，其悦在玩好。」<sup>⑦</sup>意味は「物事には根本があり、仁義はその鍵である。今では職人は器用だが、人民が必要とするものが満足できないのは、君主がよいものを好むからである。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「古之良工，不勞其知巧以為玩好。」<sup>⑧</sup>意味は

---

① 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九二頁。

② 『管子校注』（上）卷二「七法」一一六頁。

③ 『管子校注』（上）卷二「七法」一一六頁。

④ 『管子校注』（上）卷二「七法」一一七頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一六六頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八七頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷三「五輔」二〇一頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷三「五輔」二〇一頁。

「古代のすぐれた職人は、その智巧を用いてよいものを作って遊ばない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「重令」篇に一箇所ある。「菽粟不足，末生不禁，民必有飢餓之色，而工以雕文刻鏤相稚也，謂之逆。」<sup>①</sup>意味は「食糧が不足し、贅沢品の生産を禁止せず、人々は必ず飢え、職人たちは彫木鏤の金相をあらわし、これを「逆」という。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「法法」篇に一箇所ある。「故農夫不失其時，百工不失其功，商無廢利，民無游日，財無砥滯，故曰，俟其道乎！」<sup>②</sup>意味は「このようにして、農夫は農作業を怠らず、職人は効能を保証し、商人は失敗しない、人民は徘徊しない、財も滞積しない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「大匡」篇に四箇所ある。1、「桓公使鮑叔識君臣之有善者，晏子識不仕与耕者之有善者，高子識工賈之有善者，国子為李，隰朋為東国，賓胥無為西土，弗鄭為宅，凡仕者近宮，不仕与耕者近門，工賈近市，三十里置遽委焉，有司職之。」<sup>③</sup>意味は「桓公は鮑叔に官吏の中で有能な者を考察し、晏子に非官吏や耕作者の中で有能な者を考察し、高子に工匠や商人の中で有能な者を考察し、国子に訟獄を管理し、隰朋に東方諸国の事務を管理し、賓胥に西方諸国の事務を管理し、弗鄭に住宅を管理させた。役人になる者は宮庭に住み、役人にならない者や田畑を耕す者は城門に住み、職人や商人は市場に住む。三十里路ごとに宿場を設け、食料を備蓄し、役人を置いて管理した。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「令高子進工賈，応于父兄，事長养老，承事敬。」<sup>④</sup>意味は「高子を派遣して工匠、商人の選抜を管理し、父兄に順じて、長養老に仕え、任務を受けて厳粛に対応する。」ここでいう「工」とは、職人のことである。3、「工賈出入不応父兄，承事不敬，而違老治危，行此三者，有

---

① 『管子校注』（上）巻五「重令」二八五頁。

② 『管子校注』（上）巻六「法法」二九九頁。

③ 『管子校注』（上）巻七「大匡」三六八頁。

④ 『管子校注』（上）巻七「大匡」三六九頁。

罪無赦。」<sup>①</sup>意味は「工匠、商人、出入りが父兄に不順なる者、任務を受けて厳肅に扱わず、老人を捨てて詐りを働く者、この三者を行いて罪赦さず。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「小匡」篇に八箇所ある。1、「制国以為二十一郷，商工之郷六，士農之郷十五。」<sup>②</sup>意味は「全国を21の郷と定め、商・工の郷が6つ、士・農の郷が15つである。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「市立三郷，工立三族，沢立三虞，山立三衡。」<sup>③</sup>意味は「市場に三郷あり、手工業に三族あり、湖沢に三虞あり、山林立に三衡あり。」ここでいう「工」とは、職人のことである。3、「士農工商，四民者，国之石民也。」<sup>④</sup>意味は「士農工商の四民は、国家の柱石の民である。」ここでいう「工」とは、職人のことである。4、「処工必就官府。」<sup>⑤</sup>意味は「職人を役人の近くに置く。」ここでいう「工」とは、職人のことである。5、「今夫工群萃而州処，相良材，審其四時，辨其功苦，權節其用，論比計制，斷器尚完利。」<sup>⑥</sup>意味は「職人を集まって集め、よい材木を調べ、四季を観察し、質の優劣をわきまえ、各種の道具を手配しなければならない。等級を評定し、規格を評価し、器物を裁断する時は、完璧で精緻であることに注意しなければならない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。6、「夫是，故工之子常為工。」<sup>⑦</sup>意味は「故に、職人の子弟は常に職人である。」ここでいう「工」とは、職人のことである。7、「拳財長工，以止民用。」<sup>⑧</sup>意味は「財源を開発して百工を提唱し、人々の需要を保障するためである。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「問」篇に三箇所ある。1、「処女操工事者幾何人？」<sup>⑨</sup>意味は「手仕事ができる少女が、

---

① 『管子校注』（上）卷七「大匡」三七〇頁。

② 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇〇頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇一頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇二頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四一一頁。

⑨ 『管子校注』（上）卷九「問」四九二頁。

何人いるのか。」ここでいう「工」とは、手工のことである。2、「工之巧，出足以利軍伍，  
処可以修城郭、補守備者幾何人？」<sup>①</sup>意味は「職人とは、その技術レベルは、戦時には軍隊  
に協力し、平時には城郭を補修し、守備者を補充し、何人いるのか。」ここでいう「工」と  
は、職人のことである。3、「工尹伐材用，毋于三時，群材乃植，而造器定冬，完良備用必  
足。」<sup>②</sup>意味は「労働者が木材を伐採するのは、春・夏・秋の3期にしてはならない。さまざ  
まな木材が、どのような軍器を造るかを決めた。冬には完全な兵器を十分に作らねばならな  
い。」ここでいう「工」とは、労働者のことである。

「君臣上」篇に二箇所ある。1、「君明、相信、五官肅、士廉、農愚、商工願，則上下体  
而外内別也。」<sup>③</sup>意味は「君主は英明で、宰相は誠信で、五官は厳粛で、士人は廉直で、農  
民は愚朴で、商人と職人は謹厚で、それでは、上下は一定の体裁があつて、内外は一定の別  
れがある。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「如冶之于金，陶之于埴，制  
在工也。」<sup>④</sup>意味は「冶工は金属に対して、陶工は粘土に対して、何を作ろうとしているか  
を職人が把握しているようなものである。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「四称」篇に一箇所ある。「戲其工瞽」<sup>⑤</sup>意味は「楽人瞽者を賞する。」ここでいう「工」  
とは、伶人のことである。

「侈靡」篇に二箇所ある。1、「巨棺槨，所以起木工也。」<sup>⑥</sup>意味は「巨大な棺を作り、  
大工を出世させた。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「多衣衾，所以起女  
工也。」<sup>⑦</sup>意味は「副葬の衣服を多用して、織工の利益を得させて、」ここでいう「工」と  
は、織工のことである。

「治国」篇に一箇所ある。「故先王使農士商工四民交能易作，終歳之利，無道相過也。」

---

① 『管子校注』（上）卷九「問」四九二頁。  
② 『管子校注』（上）卷九「問」四九三頁。  
③ 『管子校注』（中）卷十「君臣上」五五〇頁。  
④ 『管子校注』（中）卷十「君臣上」五六四頁。  
⑤ 『管子校注』（中）卷十一「四称」六一七頁。  
⑥ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六八八頁。  
⑦ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六八八頁。

①意味は「だから先代の聖王は、農、士、商、工の四民が業種を交換しても、毎年の収入は互いに超えないように注意していた。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「小問」篇に二箇所ある。1、「選天下之豪傑，致天下之精材，来天下之良工，則有戦勝之器矣。」②意味は「天下の豪傑を選び、天下の精材を集め、天下の良工巧者を招けば、敵に勝つ武器がある。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「来工若何？」③意味は「良工巧者を招いてどうするか」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「七臣七主」篇に三箇所ある。1、「主好宮室，則工匠巧。主好文采，則女工靡。」④意味は「君主は宮室が好きで、工匠は巧妙を追求する。君主は装飾をよくして、織工はみだらさを重んじる。」こでいう「工」とは、職人と織工のことである。2、「夫男不田，女不緇，工技力于無用，而欲土地之毛，倉庫満実，不可得也。」⑤意味は「男は田を耕さず、女は布を織らず、職人技は無用なところに力を入れ、土にイネの苗を生やしたいと思っても、倉庫に穀物を積んでも、とてもできない。」ここでいう「工」とは、職人のことである。

「度地」篇に三箇所ある。1、「乃取水左右各一人，使為都匠水工。」⑥意味は「そして、水官の部下の左右一人ずつをえらんで、水工の頭領にした。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「利耗什分之六，土工之事亦不立。」⑦意味は「ただ工費の十分の六を使っても土工の事は成就しない。」ここでいう「工」とは、工事のことである。

「地員」篇に一箇所ある。「五臭所校，寡疾難老，士女皆好，其民工巧。」⑧意味は「五香植物の生む効用は、人に病気を少なくさせて老衰を遅らせ、士女はみな美しく生れ、民衆はみな心と手が器用である。」ここでいう「工」とは、技芸のことである。

---

① 『管子校注』 (中) 卷十五「治国」九二六頁。

② 『管子校注』 (中) 卷十六「小問」九五五頁。

③ 『管子校注』 (中) 卷十六「小問」九五五頁。

④ 『管子校注』 (中) 卷十七「七臣七主」九八九頁。

⑤ 『管子校注』 (中) 卷十七「七臣七主」九八九頁。

⑥ 『管子校注』 (下) 卷十八「度地」一〇五九頁。

⑦ 『管子校注』 (下) 卷十八「度地」一〇六三頁。

⑧ 『管子校注』 (下) 卷十九「地員」一一〇一頁。

「版法解」篇に五箇所ある。1、「人欲必用，事欲必工。」<sup>①</sup>意味は「人を治めるには彼に一定の効力を要求し、事を治めるにはそれに一定の完璧を要求する。」ここでいう「工」とは、完璧のことである。2、「失称量則事不工。事不工則傷，人不用則怨。」<sup>②</sup>意味は「事は分量尺度なしには完璧にならない。事が不完壁であることは傷があることを意味し、人が効力を発揮しないことは恨みがあることを意味する。」ここでいう「工」とは、完璧のことである。3、「用力苦則事不工，事不工而数復之。」<sup>③</sup>意味は「民力を使いすぎると、完璧にできないからである。」ここでいう「工」とは、完璧のことである。

「山至数」篇に二箇所ある。1、「使智者尽其智，謀士尽其謀，百工尽其巧。」<sup>④</sup>意味は「智者はすべて知恵を出し、策士はすべて謀略を出し、百工はすべて技巧を出すためである。」ここでいう「工」とは、職人のことである。2、「与工雕文梓器，以下天下之五谷。」<sup>⑤</sup>意味は「手工業による精巧な木器生産を発展させて諸侯国の食糧を掌握した。」ここでいう「工」とは、手工業のことである。

「揆度」篇に一箇所ある。「共工之王，水处什之七，陸处什之三，乘天勢以隘制天下。」<sup>⑥</sup>意味は「共工政の時代、天下は水が十分の七、陸が十分の三を占めていたが、この自然を利用して天下を支配した。」共工は、人名である。

「輕重甲」篇に三箇所ある。1、「伊尹以薄之游女工文繡纂組，一純得粟百鐘于桀之国。」<sup>⑦</sup>意味は「伊尹は薄地の何もすることのない婦人を呼んで、各種の華美な色の絹を織る。1匹の織物は桀から100鐘の食糧と交換できる。」ここでいう「工」とは、織工のことである。

2、「弓弩多匡軫者，而重籍于民，奉繕工而使弓弩多匡軫者，其故何也？」<sup>⑧</sup>意味は「私た

---

① 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇〇頁。

② 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三二五頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三四九頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七一頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一三九八頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四〇九頁。

ちのボウガンはねじれて使いにくいものが多い。百姓から重税をとって、職人を養っているのに、弩は逆に曲がって使うことが多いのはなぜか。」ここでいう「工」とは、職人のことである。3、「苟有操之不工，用之不善，天下倪而是耳。」<sup>①</sup>意味は「経営が悪ければ、運用が悪ければ、天下は高いとは思わない。」ここでいう「工」とは、完璧のことである。『管子』全書に対して63処の工の字の分析を通して、工の主な意味が職人であることが判明した。

## 第二節、商工業者の地位と役割

『管子』は政治的に商工業者の社会的地位を高めた。『小匡』は、「士農工商，四民者，国之石民也。」（士農工商の四民は、国家の柱石の民である。）という鮮明な思想を主張している。「石民」とは、国家の柱となる石の民として「四民」を確立した新概念である。石とは、ビルを支える柱石である。石民、すなわち国家立国の基礎である。『管子』のこの認識は、商工業者の社会的地位を確認し、進歩的な意味がある。社会の実践の中で、商工業者の「石民」の地位を確認して、すなわち商工業の社会的意義を確認し、根本から商工業の発展を促進することを利する。<sup>②</sup>

商工業者の役割を十分に発揮するために、『管子』は「定民之居，成民之事。」（百姓の居住地を定め、百姓の職業を定める。）（『小匡』）政策を採ることを主張した。すなわち職業の種類によって、別々に住むことである。商工業専用区を設け、商工の民を集めて居住させ、工・商の二つの集団を形成した。その意義は商工業の専門レベルを高め、商工業の発展規模を拡大し、商工業の繁栄を促進する。『小匡』によると、国は商工業専用区を設置するため、原則的な指導意見を提出した。凡そ商工の民は、「不可使雑处，雑处則其言哢，其事乱。」（彼らを雑居させてはならない。雑居すれば言うこともやることも同じではない。）

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「轻重甲」一四二二頁。

② 「論『管子』工商新思想与新政」周懷宇、『管子学刊』、2017年第2期。



どのように商工業専用区を設置するかについて、国は原則的な計画を制定し、全国の「二十一郷、商工之郷六、士農之郷十五。」（全国を21の郷と定め、商・工の郷が6つ、士・農の郷が15つである。）6つの「商工の郷」の設置を明確に計画した。また、どこに専区を設置するかについても、「処工必就官府，処商必就市井。」（職人を官府に近く、商人を市場に近く配置した。）との指導原則を示した。すなわち職人は役所の近くに住み、商人は市場の近くに住む。

管理を容易にするために、齊国には工商管理機構とそれに準ずる官吏が置かれた。「工正」は役所の手工業を担当する役人で、手工業の工房や各種の職人を管理する。「工師」は各職業の職人の技術の優劣を評価し、季節ごとの細工の項目と種類を検定し、製品の品質を検査する。「鉄官」は鉄の制鍊、鉄器の製造を含む鉄業を主管し、例えば女子工員用の針、はさみの生産を担当した。農民が耕すための農具である鋤・鍬など、職人が使う斧・鋸・錐・鑿など。また、金融貨幣機関の設置もあり、これらの機関や官職の設置は『管子』が商工業を重視したことを示している。

これらの措置は商工業にとって重要な意味を持つ。まず、業界内での経験交換に役立つ。職人にとっては、「今夫工群萃（萃，聚集）而州処」（職人を集まって住んでいる。）であり、職人同士が技術を交流し、技術の水準を高めることができる。商人が集まって、お互いに市場の情報を伝え、市況を知り、商品の流通を促進する。まさに『小匡』が「令夫商群萃而州処，觀凶飢，審国度，察其四時而監其郷之貨，以知其市之賈。負任担荷，服牛格馬，以周四方；料多少，計貴賤，以其所有，易其所無，買賤鬻貴。」（商人を居住させて集まらせ、彼らは年景凶飢えを觀察し、国内の情況を知り、四時を觀察し、本郷の貨物に注意し、市場の物価を予知する。彼らは荷を担い、牛や馬を追い、四方を旅している。物資の多寡を定め、商品の貴賤を計り、その所有をもって、その無所を易し、安く買って高く売るのである。）

と言うように、国家にとって、比較的安定した工商組織を持つことは、商工業の持続的な興隆と発展に役立つ。

### 第三節、官山海

「官山海」は、国家が塩鉄の経営と管理に対して、『管子』経済改革を実行して国の商工業を発展させる重大な措置である。<sup>①</sup>「官山海」の政策思想は、つぎの三つに分けることができる。第一、塩と鉄の資源を国家が独占し、国有とすること。第二、経営過程は、官督民営を実施する。第三、塩鉄専売を行い、税を価に寓すことである。

塩鉄は中国古代の最も重要な2つの工業製品であり、人民の生活と生産の必需品である。故に経営者は非常に物価を操作しやすく、暴利を貪り、農業生産に影響を与え、国家に危害を及ぼす。そのため『輕重甲』は、「故為人君而不能謹守其山林菹澤草萊，不可以立為天下王。」（故に君主は厳格にその山林、沼と草地を制御することができなくて、同様に天下の王業を達成することができない。）という。だから「官山海」政策を主張し、塩と鉄の販売と価格を国家が独占し、私商をこの分野から締め出た。ついで適当に値段をつけて、国に人头税の数倍の販売利潤を得させる、いわゆる「塩鉄，二十国之策也。」（国が塩鉄を経営しても、二十年相当の財政収入が得られる。）（『揆度』）

『管子』によれば、冬十月から翌年正月の農閑期に、斉国は渤海湾のニガリを数人の労働力で煮て塩にしたが、その総量が3万分に達した後、塩を煮るのをやめた。食塩の総量は限られているから、必然的に高い値段になる。食塩は誰にでも必要で、十人の家には十人の食塩が必要だ、百人の家には百人の塩が必要する。1万乗の大国で、人口は総数千万人にとどまらない。合計すると、毎日塩を売って、国の利益は二百万銭、一月六千万銭になる。斉国は塩を他の諸侯国に売って利益を得ていたが、これは海を煮て塩とし、天下に売って利益を得ることである。

鉄は民生にも重要である。女性是一人一本の針と一丁のハサミを持っていなければ針仕事ができないからだ。一人一人の農夫はすきが一本、大鋤が一本あつてはじめて農作業がで

---

<sup>①</sup> 「听『管子』講『工商与貿易』」郭麗、『博覧群書』、2021年10月。

きる。それぞれの大工は、斧を1本、鋸を1本、錐を1本、鑿を1本持っていなければ仕事ができない。斉国の一人一月の税収は三十銭ほどで、針一本に一銭上乗せすれば、三十針の上乗せ収入は、一人が毎月納める人口税に等しい。ハサミ一丁に六銭上乗せすると、ハサミ五丁分の上乗せ収入は、一人が毎月納める人口税に等しい。チェリ鉄に十銭ずつ値段をつけると、三枚のチェリ鉄の収入は一人分の人口税に等しい。塩は庶民の食事になくてはならず、鉄は民生用になくてはならない器であった。塩と鉄は人民の日常必需品であるが、一人一人が生産することはできない。塩と鉄の専売は斉国の財政収入を増加させることができ、利益は国家に帰する。農地の賦課税を減免し、農民の負担を軽減することができる。富裕な商人が暴利を貪ることを抑制し、商人による庶民の富の吸収合併を減らすことができる。そうでなければ、もし公然と人口税、家屋税、樹木税を徴収すれば、人民の積極性を挫き、ひいては階級矛盾を激化させることになるだろう。要するに、価格に寓税することは、封建国家が商品の流通過程において、交換によって商業的利潤を得るための手段である。「見予之形，不見奪之理。」（人民に利益を与える時、形式は鮮明を要求して、人民の利益を奪う時は、内情を見せないことを要求する。）（『国蓄』）の税のあり方である。当時、富国強兵に対しては、社会秩序の安定に対しても一定の意味があった。

## 第四節、外国貿易

『管子』は国内市場だけでなく、国際市場の開拓を重視し、対外貿易を行うことを主張する。これは天下の財をひきつけ、富国強兵に至る重大な措置である。<sup>①</sup>まさに『輕重甲』にあるように、「為国不能来天下之財，致天下之民，則国不可成。」（国家を建設して天下の富を引きつけることができなくて、天下の人民を引きつけることができなくて、則ち国家が成立することができない。）だから「以其所有，易其所無，買賤鬻貴。」（その所有をもって、その無所を易し、安く買って高く売るのである。）（『小匡』）『管子』は、外国商人

---

① 「論『管子』 的工商業思想」宋玉順、『管子学刊』、1994年第4期。

が斉国を揃えることに大きな意義があると考えている。斉国の商品流通だけでなく、商工業の発展にも寄与した。このため、管仲は対外貿易の面で多くの有益な措置をとった。『侈靡』篇で指摘したように、「移商人于国，非用人也，不扞郷而処，不扞君而使，出則従利，入則不守，国之山林也，取而利之，市廛之所及，二依其本。故上侈而下靡，而君臣相而上下相親，則君臣之財不私藏，然則，貧動枳而得食矣。」（商人は国家に対して、何もしない人間ではない。彼らは住所を選ばず、君主を選ばず仕える。彼らは利益を得るために売るのであって、買っても売り惜しみをしない。国家の山林資源は、取って来て営利を得て、国家の市場の税収を倍増させる。朝中上下とも贅沢に消費し、君と臣は見合いをし、君臣の財産を隠すことはありまない。そうすれば貧民にも仕事と食事が与えられる。）

まず、軽税措置を実行して、商工業の発展を奨励する。『管子』は、「关者，諸侯之頤隧也，而外財之門戸也。」（関塞は、諸侯国の国境の通行の要衝で、国外の財資産が入る門戸である。）（『問』）と認識している。このように「関」が外財を得るために重要な役割を持っている以上、閉じこもったり高税で搾取したりすると、外財は導入できない。このため、『管子』は一連の関税減免措置を提案した。まず、関税と市場税を緩和し、税率を五十分の一、つまり二パーセントにする。すなわち「弛关市之征，五十而取一。」（関市の徴税を緩和して、五十分の一の税収にした。）（『大匡』）次に、関税と市税は一つだけ徴収し、重複して徴収してはならない。「征于关者勿征于市，征于市者勿征于关。虚車勿索，徒负勿入。以来遠人，十六道同。」（商人に対しては、ただ関所税を徴収して、市に入ると課税しない。店舗に対して、ただ市場税を徴収して、出入りの関所はもう課税しない。空車で通る者には関所税は課されないし、徒歩で重荷を背負って市に入る交易者には市場税は課されない。これらの措置で他の国の遠路の商賈を誘致し、斉国の各要路は共に遵守する。）（『問』）また、特別な場合には、必要に応じて免税することも必要である。空車で来たり、荷物を背負って徒歩で来たりする他の諸侯国の商人には税金を課さず、荷物置き場や倉庫を無料で提供することもあった。『小匡』曰く、「通齐国之魚塩于東萊，使关市幾而不正，廛而不税，以為諸侯之利，諸侯称寛焉。」（東萊から斉国の魚塩を交換して諸侯国に送り、関所、市場を査

察させて徴税せず、貨物を預けて徴税せず、諸侯の利益のために、諸侯はみな彼の寛恵を賞賛した。) 斉国のこのような優遇関税徴収政策は、『管子』の薄徴商税の経済思想を体現し、商工業の発展に有利であり、諸侯国の客商に歓迎され、これが斉国のために多くの富を蓄積した。

次に、客商を誘致するために、斉国は彼らに良質のサービスを提供した。政府は斉国の外の客商のために客舎を設け、食事と宿泊の便を提供し、「為諸侯之商賈立客舎，一乗者有食，三乗者有芻菽，五乗者有伍養。」（諸侯国の商人のために客舎を設け、四馬一車の商人は、ただで食事をすることにした。十二頭の馬と三台の車をもつ商人に加えて家畜を供える。二十頭の馬と荷馬車五台の商人には、五人の給仕がついていた。）（『輕重乙』）斉国は一乗（一乗、一車四馬）で来る商人に無料の食事を提供する。斉国まで三乗した商人には、馬に供える草を加える。五乗して斉国に来る商人には、さらに五人の給仕員を配置して、斉国に大量の商人をひきつけた。この新政が実施されると、「天下之商賈歸齊若流水。」（天下諸国の商人が水のように斉に集まる。）（『輕重乙』）という好影響が出た。斉国の商業はさらに盛んになった。当時、斉国では軍事用の手工業の原料が不足していたが、皮、骨、筋、角、竹矢、羽、象牙、皮革などは、すべて各国商人の入斉交易によって補充され、斉国の軍事生産の需要を満たしていた。『大匡』にも、「三十里置遽，委焉，有司職之。凡諸侯欲通，吏從行者，令一人為負以車；若宿者令人養其馬，食以委。客与有司別契，至国入契費，義数而不当，有罪。」（三十里ごとに駅を設け、食べ物と馬を備蓄し、官を任命して管理した。諸侯諸国が斉国と交渉をして、官吏が同行する場合は、一人を派遣して車で荷物を積む。泊まれば、馬に餌をやり、食べ物で持て成す。来客と管理者はそれぞれ契券を持ち、本国までの客は契料を納める。接客マナーと課金額が不当であれば、管理者は有罪である。）これは、外国商人を誘致するために、道路を建設し、駅を建設することを示しているだけではない。さらに重要なのは、外国人の送り迎えの管理制度を強調することである。このようにして外国商人のために便宜を提供しただけでなく、彼らの金銭の損失と人身の安全を保証した。ゆえに「四隣賓客，入者悦，出者誉，光名滿天下。」（四方の隣国の賓客は、来る者は満足し、出る者は称赞

し、名声は天下に満ちるのである。)(『中国』)

再び、輸出することで、物資と交換する。斉国は自国の手工業品を自国の不足物資と交換することを非常に重視した。斉国は塩の生産で知られ、塩は斉国が他の諸侯国の物資と交換した重要な商品であった。晋、宋、衛など内陸地方の諸侯国では、塩が生産されておらず、庶民が食塩を食べられないと、人はむくむ。国家を守るには、塩の役割が特に重要である。

「国無塩則腫，守圉之国，用塩独甚。」(国内の無塩は人々をむくんで、自分の国を守るために、塩は特に重要である。)(『輕重甲』) 斉国はこれらの諸侯国に塩を売り、巨利を得た。『山至数』曰く、「与工雕文梓器，以下天下之五谷。」(手工業による精巧な木器生産を發展させて諸侯国の食糧を掌握した。)'彫文梓器'は綺麗な紋様を彫って、木器を作る。このように手工業を發展させ、輸出を通じて他国の食糧と交換し、自国の困難を解決する。

最後、『管子』は輕重の術をもって諸侯国と貿易し、商品の価格において合理的な政策をとることを主張し、「天下高則高，天下下則下。」(天下のある物資の価格が高ければ、斉国の価格は高くなる。天下のある物資の価格が低ければ、斉国の価格も下がる。)(『地数』) 諸侯国との貿易において、『管子』は特に価格政策の運用を強調し、他の諸侯国の重要物資を奪い合い、輕重調節を通じて外財を導入し、他の諸侯国の物資を斉国に流出させ、自国の富と經濟力を増大させる。

他の諸侯国で生産された物資を、斉国が特に必要とすれば、「天下下我高，天下輕我重。」(各国の物価が下がれば、私はそれを上げる。各国がこの商品を輕んじる時、私はこれを重視する。)(『輕重乙』)の策略を採用し、価格をつりあげ、輸入を奨励し、斉国で貯蔵した。たとえば諸侯国の穀価が十、斉国の穀価が二十なら、諸侯国の食糧は斉国に流れこむ。「彼諸侯之谷十，使吾国谷二十，則諸侯谷歸吾国矣。」(各諸侯国の食糧には、もし彼らの食糧価が十で、我々が二十ならば、各諸侯国の食糧はわが国に流れて来ることになる。)(『山至数』) 一方で、『管子』は、自国が保有している食糧やその他の重要物資を国内に保存することに全力を尽くした。一方、『管子』は、他国が保有する食糧やその他の重要物資を自国に大量に引き込もうとする。具体的には、「謹守重流」で、自国の食糧や重要物資を高価

に保つための高価流通政策を実施する。自国が他の諸侯国に売らなければならない物資に対しては、「天下高我下」のやり方をとる。これらの品物の価格を諸侯国より安くして、対外にダンピングして競争に勝つ。最後の目的は天下の食糧と重要物資をすべて私に用意することである。国家は大量の物資の備蓄があつて、自国の経済を調節することができて、同時にかなりの程度の上で諸侯国の経済に影響することができる。

## 第五節、商工思想

工業と商業は、生産力水準の向上、社会的生産と生活領域の拡大とともに出現した二つの経済部門である。この 2 つの経済部門は農業と相互依存し、相互促進し、共に発展している。『管子』は商工業を大いに発展させ、人々の日常生活の需要を満足させるだけではなく、更に斉国富国強兵を保障し、天下を争覇する必要がある。<sup>①</sup>『管子』は具体的な情況に基づき、士、農、工、商の 4 種類の職業によって、人口居住区を区分し、彼らに分業して仕事をさせ、安心して本業に従事させる。これは社会の安定と労働効率の向上に役立つ。商工業では、官を分職させて管理し、市場の役割を重視し、価格の変動を利用して、国家収入を増大させた。斉国は塩、鉄やその他の国家計画と民生に関する特殊な商品の生産と流通に対して、様々なレベルの制御を行って、国家のために財政収入を増加させるだけでなく、また私設勢力を吸収合併することを抑制する。斉国は重要物資への行政介入を通じて国富を増大させた。他の諸侯国との貿易を重視し、商品の交換と流通を加速させ、民の生活用品の供給を豊かにし、斉国の生産を発展させた。

---

<sup>①</sup> 「論『管子』的工商管理思想」宣兆琦、趙娜、『管子学刊』、2009 年第 2 期。

## 第七章、『管子』の中の「水」に関する経済思想

### 第一節、『管子』の中の「水」字の分析

『管子』全書には、四十一篇の文章のうち、214カ所に「水」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「牧民」篇に二箇所ある。1、「錯国于不傾之地，積于不涸之倉，藏于不竭之府，下令于流水之原，使民于不爭之官，明必死之路，開必得之門。」<sup>①</sup>意味は「国を強固な基盤の上に築き、食糧を無尽蔵に蓄えていた。財貨を無尽蔵の府庫に貯蔵する。水の流れのもとに政令が下される。人々を紛争のない場所で使うことである。犯罪者が必ず死ぬ道を示す。手柄を立てた人には必ず賞を与えるという門戸を開いている。」2、「下令于流水之原者，令順民心也。」<sup>②</sup>意味は「水の流れに政令を下すということは、民心に従うということである。」

「形勢」篇に一箇所ある。「蛟龍得水，而神可立也；虎豹得幽，而威可載也。」<sup>③</sup>意味は「蛟龍は水を得てこそ、神を立てることができる。虎や豹は深山幽谷によってこそ、威力を保つことができる。」

「立政」篇に五箇所ある。1、「二曰溝洫不遂于隘，鄣水不安其藏，国之貧也。」<sup>④</sup>意味は「第二は、溝の通りが悪くなって、堤防の水があふれて、国が貧しくなることである。」2、「溝洫遂于隘，鄣水安其藏，国之富也。」<sup>⑤</sup>意味は「すべての溝が通り、堤防の水があふれないようにすれば、国は豊かになる。」3、「使民足于宮室之用，薪蒸之所積，虞師之事也，決水潦，通溝洫，修障防，安水藏，使時水虽過度，無害于五谷。」<sup>⑥</sup>意味は「人民に

---

① 『管子校注』（上）卷一「牧民」十四頁。

② 『管子校注』（上）卷一「牧民」十四頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「形勢」二一頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「立政」六四頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷一「立政」六四頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷一「立政」七三頁。



十分な家屋建築の材料の薪を貯蔵させる。それが「虞師」の役目ことである。たまった水を排水し、溝を浚渫し、堤防を整備して貯水池の安全を確保し、雨水が多すぎても五穀に害がないようにする。」

「乗馬」篇に八箇所ある。1、「高毋近旱，而水用足；下毋近水，而溝防省。」<sup>①</sup>意味は「高い干ばつに近いことはできない、水の十分な使用を保証する。水に近くなつてはいけな  
い、溝堤の修築を節約することである。」2、「流水，网罟得入焉，五而当一。」<sup>②</sup>意味は  
「水が流れて、網を引いて魚を捕ることができるのは、五畝を一畝に折りる。」3、「十仞  
見水不大潦，五尺見水不大旱，十一仞見水輕征，十分去二三，二則去三四，四則去四，五則  
去半，比之于山。」<sup>③</sup>意味は「普通十仞の深さは水の土地を見て、大きな潦が発生していな  
い、水深五尺の土地では大干ばつは起こっていない。一仞が水を見る土地は、租税を十分の一  
軽減し、二仞は十分の二の減額、三仞は十分の三の減額、四仞は十分の四の減額、五仞は半  
減、山地に相当する。」4、「五尺見水，十分去一，四則去三，三則去二，二則去一，三尺  
而見水，比之于沢。」<sup>④</sup>意味は「5尺に水を見る土地についても、10分の1の減税を行なう。  
四尺は十分の二の減額、三尺は十分の三の減額、二尺は十分の四の減額ことである。そして  
一尺に水を見る土地は、沼地に相当する。」

「七法」篇に六箇所ある。1、「則、象、法、化、決塞、心術、計数，根天地之氣，寒暑  
之和，水土之性。」<sup>⑤</sup>意味は「規律、形象、規範、教化、決塞、心術と計数、天地の神氣、  
寒暑の調和、水土の性質を探索している。」2、「不明于決塞，而欲驅衆移民，犹使水逆流。」  
<sup>⑥</sup>意味は「決塞の術を了解せずに民を使役するのは、水を逆流させるようなものである。」  
3、「不明于計数，而欲舉大事，犹無舟楫而欲經于水險也。」<sup>⑦</sup>意味は「計数を知らずに大

---

① 『管子校注』（上）卷一「乗馬」八三頁。

② 『管子校注』（上）卷一「乗馬」八九頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九一頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷二「七法」一〇六頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷二「七法」一〇七頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷二「七法」一〇七頁。

きなことを成し遂げようとするのは、舟集を持たずに水難を渡ろうとするのと同じことである。」4、「故曰：治人如治水潦，养人如养六畜，用人如用草木。」<sup>①</sup>意味は「だから、人を治めるのは水を治めるのと同じで、人を養うのは六畜を養うのと同じで、人を使うのは草木を使うのと同じことである。」5、「有水旱之功，故能攻国救邑。」<sup>②</sup>意味は「水旱のような破壊の効果があつて、国を攻めることができ、城を救うことができる。」6、「水旱之功者，野不收，耕不獲也。」<sup>③</sup>意味は「水旱のような破壊効果は、敵の土地が収穫されず、耕作ができなくなることである。」

「幼官」篇に一箇所ある。「行秋政，水。」<sup>④</sup>意味は「秋の政令を実行して、洪水が起こる。」

「幼官図」篇に一箇所ある。「行秋政，水。」<sup>⑤</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。

「五輔」篇に二箇所ある。1、「導水潦，利陂溝，決潘渚，潰泥滯，通郁閉，慎津梁，此謂遺之以利。」<sup>⑥</sup>意味は「水を浚ったり、溝を作ったり、浅瀬を掘り返したり、土砂の淀みを取り除いたり、水路の詰まりをなくしたり、渡し場に注意を払ったりすることは、人々の便宜を図るということである。」2、「故曰：天時不祥，則有水旱。」<sup>⑦</sup>意味は「だから、天の時が不吉であれば、水旱がある。」

「八觀」篇に三箇所ある。1、「其耕之不深，芸之不謹，地宜不任，草田多穢，耕者不必肥，荒者不必墾，以人猥計其野，草田多而辟田少者，虽不水旱，飢国之野也。」<sup>⑧</sup>意味は「耕地は深くなくて、草をくわするのはまめではなくて、宜種の土地は種がなくて、まだ開いていない土地はとても荒れていて、すでに耕した土地は必ずしも肥沃でなくて、荒れ果てた土

---

① 『管子校注』（上）卷二「七法」一一一頁。

② 『管子校注』（上）卷二「七法」一二〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷二「七法」一二〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一五二頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八三頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九四頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九九頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二五八頁。

地は必ずしもやせていなくて、人口にして土地は荒地が多く熟地が少なく、旱魃や天災がなくても、これは飢国の畑ことである。」2、「以此遇水旱，則衆散而不收。」<sup>①</sup>意味は「また水害に遭えば、住民は離散して帰って来ません。」3、「食谷水，巷鑿井，場容接，樹木茂，宮牆毀壞，門戸不閉，外内交通，則男女之別毋自正矣。」<sup>②</sup>意味は「同じ谷の水を食べて、同じ路地に井戸を掘って、庭と野菜畑はつながっていて、樹木は茂っていて、庭の塀は破損して、門戸は閉じないで、内外は自由に往来して、男と女の限界が、きちんと定まっていないことである。」

「法法」篇に一箇所ある。「蹈白刃，受矢石，入水火，以听上令。」<sup>③</sup>意味は「人々は白刃を踏み、矢石を受け、火水の中に飛び込んで君令を執行することができる。」

「兵法」篇に二箇所ある。1、「三曰挙龍章，則行水。」<sup>④</sup>意味は「第三は龍の章をあげて、水中行軍ことである。」2、「曆水谷，不須舟楫。」<sup>⑤</sup>意味は「溝を通して、船を使わないことである。」

「小匡」篇に二箇所ある。1、「済汝水，逾方地，望文山，使貢絲于周室，成周反胙于隆岳，荊州諸侯，莫不来服。」<sup>⑥</sup>意味は「汝水を渡り、方城を越え、文山に走った、楚に絹を周室に献上するよう命じする。周天子が斉桓公に祭肉を送ってくれたので、荊州の諸侯が帰服しない者はない。」2、「是故天下之于桓公，遠国之民望如父母，近国之民従如流水。」<sup>⑦</sup>意味は「ゆえに天下は桓公を、遠国の民は父母の如く、近国の民は水の如く求める。」

「霸形」篇に十箇所ある。1、「寡人之有仲父也，犹飛鴻巢之有羽翼也，若済大水有舟楫也。」<sup>⑧</sup>意味は「飛鴻に翼があるように、川を渡るに船があるように、私には仲父がいる。」

---

① 『管子校注』（上）巻五「八観」二五八頁。

② 『管子校注』（上）巻五「八観」二六六頁。

③ 『管子校注』（上）巻六「法法」三〇三頁。

④ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三二〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三二三頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻八「小匡」四二四頁。

⑦ 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四〇頁。

⑧ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四五二頁。

2、「行此数年，而民帰之如流水。」<sup>①</sup>意味は「このように実行して何年か経つと、人民の帰依は水の流れのようである。」3、「要宋田夹塞两川，使水不得東流，東山之西，水深滅垝，四百里而後可田也。」<sup>②</sup>意味は「楚国はまた宋国の田をせきとめ、二本の水を両側からせきとめて、東に流れないようにしました。その結果、東山の西の方は、水深が壁もなく、四百里を越えてはじめて耕作が可能になりました。」4、「言与楚王遇，至于遇上，而以鄭城与宋水為請。」<sup>③</sup>意味は「私は楚王に会って、会ったところで、鄭城と宋水の問題を提起する。」5、「因以鄭城与宋水為請于楚。」<sup>④</sup>意味は「同時に鄭城と宋水の問題を出して、楚国に尋ねる。」6、「東発宋田，夹两川，使水復東流，而楚不敢塞也。」<sup>⑤</sup>意味は「東は宋国の田を開き、両側から二つの川を処理して、水を東に流しましたが、楚もあえて塞ぐことはなくなった。」7、「遂南伐，及逾方城，濟于汝水，望汶山。」<sup>⑥</sup>意味は「そこで楚を南に伐り、方城を越え、汝水を渡り、汶山に走ったのである。」

「戒」篇に二箇所ある。1、「虽鴻鵠之有翼，濟大水之有舟楫也，其将若君何？」<sup>⑦</sup>意味は「鴻鵠には双翼があり、河を渡るには舟楫がありますが、王に何の役にも立たないである。」2、「如此，而近有徳而遠有色，則四封之内，視君其犹父母邪，四方之外，帰君其犹流水乎。」<sup>⑧</sup>意味は「このようにして、更に徳のある人に近付いて、女色を遠ざけて、それでは、四境の内で、君主に対して親のようで、四境の外は、君主に帰依するのは水のようなものである。」

「地図」篇に一箇所ある。「濫車之水名山通谷経川陵陸丘阜之所在，苴草林木蒲葦之所茂

① 『管子校注』（上）巻九「霸形」四五四頁。

② 『管子校注』（上）巻九「霸形」四五九頁。

③ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四六〇頁。

④ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四六〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四六〇頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四六〇頁。

⑦ 『管子校注』（中）巻十「戒」五一三頁。

⑧ 『管子校注』（中）巻十「戒」五一四頁。

道里之遠近，城郭之大小，名邑廢邑困殖之地必尽知之。」<sup>①</sup>意味は「車をおおう大水、名山、大谷、大川、高原、丘陵のありか、枯草、林、葦の茂った所、道の遠近、城郭の大きさ、名城、廢邑、瘦せた所、耕作可能な田など、すべてを知らねばならない。」

「君臣下」篇に一箇所ある。「夫水，波而上，尽其揺而復下，其勢固然者也。」<sup>②</sup>意味は「それは波が湧いてきて、上からまた落ちてくるような、当然の成り行きである。」

「侈靡」篇に六箇所ある。1、「玉者陰之陰也，故勝水。」<sup>③</sup>意味は「玉は陽の中の陰ですから、水に勝るのである。」2、「蕩蕩若流水，使人思之。」<sup>④</sup>意味は「水のように平易で、人を懐かしくさせる。」3、「甚富不可使，甚貧不知耻，水平而不流，無源則遯竭，云平而雨不甚，無委云，雨則遯已。」<sup>⑤</sup>意味は「人は富がありすぎて使いにくく、貧しすぎると恥を知らず、水平であれば流れず、泉がなく、水はすぐ涸れ、雲が平らであれば大雨がなく、とろりとした雲がなければ、雨はすぐやむ。」4、「今使衣皮而冠角食野草，飲野水，庸能用之？傷心者不可以致功。」<sup>⑥</sup>意味は「獣の皮をまとい、牛の角をかぶり、草を食べ、野の水を飲ませただけで、どうして彼らを使うことができる。」5、「水，鼎之汨也，人聚之。」<sup>⑦</sup>意味は「水の流れている場所には、人々が集まって住んでいる。」6、「水之變氣，応之以精。受之以豫。」<sup>⑧</sup>意味は「水の災変の気を発見して、誠意をもって対処して備える必要がある。」

「白心」篇に二箇所ある。1、「故苞物衆者莫大于天地，化物多者莫多于日月，民之所急，莫急于水火。」<sup>⑨</sup>意味は「だから、包蔵物類の広範なものは、天地より莫大であり、化育物

---

① 『管子校注』（中）卷十「地圀」五二九頁。

② 『管子校注』（中）卷十一「君臣下」五七一頁。

③ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六三四頁。

④ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六三七頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十三「侈靡」六三八頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六五二頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七二一頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七四二頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十三「白心」七八九頁。

類の多くのものは、日月より多くなくて、人民の生活が急に必要なものは、水火を急ぐなのである。」2、「故曰：済于舟者和于水矣，義于人者祥其神矣。」<sup>①</sup>意味は「所以に、船を渡れるものは、おのずから水になじんで、人に義をなすものは、おのずから鬼神に福をなすものである。」

「水地」篇に二十九箇所ある。1、「水者，地之血氣，如筋脉之通流者也。故曰水具材也。」

<sup>②</sup>意味は「水、則ち地の血気で、それは人身の筋脈のようで、大地の中で流通している。だから、水はすべてを備えているのである。」2、「夫水淖弱以清，而好洒人之惡，仁也。」

<sup>③</sup>意味は「水は柔弱にして潔白で、人の惡を洗うことに長たけて、これはその仁である。」

3、「卑也者，道之室，王者之器也，而水以為都居。」<sup>④</sup>意味は「謙虚さは「道」の所で、帝王の氣品で、水は「卑」をもって積の所とする。」4、「是以水者，万物之準也，諸生之

淡也，違非得失之質也，是以無不滿，無不居也。」<sup>⑤</sup>意味は「さて、水は万物の「根拠」、すべての生命の「中心」、すべての損得の基礎である。だから、水に充たされてはいけない

ものはないし、止まってはいけない場所もない。」5、「集于天地，而藏于万物，産于金石，

集于諸生，故曰水神。」<sup>⑥</sup>意味は「それは天と地に集まり、万物の内部に包み込み、金石の中間に生じ、またすべての生命の中に集まる。だから、水は神に比する。」6、「万物莫不

尽其幾，反其常者，水之内度適也。」<sup>⑦</sup>意味は「万物が十分に生氣を発達させ、本来の姿に戻らないのは、その内部に含まれる水の量が相当なものだからである。」7、「人，水也。

男女精氣合而水流形。」<sup>⑧</sup>意味は「人間も、水からできている。男女の精氣が合って、「水」

によって人の形になっている。」8、「是以水集于玉，而九德出焉。」<sup>⑨</sup>意味は「だから、水

---

① 『管子校注』（中）卷十三「白心」八〇二頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一三頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一三頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一四頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一四頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一五頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一五頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一五頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一六頁。

が玉の中に集まると玉の九つの品性が生まれている。」9、「亀生于水，発之于火，于是為万物先，為禍福正。龍生于水，被五色而游，故神。」<sup>①</sup>意味は「亀は水の中に生まれて、占いの時に亀の甲を火で灼くと、万物の預言者となり、禍福の徴驗となる。龍は水に生まれ、五色をまとして泳ぐことができるので、神となる。」10、「故涸沢数百年，谷之不徙，水之不絶者生慶忌。」<sup>②</sup>意味は「だから、数百年涸れた沢で、谷が移らず、水が絶えなかった所には、慶忌が生じする。」11、「此涸川水之精也。」<sup>③</sup>意味は「涸川の水精の一種である。」12、「是以水之精，粗癢蹇，能存而不能亡者，生人与玉。」<sup>④</sup>意味は「だから、水の精、粗は凝集して、存在することしかできなくて隠滅することができなくて、人と玉が発生したのである。」13、「是故具者何也？水是也。万物莫不以生，唯知其托者能為之正。具者，水是也。故曰：水者何也？万物之本原也，諸生之宗室也，美惡賢不肖愚俊之所産也。何以知其然也？夫齊之水道躁而復，故其民貪粗而好勇。楚之水淖弱而清，故其民輕果而賊。越之水濁重而泊，故其民愚疾而垢。秦之水汔取而稽，淤滯而雜，故其民貪戾，罔而好事齊。晋之水枯旱而運，淤滯而雜，故其民諂諛葆詐，巧佞而好利。燕之水萃下而弱，沈滯而雜，故其民愚戇而好貞，輕疾而易死。宋之水輕勁而清，故其民閑易而好正。是以聖人之化世也，其解在水。故水一則人心正，水清則民心易。一則欲不汚，民心易則行無邪。是以聖人之治于世也，不人告也，不戸説也，其枢在水。」<sup>⑤</sup>意味は「では、すべてを備えているとは何でしょうか。水はすべてを備えている。万物が水に頼らずに生きているものはないということは、万物の真の拠り所を知れば証明できることである。すべてを備えているのは、水である。水とは何でしょうか。水は万物の根源で、すべての生命の根のところで、美と醜、賢と不肖、愚昧と才能拔群はすべてそれから生じする。どうやって水がこのようなものだとするのでしょうか。齊国の水は激しいので、齊国の人は貪欲で、粗暴で、勇を好む。楚国の水は柔弱で、潔白でし

---

① 『管子校注』（中）卷十四「水地」八二七頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「水地」八二七頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八二八頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八二八頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八三一頁。

たから、楚国の人は軽捷で、果敢で、敢然と行動する。越国の水は濁って重く、土を侵食するので、越国の人は愚かで、嫉妬で、穢れている。秦国の水は濃く集まって、停滞して、淀んで混じるので、秦国の人は食欲で、凶暴で、狡猾でよく殺伐する。晋国の水は渋いで、濁り、淀んで混じるので、晋国の人は媚びて偽詐し、佞人にして財を好む。燕国の水は深く集まって、柔弱で、沈滞して混交するので、燕国の人は愚愚で堅貞で、軽く急いでも死を恐れない。宋国の水は軽くて強くて清明なので、宋国の人は純朴で平易で公正なことを好む。だから聖人は世俗を改造して、状況を理解して水を見る。水が清ければ人の心は正しく、水が清ければ人の心は平易である。人の心が正しければ汚れた欲望がなく、人の心が平易であれば邪悪な行ないがない。だから聖人の治世は、一人一人を戒めることなく、一戸一戸を戒めることなく、要は水の性質を握っている。」

「四時」篇に四箇所ある。1、「宗正陽，治堤防，耕芸樹芸，正津梁，修溝洫，甃屋行水，解怨赦罪，通四方。」<sup>①</sup>意味は「正陽を宗主とし、堤坊を修め、樹芸を耕し、橋を整備し、溝を整備し、煉瓦で屋根を修めて水を行い、怨みを解き、罪人を赦し、四方に通じる。」2、「夏行春政則風，行秋政則水，行冬政則落。」<sup>②</sup>意味は「もし夏に春の政令を実行するならば、則ち大風が起きて、秋の政令を施行して、則ち水が多く、冬の政令を施行すれば草木が散るのである。」3、「秋行春政則栄，行夏政則水，行冬政則耗。」<sup>③</sup>意味は「秋に春の政令を施行すれば草木はかえって栄え、夏の政令を施行すれば水が多くなり、冬の政令を施行すれば国に傷がある。」4、「寒生水与血，其德淳越，温怒周密。」<sup>④</sup>意味は「寒さは水と血を生じて、その徳性は淳厚清揚で、許して周到である。」

「五行」篇に四箇所ある。1、「修槩水，上以待乎天董。」<sup>⑤</sup>意味は「水土を整えて、凶

---

① 『管子校注』 (中) 卷十四「四時」八四二頁。

② 『管子校注』 (中) 卷十四「四時」八四七頁。

③ 『管子校注』 (中) 卷十四「四時」八五一頁。

④ 『管子校注』 (中) 卷十四「四時」八五四頁。

⑤ 『管子校注』 (中) 卷十四「五行」八五九頁。



年の飢饉に備えねばならない。」2、「睹壬子，水行御。」<sup>①</sup>意味は「壬子に出会った日から、水の徳に応じて事を治める。」3、「睹壬子，水行御。天子決塞動大水，王後夫人薨。」<sup>②</sup>意味は「壬子に出会った日から、水の徳に応じて事を治める。天子が大河を開こうが塞ごうが、大きな治水工事を行えば、王後夫人は薨ずる。」

「勢」篇に一箇所ある。「戦而惧水，此謂澹滅。」<sup>③</sup>意味は「戦いのために川を渡るのを怖れるのは、度胸がないということである。」

「小問」篇に三箇所ある。1、「袪衣，示前有水也。」<sup>④</sup>意味は「衣を掛けることは、前に水があることを示す。」2、「至卑耳之溪，有賛水者。」<sup>⑤</sup>意味は「卑耳溪に着くと、水を渡らせるガイドがある。」3、「浩浩者水，育育者魚。」<sup>⑥</sup>意味は「浩然な水に、魚が泳いでいる。」

「七臣七主」篇に三箇所ある。1、「夏無遏水，達名川，塞大谷，動土功，射鳥獸。」<sup>⑦</sup>意味は「夏は川の水が大川に入るのを止めてはいけません、大きな谷を埋めてはいけません、土木工事を興してはいけません、鳥獸を射てはいけない。」2、「四者俱犯，則陰陽不和，風雨不時，大水漂州流邑，大風漂屋折樹，火暴焚地焦草，天冬雷，地冬震。」<sup>⑧</sup>意味は「四者はすべて違反して、それでは陰陽は不和で、風雨は不順で、大水は州邑を浸して、大風は家を吹き木を折って、大火は地を燃やして草を焦がして、空では冬に雷が鳴り、地では冬に震動する。」3、「推則往，召則来，如墜重于高，如流水于地。」<sup>⑨</sup>意味は「これを推せば去る、これを招けば来る、これは高い所に重い物を投げるようなもので、また地に水路を開いて水を引くようなものである。」

---

① 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七八頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「五行」八八〇頁。

③ 『管子校注』（中）卷十五「勢」八八二頁。

④ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九七二頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九七二頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九七五頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九九頁。

「禁藏」篇に四箇所ある。1、「漁人之入海，海深万仞，就彼逆流，乘危百里，宿夜不出者，利在水也。」<sup>①</sup>意味は「漁民が海に入って、海は深くて万仞、そこに逆流して冒険して、百里を航行して、昼夜出てこないのは、利が水中にあるからである。」2、「当春三月，萩室煖造，鑽燧易火，杼井易水，所以去兹毒也。」<sup>②</sup>意味は「春三月には竈の火を焚いて、焚き火の木を替えたり、井戸を研いで水を替えたりして、毒気を消し去る。」3、「故審利害之所在，民之去就，如火之于燥湿，水之于高下。」<sup>③</sup>意味は「利害の在りかがわかれば、火が湿らなければ乾き、水が高ければ低くなるように、民の行く方向がわかる。」4、「夫民之所主，衣与食也。食之所生，水与土也。」<sup>④</sup>意味は「人民が生活するのは、衣食を除いてはない。食料は水と土を抜きにして生産される。」

「度地」篇に四十八箇所ある。1、「故聖人之处国者，必于不傾之地。而挹地形之肥饒者，郷山，左右經水若沢，内為落渠之写，因大川而注焉。」<sup>⑤</sup>意味は「聖人が都を建設するのは、必ず平穏で確実な場所で、しかも肥沃な土地で、山に寄りかかって、左右に川や湖があつて、城内には溝が整備され排水されていて、どこからでも大河に流れている。」2、「桓公曰：

「願聞五害之説。」管仲対曰：「水一害也，旱一害也，風霧雹霜一害也，厉一害也，虫一害也，此謂五害。五害之属，水最為大。五害已除，人乃可治。」桓公曰：「願聞水害。」管仲対曰：「水有大小，又有遠近。水之出于山而流入于海者，命曰經水。水別于他水，入于大水及海者，命曰枝水。山之溝，一有水，一毋水者，命曰谷水。水之出于他水溝，流于大水及海者，命曰川水。出地而不流者，命曰淵水。此五水者，因其利而往之可也，因而扼之可也。而不久常，有危殆矣。」桓公曰：「水可扼而使東西南北及高乎？」管仲対曰：「可。夫水之性，以高走下則疾，至于漂石。而下向高，即留而不行，故高其上領瓴之，尺有十分之三，里滿四

---

① 『管子校注』（中）卷十七「禁藏」一〇一五頁。

② 『管子校注』（中）卷十七「禁藏」一〇一七頁。

③ 『管子校注』（中）卷十七「禁藏」一〇二五頁。

④ 『管子校注』（中）卷十七「禁藏」一〇二五頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五一頁。

十九者、水可走也。乃迂其道而遠之、以勢行之。水之性、行至曲必留退、滿則後推前。地下則平、行地高即控、杜曲則擣毀、杜曲激則躍、躍則倚、倚則環、環則中、中則涵、涵則塞、塞則移、移則控、空則水妄行、水妄行則傷人、傷人則困、困則輕法、輕法則難治、難治則不孝、不孝則不臣矣。故五害之属、傷殺之類、禍福同矣。知備此五者、人君天地矣。」<sup>①</sup>意味は「桓公曰く、「五害の内容をお聞きたいのである。」管仲答え、「水が一害、旱が一害、風霧雹が一害、疫病が一害、虫が一害である。これを五害という。五害のうち、水害が一番大きいである。五害を取り除けば、人民はよく治めることができる。」桓公曰く、「まず水害の話を聞きる。」管仲答え、「水には大きさもあり、近さもある。山から源を発して、海に流れ込むのを経水という。他の川からわかれて、大きな川や海に流れ込むのを枝水という。山や谷にあたり、なかつたりするのを谷水という。地下から源を発して、大きな川や海に流れ込むのを川水という。地下から湧き出て、外に出ないものを淵水という。五つの水は、その流れに沿って誘導することができ、制御することもできる。しかし、しばらくすると災害が起こる。」桓公曰く、「水、それに流れて東西南北に制御することができて、更に高い所に流れますか?」管仲答え、「それはできる。水の性質上、高い所から流れて行くのが早いので、石を押し流している。下から上に行くとは止まってる。だから、上流の水位を高くして、瓦器で誘導して、瓦器を一尺に十分の三ずつ傾けて、水は四十九里を急行することができる。そして水を迂回してより遠くまで流れ、その流れに応じて高いところまで流れていくのである。水の性質上、曲がりくねったところまで行くと、止まって後退し、いっぱいになると、後ろから押して進む。地が低ければ平穩に進み、地が高ければ激動が起こり、地勢が曲がれば土地が押し流される。地勢があまりにも曲折するならば、水流は跳ねることができて、跳ねるなら偏流、偏流ならねじれて、ねじれたら集中して、集中すれば砂泥沈殿して、砂泥沈殿すれば水道は淀んで、水道は淀んで河川は道を変えて、河川は道を変えると水流は激動して、水流は激動すれば河水は暴行して、暴行すれば人を乱すことができて、人は法度

---

<sup>①</sup> 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五四頁。

を乱すと治めにくいである。管理が難しいと行為が善くなく、行為が善くないと統治に従わなくなる。だから、五害は、その禍いは人を殺して人を傷つけるのと同じである。五害に備えることができれば、人は天地を支配することができる。」」3、「請除五害之説，以水為始。請為置水官，令習水者為吏大夫、大夫佐各一人，率部校長官佐各財足，乃取水左右各一人，使為都匠水工，令之行水道。」<sup>①</sup>意味は「五害を取り除くには、水災を優先する。水官を置いて、治水に詳しい者を任し、大夫と大夫佐を一人ずつ任命して、校長、官佐、諸徒隸を統率してもらう。そして、水官の部下の左右一人ずつをえらび、水工の頭として、水路の巡視をさせる。」4、「都以臨下，視有餘不足之處，輒下水官。水官亦以甲士當被兵之數。與三老里有司伍長行里，因父母案行閱具備水之器。」<sup>②</sup>意味は「都水官はこれに従って視察し、人数が余ったり足りなかったりしたら、下級の水官に知らせる。下級の水官でも、選ばれた甲士を徴兵の人数とし、三老、里有司、伍長などと一緒に具体的に調査し、被徴兵者の親に話を聞き、治水の道具を調べる。」5、「後常令水官吏與都匠，因三老里有司伍長案行之。」<sup>③</sup>意味は「これからは常に治水官や工匠頭に命じて、三老、里有司、伍長などの技規で検査する。」6、「常以冬少事之時，令甲士以更次益薪，積之水旁，州大夫將之，唯母後時。」<sup>④</sup>意味は「よく冬の暇な時に、甲士が交替で薪を集めて、水のそばに積んで、州大夫がそれを率いて、手遅れにならないようにする。」7、「水常可制，而使毋敗。」<sup>⑤</sup>意味は「水は常に制御されていて、害がないようにできる。」8、「春三月，天地乾燥，水糾列之時也。」<sup>⑥</sup>意味は「春の3月、天氣が乾燥して、水が少なくて流れが細い時期である。」9、「土乃益剛，令甲士作堤大水之旁，大其下，小其上，隨水而行。地有不生草者，必為之囊。大者為之堤，小者為之防，夾水四道，禾稼不傷。歲埤增之，樹以荆棘，以固其地，雜之以柏

---

① 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。

② 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。

③ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。

④ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六二頁。

楊，以備決水。」<sup>①</sup>意味は「土はますます堅固になるので、甲士を派遣して川の辺に堤を築き、堤の基礎は広く、上は狭くして、長い堤を川沿いに走らせることができる。近くの不毛の地では、ダムを掘らねばならない。大きいダムは堤を作って、小さいダムは防を作って、堤防をダムの周りを取り囲んで、作物を傷つけることを防止する。堤防は年ごとに補修し、堤にはいばらの灌木を植えて、堤の土をかためる。ヒノキやヤナギなどの大木を植えて、洪水を防ぐ。」10、「当秋三月，山川百泉踊，降雨下，山水出，海路距，雨露属，天地湊沓，利以疾作收斂毋留。」<sup>②</sup>意味は「秋の三月には、山川百泉の水が湧き出て、大雨が降って、山津波が発生して、海路に入って遠く水難が漏れて、秋雨が続いて、天地は凝合状態を呈する。この時は、出来秋を急いで、穀物を倉に帰すべきである。」11、「常令水官之吏，冬時行堤防，可治者，章而上之都，都以春少事作之。」<sup>③</sup>意味は「常に治水官を冬の間に堤防を視察させ、修治が必要なことがあれば都水官に報告する。都水官が堤をつくるのは、春の用事の少ない時期である。」12、「以徒隶給大雨，堤防可衣者衣之，冲水可据者据之。」<sup>④</sup>意味は「大雨の中で、堤防をカバーする必要がタイムリーにカバーしする。大水の時、堤防を塞ぐ必要があれば力を合わせて塞ぐする。」13、「所以然者，独水蒙壤自塞而行者，江河之謂也。歳高其堤，所以不没也。春冬取土于中，秋夏取土于外。濁水入之，不能為敗。」<sup>⑤</sup>意味は「それは、水が常に泥をはらんで、それ自体が流れを塞いでいるからである。江も河もそうである。堤防を年中高くして、水没しないようにしている。春冬は河内で土を取って高くし、秋夏は川の外で土を取って高くすれば、濁水が来ても壊れない。」

「地員」篇に十箇所ある。1、「見是土也，命之曰五施，五七三十五尺而至于泉，呼音中角，其水倉，其民強。」<sup>⑥</sup>意味は「この土を見て、これを五施の土と称し、すなわち土の深

---

① 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

② 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

③ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六八頁。

④ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六八頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六九頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七二頁。

さ三十五尺で地下泉に接する。呼音は「角」声に相当する。ここの水は青くて、住民は強いである。」2、「見是土也，命之曰四施，四七二十八尺而至于泉，呼音中商，其水白而甘，其民寿。」<sup>①</sup>意味は「この土を見て、これを四施の土と称し、すなわち土の深さ二十八尺で地下泉に接する。呼音は「商」の声に相当する。ここの水は白くて甘いである。人々は長生きする。」3、「見是土也，命之曰再施，二七十四尺而至于泉，呼音中羽，其泉咸，水流徙。」<sup>②</sup>意味は「この土を見て、これを両施の土と称し、すなわち土の深さ一四尺で地下泉に接する。呼音は「羽」声に相当する。ここの水は塩辛いので、流れ落ちやすいである。」4、「見是土也，命之曰一施，七尺而至于泉，呼音中徵，其水黑而苦。」<sup>③</sup>意味は「この土を見て、これを一施の土と称し、すなわち土の深さは七尺で地下泉に接する。呼音は「徵」声に相当する。ここの水は黒くて苦いである。」5、「其種大水腸，細水腸，触茎黄秀，以慈忍，水旱無不宜也。」<sup>④</sup>意味は「それは穀物を植えて、大水腸と細水腸の稲に適して、赤い茎と黄いので多産で、性は水と干魃に耐えて、所の種はすべて適する。」6、「其種大稷細稷，触茎黄秀，慈忍，水旱細粟如麻。」<sup>⑤</sup>意味は「それは穀物を植えて、大稷と細稷に適して、赤い茎と黄いので多産で、性は水と干魃に耐えて、粟は麻のように美しいである。」7、「沙土之次曰五埴。五埴之状，累然如仆累，不忍水旱。」<sup>⑥</sup>意味は「土砂の下に一等土壌は、五種埴土である。五種埴土の形質は、団粒積もってまるでカタツムリ、水や干ばつに弱いものである。」8、「五殖之次曰五穀。五穀之状，萎萎然，不忍水旱。」<sup>⑦</sup>意味は「五種の殖土の次の一等の土は、五種の穀土である。5種の穀土の形質は、非常に疎疎で、水や干ばつに

---

① 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七二頁。

② 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七三頁。

③ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七三頁。

④ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一一二四頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一一二八頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一一三四頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一一三九頁。

弱いものである。」

「弟子職」篇に一箇所ある。「凡拚之道，実水于盤，攘臂袂及时。」<sup>①</sup>意味は「掃除の仕方は、清水を盥に入れ、袖をひじまで捲る。」

「形勢解」篇に八箇所ある。1、「故淵涸而無水，則沈玉不至。」<sup>②</sup>意味は「だから、淵が枯れて水がないと、玉を投げて神を求めるものは来ない。」2、「蛟龍，水虫之神者也。乗于水則神立，失于水則神廢。人主，天下之有威者也，得民則威立，失民則威廢。蛟龍待得水而後立其神，人主待得民而後成其威。故曰：「蛟龍得水而神可立也。」」<sup>③</sup>意味は「蛟龍は、水虫の神である。水があれば神は立ち、水がなければ神は滅びる。君主は、天下に権威のある人である。人民に擁護されれば権威があり、人民を失えば権威がなくなる。蛟龍が水を得て初めて神が現れ、君主が人民に支持されて初めて権威が現れる。「蛟龍は水を得、そして神は立つことができる」と言う。」3、「民之従利也，如水之走下，于四方無沢也。」<sup>④</sup>意味は「人民が利を求めるのは、水が下に流れるように、東西南北を問わないからである。」4、「海不辞水，故能成其大。」<sup>⑤</sup>意味は「海は水を拒絶しないから、海になることができる。」

「乗馬数」篇に一箇所ある。「若歳凶旱水沴，民失本則，修宮室台榭，以前無狗、後無彘者為庸。」<sup>⑥</sup>意味は「大旱魃、大水などの凶年に百姓が農作業ができなくなると、宮室台榭を造ったり、豚や犬を飼うことができない貧しい者を雇って働いて暮らしている。」

「国蓄」篇に一箇所ある。「玉起于禺氏，金起于汝漢，珠起于赤野，東西南北距周七千八百里，水絶壤断，舟車不能通。」<sup>⑦</sup>意味は「玉は禺氏で、金は汝河漢水で、真珠は赤野で産出され、周の東西南北は七千八百里である。山水が隔絶されて、舟と車が通じ合うことがで

---

① 『管子校注』（下）卷十九「弟子職」一一五四頁。

② 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六七頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六九頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七五頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七八頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬数」一二三二頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七九頁。

きない。」

「山国軌」篇に一箇所ある。「有莞蒲之壤，有竹箭檀栢之壤，有汜下漸沢之壤，有水潦魚鼃之壤。」<sup>①</sup>意味は「蕒蒲の生えた沼地があり、竹矢の生えた檀栢山地があり、汚下湿潤の低地があり、魚鼃の生えた水塘地がある。」

「山權数」篇に二箇所ある。1、「湯七年旱，禹五年水，民之無(米亶)売子者。」<sup>②</sup>意味は「商湯の治世には旱魃が7年、夏禹の治世には水害が5年ある。人民は食べるものがなく、甚だしくは子供を売る者もいる。」2、「故王者歳守十分之参，三年与少半成歳。三十一年而藏十一年，与少半藏参之，一不足以傷民，而農夫敬事力作，故天毀地，凶旱水洸，民無入于溝壑乞請者也。此守時以待天權之道也。」<sup>③</sup>意味は「ゆえに成王業の君主は、毎年食糧の十分の三を貯え、三年余りで一年分の食糧を蓄えた。三十七年で十一年ちよつとの貯蓄になる。毎年3分の1の貯蓄は民生を害するほどではなく、農民が農業を重視し勤勉に努力することを促すことができる。天災が土地生産をき損しても、凶魃がおこっても、百姓は溝で死んだり、路上で物乞いをしたりすることはなくなった。これが天の時を掌握して天の權変に対応する方法である。」

「山至数」篇に六箇所ある。1、「彼重之相帰，如水之就下。」<sup>④</sup>意味は「食糧が高いところへ流れるのは、水が低いところへ流れるのと同じである。」2、「有山処之国，有汜下多水之国，有山地分之国，有水洸之国，有漏壤之国。」<sup>⑤</sup>意味は「山地があり、窪地で水が多い地域があり、山地平野が半々の地域があり、年中水があふれて害をなす地域があり、土壌が水分を失っている地域がある。」3、「汜下多水之国，常操国谷三分之一。」<sup>⑥</sup>意味は「窪地で水が多い地域ではまだ食糧の3分の1を備蓄することができる。」4、「水泉之所

---

① 『管子校注』(下) 卷二十二「山国軌」一二八二頁。

② 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇〇頁。

③ 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇〇頁。

④ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三三二頁。

⑤ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四八頁。

⑥ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四九頁。



傷、水洑之國、常操十分之二。」<sup>①</sup>意味は「水に傷つき、常時水があふれている地域ではまだ食糧の10分の2を備蓄することができる。」

「地数」篇に七箇所ある。1、「其出水者八千里、受水者八千里。」<sup>②</sup>意味は「山脈が八千里、川が八千里である。」2、「修教十年、而葛盧之山発而出水、金従之、蚩尤受而制之、以為劍鎧矛戟。是歳相兼者諸侯九。雍狐之山発而出水、金従之、蚩尤受而制之、以為雍狐之戟芮戈、是歳相兼者諸侯十二。」<sup>③</sup>意味は「しかし黄帝がこの禁令を行ったのはわずか十年目、葛盧山の鉄砲水の後、金属鉱石が露出し、蚩尤が劍、鎧、矛、戟を作り、この年に九つの諸侯国との併合戦争が発生する。雍狐山の山津波で露出した金属鉱石も蚩尤に乗っ取られて制圧され、有名な戟や戈を作り、この年に十二の諸侯国との併合戦争が起こる。」3、「夫水激而流渠、令疾而物重。」<sup>④</sup>意味は「水の流れが激しくなれば流れは急になり、徴収の号令が急なれば物価は上昇する。」4、「君伐菹薪、煮沛水為塩、正而積之三万鐘。」<sup>⑤</sup>意味は「君主が薪割り、塩を煮るように命じれば、それを徴集して三万鐘にもなる。」5、「君伐菹薪、煮沛水以籍于天下、然則天下不減矣。」<sup>⑥</sup>意味は「君主は柴を切って塩を煮て天下に収入を得ているのですから、天下は我々を弱めることはできない。」

「揆度」篇に四箇所ある。1、「共工之王、水処什之七、陸処什之三、乘天勢以隘制天下。」<sup>⑦</sup>意味は「共工の時代、天下には水が十分の七、陸が十分の三を占めていましたが、彼はこの自然の形勢を利用して天下を支配する。」2、「今谷重于吾国、輕于天下、則諸侯之自泄、如原水之就下。」<sup>⑧</sup>意味は「今、食糧は我が国では高く、他の諸侯国では安く、各国の食糧は水が下向きに流れるように我が国に流れ込んでいる。」3、「汝、漢水之右衢黄金、一策

---

① 『管子校注』（下）卷二十二「山至数」一三四九頁。

② 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三五二頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三五五頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六二頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六四頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「地数」一三六四頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三七一頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八一頁。

也。」<sup>①</sup>意味は「汝水、漢水の産出する金を使うのが、一つの方法である。」4、「珠起于赤野之末光，黄金起于汝、漢水之右衢，玉起于禺氏之辺山。」<sup>②</sup>意味は「真珠は赤野の末光から、黄金は汝水、漢水の右衢から、玉は禺氏の辺山から出る。」

「輕重甲」篇に六箇所ある。1、「飢者得食，寒者得衣，死者得葬，不資者得振，則天下之帰我者若流水。」<sup>③</sup>意味は「もし、飢える者には食物が、寒い者には衣服が、死者には埋葬が、貧しい者には救済が与えられるとすれば、天下の人は水が流れるように我々に帰着する。」2、「至湯而不然，夷競而積粟，飢者食之，寒者衣之，不資者振之，天下帰湯若流水。」<sup>④</sup>意味は「商湯はそうではない。野菜や食糧を集め、飢えている人には飯を食べさせ、凍えている人には衣を着せ、貧しい人には救済を与え、天下の人は水が流れるように商湯に帰着する。」3、「未能用金千，斉民之游水不避呉、越。桓公終北举事于孤竹、离枝，越人果至，隠曲蓄以水齐。管子有扶身之士五万人，以待戦于曲蓄，大敗越人。此之謂水豫。」<sup>⑤</sup>意味は「まだ千金を使っていないのに、斉人の水泳の技術は呉越の人に劣らないのである。桓公はついに孤竹と離枝を北伐し、越国の兵が到着して、堤を築いて溜水の曲処を塞いで斉国を水没させる。」4、「故申之以号令，抗之以徐疾也，民乎其帰我若流水。」<sup>⑥</sup>意味は「それを号令で明確にし、緩急をつけて手順を踏んでいけば、天下の人は水が流れるように我々に帰着する。」

「輕重乙」篇に四箇所ある。1、「草木以時生，器以時靡幣，沛水之塩以日消，終則有始，与天壤争，是謂立壤列也。」<sup>⑦</sup>意味は「草木はそのときに育ち、器物はそのときに滅び、海塩はそのときになくなる。終わったらまた始まって、天地の運働の変化と併行して止まらない、つまり「壤列」制度を作って、物価の騰落を永遠に利用する理論である。」2、「涇水

---

① 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八二頁。  
② 『管子校注』（下）卷二十三「揆度」一三八三頁。  
③ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一三九八頁。  
④ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四〇一頁。  
⑤ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四一七頁。  
⑥ 『管子校注』（下）卷二十三「輕重甲」一四三三頁。  
⑦ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四四頁。

十二空，汝淵洙浩滿三之于，乃請以令，使九月种麦，日至日獲，則時雨未下而利農事矣。」

①意味は「小水を地形に応じて加減すれば、汶、泗、洙、沿諸水の水量は三倍になる。そこで九月に麦を植え、翌年の夏至に刈り取るよう命じた。このようにして、時雨が降る前に、農事灌漑に有利になった。」3、「辟之以号令，引之以徐疾，施乎其帰我若流水。」②意味は「号令をかけておびき寄せ、需給の緩急を利用して吸収していくと、食糧はどんどん流れるようにわが国にやってきたのである。」4、「請以令，為諸侯之商賈立客舍，一乗者有食，三乗者有芻菽，五乗者有伍養，天下之商賈帰齊若流水。」③意味は「諸侯国の商人のために客舎を設け、四馬一車の商人は、ただで食事をすることにした。十二頭の馬と三台の車をもつ商人に加えて家畜を供える。二十頭の馬と荷馬車五台の商人には、五人の給仕がついていた。天下諸国の商人が水のように齊に集まる。」

「輕重丁」篇に九箇所ある。1、「故天子三日即位，天下之金四流而帰周若流水。」④意味は「周天子が朝にいてたった三日で、天下の黄金が四方八方から水のように集まってくるのである。」2、「齊西水潦而民飢，齊東丰庸而糶賤。」⑤意味は「斉国の西部では水害が発生して飢饉となり、斉国の東部では五穀が豊富で食糧価格が安いとされている。」3、「孟春且至，溝洫阮而不遂，溪谷報上之水不安于藏，内毀室屋，壊墻垣，外傷田野，残禾稼，故君謹守泉金之謝物，且為之舉。」⑥意味は「初春になると、溝が詰まり、溪谷の堤防が氾濫し、内では家や塀が壊れ、外では田畑や作物が傷つきます。だから、民が水利費のために売った物は、国が注意して買い取るべきである。」4、「請以令決瓊、洛之水，通之杭、庄之間。」⑦意味は「窪地にたまった水を浚渫して、二つの大通りの中間に流すように命じる。」

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五五頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四六八頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四七三頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四八三頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四八四頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四九五頁。

5、「決瓊、洛之水，通之杭、庄之間，則屠酤之汁肥流水，則蠹虻巨雄、翳燕小鳥皆歸之，宜昏飲。此水上之樂也。賈人蓄物，而売為讎，買為取，市未央畢，而委舍其守列，投蠹蛇巨雄。新冠五尺，請挾彈懷丸游水上，彈翳燕小鳥，被于暮。」<sup>①</sup>意味は「窪地にたまった水を浚渫して、二つの大通りの中間に流して、屠屋や酒屋の油水を水に流して、母鳥のような大きな鳥も、ツバメのような小鳥も、みなここに集まって、たそがれの酒を飲むのに適した、一種の水上の楽しみでした。商人は品物を持って、売るのは急いで手を引き、買うのは急いで手を引き、売買が終わらないのは早く終わらせて、露店を離れて、蚊母などの大きな鳥を捕まえに行く。大人になったばかりの若者たちも、先を争って、ぱちんこを持って、水の上を往来して、ツバメなどの小鳥を打って、夜が暮れる。」6、「故山地者山也，水地者沢也，薪芻之所生者斥也。」<sup>②</sup>意味は「斉国の山地は山であり、水地は水であり、柴草の生えた土地になっている。」

「輕重戊」篇に一箇所ある。「夏人之王，外鑿二十虬，鑿十七湛，疏三江，鑿五湖，道四涇之水，以商九州之高，以治九菽，民乃知城郭門閭室屋之築，而天下化之。」<sup>③</sup>意味は「夏代、二十条の河川を掘り、十七条の淤塞河道を浚渫し、三江を浚渫し、五湖を掘り、四涇の水を引いて、九州高地を測度し、九条の大沢を治める、人々に城郭、巷、家屋の建築を知らしめ、天下を帰化させる。」

「輕重己」篇に一箇所ある。「毋行大火，毋斬大山，毋塞大水，毋犯天之隆。」<sup>④</sup>意味は「大火を起こしてはいけない、山を掘ってはいけない、大水をふさいではいけない、天の尊嚴を犯してはいけない。」

『管子』全書に対して214処の水の字の分析を通して、水の主な意味が水であることが判明した。

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四九五頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重戊」一五〇七頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重己」一五三九頁。

## 第二節、水利思想

水は万物の源であり、水は人間の生産と生活と不可分である。<sup>①</sup>「故曰：水者何也？万物之本原也，諸生之宗室也。」（水とは何でしょうか。水は万物の根源で、すべての生命の根である。）（『水地』）「水者，地之氣血，如筋脉之通流者也。」（水、則ち地の血気で、それは人身の筋脈のようで、大地の中で流通している。）（『水地』）昔から、人間の生活や生産には水が欠かせなかった。「夫民之所生，衣与食也；食之所生，水与土也。」（人民が生活するのは、衣食を除いてはない。食料は水と土を抜きにして生産される。）（『禁藏』）食糧と衣服は人民の生存の必需品であり、農業生産には水と土地が欠かせない。したがって、水は農業生産に不可欠なものである。

水利事業は国の貧富と政治の危機に関係する。<sup>②</sup>『管子』は農業生産の需要から水を治め、水を利用することを重視している。旗印は鮮明に水利事業を興し、水害を取り除くことを国を治める根本大計と見なし、水利事業に対する特別な重視を表している。『度地篇』には、「故善為国者，必先除其五害。……水一害也，旱一害也，風霧雹霜一害也，厉一害也，虫一害也，此謂五害。五害之属，水最為大。五害已除，人乃可治。」（善く国を治める者は、まず五害を除かねばならない。水が一害、旱が一害、風霧雹が一害、疫病が一害、虫が一害である。これを五害という。五害のうち、水害が一番大きいである。五害を取り除けば、人民はよく治めることができる。）つまり、以上の五つの自然災害は、経済の発展と社会の安定に深刻な脅威となっており、これらの自然災害を取り除くための強力な対策を講じてこそ、天下の安定と庶民の安住が保障される。五害のうち、水害は最も深刻な自然災害である。五害を取り除くには、まず水害を治めることから始めなければならない。このため『立政篇』では、君主が解決を重視しなければならない五つの大事について、曰く「二曰溝洫不遂于隘，

---

① 「『管子』 可持續發展思想研究」 曹俊傑、『管子学刊』、2002 年第 4 期。

② 「浅析『管子』論水」 李宗新、李曉峰、『華北水利水電学院学報（社科版）』、2002 年 8 月第 18 卷第 3 期。

障水不安其藏，国之貧也，……溝洫遂于隘，鄣水安其藏，国之富也。」（第二は、溝の通りが悪くなって、堤防の水があふれて、国が貧しくなることである。すべての溝が通り、堤防の水があふれないようにすれば、国は豊かになる。）溝がよく通らず、貯水池に水が安全に貯まらなければ国は貧しくなり、そうでなければ国は豊かになるということだ。そこで国家は水利事業を担当する役人を設置する。「決水潦，通溝洫，修障防，安水藏，使時水虽過度，無害于五谷。歲虽凶旱，有所獲，司空之事也。」（たまった水を排水し、溝を浚渫し、堤防を整備して貯水池の安全を確保し、雨水が多すぎても五穀に害がないようにする。年景が旱魃の時、収穫がある。「司空」の役目である。）（『立政篇』）司空とは水利事業を担当する官吏のことで、彼の役割は水たまりを排水したり、溝を浚渫したり、堤防を建設したり、貯水池の安全を確保したりして、旱魃でも農業に支障がないようにすることであった。

### 第三節、水利事業の組織管理

『管子』は水利事業を興すことを論じる際、組織管理に関する問題を論じており、次の三つの面が含まれている。<sup>①</sup>第一に、治水担当の役人をまかせる。「請為置水官，令習水者为吏大夫、大夫佐各一人，率部校长官佐各財足，乃取水左右各一人，使为都匠水工，令之行水道。」（水官を置いて、治水に詳しい者を任し、大夫と大夫佐を一人ずつ任命して、校長、官佐、諸徒隸を統率してもらう。そして、水官の部下の左右一人ずつをえらび、水工の頭として、水路の巡視をさせる。）（『度地』）「水に慣れた者」を水官に任命する、すなわち治水の経験のある官吏を派遣して水利事業の仕事を取り仕切った。その官吏には、上層に大夫・大夫佐、中層に校長・官佐、さらに実務を担当する水官がいた。彼らは各水道、堤川、溝地など各所を巡視する。治水工事に着手すると決まれば、十分な人力と財力を与える。第二に、治水工事隊を編成する。「常以秋歳末之時，閱其民，案家人比地，定什伍口数，别男

---

<sup>①</sup> 「試論『管子』的治水思想」 靳懷春、『歴史与考証』、1999年第1期。

女大小。其不為用者輒免之，有錮病不可作者疾之，可省作者半事之。并行以定甲士，当被兵之數，上其都。都以臨下，視有余不足之處，輒下水官。水官亦以甲士当被兵之數，与三老、里有司、伍長行里，因父母案行閱具備水之器。」（秋が終わるたびに、住民の戸籍と土地を検査して、人口を確認して、男女老幼の人数をそれぞれ統計する。都水官はこれに従って視察し、人数が余ったり足りなかったりしたら、下級の水官に知らせる。下級の水官でも、選ばれた甲士を徴兵の人数とし、三老、里有司、伍長などと一緒に具体的に調査し、被徴兵者の親に話を聞き、治水の道具を調べる。）（『度地』）すなわち現地の百姓を徴集して治水の隊列をつくるのである。そのため、毎年秋以降、人戸統計を実施して、人口の数と土地の面積を確認し、老若男女別に人数を集計し、治水に参加できる実際の労働力を具体的に分析する。労働能力を喪失したり、長期にわたって病気にかかったりした場合は、労役を免除する。全労働をできないものについては、半労働で処理する。そして、この調査分析の結果に基づいて、具体的な人員と人数を確定し、上級主管部門に報告する。主務部署が査察を行い、人数に差があれば、水官を派遣し、現地の関係部署と、さらには被徴用者の両親との確認を行う。第三に、必要な治水道具や資材を用意する。「閱具備水之器，以冬無事之時。籠、甬、板、築，各什六，土車什一，雨傘什二。食器兩具，人有之，錮藏里中，以給喪器。」すなわち治水に必要な道具を用意し、冬の農閑期にそれを行い、それを各戸に配っていた。筐、鍬、板張り、ヨイトマケ、十軒ごとに六件ずつ用意する。土車は、10 軒が 1 台用意する。雨除けの屋台、10 軒が 2 台用意する。それから飲食用具は各自 2 セット持参し、まとめて保管し、紛失したら補充することができる。治水道具のほかに、必要な木材も農閑期に備えておく。「常以冬少事之時，令甲士以更次益薪，積之水旁。州大夫將之，唯毋後時。其積薪也，以事之已；其作土也，以事未起。」（よく冬の暇な時に、甲士が交替で薪を集めて、水のそばに積んで、州大夫がそれを率いて、手遅れにならないようにする。）（『度地』）すなわち州大夫が担当し、治水甲士を率いて交代で材木を伐り、水辺に積んで備え、事を誤るべからず。「常以毋事具器，有事用之，水常可制，而使毋敗。此謂素有備而預具者也。」（常に

水の災害がない時に用具を用意して、災害があった時に使用して、水は常に制御することができて、危害がないようにする。これは、日頃から準備をして未然に防ぐということである。) 水害が起きないうちに器具を用意しておき、水害が起きたときに使えるようにすることで、被害を受けずに水を治すことができる。『管子』では水利事業を興すことだけでなく、堤防の日常的な養護と管理を強調している。「常令水官之吏，冬時行堤防，可治者章而上之都。都以春少事作之。已作之後，常案行。堤有毀作，大雨，各葆其所，可治者趣治，以徒隶給大雨，堤防可衣者衣之。冲水，可据者据之。終歳以毋敗為效。」すなわち、水官を常時派遣して冬の間に各所の堤防を巡視させ、修治が必要な堤防を発見した場合には、速やかに上部主管部門に書面で報告すること。堤防の補修は春の農閑期に着工したもので、堤防が完成した後は、規則に従って常習的な養護を行う。堤防が壊れている場合は、大雨の時に分けて保護し、補修できるものは急いで補修し、カバーできるものはカバーし、水の衝撃を受けた場所は補強できるものは補強する。堤防は年中、壊れないように堅固にしなければならない。

#### 第四節、水利工事技術問題

水利事業を興すには組織管理の問題だけでなく、工事技術の問題もある。<sup>①</sup>後者については、『管子』に多くの論述がある。水利事業を興す工事の季節を選ぶことについて、『度地』は詳細な分析を行った。「春三月，天地乾燥，水糾列之時也。山川涸落，天氣下，地氣上，万物交通。故事已，新事未起，草木莢生可食。寒暑調，日夜分。分之後，夜日益短，昼日益長，利以作土功之事。……当夏三月，天地氣壯，大暑至，万物榮華，利以疾耨殺草蕨，使令不欲擾，命曰不長。不利作土功之事，放農焉。利皆耗十分之五，土功不成。当秋三月，山川百泉踊，降雨下，山水出，海路距，雨露属，天地湊沕，利以疾作収斂毋留。一日把，百日鋪，民毋男女，皆行于野，不利作土功之事。濡湿日生，土弱難成，利耗十分之六，土工之事亦不立。当冬三月，天地閉藏，暑雨止，大寒起，万物実熟，利以填塞空郤，繕辺城，塗郭術，平

---

① 「『管子』水論之解説」宣兆琦、『理論学刊』、2009年4月第4期。



度量，正權衡，虛牢獄，實廩倉。君修樂，与神明相望。凡一年之事畢矣。举有功，賞賢，罰有罪，遷有司之吏而第之。不利作土工之事，利耗十分之七，土剛不立。昼日益短，而夜日益長，利以作室，不利以作堂。」（春の3月、天氣が乾燥して、水が少なくて流れが細い時期である。山河が涸れて水が少なくなり、氣候が暖かくなり、寒さがなくなり、万物が活動を始める。旧年の農作業は終わり、新年の農作業はまだ始まっていませんが、草木の若芽は食べられるようになった。氣候の寒さと暑さが次第に調和し、昼と夜の長さも均分されるようになった。均分すると、夜は一日一日短くなり、昼は一日長くなる。この時は土工の仕事をするのに有利である。夏の三ヶ月間、自然界は変化が激しく、大暑が到来し、万物が繁茂する。農地の草取りをしっかりとやるべきで、政令は農作業の邪魔をしないようにすべきで、労役の徴発も時間が長すぎてはいけない。この時土工の工事をするのに不利で、それが農事を妨害するため、ただ半分の工費を費やして、土工も成果がありえない。秋の三月には、山川百泉の水が湧き出て、大雨が降って、山津波が発生して、海路に入って遠く水難が漏れて、秋雨が続いて、天地は凝合状態を呈する。この時は、出来秋を急いで、穀物を倉に帰すべきである。「一日刈り取って百日食べる」という。男も女も、畑仕事をする。この時土工の工事をするのに不利で、湿気の気が日生するため、土の質は軟らかくてなりにくいことである。工費の十分の六を費やすだけでは、仕事も成就しない。冬の三ヶ月の間に、天地は閉じ、暑さ雨は止み、寒すぎて、万物は実熟する。この時、家屋を補修し、辺防の砦を修繕し、城壁の道路を修理し、度量衡を正し、獄中の罪人を処分し、草食糧を蓄え、君主は娯楽と祭祀を行う。一年の事を全うした以上は、功績を賞し、賢を賞し、罪を罰し、官吏を昇進させる。この時不利は土工の工事をして、ただ10分の7の工費を費やして、土が凍ってできにくいである。昼は短くなり、夜は長くなりますから、室内で働くことは、外堂で働くこともできない。）明らかに『度地』は春になったら水利事業に着手せよと主張している。技術的には、この季節は「乾燥している」ために、土の水分量が適しており、「土乃益剛」すなわち新しくできた堤防を堅固にすることができる。この時は「山川涸れ」となり、川が渇水期にあるため、工事が容易になり、また河床や干潟の土を取って堤防を築ける。これは一方では河道

を浚渫する役割を果たすことができ、一方では堤の外の土源も節約できる。水利事業の興すと農業生産の関係から見ると、この季節は「故事已、新事未起」、農閑期にあつて、ちょうど水利事業を興し、堤防を築くよい季節である。またこの時期は寒暖が適度で、日がだんだん長くなるので工事にも有利である。もちろん陰陽五行の観点からも、この季節は「天気の下、地気の上、万物が交通する」ので、水利事業を興すのも陰陽の道に合うと考えられている。他の季節については、『度地』は、いずれも「不利作土工之事」としている。たとえば「夏三月」は、ちょうど農繁期だから、労役を徴集してはいけない、水利事業を興すことは農事の妨げになる。「秋三月」は、ちょうど秋の収穫がたいへん忙しい季節で、水利事業を興すことは秋の収穫に影響することができて、しかも秋の土の水分の含有量は多く、「濡湿日生、土弱難成」、同じく「不利作土工之事」でもある。「冬三月」「土剛不立」というのは、凍土が固くて突きにくいから、「不利作土工之事」ということでもある。見ることで、『度地』はすでに明確に異なる季節の土の異なる含水量およびその他の特徴に対して水利事業の質の方面の影響を認識する。どのように堤防を建設するかについて、『度地』は、「作堤大水之旁，大其下，小其上，随水而行。」（川の辺に堤を築き、堤の基礎は広く、上は狭くして、長い堤を川沿いに走らせることができる。）べきだと考えている。つまり、川岸に沿って水の流れに沿って堤防をつくるのであり、それも底は広く、上は狭い台形にする。これらの堤防の主な機能は、梅雨の時期に雨が多く降って川が氾濫するのを防ぐことである。堤防を建設して洪水を防ぐだけでなく、『度地』はまたダムを建設して水を貯めるべきだとも考えている。「地有不生草者，必為之囊。大者為之堤，小者為之防。夹水四周，禾稼不傷。歲埤增之，樹以荆棘，以固其地，雜之以柏楊，以備決水。民得其饒，是謂流膏。」（近くの不毛の地では、ダムを掘らねばならない。大きいダムは堤を作って、小さいダムは防を作って、堤防をダムの周りを取り囲んで、作物を傷つけることを防止する。堤防は年ごとに補修し、堤にはいばらの灌木を植えて、堤の土をかためる。ヒノキやヤナギなどの大木を植えて、洪水を防ぐ。）ここで言う「囊」は、今日の滞洪区の低地に似ていて、洪水に備えて

臨時に放水するのに使うか、あるいは放水と貯水の二重の機能を持つダムであると考えている。『度地』によれば、草も育たず農作物の栽培にも適しない塩害低地を囲ってダムを建設し、堤防を作り、しかも毎年補修を行い、堤防の上にイバラの灌木を植えて補強し、さらに柏や楊などの大木を植えて決壊に備える。このように洪水が来た時、貯水池は洪水を分けて貯水することができ、作物を保護させる。日照りの季節には、百姓はそこから水を引いて土地に水を注ぐことができるので、これを「流膏」と呼んだ。水利施設の養護について、『度地』に曰く「歳高其堤，所以不没也。春冬取土于中，秋夏取土于外，濁水入之不能為敗。」

（堤防を年中高くして、水没しないようにしている。春冬は河内で土を取って高くし、秋夏は川の外で土を取って高くすれば、濁水が来ても壊れない。）毎年堤防を高くしているのだが、洪水で泥が混じり、水路が淀んで水位が高くなる。春と冬は河道の土取ってで堤防を高くし、夏と秋は河道以外の土を取る。こうすれば、洪水が来ても堤防を水没させたり破壊したりすることはない。

見ることができて、『管子』は豊富な水利の科学技術の思想を持っている。水利事業は農業の命脈であり、水害の防除と水利事業を興すことは農業生産の正常な進行を保証し、農業の発展を促進する有力な措置である。<sup>①</sup>『管子』は洪水災害を社会経済の発展を制約する重要な要素とみなし、水利事業を興すことによって、農業基盤施設の建設を強化し、水害を防止することによって、社会経済の健全な発展を促進し、それによって、富国強兵を実現し、諸侯を制覇するという目的を達成する。

---

<sup>①</sup> 「『管子』的水害論与農田水利建設」王秀珠、李英森、『管子学刊』、1993年第4期。

## 第八章、『管子』の中の「地」に関する経済思想

### 第一節、『管子』の中の「地」字の分析

『管子』全書には、四〇篇の文章のうち、390カ所に「商」の字が登場する。次はその詳細を取り上げ、分析を行う。

「牧民」篇に七箇所ある。1、「凡有地牧民者，務在四時，守在倉廩。」<sup>①</sup>意味は「すべて一国の君主は、四時の農事に力を入れ、食糧の貯蔵を確保しなければならぬ。」2、「国多財則遠者来，地辟举則民留处。」<sup>②</sup>意味は「国の財力が豊かであれば、遠方の人々は移り住んでくることができ、荒地の開発がうまくいけば、自国の民は安心して留まることができる。」3、「不務天时则財不生，不务地利则倉廩不盈。」<sup>③</sup>意味は「天の時に注意しなければ富は育たず、地の利に注意しなければ食糧は足りない。」4、「錯国于不傾之地，積于不涸之倉，藏于不竭之府，下令于流水之原。」<sup>④</sup>意味は「国を強固な基盤の上に築く。食糧を無尽蔵に蓄えている。財貨を無尽蔵の府庫に貯蔵する。水の流れのもとに政令が下される。」5、「錯国于不傾之地者，授有德也。」<sup>⑤</sup>意味は「国を堅実な基礎の上に作るということは、道德的な人に政権を任せるということである。」6、「如地如天，何私何親？如月如日，唯君之節。」<sup>⑥</sup>意味は「天地のように万物に接して、どんな偏愛がない。日月がすべてを照らすようにしてこそ、君主の気品というものである。」7、「城郭溝渠不足以固守，兵甲彊力不足以应敵，博地多財不足以有衆。」<sup>⑦</sup>意味は「城郭や溝だけでは、守りきれるとはかぎらない。強大な武力と装備だけでは、敵を防ぐことはできない。土地が広く物が広いからとい

---

① 『管子校注』（上）卷一「牧民」二頁。

② 『管子校注』（上）卷一「牧民」二頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「牧民」三頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「牧民」一四頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷一「牧民」一四頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷一「牧民」一七頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷一「牧民」一七頁。

って、百姓は必ずしもそれを擁護するとは限らない。」

「形勢」篇に四箇所ある。1、「天不変其常，地不易其則，春秋冬夏不更其節，古今一也。」

①意味は「天はその常規を変えず、地はその法則を変えず、春秋冬夏その節令を変えず、昔も今も同じである。」2、「有無棄之言者，必参于天地也。」②意味は「以上の格言を捨てない者は天地に匹敵する。」3、「能予而無取者，天地之配也。」③意味は「人に報酬を求めず、恩恵だけを与えることができるなら、それは天と地の偉大さである。」4、「日月不明，天不易也。山高而不見，地不易也。」④意味は「月日は不明な時がありますが、天は変わらない。山が高くて見えないこともあります、地は変わらない。」

「權修」篇に十一箇所ある。1、「土地博大，野不可以無吏。」⑤意味は「領土は広大で、田畑には役人がいないわけにはいきない。」2、「地博而国貧者，野不辟也。」⑥意味は「土地が広くて国が貧しいのは、土地が開発されていないからである。」3、「地辟而国貧者，舟輿飾，台榭広也。」⑦意味は「土地が開いても国が貧しいのは、君主の船車が豪華すぎ、楼台亭閣が多すぎるからである。」4、「地之生財有時，民之用力有倦，而人君之欲無窮。」⑧意味は「土地は富を生産して、季節の制限を受ける。人民は労力を費やして、疲れる時がある。しかし、人君の欲望には限りがない。」5、「地之不辟者，非吾地也。」⑨意味は「土地があっても開発ないということは、自分の土地ではないということである。」6、「地之守在城，城之守在兵，兵之守在人，人之守在粟，故地不辟則城不固。」⑩意味は「国土の保障は城にあり、城の保障は軍隊にあり、軍隊の保障は人民にあり、人民の保障は食糧にある。」

---

① 『管子校注』 (上) 卷一「形勢」二一頁。

② 『管子校注』 (上) 卷一「形勢」三二頁。

③ 『管子校注』 (上) 卷一「形勢」三六頁。

④ 『管子校注』 (上) 卷一「形勢」四六頁。

⑤ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」四八頁。

⑥ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」四八頁。

⑦ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」四九頁。

⑧ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」五一頁。

⑨ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」五一頁。

⑩ 『管子校注』 (上) 卷一「權修」五二頁。

だから土地が開発ないと、城が固まらないことになる。」7、「故上不好本事則末産不禁，末産不禁則民緩于時事而輕地利，輕地利而求田野之辟，倉廩之實，不可得也。」<sup>①</sup>意味は「所以に、君主が農業を重視しなければ、贅沢品の商工業を禁止せず、贅沢品の商工業を禁止しなければ、人々は農事を遅らせて土地の利を軽んじる。地の利を軽んじる状況の下で、田畑を開発して、倉廩みちて充実することを望みとするのは、それはできない。」8、「有地不務本事，君国不能壹民，而求宗廟社稷之無危，不可得也。」<sup>②</sup>意味は「土地を持っていたても農業を重視せず、国を支配していても国民に号令をかけることができないのでは、国に危機が起こらないようにすることはできない。」

「立政」篇に五箇所ある。1、「四曰不好本事，不務地利而輕賦斂，不可与都邑。」<sup>③</sup>意味は「第四に、農業を重視せず、地の利を重視せず、安易に税を課す者を都邑の官にしてはならない。」2、「好本事，務地利，重賦斂，則民懷其産。」<sup>④</sup>意味は「農業を重視し、地の利を重視し、安易に課税しないからこそ、人民は自分の田畑を懐かしむことができる。」3、「三曰桑麻不植于野，五谷不宜其地，国之貧也。」<sup>⑤</sup>意味は「第三は田畑に桑や麻を植えないで、五穀を植えて土地の事情に応じなければ、国は貧乏になる。」4、「桑麻植于野，五谷宜其地，国之富也。」<sup>⑥</sup>意味は「田畑に桑や麻を植え、その土地の事情に応じて五穀を植えれば、国は豊かになる。」5、「相高下，視肥瘠，觀地宜，明詔期，前後農夫，以時均修焉，使五谷桑麻皆安其処，由田之事也。」<sup>⑦</sup>意味は「地勢の高低を観測し、地味の肥瘦を分析し、土地がどのような作物の生育に適しているかを究明する。農民が応召して服務する日を明確に定め、農民の生産、服務の前後に対して、時間どおりに全面的に手配し、五穀桑麻の栽培をさせ、それぞれにその適を得させる。それが「司田」の役割である。」

---

① 『管子校注』（上）卷一「権修」五二頁。

② 『管子校注』（上）卷一「権修」五三頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「立政」六二頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「立政」六二頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷一「立政」六四頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷一「立政」六四頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷一「立政」七三頁。

「乗馬」篇に二十六箇所ある。1、「因天材，就地利，故城郭不必中規矩，道路不必中準繩。」<sup>①</sup>意味は「天然資源に頼り、地勢の利に頼る。だから、城郭の構築、こだわって方円の規則に合う必要はありえない、道路の敷設も、平準繩にこだわる必要はありえない。」2、「地者，政之本也。」<sup>②</sup>意味は「土地は政治の根本である。」3、「諸侯之地，千乗之国者，器之制也。」<sup>③</sup>意味は「一つの諸侯国が兵車千台を持つ、軍備の制度である。」4、「地者，政之本也，是故地可以正政也。地不平均和調，則政不可正也。」<sup>④</sup>意味は「土地は政治の根本である。だから、土地は政事を調整することができる。土地が公平でなければ、政治活動は公正ではありえない。」5、「天地莫之能損益也。然則可以正政者，地也，故不可不正也。正地者，其实必正，長亦正，短亦正，小亦正，大亦正，長短大小尽正。」<sup>⑤</sup>意味は「天地は人の力でない時である。政治の調整に使えるのは、土地だけである。だから、土地の整備が不可欠なのである。土地を整備して、その実際に耕することができる数字は、必ず正さなければならない。長いものは核正、短いものは核正、大きいものは核正、小さいものは核正、長短大小いずれも核正が正確でなければならない。」6、「是知諸侯之地，千乗之国者，所以知地之小大也，所以知任之輕重也。」<sup>⑥</sup>意味は「ですから、一諸侯国が兵車千両を出せるという基準がわかれば、軍備の大きさも、負担の重さも割り出すことができる。」7、「地之不可食者，山之無木者，百而当一。」<sup>⑦</sup>意味は「五穀を生まない土地や樹木のない禿山では、百畝を一畝の可耕地となる。」8、「地之無草木者，百而当一。」<sup>⑧</sup>意味は「草木の生えない土地は、百畝を一畝の可耕地となる。」9「命之曰地均，以実数。」<sup>⑨</sup>意味は「これを可

---

① 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八三頁。

② 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八四頁。

③ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八四頁。

④ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八四頁。

⑤ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八五頁。

⑥ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八九頁。

⑦ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八九頁。

⑧ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八九頁。

⑨ 『管子校注』(上) 卷一「乗馬」八九頁。

耕面積の実数で土地を換算するという。」10、「方六里為一乘之地也。」<sup>①</sup>意味は「六里四方の土地から、一台の兵車が出る。」11、「方六里，一乘之地也。」<sup>②</sup>意味は「六里四方の土地から、一台の兵車が出る。」12、「一鎰之金，食百乘之一宿，則所市之地六灸一畝，命之曰中歲，有市、無市則民不乏矣。」<sup>③</sup>意味は「一鎰の黄金は、百乗の兵車で一泊分の費用であったといわれている。このように布地を徴収するところは、土地六歩に合わせて一斗の穀物を徴発する。これが中年輩の税率である。市場がなければならず、市場がなければ国民は不足する。」13、「道曰：均地分力，使民知時也。」<sup>④</sup>意味は「事理は我々に土地を分租に換算して、分戸経営を実行することを教えて、人民自身に農業の時間を急がせることができる。」14、「故不均之為惡也，地利不可竭，民力不可殫。」<sup>⑤</sup>意味は「土地を分配しないことの害は、地の利が十分に利用できず、人の力が十分に発揮できないことである。」15、「上地方八十里，万室之國一，千室之都四。中地方百里，万室之國一，千室之都四。下地方百二十里，万室之國一，千室之都四。以上地方八十里，与下地方百二十里，通于中地方百里。」<sup>⑥</sup>意味は「八十里四方の上等な土地で、一万戸の町を一つ、千戸の町を四つ負担できる。百里四方の中等な土地で、一万戸の町を一つ、千戸の町を四つ負担できる。百二十里四方の下等な土地では、一万戸の町を一つ、千戸の町を四つ負担できる。ですから、八十里四方の上等の土地も、百二十里四方の下等な土地も、百里四方の中等の土地に相当する。」

「七法」篇に七箇所ある。1、「則、象、法、化、決塞、心術、計数，根天地之氣，寒暑之和，水土之性。」<sup>⑦</sup>意味は「規律、形象、規範、教化、決塞、心術と計数、天地の神氣、寒暑の調和、水土の性質を探索している。」2、「輕民處、重民散則地不辟，地不辟則六畜

① 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

② 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九一頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」九二頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷一「乗馬」一〇四頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷二「七法」一〇六頁。



不育，六畜不育則国貧而用不足，国貧而用不足則兵弱而士不厉，兵弱而士不厉則戰不勝而守不固，戰不勝而守不固則国不安矣。」<sup>①</sup>意味は「盗賊が多く、営農者が離散した結果、土地が開発せず、土地が開発なければ六畜が育たず、六畜が育たず、国が貧しくて財が足らず、国が貧しくて財用が足らなければ兵が弱くて士気が上がらず、兵が弱くて士気が上がらなければ、戦に勝てず、守りきれず、国が安定しない。」3、「故賢知之君必立于勝地，故正天下而莫之敢御也。」<sup>②</sup>意味は「賢明な君主は、常に勝つ立場にあるので、天下を征服しても抵抗する人はいない。」4、「若夫曲制時举，不失天時，毋墮地利，其数多少，其要必出于計数。」<sup>③</sup>意味は「部隊の作戦の時機は、天の時を失わず、地の利を廃しないことである。軍事上の数字の多少は、主に計画に依拠しなければならない。」5、「是故張軍而不能戰，圍邑而不能攻，得地而不能実，三者見一焉，則可破毀也。」<sup>④</sup>意味は「したがって、陣を張っても戦さが定まらない、城邑を包囲しても攻囲が定まらない、土地を得ても立てこもることが定まらない、三つのうち一つは、滅ぶことになる。」6、「野不辟，地無吏，則無蓄積；官無常，下怨上，而器械不功；朝無政，則賞罰不明；賞罰不明，則民幸生。」<sup>⑤</sup>意味は「荒地は開発されていない、農業はまた専管の官吏がいない、それでは食糧を蓄えることができない。官府は常道がなくて、職人は上級に不平を言って、武器は使用しない。朝廷には政令がなく、賞罰がはっきりしないので、民衆は僥倖に生きる。」7、「故兵也者，審于地凶，謀十官，日量蓄積，齊勇士，遍知天下，審御機数，兵主之事也。」<sup>⑥</sup>意味は「故に、兵を使うには、地理的な状況をよく知り、天時を把握し、軍需の備蓄を計算し、勇士を指導し、天下の状況をよく把握し、戦機と運用の策略を真剣につかまなければならない。それが総帥の仕事である。」

---

① 『管子校注』（上）卷二「七法」一一一頁。

② 『管子校注』（上）卷二「七法」一一七頁。

③ 『管子校注』（上）卷二「七法」一一九頁。

④ 『管子校注』（上）卷二「七法」一一九頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷二「七法」一二〇頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷二「七法」一二〇頁。

「幼官」篇に五箇所ある。1、「一挙而上下得終，再挙而民無不従，三挙而地辟散成，四挙而農佚粟十，五挙而務輕金九，六挙而潔知事変，七挙而外内為用，八挙而勝行威立，九挙而帝事成形。」<sup>①</sup>意味は「このように、一年目の施政の結果、上も下も良い政治をした。翌年の施政の結果、人民は従わなかった。三年目の施政の結果、土地が開墾され、五穀が取れた。四年目の施政の結果、農民は安楽で食糧が豊かになった。五年目の施政の結果、賦役は軽減され国庫は潤沢になった。六年目の施政の結果、国事の変化を予言することができた。七年目の施政の結果、内外ともに自分のためにすることができた。八年目の施政の結果、勝利が実現し、国威が樹立された。九年目の施政の結果、帝業は一応の規模となった。」2、「十二地気発，戒春事。」<sup>②</sup>意味は「十二日過ぎると、地気が発散して、農作業が禁止される。」3、「至善之為兵也，非地是求也，罰人是君也。」<sup>③</sup>意味は「最高レベルの用兵は、他国の土地を占領するためでも、他国の民を支配するためでもありえない。」4、「会請命于天，地知気和，則生物従。」<sup>④</sup>意味は「天を祭って病を祓い、水土をよくすれば、すべての生物も服従することができる。」5、「著于取与之分，則得地而不執。」<sup>⑤</sup>意味は「取ることと与えることの節度がわかれば、敵地に深入りしても危うくならない。」

「幼官図」篇に五箇所ある。1、「一挙而上下得終，再挙而民無不従，三挙而地辟散成，四挙而農佚粟十，五挙而務輕金九，六挙而潔知事変，七挙而外内為用，八挙而勝行威立，九挙而帝事成形。」<sup>⑥</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。2、「十二，地気発，戒春事。」<sup>⑦</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。3、「至善之為兵也，非地是求也，罰人是君也。」<sup>⑧</sup>4、「会請命于天，地知気和，則生物従。」<sup>⑨</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。5、「著于取与之分，

① 『管子校注』（上）卷三「幼官」一三九頁。

② 『管子校注』（上）卷三「幼官」一四七頁。

③ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一七七頁。

④ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一七七頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「幼官」一七八頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八四頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八八頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八八頁。

⑨ 『管子校注』（上）卷三「幼官図」一八八頁。

則得地而不執。」<sup>①</sup>意味や用法は「幼官」篇と同じ。

「五輔」篇に五箇所ある。1、「是以小者兵挫而地削，大者身死而国亡。」<sup>②</sup>意味は「だから、小さくすれば兵が負けて地が削り、大きくすれば身が死んで国が滅びるのである。」

2、「故处不安而动不威，戦不勝而守不固，是以小者兵挫而地削，大者身死而国亡。」<sup>③</sup>意味は「だから生活は安定しないで仕事をして威信がなくて、戦争は勝たないで守備は堅くなくて、そこで小さくすれば兵が負けて地が削り、大きくすれば身が死んで国が滅びるのである。」

3、「上度之天祥，下度之地宜，中度之人順，此所謂三度。」<sup>④</sup>意味は「上は天の時を計り、下は地の利を計り、中は人の和を測る、いわゆる三度である。」

4、「天時不祥，則有水旱；地道不宜，則有飢饉；人道不順，則有禍乱。」<sup>⑤</sup>意味は「天の時は不吉で、則ち水旱があり、地の利がよくなければ、飢饉があり、人の道が合わなければ、災いがある。」

5、「凡人君之所以内失百姓，外失諸侯，兵挫而地削，名卑而国虧，社稷滅覆，身体危殆，非生于諂淫者，未之嘗聞也。」<sup>⑥</sup>意味は「凡人君、内に百姓を失い、外に諸侯を失い、兵敗して国土を削られ、名卑して国を害され、社稷を滅ぼされ、己れ危殆なるものは、淫乱に対する喜びによらざるものはありえない。」

「宙合」篇に十一箇所ある。1、「天不一時，地不一利，人不一事，可正而視，定而履，深而迹。」<sup>⑦</sup>意味は「天も一つの季節ではなく、大地も一つの利益ではなく、人も一つの事ではなく。視覚を正し、足取りをはっきりさせ、自分の行跡を深く表明しなければならない。」

2、「夫天地一陰一易，若鼓之有桴，擲擋則擊。」<sup>⑧</sup>意味は「天地には陰があり平易があり、太鼓には太鼓の槌があるように、これを打つとちりんちりと音がするのである。」

---

① 『管子校注』（上）卷三「幼官」一八八頁。

② 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九二頁。

③ 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九二頁。

④ 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九九頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷三「五輔」一九九頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷三「五輔」二〇一頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二〇六頁。

⑧ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二〇六頁。

3、「天地万物之橐，宙合有橐天地。」<sup>①</sup>意味は「天地は万物を網羅する大袋で、宙合の理は天地を包括するのである。」4、「天涓陽，無計量；地化生，無法崖。」<sup>②</sup>意味は「天は万物を育てて、多くて計り知れなくて、大地は万物を造って、多くて果てがありえない。」5、「故曰：聖人參于天地。」<sup>③</sup>意味は「だから、聖人は天と地にふさわしいと言う。」6、「天不一時，地不一利，人不一事，是以著業不得不多，人之名位不得不殊。」<sup>④</sup>意味は「天も一つの季節ではなく、大地も一つの利益ではなく、人も一つの事ではなく。したがって、事業も多様に分けなければならず、地位も多様に分けなければならないわけです。」7、「高下肥磽，物有所宜，故曰地不一利。」<sup>⑤</sup>意味は「土地が高くても、低くても肥えてやせていて、物産はそれぞれ適当である。ですから、地は、一つの物利だけではなく。」8、「夫天地一陰一易，若鼓之有桴，擲擋則擊，言苟有唱之，必有和之，和之不差，因以尽天地之道。」<sup>⑥</sup>意味は「天地には陰があり平易があり、太鼓には太鼓の槌があるように、これを打つとちりんちりと音がするのである。言ったのはもし歌うならば、必ず和があつて、所和は悪くなくて、すべて天地の法則に合うためである。」9、「天地，万物之橐也，宙合有橐天地。天地直万物，故曰：万物之橐。宙合之意，上通于天之上，下泉于地之下，外出于四海之外，合絡天地以為一裹，散之至于無閑，不可名而山，是大之無外，小之無内，故曰：有橐天地。」<sup>⑦</sup>意味は「天地は万物を網羅する大袋で、宙合の理は天地を包括するのである。天地は万物を包み込んでいるのですから、万物の橐というのである。「宙合」とは、上は天の上に通じ、下は地の下に深く、外は四海の外に出て、天地を合わせて一つの袋になるという意味である。それをばらばらにして、隙間のないごく小さなところまで浸透させると、名前がわからない

① 『管子校注』（上）卷四「宙合」二〇六頁。

② 『管子校注』（上）卷四「宙合」二一三頁。

③ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二二七頁。

④ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二三四頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二三四頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二三五頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷四「宙合」二三五頁。

くらいである。外に何もないほど大きく、中に何もないほど小さくなったと言ってもいいである。だから、それはまた天地を包むことができる。」

「枢言」篇に四箇所ある。1、「帝王者審所先所后，先民与地則得矣，先貴与驕則失矣。」

①意味は「帝王とは、何を先にやるべきか、何を後にやるべきかを見極めることである。人民と土地を前面に出すのは正しく、高貴さと誇りを前面に出すのは間違っている。」2、「人主不可以不慎貴，不可以不慎民，不可以不慎富。慎貴在举賢，慎民在置官，慎富在務地。」

②意味は「人君は「貴」の問題に慎重にならざるべからず、「人民」の問題に慎重にならざるべからず、「富」の問題に慎重にならざるべからず。「貴」を慎重に扱うのは、いかに賢人を登用するかにある。「人民」を慎重に扱うことは、官吏をいかに置くかにある。「富」を大切にすることは、農業をいかに大切にすることにかかっている。」3、「先王不貨交，不列地，以為天下。」③意味は「先王も「貨交」や「裂地」で天下を治めませんでした。」4、

「天以時使，地以材使，人以徳使，鬼神以祥使，禽獸以力使。」④意味は「天は、季節を通じて作用を発揮して、地は、物材を通じて作用を発揮して、人は、行徳によって作用を発揮して、鬼神は、福を与えることによって作用を発揮して、獣は力によって力を発揮する。」

「八観」篇に十三箇所ある。1、「明君者閉其門，塞其塗，弇其迹，使民毋由接于淫非之地，是以民之道正行善也若性然，故罪罰寡而民以治矣。」⑤意味は「英明な君主は犯罪の門戸を閉じて、犯罪の道を塞いで、犯罪の影響を消滅して、人民に悪事の環境に接触させるできないことである。だから人民が正道を歩み、善い事をするのは、まるで本性のようである。だから、罪や罰が少なくても人民は安定している。」2、「其耕之不深，芸之不謹，地宜不任，草田多穢，耕者不必肥，荒者不必墮，以人猥計其野，草田多而辟田少者，虽不水旱，飢

---

① 『管子校注』（上）巻四「枢言」二四二頁。

② 『管子校注』（上）巻四「枢言」二四二頁。

③ 『管子校注』（上）巻四「枢言」二四五頁。

④ 『管子校注』（上）巻四「枢言」二五〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻五「八観」二五六頁。

国之野也。」<sup>①</sup>意味は「耕地は深くなくて、草を鋤するのはまめではありません；宜種の土地は種がなくて、まだ開いていない土地はとても荒れていて、すでに耕した土地は必ずしも肥沃でなくて、荒れ果てた土地は必ずしもやせていない。人口にして土地は荒地が多く熟地が少ないである。旱魃や天災がなくても、これは飢国の畑である。」3、「若是而民寡，則不足以守其地，若是而民衆，則国貧民飢；以此遇水旱，則衆散而不收。」<sup>②</sup>意味は「このような国家のようで、人口が少なくてその国土を守ることができない。人口が多ければ、国は貧しく民は飢える。また水害に会ったと、住民は離れになって帰って来ない。」4、「故曰：有地君国，而不務耕耘，寄生之君也。」<sup>③</sup>意味は「だから、土地を持って国を支配しながら農業をしないのは、寄生する王である。」5、「夫山沢广大則草木易多也，壤地肥饒則桑麻易植也，薦草多衍則六畜易繁也。」<sup>④</sup>意味は「山林と湖沢が广大で、草木は繁殖しやすく、土地が肥沃で、桑の麻は生長しやすく、牧草が繁茂すると、六畜が繁栄しやすくなる。」6、「山沢虽広，草木毋禁，壤地虽肥，桑麻毋数，薦草虽多，六畜有征，閉貨之門也。」<sup>⑤</sup>意味は「もし山沢が広ければ、草木を乱伐して禁令がなく、土地は肥えています、桑や麻を栽培してその法を得なく、牧草は多いが、六畜を飼育して税を徴収する。商売を塞ぐようなものである。」7、「課兇飢，計師役，觀台榭，量国費，而実虚之国可知也，凡田野，万家之衆可食之地方五十里，可以為足矣。」<sup>⑥</sup>意味は「飢饉の年を調べ、軍に服務する人を数え、楼台亭閣の建設を見て、財政の費用を計る。虚実の国を区別することができる。およそ万戸の人口をもつ農村で、食べるべきところは、五十里ほどあれば十分である。」8、「彼野悉辟，而民無積者，国地小而食地浅也。」<sup>⑦</sup>意味は「そういう土地が開墾されていても民に蓄えが

① 『管子校注』（上）巻五「八観」二五八頁。

② 『管子校注』（上）巻五「八観」二五八頁。

③ 『管子校注』（上）巻五「八観」二五八頁。

④ 『管子校注』（上）巻五「八観」二五八頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻五「八観」二五九頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻五「八観」二六〇頁。

⑦ 『管子校注』（上）巻五「八観」二六〇頁。

ない国は、国土が小さくて耕地が少ないからである。」9、「田半墾，而民有餘食，而粟米多者，国地大而食地博也。」<sup>①</sup>意味は「土地が半分しか開墾されていないのに、民に余食があり粟米が豊富な国は、国土が広く耕地が多いからである。」10、「国地大而野不辟者，君好貨而臣好利者也。」<sup>②</sup>意味は「国土が広くても荒地が開墾されないのは、君主が財を求め臣民が利を好むからである。」11、「辟地広而民不足者，上賦重，流其藏者也。」<sup>③</sup>意味は「土地開墾が多いにもかかわらず百姓の食糧が不足しているのは、朝廷の賦課税が重く、百姓が蓄えていた食糧を売ったからである。」12、「彼民非谷不食，谷非地不生，地非民不動，民非作力毋以致財。」<sup>④</sup>意味は「人民は食糧を作らなければ食べることができない、食糧は土地に頼らなければ成長できない、土地は人民がなければ耕作できない、人民は力を売らなければ富を得ることができない。」13、「地四削，入諸侯，破也。」<sup>⑤</sup>意味は「土地は分割され、国は滅びる。」

「法禁」篇に一箇所ある。「故有国之君，苟不能同人心，一国威，齐士義，通上之治，以為下法，則虽有広地衆民，犹不能以為安也。」<sup>⑥</sup>意味は「ですから、一国の君が、人心を帰順させ、国家の権威を統一し、士人の意志を統一し、上の統治措置を下の行為規範として貫徹させなければ、広大な国土があっても、多くの人民は、まだ安全とはいえない。」

「重令」篇に二箇所ある。1、「地大国富，人衆兵強，此霸王之本也，然而与危亡為隣矣。」<sup>⑦</sup>意味は「土地が広く、国が豊かで、人民が多く、兵力が強盛で、これが、当然、制覇し、王を称する根本である。しかし、ここまできると、いよいよ危死に近づいてくる。」2、「若夫地虽大而不并兼，不擾奪；人虽衆，不緩怠，不傲下；国虽富，不侈泰，不縱欲；兵虽強，

---

① 『管子校注』（上）卷五「八觀」二六〇頁。

② 『管子校注』（上）卷五「八觀」二六〇頁。

③ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二六〇頁。

④ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二六一頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷五「八觀」二七一頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷五「法禁」二七五頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷五「重令」二八九頁。

不輕侮諸侯，動衆用兵，必為天下政理。」<sup>①</sup>意味は「国土は広くても、併合や略奪を行わず、人口は多くても、情を怠らず、驕りを怠らず、国は富みても、欲を贅沢せず、兵力は強くても、諸侯を軽侮せず、軍事行動をするのは、天下の理を伸張するためである。」

「法法」篇に一箇所ある。「国無以小与不幸而削亡者，必主与大臣之德行失于身也，官職法制政教失于国也，諸侯之謀慮失于外也，故地削而国危矣。」<sup>②</sup>意味は「国家はこれまで小さいと不幸のために危亡したことがなくて、きっと君主と大臣自身が徳を失ったため、国内の官職、法制、政教にミスがあつて、国外は諸侯国に対する謀略にミスがあつて、そのため土地を削減してその上国家危亡する。」

「兵法」篇に六箇所ある。1、「故挙兵之日而境内貧，戦不必勝，勝則多死，得地而国敗。」<sup>③</sup>意味は「だから、戦争を起こして国が貧しくなり、戦争を始めて必勝の把握がなくなり、戦争に勝つと多くの人が亡くなり、土地を得て国の元気が傷つくる。」2、「挙兵之日，而境内不貧，戦而必勝，勝而不死，得地而国不败。」<sup>④</sup>意味は「戦争を起こして国が貧しくないことを維持して、戦争を始めて必勝の把握があつて、戦争に勝って死亡していないで、土地を得て国の元気を傷つけない。」3、「得地而国不败者，因其民也。」<sup>⑤</sup>意味は「土地を得ても自国の元気を害さないのは、被征服国の民に順応しているからである。」4、「器成教施，追亡逐遁若飄風，擊刺若雷電，絶地不守，恃固不拔，中处而無敵，令行而不留。」<sup>⑥</sup>意味は「兵器が整っていて、訓練もよく、脱走兵を追えば風のように速く、敵軍を撃てば雷のように激しくなる。敵は要害があつても守ることができなくて、たとえ險固に仕えても支持することができない。わが軍は、常に進んで敵なし、進んで滞りなく進みる。」5、「凌山坑，不待鉤梯。歴水谷，不須舟楫。徑于絶地，攻于恃固。独出独入，而莫之能止。」<sup>⑦</sup>意

---

① 『管子校注』（上）巻五「重令」二八九頁。

② 『管子校注』（上）巻六「法法」三〇四頁。

③ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三一七頁。

④ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三一七頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三一七頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三二二頁。

⑦ 『管子校注』（上）巻六「兵法」三二三頁。



味は「谷を渡るには鉤梯を使わず、溝を渡るには船を使わず、絶壁の地勢を通ることができ、要害に拠って籠城している敵を打ち破ることができる。出たり入ったりは誰にも止められない。」

「大匡」篇に一箇所ある。「君与地，以汝為竟。」<sup>①</sup>意味は「君上は土地を魯国に返して、汝水を境にしてくださいませんか。」

「中匡」篇に二箇所ある。1、「賜小国地，而后可以誅大国之不道者。」<sup>②</sup>意味は「まず小国に土地を与え、それから始めて無道な大国を誅伐する。」2、「計得地与宝而不計失諸侯，計得財委而不計失百姓，計見親而不計見棄。」<sup>③</sup>意味は「土地と財宝を得ることだけを考えて諸侯を失うことを考えず、財貨を積むことだけを考えて民を失うことを考えず、親しむことだけを考えて捨てることを考えない。」

「小匡」篇に十九箇所ある。1、「相地而衰其政，則民不移。」<sup>④</sup>意味は「土地の肥やせに応じて税を徴収すれば、民が外に出ることはありえない。」2、「列地分民若一，何故独寡切？何以不及人？教訓不善，政事其不治。」<sup>⑤</sup>意味は「恩賞の土地も民も同じなのに、なぜあなただけ成績が悪いのですか？なぜ他の人に及ばないのですか？教育がうまくいかないと、政治がうまくいかないのである。」3、「審吾疆場，反其侵地，正其封界，毋受其貨財，而美為皮幣，以极聘眺于諸侯，以安四隣，則隣国親我矣。」<sup>⑥</sup>意味は「我々の国境を検閲し、侵略した国々の土地を返し、隣国の境を訂正し、彼らの財貨を受け取らない。そして皮幣をきちんと出して、各国の諸侯を次々に招いて、こうして四隣を安定させると、隣国はわが国と親しくなる。」4、「以魯為主。反其侵地常、潜，使海于有弊，渠弥于河階，綱山于有牢。」<sup>⑦</sup>意味は「魯国が主である。彼らを侵略した常、潜両地を返還しなければならなくて、斉国

---

① 『管子校注』（上）卷七「大匡」三五五頁。

② 『管子校注』（上）卷八「中匡」三九七頁。

③ 『管子校注』（上）卷八「中匡」三九七頁。

④ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四〇二頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四一八頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

⑦ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

に大海に遮蔽があつて、小さい海に塀があつて、環山に柵壁がある。」5、「以衛為主。反其侵地吉台、原姑与柴里，使海于有弊，渠弥于有渚，綱山于有牢。」<sup>①</sup>意味は「衛国が主である。彼らを侵略した吉台、原姑与柴里を返還しなければならなくて、斉国に大海に遮蔽があつて、小さい海に塀があつて、環山に柵壁がある。」6、「以燕為主，反其侵地柴夫、吠狗，使海于有弊，渠弥于有渚，綱山于有牢。」<sup>②</sup>意味は「燕国が主である。彼らを侵略した柴夫、吠狗兩地を返還しなければならなくて、斉国に大海に遮蔽があつて、小さい海に塀があつて、環山に柵壁がある。」7、「四隣大親，既反其侵地，正其封疆，地南至于岱陰，西至于濟，北至于海，東至于紀隨，地方三百六十里。」<sup>③</sup>意味は「四隣は大いに仲よくなりました。侵略の地を返還し、その国境を定めた後、斉国の領土は、南は泰山の北、西は済水、北は海、東は紀隨の兩地に至り、地方は全部で三百六十里になりました。」8、「諸侯多沈乱不服于天子，于是乎桓公東救徐州，分吳且，存魯蔡陵，割越地，南据宋鄭，征伐楚。濟汝水，逾方地，望文山，使貢絲于周室，成周反胙于隆岳，荊州諸侯，莫不来服。」<sup>④</sup>意味は「当時の諸侯には混乱して天子に従わぬ者が多いのである。そこで桓公は、東に徐州を救い、吳の半分を分け、魯国を救い、蔡国を侵し、越を分割した。南面して宋、鄭兩國を以って楚を伐り、汝の水を渡り、方城を過ぎ、文山に近づき、楚国に糸を周室に貢するよう命じました。周の天子が斉の桓公に祭肉を送ってくれたので、荊州の諸侯が帰服しない者はいない。」9、「西征，攘白狄之地，遂至于西河。」<sup>⑤</sup>意味は「西への征戦では、白狄の土地を奪い、西河に至る。」10、「昔人之受命者，龍龜假，河出図，雒出書，地出乘黄。」<sup>⑥</sup>意味は「古人が命を受けて王になるのは、いつも龍と亀が来て、黄河は図を出し、洛水は本を出し、地

---

① 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

② 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

③ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

④ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二四頁。

⑤ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二五頁。

⑥ 『管子校注』（上）卷八「小匡」四二六頁。

は乗黄神馬を出る。」11、「筑蔡鄴陵培夏灵父丘，以衛戎狄之地，所以禁暴于諸侯也。」<sup>①</sup>

意味は「蔡、郡陵、培夏、靈父丘などの城を建設して戎狄の地を防御し、戎狄が諸侯に略奪を防ぐためである。」12、「筑五鹿、中牟、鄴盖与社丘，以衛諸夏之地，所以示勸于中国也。」

<sup>②</sup>意味は「五鹿、中牟、鄴襄、盖、牡丘などの城を築き、諸夏の地を守り、中国の權威を示しました。」13、「故行地滋遠，得人弥衆，是何也？」<sup>③</sup>意味は「だから、遠くに行けば行くほど、多くの人を得られるのですが、これはどういう理由でしょうか。」14、「于是列広地以益狭地，損有財以益無財。」<sup>④</sup>意味は「そこで地の多いものを取って地の少ないものを

補い、財のあるものを削って財のないものを与える。」15、「入邑墾草辟土，聚粟衆多，尽地之利，臣不如甯戚，請立為大司田。」<sup>⑤</sup>意味は「荒れ地を開発して城邑とし、土地を開いて食糧を増産させ、入口をふやし、土地の利を尽くする。私は寧戚に及ばず、彼を大司田に封じてください。」

「霸形」篇に三箇所ある。1、「焼蓺燬焚鄭地，使城壞者不得複筑也，屋之焼者不得複葺也，令其人有喪雌雄，居室如鳥鼠処穴。」<sup>⑥</sup>意味は「鄭の土地を火で焼いて、鄭の国の城を壊して再建することができなくて、家を壊して修復することができなくて、また男女にその配偶者を喪わせて、部屋は鳥の巢の鼠の穴のようである。」2、「使軍入城鄭南之地，立百代城焉。」<sup>⑦</sup>意味は「軍隊に命じて鄭の南に城を築き、百代城を建てさせました。」

「霸言」篇に十六箇所ある。1、「霸王之形，象天則地，化人易代，創制天下，等列諸侯，賓属四海，時匡天下。」<sup>⑧</sup>意味は「霸業と王業の規模はこうである。それは天をまねて、大地を学んで、世人を教化して、王朝を変えて、天下の法制を創立して、諸侯等次を分列して、

「霸形」篇に三箇所ある。1、「焼蓺燬焚鄭地，使城壞者不得複筑也，屋之焼者不得複葺也，令其人有喪雌雄，居室如鳥鼠処穴。」<sup>⑥</sup>意味は「鄭の土地を火で焼いて、鄭の国の城を壊して再建することができなくて、家を壊して修復することができなくて、また男女にその配偶者を喪わせて、部屋は鳥の巢の鼠の穴のようである。」2、「使軍入城鄭南之地，立百代城焉。」<sup>⑦</sup>意味は「軍隊に命じて鄭の南に城を築き、百代城を建てさせました。」

「霸言」篇に十六箇所ある。1、「霸王之形，象天則地，化人易代，創制天下，等列諸侯，賓属四海，時匡天下。」<sup>⑧</sup>意味は「霸業と王業の規模はこうである。それは天をまねて、大地を学んで、世人を教化して、王朝を変えて、天下の法制を創立して、諸侯等次を分列して、

「霸言」篇に十六箇所ある。1、「霸王之形，象天則地，化人易代，創制天下，等列諸侯，賓属四海，時匡天下。」<sup>⑧</sup>意味は「霸業と王業の規模はこうである。それは天をまねて、大地を学んで、世人を教化して、王朝を変えて、天下の法制を創立して、諸侯等次を分列して、

「霸言」篇に十六箇所ある。1、「霸王之形，象天則地，化人易代，創制天下，等列諸侯，賓属四海，時匡天下。」<sup>⑧</sup>意味は「霸業と王業の規模はこうである。それは天をまねて、大地を学んで、世人を教化して、王朝を変えて、天下の法制を創立して、諸侯等次を分列して、

---

① 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四〇頁。

② 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四〇頁。

③ 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四〇頁。

④ 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四〇頁。

⑤ 『管子校注』（上）巻八「小匡」四四七頁。

⑥ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四五八頁。

⑦ 『管子校注』（上）巻九「霸形」四六〇頁。

⑧ 『管子校注』（上）巻九「霸言」四六〇頁。

四海を帰属させて、そして時に乗じて天下を匡正する。」2、「夫兵幸于権、権幸于地。故諸侯之得地利者、権従之。失地利者、権去之。」<sup>①</sup>意味は「兵の勝ちには権があるため、権の勝ちには地の利を得るためである。だから、諸侯は地の利を得て、続いて権があり、地の利を失えば、権も失える。」3、「時至而挙兵、絶堅而攻国、破大而制地、大本而小標。塞近而攻遠。」<sup>②</sup>意味は「時が来れば挙兵する。堅壁を破って敵国を攻略して、大城を破って敵地を制御して、根本は十分で目標は小さくて、近国を保全して遠敵を攻伐する。」4、「地大而不為、命曰土満。」<sup>③</sup>意味は「土地が大きくて耕さないことを「土満」と言う。」5、「地大而不耕、非其地也。」<sup>④</sup>意味は「土地が大きくても耕さなければ、彼の土地ではない。」6、「霸王之形、徳義勝之、智謀勝之、兵戦勝之、地形勝之、動作勝之、故王之。」<sup>⑤</sup>意味は「覇業と王業の形勢はこうである。徳義に優位あり、智謀に優位あり、兵戦に優位あり、地形に優位あり、動作に優位あり、だから天下を治めることができる。」7、「立政出令用人道、施爵禄用地道、挙大事、用天道。」<sup>⑥</sup>意味は「令を出すには人道を使い、爵禄を施すには地道を使い、大事を挙行するには天道を使う。」8、「近而不服者、以地患之。」<sup>⑦</sup>意味は「近くて従わない国には、土地を侵攻する。」9、「必先定謀慮、便地形、利権称、親与国。」<sup>⑧</sup>意味は「まず計画を立て、有利な地形を取り、有利な結末を衡量し、同盟国との関係を緊密にしなければならない。」10、「是故先王之伐也、必先戦而后攻、先攻而后取地。」<sup>⑨</sup>意味は「ですから、先王が征伐するには、先に戦ってから攻め、先に攻めてから地を取る必要があります。」11、「精于刑、則大国之地可奪、強国之兵可圍也。」<sup>⑩</sup>意味は「情

---

① 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四六五頁。

② 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四六九頁。

③ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七一頁。

④ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七一頁。

⑤ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七二頁。

⑥ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七三頁。

⑦ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七三頁。

⑧ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七九頁。

⑨ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四七九頁。

⑩ 『管子校注』(上) 卷九「覇言」四八〇頁。

勢に熟達すれば大国の土地は奪うことができ、強国の兵は包囲することができる。」<sup>12</sup>、

「夫神聖視天下之刑，知世之所謀，知兵之所攻，知地之所歸，知令之所加矣。」<sup>①</sup>意味は「神聖なる君主とは、天下の情勢を知り、当代の謀略を知り、兵の進攻を知り、土地の帰属を知り、政令の対象を知る。」

「問」篇に六箇所ある。1、「所筑城郭，修墻閉，絶通道厄闕，深防溝，以益人之地守者何所也？」<sup>②</sup>意味は「彼らの築いた城郭、築かれた垣、設けられたバリケード、設置された門楼、深まりつつある濠など、国土を守るのに役立つものは何でしょうか。」2、「制地。君曰，理国之道，地徳为首。君臣之礼，父子之親，覆育万人，官府之藏，強兵保国，城郭之陰，外応四极。具取之地，而市者天地之財具也，而万人之所和而利也，正是道也。民荒無苛，人尽地之職。」<sup>③</sup>意味は「国土地の利の問題について、君主は「国を治める道は、土地の利益を十分に發揮することを第一とすべきだ」と言いました。君臣間の礼儀制度も、父子間の親心も、すべて国土の収入にかかっているべきで、地は万民を覆って化育することができる。官府の貯蔵、軍事力を増強して国家を防衛し、城郭の要害は、四方の諸侯の来襲を外に備えている。全て土地に依存している。市場は天地の財物が集まる場所であり、万民が市に入って交易することで相互に利益を得る、地の産物でもある。民は自力更生し、施政を急がず、各々努力し、地の利を尽くする。」

「地図」篇に五箇所ある。1、「凡兵主者，必先審知地図。輶輶之陰，濫車之水，名山、通谷、経川、陵陸、丘阜之所在，苴草、林木、蒲葦之所茂，道里之遠近，城郭之大小，名邑、廢邑、困殖之地，必尽知之。地形之出入相錯者，尽藏之。然后可以行軍襲邑，举錯知先后，不失地利，此地図之常也。」<sup>④</sup>意味は「凡軍の大將は、まず地図をよく知っている。廻る陰路、車におおわれる大水、名山、大谷、大川、高原、丘陵のありか、枯草、林、葦の茂る所、道の遠近、城郭の大きさ、名城、廢邑、瘦せた所、耕作可能な畑など、すべてを知らねばな

---

① 『管子校注』（上）卷九「霸言」四八〇頁。

② 『管子校注』（上）卷九「問」四九四頁。

③ 『管子校注』（上）卷九「問」四九八頁。

④ 『管子校注』（中）卷十「地図」五二九頁。

らない。地形の交錯も、完全に把握していなければならない。そして、行軍して邑を襲うなど、地の利を失わないことが地図の意味である。」

「参患」篇に二箇所ある。1、「外不以兵而欲誅暴，則地必虧矣。」<sup>①</sup>意味は「外に用兵せず暴国を征伐しようとするれば、必然的に国土を失うことになる。」2、「是以聖人小征而大匡，不失天時，不空地利，用日維夢，其数不出于計。」<sup>②</sup>意味は「だから聖人はいつも小さい征戦に対して大きい恐れがあつて、天の時を失わないようにして、地の利を失わないようにして、昼間の作戦は夜間によく計画する。」

「君臣上」篇に二箇所ある。1、「有善者，賞之以列爵之尊，田地之厚，而民不慕也。」<sup>③</sup>意味は「よい成績をあげた者には、高貴な爵位や美厚な田畑をもって褒美をあたえますから、人民は羨望の心をはかることはありえない。」2、「天有常象，地有常形，人有常礼，一設而不更，此謂三常。」<sup>④</sup>意味は「天には常の氣象あり、地には常の形体あり、人には常の礼制あり、一度設けられたら改めない、これを三常という。」

「君臣下」篇に二箇所ある。1、「下注者，発地利，足財用也。」<sup>⑤</sup>意味は「下を向くとは、地の利を開発して富を増やすことに注意する。」2、「審天時，物地生，以輯民力。」<sup>⑥</sup>意味は「詳しく天の時を観察し、土地の性質を観察して、民力を合理的に使う。」

「小称」篇に三箇所ある。1、「虽有天子諸侯，民皆操名而去之，則捐其地而走矣。」<sup>⑦</sup>意味は「いくら天子諸侯の地位がありますが、民がその悪名で去ってしまえば、領地を捨てて出奔するほかありえない。」2、「此其変名物也，如天如地，故先王曰道。」<sup>⑧</sup>意味は「その変化名物の作用は、まさに天地のごとく大きいのである。だから、先王はこれを「道」と

---

① 『管子校注』(中) 卷十「参患」五三五頁。

② 『管子校注』(中) 卷十「参患」五三五頁。

③ 『管子校注』(中) 卷十「君臣上」五三五頁。

④ 『管子校注』(中) 卷十「君臣上」五五〇頁。

⑤ 『管子校注』(中) 卷十一「君臣下」五八四頁。

⑥ 『管子校注』(中) 卷十一「君臣下」五九四頁。

⑦ 『管子校注』(中) 卷十一「小称」五九九頁。

⑧ 『管子校注』(中) 卷十一「小称」六〇六頁。

言った。」3、「死者無知則已，若有知，吾何面目以見仲父于地下。」<sup>①</sup>意味は「死んで知覚がないのならまだしも、知覚あるのなら、私はどうして仲父の顔を見ることができるでしょうか。」

「侈靡」篇に二十一箇所ある。1、「地重人載，毀敝而養不足，事末作而民兴之，是以下名而上実也。」<sup>②</sup>意味は「土地は貴重で、人口は増えて、生活は貧しくて、しかも食糧は不足する。贅沢な商工業を発展させて、人民の生活が振興されたのは、虚名を重んじないで、實際を重んじた措置である。」2、「尊天地之理，所以論威也。」<sup>③</sup>意味は「天地尊卑の理を説くのは、権威を示すためである。」3、「必辨于天地之道，然后功名可以殖。」<sup>④</sup>意味は「天地事物の法則を知ってこそ、功業や名声を発展させることができる。」4、「辨于地利，而民可富。」<sup>⑤</sup>意味は「地の利をわきまえることは、人民を富ませることができる。」5、「天之所覆，地之所載，斯民之良也。不有而丑天地，非天子之事也。」<sup>⑥</sup>意味は「天の覆の如く、地の載の如く、これらの条件を備えて、民に愛される君主である。そのような実績がないのに、無理に天と地とを合わせようとするのは、天子のなすべきことではない。」6、「故縁地之利，承從天之指，辱举其死，開国閉辱。知其縁地之利者，所以参天地之吉綱也。」<sup>⑦</sup>意味は「そのためには、地の利に応じて、天の意に従い、先祖と神々を厚く祀り、国を開く。地の利に応じるということは、天地の摂理を悟るということである。」7、「故地広千里者，禄重而祭尊。其君無餘。地与他若一者，從而艾之。」<sup>⑧</sup>意味は「千里の地をもつ君主は、臣下の俸禄も厚く、祭祀の格式も高いのである。土地がなく荒地しかなかった君

---

① 『管子校注』（中）卷十一「小称」六〇九頁。

② 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六二八頁。

③ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六三八頁。

④ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六四六頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六四六頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六四七頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六六一頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」六八九頁。

主は、開墾するしかない。」8、「方百里之地，樹表相望者，丈夫走禍，婦人備食。」<sup>①</sup>意味は「方百里の土地に、印を立てて互に見る所に、男は疾く応召し、婦人は食事を用意する。」

9、「万世之国，必有万世之実。必因天地之道，無使其内，使其外，使其小，毋使其大，棄其国宝。」<sup>②</sup>意味は「万世に伝わる国には、万世に伝わる国宝がある。この国宝は、天地の摂理に則り、内政につとめて外に侵略せず、石橋を叩いて渡ることを慎んでいる。国宝を捨てて外に侵略すれば、同盟国を離れて失敗する。」10、「水鼎之汨也，人聚之。壤，地之美也，人死之。」<sup>③</sup>意味は「水の流れている場所には、人々が集まって住んでいる。土が肥えているところは、人が離れない。」11、「天地不可留，故動，化故從新。」<sup>④</sup>意味は「宇宙は滞在しないので、常に古いものから新しいものへと変働する。」12、「天地若夫神之動，化變者也。天地之極也，能與化起而王用，則不可以道山也。」<sup>⑤</sup>意味は「天地はそこに神が働いているようなもので、変化するのが天地の最大の特徴である。変化に参加し、活用できる人は、途中で立ち止まってはいけない。」13、「夫運謀者，天地之虚満也。合离也，春秋冬夏之勝也。」<sup>⑥</sup>意味は「画策の運用については、天地の盈虚と離合を把握し、春秋冬夏の交替を理解することにある。」14、「地陽時貸，其冬厚則夏熱，其陽厚則陰寒，是故王者謹于日至。」<sup>⑦</sup>意味は「冬に極寒があれば夏は暑く、陽気が厚ければ陰寒と、陰陽の働きは常に交互である。だから王は、冬至と夏至の二つの節気が十分に注意する。」15、「地之變氣，応其所出。」<sup>⑧</sup>意味は「地に災変の気が起きたら、その現れたところで解決を祈る。」16、「且夫天地精氣有五，不必為沮，其前而反，其重𡗗動毀之進退，即此数之難得者也。」<sup>⑨</sup>意味は「天地の運働の精気は五つありますから、その氣運の最も旺盛なる者を妨げて、その動

① 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七一二頁。

② 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七一五頁。

③ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七二二頁。

④ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七二六頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七二六頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七三七頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七三八頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七四二頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十二「侈靡」七四二頁。



きに逆らうべきではない。しかし、それらが運動し、滅び、前進し、後退していく過程を知  
ることは、なかなかできない。」

「心術上」篇に三箇所ある。1、「天曰虚，地曰静，乃不伐。」<sup>①</sup>意味は「天は虚しく、  
地は静かですから、まちがいはない。」2、「道在天地之間也，其大無外，其小無内，故曰  
不遠而難極也。」<sup>②</sup>意味は「道は天地の間にあり、無限に大きくて無限に小さいので、「遠  
からずして難極なり」という。」3、「天之道虚，地之道静。」<sup>③</sup>意味は「天の道は「虚」、  
地の道は「静」である。」

「心術下」篇に三箇所ある。1、「是故聖人若天然，無私覆也；若地然，無私載也。」<sup>④</sup>  
意味は「だから、聖人はいつも天のようで、私心がなくて万物を覆う。地のように、私心な  
く万物を載る。」2、「執一而不失，能君万物，日月之与同光，天地之与同理，聖人裁物，  
不為物使。」<sup>⑤</sup>意味は「一途を怠らずにいれば、万物を統べることができ、日月もこれと  
同じ光、天地もこれと同じ理になる。聖人は物事を裁定し、物事に支配されない。」3、「是  
故聖人一言解之。上察于天，下察于地。」<sup>⑥</sup>意味は「したがって、聖人は道について一字の  
解釈があつて、天に通じることができて、地に下ることができるのである。」

「白心」篇に七箇所ある。1、「故苞物衆者莫大于天地，化物多者莫多于日月，民之所急  
莫急于水火。」<sup>⑦</sup>意味は「だから、包蔵物類の広範なのは、天地で、化育物類の多いのは、  
日月で、人民の生活の急切に必要なのは、水火である。」2、「效夫天地之紀。」<sup>⑧</sup>意味は  
「天地の運行法則を真似る。」3、「天或維之，地或載之。」<sup>⑨</sup>意味は「天は一つのものが  
繋ぎ止めているようで、地は一つのものを載せているようである。」4、「天莫之維則天以

---

① 『管子校注』(中) 卷十三「心術上」七六四頁。

② 『管子校注』(中) 卷十三「心術上」七六七頁。

③ 『管子校注』(中) 卷十三「心術上」七七〇頁。

④ 『管子校注』(中) 卷十三「心術下」七七八頁。

⑤ 『管子校注』(中) 卷十三「心術下」七八〇頁。

⑥ 『管子校注』(中) 卷十三「心術下」七八六頁。

⑦ 『管子校注』(中) 卷十三「白心」七八八頁。

⑧ 『管子校注』(中) 卷十三「白心」七九四頁。

⑨ 『管子校注』(中) 卷十三「白心」七九四頁。

墜矣，地莫之載則地以沈矣。」<sup>①</sup>意味は「天はもしものが繋ぎ止めていないならば、すぐ落ちてくる。地を載せてものがなければ、沈んです。」5、「夫天不墜，地不沈，夫或維而載之也夫。」<sup>②</sup>意味は「天は落ちないで、地は沈まないで、あるいはまさに何か繋ぎ止めてそれらを載せていることがある。」6、「道之大如天，其広如地，其重如石，其輕如羽。」<sup>③</sup>意味は「道は、その大きさは天のようで、その広さは地のようで、その重さは石のようで、その軽さは羽のようである。」

「水地」篇に三箇所ある。1、「地者，万物之本原，諸生之根菀也，美惡賢不肖愚俊之所生也。」<sup>④</sup>意味は「地は万物の根源であり、諸生の根で、美、悪、賢、不肖、愚俊の生成なり。」2、「水者，地之血氣，如筋脉之通流者也。」<sup>⑤</sup>意味は「水、則ち地の血気で、それは人身の筋脈のようで、大地の中で流通している。」3、「集于天地，而藏于万物，産于金石，集于諸生，故曰水神。」<sup>⑥</sup>意味は「それは天と地に集まり、万物の内部に包み込み、金石の中間に生じ、またすべての生命の中に集まる。だから、水は神に比する。」

「四時」篇に六箇所ある。1、「故天曰信明，地曰信聖，四時曰正。」<sup>⑦</sup>意味は「だから聖人は天道に対して本当に聡明なので、地道に対して本当に聖智なので、そのため彼の認識する四時も正しいである。」2、「是故陰陽者，天地之大理也。」<sup>⑧</sup>意味は「したがって、陰陽の変化は天地の根本の理である。」3、「其事号令，修禁徙，民令静止，地乃不泄，断刑致罰，無赦有罪，以符陰氣。」<sup>⑨</sup>意味は「この時期にやることは、転居を禁止して、なるべく人を静かにして、地気を漏らさないようにすることである。刑を宣告して罰を定めて、罪人を許してはいけなくて、陰気の要求に適応する。」4、「此三者聖王所以合于天地之行

---

① 『管子校注』（中）卷十三「白心」七九四頁。

② 『管子校注』（中）卷十三「白心」七九四頁。

③ 『管子校注』（中）卷十三「白心」八一〇頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一三頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一三頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十四「水地」八一四頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八三八頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八三八頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五四頁。

也。」<sup>①</sup>意味は「この三つは、聖王が天と地の運行に合わせるためにとったものである。」

5、「此四者聖王所以免于天地之誅也。」<sup>②</sup>意味は「この四つは、聖明君主が天地の誅罰を避けるためにとったものである。」6、「道生天地，徳出賢人。」<sup>③</sup>意味は「「道」は大地を生じて、「徳」は賢人を生じる。」

「五行」篇に十三箇所ある。1、「六月日至，是故人有六多，六多所以街天地也。」<sup>④</sup>意味は「毎年、六ヶ月を経て、冬至、夏至となるわけですから、人間の卦は六爻で、六爻は天地に通じる。」2、「天道以九制，地理以八制，人道以六制。」<sup>⑤</sup>意味は「天道は九を、地理は八を、人道は六を制度とする。」3、「以天為父，以地為母，以開乎万物，以綏一統。」

<sup>⑥</sup>意味は「天子は天を父とし、地を母とし、これをもって万物を開発し、統一する。」4、「治祀之，下以觀地位。」<sup>⑦</sup>意味は「土地を祭祀して、土地の利益を観察する。」5、「通乎陰氣，所以事地也，經緯星歷，以視其離。」<sup>⑧</sup>意味は「陰氣に通じるのは、地に従事するため、すなわち星暦の節気を把握して、その運行の順序を明らかにするためである。」6、「

「昔者黃帝得蚩尤而明于天道，得大常而察于地利，得蒼龍而辯于東方，得祝融而辯于南方，得大封而辯于西方，得后土而辯于北方。」<sup>⑨</sup>意味は「昔、黃帝は蚩尤を相とし天道を明察し、大常を相とし地の利を明察し、蒼龍を相とし東方を明察し、祝融を相とし南方を明察し、大封を相とし西方を明察し、後土を相とし北方を明察した。」7、「黃帝得六相而天地治，神明至。」<sup>⑩</sup>意味は「黃帝が六相を得て、天地が治まるとは、神の極みと言える。」8、「大

---

① 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五五頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五五頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「四時」八五七頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八五九頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八五九頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八五九頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六〇頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六〇頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六五頁。

⑩ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六五頁。

常察乎地利，故使為廩者。」<sup>①</sup>意味は「大常は地の利に通じていたので、黄帝は彼を「廩者」の官にした。」9、「人与天調，然后天地之美生。」<sup>②</sup>意味は「人類の生産、生活と自然界の陰陽、時序は調和して、それから自然界は美しい事物が発生する。」10、「君子修游馳以發地氣。」<sup>③</sup>意味は「貴者は馬を遊ばせて、以て地の気を発散する。」11、「所以待天地之殺斂也。」<sup>④</sup>意味は「天地の秋に行われる殺戮に備えるためである。」12、「然則昼炙陽，夕下露，地競環，五谷隣熟，草木茂。」<sup>⑤</sup>意味は「日中は日が暑く、夜は涼露が降り、地気が出て、五穀が続々と熟し、草木も豊かになる。」13、「所以貴天地之所閉藏也。」<sup>⑥</sup>意味は「これはまさに天地閉藏の要求に適応しているのである。」

「勢」篇に七箇所ある。1、「逆節萌生，天地未刑，先為之政，其事乃不成，繆受其刑。」<sup>⑦</sup>意味は「敵の逆らうことはまだ始まったばかりで、天地が何もしていないのに、早目に征討してしまつては、事は成功せず、かえって懲罰を受ける。」2、「慕和其衆，以修天地之從。人先生之，天地刑之，聖人成之，則与天同極。正静不爭，動作不貳，素質不留，与地同極。」<sup>⑧</sup>意味は「自軍衆を慕い、天の時と地の利を待ちます。まず人々がそこで生事を起こし、次に天と地が懲罰の徴候を示し、最後に聖人が征伐によってこれをなすというのが天の準則と一致しています。もちろん、正静で争わず、行動に狂いがなければ、本質的に殺戮の心がなければ、地の基準と同じである。」3、「修陰陽之從，而道天地之常。」<sup>⑨</sup>意味は「陰陽の運行の軌道に従い、天地の常規を遂行しなければならない。」4、「死死生生，因天地之形。天地之形，聖人成之。」<sup>⑩</sup>意味は「死生は、天地の徴候によって行い。天地は征象を

---

① 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六五頁。

② 『管子校注』（中）卷十四「五行」八六五頁。

③ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七二頁。

④ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七六頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七六頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十四「五行」八七八頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十五「勢」八八五頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十五「勢」八八五頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十五「勢」八八六頁。

⑩ 『管子校注』（中）卷十五「勢」八八六頁。

示し、聖人は征伐の事を完成する。」

「九変」篇に一箇所ある。「不然，則地形險阻，易守而難攻也。」<sup>①</sup>意味は「そうでなければ、この国の地形は険しく、守り易く、攻め難いのである。」

「任法」篇に四箇所ある。1、「是故人主有能用其道者不事心，不勞意，不動力，而土地自辟，困倉自実，蓄積自多，甲兵自強，群臣無軸偽，百官無奸邪，奇術技芸之人，莫敢高言孟行，以過其情，以遇其主矣。」<sup>②</sup>意味は「だから、君主がこの原則を運用することができるのは、心配しなくても、苦勞しなくても、土地は自然に開かれ、倉廩は自然に豊かになり、蓄積は自然に豊かになり、兵力は自然に強大になりました。群臣に詐偽の者はなく、百官に奸邪の者はなく、特殊な技芸をもった者もみな誇大な言葉、粗雑な行為で個人を誇張し、君主を欺くことを恐れました。」2、「故聖君失度量，置儀法，如天地之堅，如列星之固，如日月之明，如四時之信，然故令往而民從之。」<sup>③</sup>意味は「聖明君主は制度の儀法を設け、天地のように確固とし、列星のように確固とし、日月のように光明とし、四時の運行のように正確とすれば、法が出ると人民は従う。」3、「以法制行之，如天地之無私也，是以官無私論，士無私議，民無私說，皆虛其匈以听于上。」<sup>④</sup>意味は「法に依って事を為すのは、天地が万物に対してそうであるように私心がなく。官吏には私的な政見がなく、士人には私的な議論がなく、民間には私的な主張がなく、皆が虚心に君主に従う。」4、「夫君臣者，天地之位也。」<sup>⑤</sup>意味は「君と臣は天と地に相当する。」

「治国」篇に三箇所ある。1、「戰勝者地広。」<sup>⑥</sup>意味は「勝てば土地も広がりのである。」

2、「是以先王知衆民、強兵、広地、富国之必生于粟也，故禁末作，止奇巧，而利農事。」

<sup>⑦</sup>意味は「そのため、先代の聖王は、人口が多く、兵力が強く、国土が広く、国が豊かなの

---

① 『管子校注』(中) 卷十五「九変」八九八頁。

② 『管子校注』(中) 卷十五「任法」九〇一頁。

③ 『管子校注』(中) 卷十五「任法」九〇九頁。

④ 『管子校注』(中) 卷十五「任法」九一一頁。

⑤ 『管子校注』(中) 卷十五「任法」九一二頁。

⑥ 『管子校注』(中) 卷十五「治国」九二四頁。

⑦ 『管子校注』(中) 卷十五「治国」九二六頁。

は、すべて食糧に由来することを知り、贅沢な商工業や奢侈品の製造を禁じ、農業を有利にしようしました。」 3、「粟也者，地之所歸也。」<sup>①</sup>意味は「食糧は、領土の開拓にもつながる。」

「内業」篇に七箇所ある。1、「流于天地之間，謂之鬼神。」<sup>②</sup>意味は「天地の間に流れるものを鬼神と謂う。」 2、「天主正，地主平，人主安静。」<sup>③</sup>意味は「天は正にあり、地は平にあり、人は静かにある。」 3、「山陵川谷，地之枝也。」<sup>④</sup>意味は「山陵川谷は地の物材である。」 4、「正形摂徳，天仁地義，則淫然而自至。」<sup>⑤</sup>意味は「外形を正し、内徳を修め、天の仁の如く、地の義の如くすれば、やがて神の最高の境地に達します。」 5、「一言之解，上察于天，下極于地，蟠満九州。」<sup>⑥</sup>意味は「ただ一つの字の理解があつて、上は天に通じることができて、下は地に至つて、しかも九州に満ちている。」 6、「乃能窮天地，被四海。」<sup>⑦</sup>意味は「このようにして天地を全面的に認識し、四海を広く察することができる。」 7、「凡人之生也，天出其精，地出其形，合此以爲人。」<sup>⑧</sup>意味は「人の命は、天から精気を与えられ、地から形体を与えられ、その二つが結びついて人となるのである。」

「小問」篇に三箇所ある。1、「力地而動于時，則国必富矣。」<sup>⑨</sup>意味は「土地を耕して農時に合うようになれば、きっと国は豊かになる。」 2、「請問行軍襲邑，挙錯而知先后，不失地利，若何？」<sup>⑩</sup>意味は「兵を出して城邑を襲う場合、先後を予知し、地の利を失わないようにするにはどうしますか？」 3、「昔者天子中立，地方千里，四言者該焉，何爲其寡也？」<sup>⑪</sup>意味は「昔天子が中央に立てば、地方は千里にも及んだが、この四条さえ具えてい

---

① 『管子校注』（中）卷十五「治国」九二六頁。

② 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三一頁。

③ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三七頁。

④ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三七頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三七頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三八頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九三九頁。

⑧ 『管子校注』（中）卷十六「内業」九四五頁。

⑨ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九五五頁。

⑩ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九五六頁。

⑪ 『管子校注』（中）卷十六「小問」九五九頁。

れば、どうして人民が少くなかったでしょう。」

「七臣七主」篇に七箇所ある。1、「夫男不田，女不緇，工技力于無用，而欲土地之毛，倉庫滿実，不可得也。」<sup>①</sup>意味は「男は田を耕さず、女は布を織らず、職人技は無用の長物に力を入れますから、土地に穀物を生ませようとしても、倉庫に穀物を積んでおくことは、とてもできない。」2、「土地不毛，則人不足。」<sup>②</sup>意味は「土地に穀物がなければ人民は困窮する。」3、「六務者何也？一曰節用。二曰賢佐。三曰法度。四曰必誅。五曰天時。六曰地宜。」<sup>③</sup>意味は「六務とは何ですか？一には財を節約し、二には賢佐を登用し、三には法度を重んじ、四には刑罰を断行し、五には天の時を重んじ、六には地の利を重んじる。」4、「冬政不禁，則地氣不藏。」<sup>④</sup>意味は「冬に禁政ができなければ、地気は保てない。」5、「四者俱犯，則陰陽不和，風雨不時，大水漂州流邑，大風漂屋折樹，火暴焚地焦草，天冬雷，地冬霆。」<sup>⑤</sup>意味は「四者とも違反すれば、陰陽不和、風雨不順、大水は州邑を沈め、大風は木を折り、大火は地に草を焦がし、冬には空に雷を打ち、地には震動がある。」6、「推則往，召則来，如墜重于高，如澆水于地。」<sup>⑥</sup>意味は「これを推せば去る、これを招けば来る、これは高い所から重い物を下に投げるようなもので、また地に水路を開いて水を引くようなものである。」

「禁蔵」篇に一箇所ある。「故春仁，夏忠，秋急，冬閉，順天之時，約地之宜，忠人之和。」<sup>⑦</sup>意味は「このように、春は慈悲深く、夏は誠実で厚く、秋は厳しく、冬は閉じて、天の時に順じて、地の宜に応じ、更に人の和に適うのである。」

「九守」篇に二箇所ある。1、「誠暢乎天地，通于神明，見奸偽也。」<sup>⑧</sup>意味は「真実に

---

① 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九八九頁。

② 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九八九頁。

③ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

④ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

⑤ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九五頁。

⑥ 『管子校注』（中）卷十七「七臣七主」九九九頁。

⑦ 『管子校注』（中）卷十七「禁蔵」一〇一八頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷十八「九守」一〇四二頁。

は天地にずんずんとし、神に通じる力がある。況いて奸邪な人々にはなおさらでしょう。」

2、「一曰天之，二曰地之，三曰人之，四曰上下左右前后。」<sup>①</sup>意味は「一は天、二は地、三は人間、四は上下左右前後である。」

「度地」篇に十九箇所ある。1、「寡人請問度地形而為国者，其何如而可？」<sup>②</sup>意味は「地勢を踏査して都をつくる作業は、どのように進めばよいのでしょうか。」2、「故聖人之処国者，必于不傾之地。而挾地形之肥饒者，郷山，左右經水若沢，内為落渠之写，因大川而注焉。」<sup>③</sup>意味は「聖人が都を建設するのは、必ず平穏で確実な場所で、しかも肥沃な土地で、山に寄りかかって、左右に川や湖があつて、城内には溝が整備され排水されていて、どこからでも大河に流れている。」3、「此謂因天之固，埽地之利，内為之城，城外為之郭，郭外為之土闕。地高則溝之，下則堤之，命之曰金城。」<sup>④</sup>意味は「全国の天然資源を利用して、全国の土地財利を徴収できるからである。都城の建設は内に「城」を修理するべきで、外は「郭」を修理して、郭の外は城の塹壕を築き。地勢が高ければ溝を掘って、地勢が低ければ堤を築き。それこそが、堅牢な城なのである。」4、「出地而不流者，命曰淵水。」<sup>⑤</sup>意味は「地下から湧き出て外に出ないものを淵水と謂う。」5、「地下則平，行地高即控。」<sup>⑥</sup>意味は「地が低ければ穏やかに進み、地が高ければ激動が起こる。」6、「知備此五者，人君天地矣。」<sup>⑦</sup>意味は「五害に備えることができれば、人は天地を支配することができる。」

7、「常以秋歳末之時，閱其民，案家人比地，定什伍口数，別男女大小。」<sup>⑧</sup>意味は「秋が終わるたびに、住民の戸籍と土地を検査して、人口を確認して、男女老幼の人数をそれぞれ

---

① 『管子校注』（下）卷十八「九守」一〇四三頁。

② 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五〇頁。

④ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五一頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五四頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五五頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五八頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。



統計する。」8、「天地和調，日有長久。」<sup>①</sup>意味は「天と地が調和し、日が長いのである。」

9、「春三月，天地乾燥，水糾列之時也。」<sup>②</sup>意味は「春の3月は気候が乾燥して水が少なく流れが細かい時期である。」10、「天氣下，地氣上。」<sup>③</sup>意味は「だんだん暖かくなってきて、寒さも消えてきた。」11、「地有不生草者，必為之囊。」<sup>④</sup>意味は「近くの不毛の地では、ダムを掘らねばならない。」12、「歲埤増之，樹以荆棘，以固其地。」<sup>⑤</sup>意味は「堤防は年ごとに補修して、堤の上にはいばらの灌木を植えて、堤の土を固める。」13、「當夏三月，天地氣壯。」<sup>⑥</sup>意味は「夏の3ヶ月間、自然界は激しく変化する。」14、「天地湊沕。」<sup>⑦</sup>意味は「天と地が凝集した状態を現れる。」15、「天地閉藏。」意味は「天と地が閉じた状態を現れる。」16、「冬作土功，発地藏，則夏多暴雨，秋霖不止。」<sup>⑧</sup>意味は「冬に土工をして、地気を発散すれば、夏には豪雨が多く、秋には霖雨がとまらない。」

「地員」篇に三箇所ある。1、「地潤数毀，難以立邑置廬。」<sup>⑨</sup>意味は「地は濡れて壊れやすく、城も塙も築きにくいのである。」2、「山之上命之曰泉，其地不乾，其草如茅与走，其木乃櫛。」<sup>⑩</sup>意味は「山頂には「懸泉」という場所がある。土を乾燥しないで生の草は茅草と薺草、木は櫛、地を2尺掘れば泉が見える。」3、「其地其樊，俱宜竹箭，藻龜檣檀，五臭生之。」<sup>⑪</sup>意味は「ここの土地にも、ここの山にも、竹、矢、棗、獲、憎木、檀、そして五つの香りのある植物が適している。」

---

① 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇五九頁。

② 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六二頁。

③ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

④ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷十八「度地」一〇六三頁。

⑨ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇七二頁。

⑩ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一〇八五頁。

⑪ 『管子校注』（下）卷十九「地員」一一〇一頁。

「形勢解」篇に二十六箇所ある。1、「地生養万物，地之則也。」<sup>①</sup>意味は「地は、万物を育てる、これは地の法則である。」2、「地不易其則，故万物生焉。」<sup>②</sup>意味は「地はその法則を変えないで、だから万物は生長する。」3、「故用則者安，不用則者危，地未嘗易其所以安也。故曰：地不易其則。」<sup>③</sup>意味は「だから、法則に従えば安全、守らなければ危険になる。地はその法則を変えることなく、常に安定しているのである。だから、「地不易其則」と言う。」4、「天覆万物而制之，地載万物而養之，四時生長万物而收藏之，古以至今，不更其道，故曰：“古今一也。”」<sup>④</sup>意味は「天は復育して万物を制御して、地は載せて万物を育て、四時は生長して万物を隠している。昔からこのしきたりは変わらない。だから「古今一也」と言う。」5、「故虽不用犠牲圭璧禱于鬼神，鬼神助之，天地与之，举事而有福。」<sup>⑤</sup>意味は「故に、牛や羊と玉器を使わずに神や鬼に祈りを捧げても、鬼神も助け、天地も支援してくれるので、何をしても幸せである。」6、「故虽用犠牲圭璧禱于鬼神，鬼神不助，天地不与，举事而有禍。」<sup>⑥</sup>意味は「故に、牛や羊と玉器で鬼神に祈りを捧げても、鬼神は助けてくれず、天地も支援してくれず、何事も災いを招き。」7、「地之裁大，故能兼載万物。」<sup>⑦</sup>意味は「地の材器が大きいので、万物を載ることができる。」8、「地公平而無私，故小大莫不載。無棄之言，公平而無私，故賢不肖莫不用，故無棄之言者，参伍于天地之無私也；故曰：“有無棄之言者，必参之于天地矣。”」<sup>⑧</sup>意味は「天は公平で私心がなくて、だから美と悪は覆らないところがなく、地は公平で私心がなくて、だから小さいと大きいは何も載せないことがなく。廃棄できなければ公平無私ですから賢も不肖も応用できる。だから、廃棄することができない言葉は、天地のように私心がありえない。だから、「有

---

① 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六八頁。

② 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六八頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六八頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一六九頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七三頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七三頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七七頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七八頁。

無棄之言者，必参之于天地也」と言う。」9、「天生四時，地生万財，以养万物，而無取焉。明主配天地者也，教民以時，勸之以耕織，以厚民养，而不伐其功，不私其利。故曰：“能予而無取者，天地之配也。”」<sup>①</sup>意味は「天には四時があり、地には万財があり、それらはこれによって万物を養育して、いかなる報酬も取らない。明君は天と地に比してふさわしい人で、人民に時間どおりに生産するように教育し、人民が織を耕すことを奨励して、これによって人民の生活を高め、その功を誇ってその利を独占することをしない。だから、「能予而無取者，天地之配也」と言う。」10、「地大国富，民衆兵強，此盛満之国也。」<sup>②</sup>意味は「土地が広く、国が豊かで、人口が多く、軍隊が強い、これが繁栄の国である。」11、「古者武王地方不過百里，戦卒之衆不過万人，然能勝攻取，立為天子，而世謂之聖王者，知為之之術也。桀紂貴為天子，富有海内，地方甚大，戦卒甚衆，而身死国亡，為天下僂者，不知為之之術也；故能為之，則小可為大，賤可為貴；不能為之，則虽為天子，人犹奪之也；故曰：“巧者有余，而拙者不足也。”」<sup>③</sup>意味は「むかし周の武王は、土地は百里、兵は万人にすぎませんでしたが、これに勝って天子になった。後に聖王と呼ばれるようになったのは、国を治めて君と為す術を知っていたからである。桀、紂は貴天子と為し、海内に富み、土地は甚だ広く、兵は甚だ多く、身を殺して国を滅ぼし、天下に殺され、国を治めて君と為す術を知らず。故に上手に国のため、小さくなることができて大きくなって、安くなることができて高くなる。国を為すのが下手な者は、天子になっても、人は奪う。だから、「巧者有余，而拙者不足也」と言う。」12、「明主上不逆天，下不圯地，故天予之時，地生之財。乱主上逆天道，下絶地理，故天不予時，地不生財；故曰：“其功順天者，天助之，其功逆天者，天違之。”」<sup>④</sup>意味は「明君は上では天を背かず、下では地を廢せず、だから天は彼に有利な天の時を与え、地は彼のために富を生産する。昏君は上では天道に背き、下では地理に背いているので、

---

① 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一七九頁。

② 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八二頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八五頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八六頁。

天は彼に有利な天の時を与えず、地も彼に富を生産することを与えない。だから、「其功順天者，天助之，其功逆天者，天違之」と言う。」<sup>13</sup>、「古者武王，天之所助也，故虽地小而民少，犹之為天子也。桀紂，天之所違也，故虽地大民衆，犹之困辱而死亡也；故曰：“天之所助，虽小必大。天之所違，虽大必削。”」<sup>①</sup>意味は「昔、周の武王は天に助けられた君主でしたから、土地が小さくても、人口が少なくても、天子になることができた。桀と紂は天の制す君主で、土地は大きくても、人口は多くても、辱められて死ぬのである。だから、「天之所助，虽小必大。天之所違，虽大必削」と言う。」<sup>14</sup>、「山，物之高者也；地陰穢不平易，則山不得見；人主犹山也，左右多党比周以壅其主，則主不得見；故曰：“山高而不見，地不易也。”」<sup>②</sup>意味は「山は、物の中で一番高いである。しかし、地面は陰しく、山も見えない。人君は山のようなものである。左右の近臣が徒党を組んで君主を欺いているから、君主にも見えない。だから、「山高而不見，地不易也」と言う。」

「立政九敗解」篇に二箇所ある。1、「遼遠之地謀，辺境之士修，百姓無圉敵之心。」<sup>③</sup>意味は「遠くの国土は失われ、辺境の戦士は怠け、民は敵を防ぐ闘志を失う。」2、「被求地而予之，非吾所欲也。」<sup>④</sup>意味は「敵国が彼らに土地を割ろうとするのは、当然ながら我々の意図したことではない。」

「版法解」篇に六箇所ある。1、「版法者，法天地之位，象四時之行，以治天下。」<sup>⑤</sup>意味は「法とは、天地の方位に倣って、四時の運行を模擬して、天下を治めようとするものである。」2、「是故以天地日月四時為主為質，以治天下。」<sup>⑥</sup>意味は「そこで、天地、日月、四時を用いて、主宰として、根拠として、天下を治めようとしたのである。」3、「地載而

---

① 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八六頁。

② 『管子校注』（下）卷二十「形勢解」一一八九頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十一「立政九敗解」一一八九頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十一「立政九敗解」一一九二頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一一九六頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇三頁。

無棄也，安固而不動，故莫不生殖。」<sup>①</sup>意味は「地は万物を載せて捨てず、安定している。だから育たないものはない。」4、「故曰：法天合德，象地無親。」<sup>②</sup>意味は「だから、「法天合德、象地無親」と言う。」5、「非有怨乃除之，所事之地常無怨也。」<sup>③</sup>意味は「怨みがあるから消すのではなく、常に怨みが起きないようにするのである。」6、「象地無親，無親安固。」<sup>④</sup>意味は「象地無親，無親安固。」

「明法解」篇に一箇所ある。「故君臣相与，高下之处也，如天之与地也。」<sup>⑤</sup>意味は「ですから君臣の上下は、天と地のようなものである。」

「巨乘馬」篇に三箇所ある。1、「則五衢之内阻棄之地也。」<sup>⑥</sup>意味は「全国五方の地は廃棄の地となる。」2、「是春失其地，夏失其苗，秋起繇而無止，此之謂谷地数亡。」<sup>⑦</sup>意味は「これは春に耕作を誤る、夏に苗を草切ることを誤る、秋にまた際限なく徴発する、それは食糧、土地が絶えず喪失するということである。」

「乗馬数」篇に四箇所ある。1、「戦国修其城池之功，故其国常失其地用。」<sup>⑧</sup>意味は「戦争をしている国は、城の建設に力を入れている。ですから、そういう国は農業ができないことが多いのである。」2、「出準之令，守地用人策，故開闢皆在上，無求于民。」<sup>⑨</sup>意味は「平準の号令を発して、農業の生産を適時に掌握し、物価の政策も適時に掌握したのですから、経済の開放と閉収の主導権はすべて国家にあり、庶民に直接求めないのである。」3、「此齐力而功地，田策相圓。」<sup>⑩</sup>意味は「彼らは皆同じ労力をかけて農業に従事しており、彼らの農業生産を掌握することは国の物価政策を掌握することと両立している。」4、「章

---

① 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇四頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十一「版法解」一二〇六頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十一「明法解」一二二〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二三頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十一「巨乘馬」一二二三頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬数」一二三二頁。

⑨ 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬数」一二三二頁。

⑩ 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬数」一二三三頁。

四時，守諸開闢，民之不移也，如廢方于地此之謂策乘馬之數也。」<sup>①</sup>意味は「四時の物価の変化を制御して、市場の収放の全権を掌握すれば、百姓の安定は、四角いものを平地に置くようなものである。」

「国蓄」篇に二箇所ある。1、「分地若一，強者能守。」<sup>②</sup>意味は「同じ土地なら、強い者は上手に使い熟す。」2、「是壤地尽于功賞，而稅臧殫于繼孤也。」<sup>③</sup>意味は「その結果、土地は論功行賞に充てられ、税収は遺児の養育に充てられた。」

「山国軌」篇に一箇所ある。「龍夏之地，布黃金九千，以幣貨金，巨家以金，小家以幣。」<sup>④</sup>意味は「竜夏地区では、金九千斤を貸し付け、貨幣を使って金を補助し、大家族は金を使い、小家族は貨幣を使うことができる。」

「山権数」篇に十一箇所ある。1、「天以時為權，地以財為權，人以力為權，君以令為權；失天之權，則人地之權亡。」<sup>⑤</sup>意味は「天は四時の変化でその変化を体現し、地は財物の多寡でその変化を体現し、人は能力の高低でその変化を体現し、君主は命令を下すことでその変化を体現する。君主が天の権力を握れなければ、人や地の権力も握れない。」2、「何為失天之權則人地之權亡？」<sup>⑥</sup>意味は「なぜ天の権を握れなければ、人と地の権を握れないので。」3、「人地之權皆失也。」<sup>⑦</sup>意味は「人と地の権皆を失う。」4、「故天毀地，凶旱水洸，民無入于溝壑乞請者也。」<sup>⑧</sup>意味は「天災で土地が荒らされても、干ばつで冠水しても、溝で死んだり、街で物乞いをしたりする人はいません。」5、「管子対曰：“国無制，地有量。”桓公曰：“何謂国無制地有量？”」<sup>⑨</sup>意味は「管仲は、「国には固定不変の政策はない。土地によって生産量の差がある」と答えた。桓公は言った、「国に固定不変の政策

---

① 『管子校注』（下）卷二十一「乗馬数」一二三七頁。

② 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二六四頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十二「国蓄」一二七五頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十二「山国軌」一二九四頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三〇〇頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三〇〇頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三〇〇頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三〇〇頁。

⑨ 『管子校注』（下）卷二十二「山権数」一三〇六頁。

がないというのは、土地の生産量の違いですか?」 6、「地量百畝，一夫之力也。」<sup>①</sup>意味は「一人の農民は、普通 100 畝の畑を耕す。」 7、「故地有量，国無策。」<sup>②</sup>意味は「ですから、土地の生産量にばらつきがなければ、国に財テクというものがないし、固定した政策もない。」 8、「桓公曰：“何謂御神用宝？”管子対曰：“北郭有掘闕而得亀者，此檢数百里之地也。”桓公曰：“何謂得亀百里之地？”」<sup>③</sup>意味は「桓公は言った、「御神用宝とは何ですか?」管仲は、「北郭には、地を掘って亀を得た者がいる。この亀を使えば、百里の土地に相当する利益が得られる」と答えた。桓公は、「亀を得て百里の地に相当するとは何ですか?」」

「山至数」篇に六箇所ある。1、「民不得以織為繆綃，而狸之于地。」<sup>④</sup>意味は「民が死んでも絹を棺を覆うものとして地に埋めてはいけない。」 2、「故幣乘馬者，布幣于国，幣為一国陸地之数，謂之幣乘馬。」<sup>⑤</sup>意味は「したがって、貨幣の計算計画とは、この需要量を全国的に推計して、貨幣の数字を全国の土地の数に対応させることである。これを貨幣の計算計画という。」 3、「禽獸羊牛之地也。」<sup>⑥</sup>意味は「家畜や牛や羊が育つのに良い場所である。」 4、「此出諸礼義，籍于無用之地，因捫牢策也，謂之通。」<sup>⑦</sup>意味は「この政策は、祭祀儀礼から出発して、山林の無用の地に収入を得て、牛や羊の市場を独占する政策でした。まさに国家理財政策の『徹底』である。」 5、「有山処之国，有汜下多水之国，有山地分之国，有水洿之国，有漏壤之国。」<sup>⑧</sup>意味は「山地があり、窪地で水が多い地域があり、山地平野が半々の地域があり、年中水があふれて害をなす地域があり、土壌が水分を失っている地域がある。」 6、「山地分之国，常操国谷十分之三。」<sup>⑨</sup>意味は「山地平野が半々の

---

① 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇六頁。

② 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三〇六頁。

③ 『管子校注』(下) 卷二十二「山權数」一三一五頁。

④ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三三七頁。

⑤ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四一頁。

⑥ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四六頁。

⑦ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四六頁。

⑧ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四八頁。

⑨ 『管子校注』(下) 卷二十二「山至数」一三四九頁。

地域ではまだ食糧の10分の3を備蓄することができる。」

「地数」篇に六箇所ある。1、「地数可得聞乎」<sup>①</sup>意味は「地理的条件を利用した財テクの方法を教えてくださいませんか?」2、「地之東西二万八千里，南北二万六千里。」<sup>②</sup>意味は「国土の距離は東西二万八千里、南北二万六千里である。」3、「天非独為湯雨菽粟，而地非独為湯出財物也。」<sup>③</sup>意味は「天が専ら商湯のために食糧を下ろすのでもなく、地が専ら商湯のために財物を生むのでもない。」4、「請問天財所出，地利所在。」<sup>④</sup>意味は「天然資源はどこから来ますか。地の利益はどこにあるか。」5、「此天財地利之所在也。」<sup>⑤</sup>意味は「それこそが天と地の財利である。」6、「以天財地利立功成名于天下者誰子也?」<sup>⑥</sup>意味は「天と地の財利を利用して、功を立てて、天下に名を成した人は誰か。」

「国準」篇に一箇所ある。「彼菹菜之壤，非五谷之所生也，麋鹿牛馬之地。」<sup>⑦</sup>意味は「雑草の蔓延る窪地で、食糧の生育には不向きですから、麋鹿牛馬を飼育する牧場とすべきである。」

「輕重甲」篇に三箇所ある。1、「今為国有地牧民者，務在四時，守在倉廩。国多財則遠者来，地辟举則民留处，倉廩实則知礼節，衣食足則知荣辱。」<sup>⑧</sup>意味は「すべて一国の君主は、四時の農事に力を入れ、食糧の貯蔵を確保しなければならぬ。国の財力が豊かであれば、遠方の人々は移り住んでくることができ、荒地の開発がうまくいけば、自国の民は安心して留まることができる。食糧が豊かになれば、人々は礼儀を知り、衣食が豊かであれば、人は荣辱を知る。」2、「然則地非有広狭，国非有貧富也，通于発号出令，審于輕重之数使然。」<sup>⑨</sup>意味は「このことからわかるように、国土に広狭なく、国に貧富なく、要は令を

---

① 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三五二頁。

② 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三五二頁。

③ 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三五二頁。

④ 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三六〇頁。

⑤ 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三六〇頁。

⑥ 『管子校注』(下) 卷二十三「地数」一三六〇頁。

⑦ 『管子校注』(下) 卷二十三「国準」一三九四頁。

⑧ 『管子校注』(下) 卷二十三「輕重甲」一四三二頁。

⑨ 『管子校注』(下) 卷二十三「輕重甲」一四三六頁。



下すことと軽重の術に通じていることである。」

「輕重乙」篇に七箇所ある。1、「地之東西二万八千里，南北二万六千里。」<sup>①</sup>意味は「国土の距離は東西二万八千里、南北二万六千里である。」2、「請与之立壤列天下之旁，天子中立，地方千里，兼霸之壤三百有余里，侏諸侯度百里，負海子男者度七十里。」<sup>②</sup>意味は「天下四方に「壤列」の制度を設けなさい、天子は中央にいて、統治地方は千里、大きな諸侯国は三百余里、普通の諸侯国はおおよそ百里、海に近い子爵、男爵はおおよそ七十里である。」3、「故此所謂善因天時，辨于地利，而辟方都之道也。」<sup>③</sup>意味は「これが天の時を善用し、地の利を明察して、大貯水池を掘る方法である。」4、「吾挙兵而攻，破其軍，并其地，則非特四万二千金之利也。」<sup>④</sup>意味は「我々が兵を挙げて、敵を破り、敵の地を占領すれば、四万二千の利益だけではない。」5、「故遂破其軍，兼其地，而虜其將。故未列地而封，未出金而賞，破萊軍，并其地，禽其君。」<sup>⑤</sup>意味は「彼らの軍隊を次々と攻略し、彼らの土地を併合し、彼らの敵將を捕らえた。そこで、土地を出して官に封じること、黄金を出すことも待たずに、萊国の軍隊を破り、萊国の土地を併合し、王を捕らえた。」

「輕重丁」篇に七箇所ある。1、「地重投之哉，兆国有慟。」<sup>⑥</sup>意味は「地震は疫病の前兆で、国に不幸が起こる。」2、「陰雍長城之地，其于齊国三分之一，非谷之所生也。」<sup>⑦</sup>意味は「平陰堤防と長城の敷地は齊国の土地の3分の1で、穀物を生産する場所ではなく。」3、「朝夕外之，所墮齊地者五分之一，非谷之所生也。」<sup>⑧</sup>意味は「潮に囲まれて海水が水没した土地は、五分の一ほどで、穀物を生産する場所ではなく。」4、「三敗殺君二重臣定

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四三頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四四三頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五五頁。

④ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五七頁。

⑤ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重乙」一四五七頁。

⑥ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一四八七頁。

⑦ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

⑧ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

社稷者、吾此皆以孤突之地封者也。故山地者山也、水地者沢也、薪芻之所生者斥也。」<sup>①</sup>意味は「過去の両国の絶え間ない衝突の中で、国境の上で孤立して突出している土地を魯に譲らなければならない。斉国の山地は山であり、水地は沢であり、柴草の生えた土地であるだけである。」<sup>5</sup>、「托食之主及吾地亦有道乎？」<sup>②</sup>意味は「一つは『居候の主』の問題と、もう一つは土地を削られた問題ですが、それについては何か方法があるか。」

「輕重己」篇に一箇所ある。「下作之地、上作之天、謂之不服之民。」<sup>③</sup>意味は「働きもせず、ただ天と地の恵みに頼る者は、これを不服の民と謂。」

『管子』全書に対して 214 処の地の字の分析を通して、地の主な意味が地、土地、国土であることが判明した。

## 第二節、地利思想

『管子』の『地圀』には地図を論じるほかに、『地員』、『度地』、『水地』など土壤地理、植物地理、水文地理および採鉱方面の地理知識がある。したがって、『管子』は古代の重要な地理書とも言える。

『管子』の地政論は、すなわち地は政の基なり、地政の思想は、鮮明的な中国の公文化と農耕文明の特色が有している、国家学説と政治経済学に対する貢献で、世界的な意義を持っている。『管子』の『乗馬』に「地政」の一節が書いてある。

「地者、政之本也。朝者、義之理也。市者、貨之準也。黄金者、用之量也。諸侯之地、千乗之國者、器之制也。五者、其理可知也、為之有道。地者、政之本也、是故地可以正政也。地不平均和調、則政不可正也。」（『乗馬』）

（土地は政治の根本である。朝廷は儀法の体現である。市場は商品需給の状況を示す指標である。金は財貨を計る道具である。一つの諸侯国が兵車千台を持つ、軍備の制度である。

---

① 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

② 『管子校注』（下）卷二十四「輕重丁」一五〇〇頁。

③ 『管子校注』（下）卷二十四「輕重己」一五三三頁。

この5つは、理屈は理解できますし、実行にも一定のルールがある。土地は政治の根本である。だから、土地は政事を調整することができる。土地が公平でなければ、政治活動は公正ではありえない。)

齊の宰相管子は古代中国における最初の名実ともに土地問題の専門家であった。『管子』の本は大量に土地の問題の紙幅に及んで、異なった章の中で、『管子』は土地の視点が異なっていて力点が異なっているにもかかわらず。『水地』、『度地』、『地員』、『地数』などが土地を論じ、『臣乗馬』、『乗馬数』などが土地に関する食糧経済問題を論じている。

『管子』は自然哲学の面から次のように述べている。

「地者、万物之本原，諸生之根菀也，美惡賢不肖愚俊之所生也。」（『水地』）

（地は万物の根源であり、諸生の根で、美、悪、賢、不肖、愚俊の生成なり。）

『管子』は、天と地の間には人間の力ではなく、人間の意志でもない力があり、天と地はその力の源泉だと考えた。山、淵、沢、水に具体的に主導力の魔法のようなものがあるが、管仲は政治家の心を持って、常にマクロの視点からの政治経済学に長けている。『管子』は土地の政治的役割は土地が財を生むことだと意識していた。

「国多財則遠者来，地辟举則民留处。」（『牧民』）

（国の財力が豊かであれば、遠方の人々は移り住んでくることができ、荒地の開発がうまくいけば、自国の民は安心して留まることができる。）

「地之生財有時，民之用力有倦，而人君之欲無窮。」（『權修』）

（土地は富を生産して、季節の制限を受ける。人民は労力を費やして、疲れる時がある。しかし、人君の欲望には限りがない。）

『管子』は素朴な労働の富論と土地の富論の思想を持っていて、これも『管子』の哲学思想が実った優れた果実の一つである。なぜなら、労働価値論であれ、土地の富論であれ、この二つの理論はいずれも西洋で複雑で長期的な思考と理論創生の過程を経てきたからであ

る。<sup>①</sup>

春秋戦国時代は、中国の歴史の大変革の時期で、時代の流れの管子の経済思想を反映するために、封建君主、地主階級の立場を生成した。国家は貴粟重農政策を推進して農業の発展を保証し、国家の安定と強さを維持することを主張する。『管子』には農業生産を重視した記述が多い、例えば『小問』篇では、管仲が斉の桓公に、どうすれば国を豊かにすることができるかという質問に、「力地而動于時，則国必富矣。」（土地を耕して農時に合うようになれば、きっと国は豊かになる。）と答えている。これはつまり管仲が、土地の耕作に心を込めて努力し、合理的でタイムリーな農業の手配をすれば、国は豊かになると考えていることを示している。また、『治国』の中でも言及している、「夫富国多粟，生于農，故先王貴之。」（国が豊かで食糧が充実したのは農業のおかげで、先代の聖王は農業を重視した。）天下を制覇するためには、国富や粟が多くなければならないという意味であるが、それは農業に由来するので、先王は農業を重視した。このような論述は『管子』の中にたくさん出てくるが、同時に『管子』では一連の農業組織管理の思想を提起している。君主は農務に親しみ、民の功力に順じて、五穀を養う。これらの鮮明な時代の特性を反映して、農業を重視するだけでなく、斉国の絶え間ない強さは、古代国家の経済や社会政治に非常に大きな影響を与えた。その後の歴代王朝は農業を第一に重視し、国家の根幹としてきた。

## 第二節、土地の生態環境

中国古代の先秦時代には、今のように系統的な生態環境に関する科学理論と環境保護の措置がなかったが、多くの思想家が生態環境の存在と利用及び自然資源保護に対して科学的な認識を持っていた。春秋時代の管子は1つの典型的な代表である。管子の自然環境の理論の中で、表現の最も際立っているのはその「土地の状況に応じて」の生態系の意識である。

---

<sup>①</sup> 「『管子』地政論与土地問題」龔武、『第十一届全国管子学术研讨会论文集』（三）、2016年12月。

管子のこの比較的系統の理論の中で、かなり豊かで科学的な思想の内包を持っている。<sup>①</sup>

『管子』という本の中で、管仲は有名な「因天材，就地利」という考え方を提唱している。彼は言う、「凡立国都，非于大山之下，必于广川之上；高毋近旱，而水用足；下毋近水，而溝防省；因天材，就地利，故城郭不必中規矩，道路不必中準繩。」（都をつくるのは、山の下ではなく、大河の近くでなくてはならない。高い干ばつに近いことはできない、水の十分な使用を保証する。水に近くなつてはいけない、溝堤の修築を節約することである。天然資源に頼り、地勢の利に頼る。だから、城郭の構築、こだわって方円の規則に合う必要はありえない、道路の敷設も、準繩にこだわる必要はありえない。）（『乗馬』）『管子』はここで主に「国の首都」の具体的な位置について提出した一つの特殊な「因天材，就地利」の命題であるが、人類の生存の環境の認識に対して、その「土地の状況に応じて」は生態哲学の中で一つの重要な普遍的な意義の観点を持つ。

『管子』は、土地の状況に応じて、「天と地の道」に順応することだと考えている。『管子』の中で、「天道」は多く「天の道」、あるいは「天地の道」と称する。『管子』は指摘する、「得天之道。其事若自然。失天之道，虽立不安。」（天の道を得て、その事は若自然で。天の道を失い、立つのは不安。）（『形勢』）

『管子』は、土地の状況に応じて、また「天地の道」順応の基礎の上で更に高い境地に達しなければならないで、この更に高い境地は提唱する「自然に背くことがない」、「人と天と調和」で、「人と天との調和」とは、人間の個体や無数の個体からなる社会が、「天」すなわち自然と調和した振る舞いをしているという主張である。そうすれば「天地の美が生まれる。」

---

<sup>①</sup> 「論『管子』“因地制宜”的環境理論及其特点」張全明、『管子学刊』、2010年第4期。

### 第三節、地政要公

地政は、『管子』が発明した政治経済学の用語で、土地と国、それによって経済と政治の二つの核心的な要素を緊密に一つにして表現する。この地政要公の概念は、中国の先人たちが二千六百年前から土地が国の中での基礎的な地位を理解し、しっかりと手に入れていたことを示している。<sup>①</sup>

『管子』の地政論の大前提は、土地は王権に属するという原始的な土地公有の理念であった。地政は管子が発明したものであり、廢私立公も管子が発明したものである。両者は一つの文章の中には現れないが、管子の治国の指導思想とその一貫した思想体系によって、両者の間に相互文関係が存在する可能性は自明である。

土地の客観的な実在の属性は、それがあつた種の自然と既成の力であることを決定して、それが人に提供するすべては、すべての時代の社会と国家の民族特徴を持っている。一方では国の第一の物質的基盤で、まさに土地の面積の大きさと質（いわゆる地理的要素）は国家の経済・文化の方向を決定して、それで世はいわゆる地理の環境の決定論の学派がある。

『管子』の道教思想は濃厚で、管子の哲学観念の中で、水は万物の生命の本源であると考えて、『水地』の一篇の初めのところでは、地についての認識に言及して、「地者、万物之本原、諸生之根苑也。美惡賢不肖愚俊之所生也。水者、地之血氣、如筋脉之通流者也。」（土地は万物の根源で、すべての生命の根を植えるところで、すべての美、悪、賢、不肖、愚かさ、俊才の発生の源で、水は土地の血気である。）この『管子』には、管子の生命の根源論として水があることが示されているが、このように管子は、土地を万物の成長の源として重要視していることがわかる。『管子』は『内業』の中で心の修養については「凡そ人の生は、天はその精を出し、地はその形を出し、これに合わせて人となり」と言い、つまり、天が人間に精気を与え、地が人間に形体を与えているのである。そして、天と地の調和を強調

---

<sup>①</sup> 「『管子』地政論与土地問題」龔武、『第十一届全国管子学術研討会論文集』（三）、2016年12月。

している。

## 第四節、地力均分

『管子』の土地観念ではまず土地を合理的に分配すべきで、『乗馬』では「道曰：均地分力，使民知時也。」（事理は我々に土地を分租に換算して、分戸経営を実行することを教えて、人民自身に農業の時間を急がせることができる。）と述べている。天道は土地を公平に農民に分配して耕作することを要求して、人々に農民の時間を把握することを促す。『管子』の言う「均等分力」には、土地分配制度だけでなく、土地の税制度も含まれる。管子の定めた土地分配制度は西周以来の「井田制」に基づいており、900 畝の土地を 100 畝ずつ 9 分割して「一田」とし、外側の 8 つの土地を 100 畝ずつ農民に耕作させ、そのうちの 1 つを公田とする。管子も百畝を土地の計量単位として農民に土地を分配しており、『山権数』には「地量百畝、一夫之力也。」（一人の農民は、普通 100 畝の畑を耕す。）と明記されている。1 つは、土地を公平に分配することである。2 つ目は合理的に土地税収を行うことで、『管子』は「相地而衰其政、則民不移。」（土地の肥やせに応じて税を徴収すれば、民が外に出ることはありえない。）（『小匡』）土地に対する徴税の根拠は、土地の肥瘦の状況であり、「賦禄以粟、案田而税。」（農民への賦課は、食糧の量から計算して、土地の肥えやせに応じて徴収する。）（『大匡』）であったとされている。

春秋時代、奴隷制の経済は次第に瓦解して、封建制の経済は次第に発展して、国家は経済の策略を改革する必要がある。管仲は政治学者であり哲学者であり経済学者でもあった。

『管子』の経済思想は学界の研究の重点で、その中で非常に重要な 1 つの経済思想は農業を基本とする重農思想である。<sup>①</sup>農業をすることは、国が豊かになり、軍隊が強くなり、人々が安らかに暮らすための基礎である。『治国』にあるように、「粟也者，民之所帰也；粟也

---

<sup>①</sup> 「『管子』的土地観—“均分地力” “尽地力” “因地制宜”」呉妙、『2019 第十四届全国管子學術研討会交流論文集』、2019 年 5 月。

者、財之所歸也；粟也者、地之所歸也；粟多則天下之物尽至矣。」（食糧は、庶民を引きつけることができ、富を招くことができ、領土の開拓にもつながる。食糧が多くなれば、天下の物産が集まってくる。）農業で生産される食糧は農民と富と国土の帰属の重要な根拠である。管子は農民が土地でまじめに働き、自分と軍隊と国のために十分な食糧を提供すべきだと考えた。

春秋時代は国が四分五裂していて、統一的な政治環境がなく、文化的にも比較的開放的で、支配階級の人民に対する思想統制は統一国家の時ほどひどくなかった。各国の君主が人材を求めて改革を試みたことも、開明的な思想と先鋭的な改革を刺激した。管子のある斉国の地理位置は東の海に隣接して、西の国は各国に面して、地理環境の開放性は開放的な文化環境をもたらして、管子の思想は多くの思想家の思想を融合した。これらの要因は、管子を認識することができるが、国民の土地の重要性は、より貴重なのは、土地の保護措置の持続、可能な開発の概念を具現化するために、このような政治思想は、現在でも、経済のグローバル化の時代に、もっと見逃せない意義があるであろう。



## 終わりに

以上は、管子その人、その事績と『管子』という書物を紹介した。中には『管子』における「幣」、「農」、「工」、「商」、「賦」、「税」、「水」、「地」という文字の調査と分析によって、管子の経済思想と意義を述べてきた。

『管子』の文章は、戦国時代から秦漢期までの長い時期に於いて、様々な作者によって書かれたものとみられる。故に今までの管子研究論文は、管子の思想を断片的に考察するものが多かった。本研究は上記の研究方法を通じて、『管子』の各文章の間にいくつかの一貫した思想があると確認した上で、管子の経済思想と政策の内容をより多角的に究明した。また、『管子』の各文章の間に不一致の思想もあることを確認して、その不一致の原因の究明に努めた。

本研究は、『管子』の各文章の間に一貫した思想として、農業重視の姿勢がみられるとしている。農業を重視することは、人民の安住の保証であり、国家統治の有力な物質的基盤であり、社会経済の発展と富国強兵を促進するための保証となることでもあるとしている。

「五谷食米，民之司命也。」（食糧は、人民の生命の支配者である。）（『国蓄』）「明王之務，在于強本事，去無用，然後民可使富。」（英明な君主の任務は、農業を強化し、無用の長物の生産を廃止し、そして人民を豊かにすることにある。）（『五輔』）つまり、食糧は人民の生活必需品であり、人々はまず食事の問題を解決しなければ、他の諸事業に従事することができない。だから、国を豊かにするにはまず国民を豊かにし、豊かな国民が国を治めることになる。「善為国者，必先富民，然後治之。」（故に、上手に国を管理する君主は、まず民を豊かにしてから治めなければならない。）「凡治国之道，必先富民，民富則易治也，民貧則難治也。」（およそ国を治める道理は、まず民を豊かにしなければならない。民が豊かであれば治めやすく、貧しければ治めにくくなる。）「必国富而粟多也。夫富国多粟，生于農，故先王貴之。」（国が豊かで糧が多いからに違わない。国が豊かで食糧が充実したの

は農業のおかげで、先代の聖王は農業を重視した。）（『治国』）国民には十分な生活物資があり、安定した経済的基盤があり、各人が楽に暮らし、この物質的基盤の上に、遵法奉公が可能になり、君主の命令に喜んで服従することが可能になり、君主が教化を施し、民を善に導くことが可能になり、国家が安定し秩序あるものになる。同時に、「民事農則田墾，田墾則粟多，粟多則国富，国富者兵強，兵強者戦勝，戦勝者地広。」（百姓が農業に従事すれば土地が開墾され、土地が開墾すれば食糧が増え、食糧が増えれば国が豊かになり、国富になれば兵力が強大になり、兵が強ければ戦争に勝ち、勝てば土地が広がる。）（『治国』）農業生産を発展させ、食糧の供給を増やすことは、富国強兵を実現し、領土を拡張し、諸侯を制覇するために必要であった。国の農業が強くなってこそ、国の軍隊も強くなり、軍隊が強くなれば戦争に勝つことができ、戦争に勝てば広大な国土を持つことができる。

そのために、本研究が取り上げた「幣」、「賦」、「税」、「商」、「工」、「水」および「地」に現れる経済思想は、すべて農業発展のために打ち出したものである。例えば、「幣」つまり貨幣の収放によって、社会の主要消費財である穀物の価格を統制でき、貨幣の社会的購買力を安定させる役割がある。「彼幣重而万物軽，幣軽而万物重。彼谷重而谷軽，人君操谷幣金衡而天下可定也，此守天下之数也。」（市場では貨幣の値が上がれば物価が下がり、貨幣の値が下がれば物価が上がり、食糧の値が上がれば金の値が下がる。人君が食糧と貨幣と金のバランスをとれば、天下の経済秩序は安定する。これも天下掌握の一つの方法だ。）（『山至数』）『管子』は貨幣の収放によって、社会の主要消費財である穀物の価格を統制する。『管子』貨幣調節思想の核心内容は「以重射軽，以賤泄平」である。社会にとって、貨幣が少なく物が多ければ、必然的に貨幣が重く物が軽くなり、逆に貨幣が軽く物が重くなる。「以重射軽」ことによって、市場のある種の軽い商品はすでに重くなって、そして価格が引き続き上昇する傾向があって市場の需給に不利になる時、「以賤泄平」を採用して、もとの「以重射軽」を替わる。その商品の価格がまた低くなった時には、また「以重射軽」を採用して、価格の回復を促す。このように繰り返すことで、貨幣の社会的購買力を安定させる。「税」の字は「禾」と「兌」からできており、国家は民から食糧を徴収し、支配

者の生活に必要な食糧を供給しなければならないので、農業重視は支配者の重要使命であることを強調した。「水」と「地」はなおさら農業にとって極めて重要なものなので、水利事業の建設や土地の整備が一層重要であるとしている。水は万物の源であり、水は人間の生産と生活と不可分である。「故曰：水者何也？万物之本原也，諸生之宗室也。」（水とは何でしょうか。水は万物の根源で、すべての生命の根である。）（『水地』）「水者，地之氣血，如筋脉之通流者也。」（水、則ち地の血気で、それは人身の筋脈のようで、大地の中で流通している。）（『水地』）昔から、人間の生活や生産には水が欠かせなかった。「夫民之所生，衣与食也；食之所生，水与土也。」（人民が生活するのは、衣食を除いてはない。食料は水と土を抜きにして生産される。）（『禁藏』）食糧と衣服は人民の生存の必需品であり、農業生産には水と土地が欠かせない。したがって、水は農業生産に不可欠なものである。

水利事業は国の貧富と政治の危機に関係する。『管子』は農業生産の需要から水を治め、水を利用することを重視している。旗印は鮮明に水利事業を興し、水害を取り除くことを国を治める根本大計と見なし、水利事業に対する特別な重視を表している。

「地者，万物之本原，諸生之根苑也。美惡賢不肖愚俊之所生也。」（地は万物の根源であり、諸生の根で、美、悪、賢、不肖、愚俊の生成なり。）（『水地』）土地は万物の根源で、すべての生命の根を植えるところで、すべての美、悪、賢、不肖、愚かさ、俊才の発生の源である。『管子』は、土地を万物の成長の源として重要視していることがわかる。『治国』にあるように、「粟也者，民之所歸也；粟也者，財之所歸也；粟也者，地之所歸也；粟多則天下之物尽至矣。」（食糧は、庶民を引きつけることができ、富を招くことができ、領土の開拓にもつながる。食糧が多くなれば、天下の物産が集まってくる。）（『治国』）農業で生産される食糧は農民と富と国土の帰属の重要な根拠である。管子は農民が土地でまじめに働き、自分と軍隊と国のために十分な食糧を提供すべきだと考えた。管仲は、土地の品質には優劣の区別があり、生産量には高低の区別があるため、土地の品質の善し悪しに基づいて課税標準を定めるべきだとみなしている。

一方、『管子』の各文章の間に不一致の思想として、本研究は「商」、「工」という文字に現われた経済思想が取り上げられた。管仲自身は商人の出身なので、商業の発展を重視する政策を取っている。『小匡』によると、国は商工業専用区を設置するため、原則的な指導意見を提出した。凡そ商工の民は、「不可使雑処，雑処則其言嘑，其事乱。」（彼らを雑居させてはならない。雑居すれば言うこともやることも同じではない。）（『小匡』）商工業専用区を設け、商工の民を集めて居住させ、工・商の二つの集団を形成した。その意義は商工業の専門レベルを高め、商工業の発展規模を拡大し、商工業の繁栄を促進する。これは一見「重農抑商」の農業思想に反するものとみられるが、管子は工業と商業は、生産力水準の向上、社会的生産と生活領域の拡大とともに出現した二つの経済部門として、国がよい政策を打ち出せばこの二つの経済部門は農業と相互依存し、相互促進し、共に発展できると考えたのである。士、農、工、商の4種類の職業によって、人口居住区を区分し、彼らに分業して仕事をさせ、安心して本業に従事させる。これは社会の安定と労働効率の向上に役立つとしている。

『管子』の思想内容があまりにも豊富で、本論考は『管子』経済思想を研究したのみで、さらなる掘り下げ研究する必要があると思われる。

また、本論考は、紙面、時間と能力の不足で、経済思想の追究のみにとどまり、『管子』における政治思想ないし哲学思想については言及しなかった。これらを今後の課題とした。

## 参考文献

著書類：

- 『東洋歴史大辞典』第二卷、平凡社、1975 年
- 『東洋の歴史』第一卷、人物往来社、1988 年
- 『東洋文化史概説』上野菊爾著、清教社、1937 年初版
- 『管子の研究』金谷治著、岩波書店、1995 年
- 『古代中国の開発と環境—『管子』地員篇研究』原宗子著、研文出版、1994 年
- 『史記』司馬遷著、商務印書館、1979 年
- 『西周史』許倬云著、三聯出版發行、1994 年
- 『管子集校』郭沫若、聞一多、許維通著、科学出版社、1956 年
- 『管子探源』羅根沢著、中華書局、1931 年
- 『管仲評伝』戦化軍著、齊魯書社、2001 年
- 『管子校注』全三冊黎翔鳳撰、梁運華整理、中華書局、2004 年
- 『管仲評伝』張力著、四川大学出版社、2005 年
- 『論管子』王京龍著、齊魯書社、2009 年
- 『管子思想研究概要』張艷麗著、齊魯書社、2009 年
- 『管子的霸權思想及其現代化』王日華著、世界經濟与政治、2007 年
- 『管子—中国最早的管理学文庫』蔡一著、高等教育出版社、2009 年
- 『中国文化史』李山著、北京師範大学出版社、2007 年
- 『經学研究集刊』（第 15 期）台灣師範大學經學研究所、2013 年

論文類：

- 「管子幼官攷」町田三郎、『集刊東洋学』、1959 年 5 月
- 「管子の思想—外言類を中心に—」町田三郎、『集刊東洋史』7、1962 年 5 月

- 「管子水地篇について」町田三郎、『集刊東洋学』35、1976年5月
- 「時令説について—『管子・幼官篇』を中心にして」町田三郎、『東北大学教養部文科紀要』第九集、1962年5月
- 「再び管子四篇について」町田三郎、『東北大学教養部紀要(人文科学篇)』第四号、1966年2月
- 「管子『侈靡篇』について」町田三郎、京都大学、『東洋史研究』44、1986年
- 「金谷治著『管子研究—中国古代思想史の一面』」町田三郎、京都大学、『東洋史研究』47、1988年6月
- 「『管子』研究の現状と課題」原宗子、『流通経済大学論集』19(1)、1984年9月
- 「管子の経済思想」穂積文雄、『先秦経済思想史論』、1942年
- 「中国古代の経済思想—『管子』の研究」長谷川誠一、『駒沢大学研究論集』、1967年
- 「『管子』を読む 君主の儉約と奢侈」寺出道雄、『三田学会雑誌』113-3、2020年3月
- 「「非古是今」史観と唐代諸子学の周辺 —『通典』に現れた『管子』の輕重論を中心に—」宮岸雄介、『明治学院大学教養教育センター紀要』17、2023年3月
- 「『管子』心術下・内業篇再考：兩篇の「祖本」における「心」の思想を中心に」熊奕泓、『東洋古典學研究』50、2020年10月
- 「『管子』「国蓄」篇を読む：君主と市場」寺出道雄、『三田学会雑誌』113-2、2020年7月
- 「『管子』に見られる経済思想：『史記』貨殖列伝との関連から」若江賢三、『東洋哲学研究所紀要』35、2020年
- 「『礼記』大学篇「八条目」と『管子』牧民篇と『老子』第五十四章 —全「天下」政治秩序の構想における封建と郡県との対立」池田知久、『斯文』134、2019年3月
- 「秦律における爵価再考—『管子』輕重甲篇の「金価四千」との関連」若江賢三、『人文学論叢』（愛媛大学人文学会 編）18、2016年

「春秋時代の農民の田の面積―『管子』治国篇の資料学的再検討」若江賢三、『愛媛大学法文学部論集. 人文学科編』38、2015年2月

「『管子』四篇の政治思想について」南部英彦、『研究論叢 人文科学・社会科学』（山口大学教育学部）64-1、2015年1月

「『管子』における押韻句の分布とその思想的背景」『文芸論叢』80、2013年3月、『故佐藤義寛教授追悼論集』再録

「『管子』の心術と内業再探」金東鎮、『中國思想史研究』33、2012年12月

「『管子』の「道」について」高田哲太郎、『中国研究集刊』53、2011年6月

「『管子』の聖人」高田哲太郎、『集刊東洋学』106、2011年

「『管子』勢篇に見る黄老思想の分析―齊・田常と越・范蠡の接点」谷中信一、『史艸』47、2006年11月

「『管子』水地篇の著述とその思想的特色」小川貴宏、『西南学院大学大学院文学研究論集』24、2005年1月

「水の哲学(4) 古代中国の水の思想(4) 『管子』を中心として」蜂屋邦夫、『季刊河川レビュー』33-2、2004年

「文献『管子』の領域編成」佐竹靖、『人文学報』（東京都立大）335、2003年3月

「安井息軒の漢籍享受―管子・管子纂詁」田中司郎、『東アジア日本語教育・日本文化研究』4、2002年3月

「『管子』法思想考(2) 解諸篇において」谷中信一、『中國古典研究』40、1995年12月

「『管子』法思想考―経言諸篇において-1-」谷中信一、『中國古典研究』38、1993年12月

「自然と生命：『管子』における法思想の特色について」久富木成大、『金沢大学教養部論集. 人文科学篇』29-2、1992年3月

「『管子』外言類の法思想について」横山裕、『中国哲学論集』17、1991年10月

「『管子』における頌水思想をめぐって」久富木成大、『金沢大学教養部論集. 人文科学篇』29-1、1991年8月

- 「『管子』経言類の法思想について」横山裕、『中国哲学論集』16、1990年10月
- 「管子「侈靡篇」について」町田三郎、『東洋史研究』1986年3月
- 「〈管子〉4篇の思想について-3-白心篇の思想」穴沢辰雄、『東洋学論叢』11、1986年3月
- 「管子「経済論」の一考察-1-」水上健造、『和光経済』8-1.2、1975年3月10、1967年6月
- 「管子「経済論」の一考察-2-」水上健造、『和光経済』9-2、1976年1月
- 「管子「経済論」の一考察-3-」水上健造、『和光経済』18-1、1985年11月
- 「管子「経済論」の一考察-4-」水上健造、『和光経済』22-1、1989年11月
- 「〈管子〉4篇の思想について-2-心術下篇と内業篇の思想」穴沢辰雄、『東洋学論叢』10、1985年3月
- 「『管子』4篇と『荀子』正名篇とにおける「ことば」の問題」石田秀実、『日本中国學會報』37、1985年
- 「『管子』の法思想：「外言」類以下を中心として」森田邦博、『中国哲学論集』10、1984年
- 「「管子」四篇における神と道」柴田清継、『日本中国學會報』36、1984年
- 「管子における統治観」緒形暢夫、『埼玉大学紀要. 教育学部. 人文・社会科学』31、1982年
- 「管子的君臣観初探」裴伝永、孫希国、『管子学刊』、1998年第1期
- 「管子的君主人格思想探析」孫聚友、『管子学刊』、1989年第2期
- 「試析『管子』中の農業科技思想」李艷紅、『广西民族大学学报』、2009年2月第1期
- 「浅談『管子』与『經濟論』的農業思想」曹俊傑、『管子学刊』、1998年第4期
- 「『管子』農業經濟管理思想概観」劉冠生、『管子学刊』、2005年第2期
- 「『管子』的農業科技思想初探」侯輝、『農業考古』、2013年第3期
- 「『管子』貨幣思想研究」譚曉麗、『管子学刊』、1996年第1期
- 「浅議『管子』的農業經濟思想」林承園、『全国第七届管子學術研討会交流論文集』、2012



年 4 月

「『管子』的貨幣思想析論」趙夢涵、『管子學刊』、2004 年第 1 期

「『管子』貨幣思想論」張龍海、『管子學刊』、1994 年第 1 期

「『管子』賦稅思想及其當代價值」王義忠、『稅務研究』、2015 年 8 月

「管子的財政思想」馬海濤、韋燁劍、『河北大學學報』、2019 年 9 月

「論『管子』的工商管理思想」宣兆琦、趙娜、『管子學刊』、2009 年第 2 期

「論『管子』的工商業思想」宋玉順、『管子學刊』、1994 年 4 期

「論『管子』工商新思想與新政」周懷宇、『管子學刊』、2017 年第 2 期

「听『管子』講『工商與貿易』」郭麗、『博覽群書』、2021 年 10 月

「『管子』可持續發展思想研究」曹俊傑、『管子學刊』、2002 年第 4 期

「淺析『管子』論水」李宗新、李曉峰、『華北水利水電學院學報(社科版)』、2002 年 8 月第 18 卷第 3 期

「試論『管子』的治水思想」靳懷春、『歷史與考証』、1999 年第 1 期

「『管子』的水害論與農田水利建設」王秀珠、李英森、『管子學刊』、1993 年第 4 期

「『管子』水論之解讀」宣兆琦、『理論學刊』、2009 年 4 月第 4 期

「『管子』地政論與土地問題」龔武、『第十一屆全國管子學術研討會論文集』(三)、2016 年 12 月

「論『管子』“因地制宜”的環境理論及其特點」張全明、『管子學刊』、2010 年第 4 期

「『管子』的土地觀——“均分地力”“盡地力”“因地制宜”」吳妙、『2019 第十四屆全國管子學術研討會交流論文集』、2019 年 5 月

「試析『管子』“四維”價值觀的邏輯建構」桂勝、『アジアの歴史と文化』15、2011 年 3 月

「『管子』四篇と『韓非子』四篇に見える名思想の研究」曹峰、『人文科学』14、2009 年 3 月